
漂流のA

権兵衛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

漂流のA

【ZPDFード】

Z88880Q

【作者名】

権兵衛

【あらすじ】

転生者アクセル・ベルトラン・ド・ラヴィス。転生先はゼロの使い魔の世界、トリステイン王国の子爵領。目的は、死なないこと、殺されないこと。テンプレ的二次創作、転生ものです。どのような展開になるかわからないので、不愉快な思いをさせてしまうかも知れませんが、よろしければご覧下さい。

2011年10月11日・三ヶ月もほつたらかしにしてしまい、お待ち下さった方、申し訳ありませんでした。私事のトラブルが続発し、忙しさにかまけて、つい疎遠になってしましました。一段落

しましたが、何とか今月中にもう一話くらいは仕上げたいです。

第一話へ転生へ（漫書き）

初めまして。よくある転生ものなので、お読みじいご覧あれ。

アクセル・ベルトラン・ド・ラヴィス

トリステイン王国のラヴィス子爵、彼の祝福されるべき第一子は、
そう名付けられた。

両親のそれを受け継いだ、若草色の頭髪。空色の瞳。その瞳には
既に自我と呼べるもののが存在していたのだが、それを読み取れる者
はいなかつた。

よく遊ぶ子どもだつた。いや、勿論子どもであるからには、遊び
に時間の大部分を費やすのは当たり前なのだが、ラヴィス子爵はい
つしか、アクセルの特異性に気付いた。

暇なメイドや使用人、挙げ句の果てには執事まで付き合わせ、屋
敷の敷地内を所狭しと遊び回る。勿論、彼等も仕事があり、空き時
間でアクセルの相手をしていたのだが……アクセルは、疲れ果てて
も、遊ぶのを止めようとはしなかつた。

まるで、体力を全て、それこそ爪先から脳天まで総動員し、一滴
残らず絞り出そうとしているかのように。それは遊びというよりも、
最早、鍛錬に近いものだつた。

鬼ごっこをするときも、所詮はようやく歩けるよつになつた子ど
も。全速力を出そうが、大人に敵うはずはない。しかし、いつしか
……常に全速力で逃げ回るアクセルを捕えるために、大の大人が三
人がかりで臨まなければならなくなつた。早い話が、単純に追いつ
けなくなつたのだ。

外で遊べない雨の日は、屋敷の中で遊ぶ。書庫に籠もり、魔法書や物語などを、片つ端から読みふける。誰に強制されたわけでもない。そもそも家庭教師をつけようか、と、子爵夫妻が話し始める頃には、既に文字を習得していた。その後の勉強も、特に苦にした様子もなく、知識欲の塊のよう、あらゆるものに貪欲な姿勢を見せた。

「まつたく……家庭教師というのが、これほど寂しいものだつたとは」

専属の家庭教師を任じられた、没落貴族の血を受け継ぐメイドが、どこか嬉しそうに言つていた。

彼女曰く、放つてもどんどん進んでしまつそうだ。

「そうか……。しかし、この私から、あんな麒麟児が出来上がるとはな」

ラヴィス子爵は自嘲するような、しかし明るい笑みを浮かべ、窓の外を見る。

輝くような光が差し込む庭で、今日もアクセルは、暇を持て余していた使用人達と鬼ごっこに興じている。もはや、追い付けることすら滅多にないのだが、それでも、毎度付き合わされる彼等に倦怠感はない。自分たちと遊びたがり、懐いてくれる子どもは、愛すべき存在なのだろう。

「しかし、あの中には元傭兵もいた筈だが……いやはや、凄いな

「そうですね。しかし

「……まあ、言いたい事は分かる」

ラヴィス子爵は、隣に立つメイドに向き直った。

少々早いかも知れないが、アクセルに魔法の実技を始めさせよう
というのは、既に決まっていた。何しろアクセル自身が魔法に並々
ならぬ興味を持ち、やたらと質問していくのだ。初めのうちはまだ
早いと奢めていた周囲も、あまりに熱心に聞いてくるので、結局真
面目に答えてしまっている。

そもそも貴族として生を受けた以上、魔法は必須能力だ。そして、
本人にやる気があるに越したことはない。

「私は、甘いのかもな？」

初めての子どもなのだ。ついつい甘やかしてしまいたくもなる。
あの足の速さとスタミナは、褒めるべきものだと思うのだが、隣
のメイドは違った。

魔法は必須能力であり、そして最重要のステータスなのだ。貴族
の能力とは、統治能力や政治能力も確かに重要だが、それ以前にま
ずは魔法能力。それこそが、最も重視されるべきもの。

アクセルの家庭教師を務めるメイド……名前を、リーズ。彼女の
両親は貴族であつたが、魔法能力が低く、そしてその事が結果とし
て、リーズの家を没落させた。

だからこそ、なのだろう。ラヴィス子爵から見ても異常なほど、
魔法の力に固執する傾向がある。

どれほどアクセルが学業に励み、どれほど屈強な肉体を作ろうと、
それを評価しない。全てはこれから……魔法の実力がどれほど伸び
るか。それのみ、ただその一点のみ。

ラヴィス子爵がアクセルを麒麟児などと評価するのも、内心では、
何を的はずれなことを、と思っているだらう。魔法の実力すらわか
らない内から、下すべき評価ではない、と。

ラヴィス子爵も、それを間違いだとは思わない。

三日後、ついにアクセルは杖を持つことを許される。

今まで散々に書を読み耽つたお陰か、やり方は既に覚えている。
しかしだからと黙つて、それがすぐに実技に結びつくわけではない。

そう……その筈だつた。

魔法を練習し始めたその日、一通りの「コモンスペルを成功させた
アクセルに、リーズは評価を下す。

麒麟児どころではない。大天才だと。

「ここがあの世界だということを、アクセルが……アクセルと名付
けられた魂が確信したのは、文字を覚えてからだつた。

父親の机……そこに散らばつていた手紙の送り主は、ラ・ヴァリ
エル公爵。そして、グラモン元帥。その二人の名は、よく知つて
いた。

片や、トリステイン王国に名高き公爵家。片や、トリステイン王
国に名高き軍人。

その一人と頻繁に手紙をやりとりしている、このラヴィス家も、
一段劣る子爵とはいえ、それなりに重要な立ち位置にいるらしい。

どうやらまだ、原作の……平賀才人が召喚される時期までには、
大分あるようだ。

アクセルには、死の記憶がある。六畳一間のボロアパートで浪人生活を送っている時、風邪をこじらせ、助けを呼べないまま衰弱死したという、あまりに寂しい記憶。

最後の記憶は、このまま死ねば、冷蔵庫の横に置いてあるネギがどうどろに腐って悪臭を放ち、その悪臭の中でようやく、自分の死体が見つかることになる……といつ、至極どつでもここのもの。

死ぬ時は、気持ち良かつた。

体中から全ての力が抜けていき、まるで誰かに、これ以上頑張らなくてもいいんだよ、と、そんな風に抱きしめられている気分。が、その快感はすぐに消えた。やっぱお前頑張れ、と蹴飛ばされるようにして、自分は転生を果たした。

肩透かしを喰らつたようにも思えたが、まあ折角take2が始まんだし、頑張るべきなのだろう。

赤子になつて気付いたのは、とてつもなく退屈ということ。何の因果か意識を保つたまま産まれたせいでのことのない時間というものを実感してしまう。しかし、それでも楽しみはあった。

女子と手を繋ぐなど、中学生の時のオクラホマミキサーが最後。そんな自分が、麗しきメイドに抱かれる。どれだけ胸に触れても怒られない。

（何とこうか、じーじーひなた荘並の信頼率だよな）

父・ラヴィス子爵の趣味だとしたら、非常にいい父親だと思つ。採用基準に外見が含まれているのは、まず間違いない。

メイドだけではなかつた。母親も、少し身体の凹凸が乏しいとはい、紛う事なき美女。その美女の乳房に堂々と吸い付けるわけだが、何だか妙な気分だ。即エレクチオンしそうなものだが、母親から感じる愛情に、何といつか……毒氣を抜かれる。まあ、まだ自分の身体はそこまで発達しているわけではないし、実の母親相手にそんなことになるわけにはいかない。エディップス・コンプレックスは洒落にならないし。

鬼ごっこやその他の運動だつて、活発な子どもだとか言われるが、申し訳なくもはつきり言つてしまえば、その……性欲の発散の為だつたりする。まだ精通とはほど遠い年齢なのに、性欲を持て余してしまうのはやはり、メイド達のせいだつた。

弟が出来た気分なのか、甘やかし、愛情を注いでくれるのはいいのだが、スキンシップが少々過剰なのだ。基本的に、身の回りの世話はメイド達の仕事である。しかし、何も下着を穿かせたり、風呂で身体を洗つてくれたり、更には添い寝してくれる必要はない。

この年齢で、こちらが恥ずかしがつているのはどうやらバレているらしく、彼女たちは調子に乗つてやたらと世話を焼く。せめてもう少し、年を取つてからやつて欲しいのだ。今は、手の出しようがないし。

吐き出しそうのない欲望に、気が狂いそうになり、それを何とか発散させるために、他のことに集中する。それしか方法はなかつた。

しかし、やるべき事は山ほどある。やりたい事も。

はつきり言つて、この世界での自分は主人公ではないのだ。言つなれば、ルイズとオ人、そしてそれを取り巻く人々の物語の世界。自分はただの、とある子爵の嫡男。

主人公たちに積極的に関わるつもりはない。何故か？ 命がいく

つあっても足りないから。

取りあえず、自分の望みを考えてみる。

魔法は使えるようになりたい。使えないと死にそうだから。
身体も鍛えるべきだろ。魔法以外の要因で死ぬかも知れないから。

内政、というのもやつてみたい。自分に抜きん出た知識などないが、それでも、持つている記憶を何らかの形で役立たせることには出来るだろう。

美人の嫁さん、それに出来れば愛人や側室を何人か。これは重要。昼は淑女、夜は娼婦だったら言つことなし。

（でもなあ……）

欲望は色々あっても、前提として、まずは死なないこと。殺されないこと。

死ぬ時は孤独ではなく、ベッドで、愛する人々に囲まれて、惜しまれて死にたい。

（やう……死んだらお終いだ）

一度死を経験したお陰か、死というものがはつきりと、実体を持つもののようにはじられる。折角人生をやり直せるのに、何も成さずに終わるのはイヤだ。

（いや、成すとか言つても、そんな……小さなことでいいんだけど）

後の世に功績を残し、その功績と、自分の名が忘れられなによ

にしたい。

しかし、死ぬような田には遭いたくない。

（なるべく、命の危険のない方法で……）

我が儘だとは、勿論思つ。しかし、所詮は元一般人の思考。器量なんてものはなくて当然だろつ。このまま子爵領を受け継ぎ、そこそこ領地を豊かにして、領民に慕われ、平穀無事に一生を終えられたら……。

（……吉良吉影かよ、俺は）

大きな喜びはなく、そして大きな悲しみもない、植物のように平穏な人生。

そしてそれを送るために、強大な力を持たなければならない。

（どっちにしろ、強くならなくちゃ なあ……）

アクセルはそう思いながら、思考を巡らせた。

魔法の訓練を初めて、三日後。既に治癒を含め、水属性の簡単な魔法なら使えるようになつた。

本当は一刻も早く、出来るだけ多くの魔法をマスターしたいのだが、ふとアクセルは気付く。あまり強い力を持てば、目立つてしまふのではないかと。

「そり魔法を練習し、それを小出しにしてこゝのが、一番のやり方ではないか。

「若様。本日は、ここまでにしておきましょ」

「うん。ありがと、リーズ」

訓練を担当するのは、リーズ。没落した元貴族の、メイド。初めてこの屋敷に来た時は、表情の乏しい娘だと感じたし、それは間違つてはいなかつた。そして、そんなリーズを笑顔にしてあげたいと、純粹にそう思った。

いくら学業の成績が良くとも、あまり褒めなかつたリーズが、アクセルが魔法を成功させた時には、途端に笑顔になる。そして、惜しみない賞賛をくれる。

女の子にいいところを見せたい一心で、つい張り切つてしまつたが、やはり全力ではやらなかつた。その事に罪悪感もあるが、あまり目立ちたくない。

今日もリーズの笑顔が見られたことに、喜びと罪悪を感じつつ、アクセルは屋敷の外に出た。

供も連れずに外に出るのは非常識なのだが、少し歩いたところにある小さな湖だけは、一人での外出を許されている。リーズが、お墨付きをくれた。

(さて……今日も、と)

服を脱ぎ、上半身裸になる。水練のためといふことにしてあるが、アクセルは湖の畔にある背陰に立つた。屋敷や山道から誰かが来ても、ここならすぐに分かる。

「……フウ……」

軽く息を吐きながら、岩の前に立つ。そして腰を落とし、拳を構えると、岩に叩き付けた。

「……」

勿論、痛みはある。繰り返せば、あつとこう間に皮膚は破れ、血が滲む。

それでも、アクセルは全力で、両の拳を叩き付けた。

別に、前世で空手をやっていたわけではない。武道と呼べるものには勿論、スポーツも、せいぜい温泉卓球くらい。それでも、こいつやつて鍛えれば、何れ頑強な拳が作り出されることは予想出来る。

明日のために……ではなく、死なないために。

この世界は、前世ほど死が遠くはない。死の危険は、ずっと身近な存在だ。確かに子爵の嫡男である自分は、外に出る時には護衛が付くし、魔法が使えない平民も、おいそれと襲つては来ないだろう。しかし、それでも襲つてくる平民は、俗に言うメイジ殺しと呼ばれるような、化け物。

魔法を使うには、杖、そして呪文が必要だった。杖を抜き、呪文を唱える。呪文の詠唱も、咄嗟の攻撃なら一秒ほどだろうが、その一秒で、杖を弾き飛ばされたら……。

予備の杖を持つことは出来るが、それでは根本的解決にはならない。

風呂で襲われたら？

い。

女の子とベッドで楽しんでいる時を襲われたら？

アクセルは、杖を使わない……格闘技を習得しようとした。

しかし、無い。そんなもの、いくら調べても見当たらない。剣術は存在するし、軍人なら独自に格闘術も編み出しているだろうが、それはあくまで独自のものであって、教えて貰えるような技術は見つからなかった。少なくとも、調べられる範囲には。もつと探せば、その為の教師となる人材も見つかるだろうが、時間は惜しい。

剣は傭兵、あがりの使用人に教えて貰えるだろうが、その剣すら無い場合は、どうするか。

結局、自分で何とか工夫するしかない……そんな結論に達した。

痛い。本当に痛い。傷ついた拳で殴り続けているのだから、当たり前と言えば当たり前だが、それでも、一撃一撃、怯みそうになる身体を奮い立たせ、全力で岩を叩く。傷ついても、水の治癒魔法があれば、跡形も無く完治する。この為に、何よりも真っ先に治癒を覚えた。

死がないためなのだ。痛みも、それを考えれば我慢できる。

以前は三発ほどで血が滲み始めたが、今では十発殴つても無傷なところを見ると、成果は上がっているようだ。

しかし、これはあくまで、秘密にしておきたい。杖も、剣すらも持っていない自分なら、相手も油断するだろうし、隙も生まれる。知られたら、ひょっとしたら腕を切り落とされるような目に遭うかも知れない。と言つて、自分ならそうするだろう。

空手をやつていたわけではないから、技術もなく、見様見真似。しかし、硬い拳はそれだけで、切り札となってくれる筈だ。

毎日治癒を続けたお陰で、水系統のレベルも上がっている。そしてアクセルは、一つの実験を行つた。

「…………」

場所は、湖。しかし岩陰ではなく、小舟を出し、ちょうど湖の反対側に。万が一にも、見られるわけにはいかないし、見られたくはない。

「……大丈夫、大丈夫……」

アクセルはぶつぶつと、呪詛のように呴く。その顔……いや、体中には冷や汗が浮かんでいた。

杖を弾かれれば、魔法は使えない。それはどうやら、絶対らしい。しかしもし、素手で魔法が使えたら……それもまた、強力な、これ以上無い程の切り札になつてくれる筈だ。

「欲張りすぎじゃないのか、俺……」

これから行う事を考へると、少し震えが来る。ここまでする必要があるのか、疑問が浮かぶ。

しかし。これをしなかつたから、死んだ……そんな未来は、絶対に避けたい。アクセルは遂に覚悟を決め、小枝を銜えると、左手のナイフを握り締めた。

通常アクセルは右利きで、右手に杖を持つ。杖と言つても、オー

ソドックスな、教鞭のような細いものだ。右手で包み込むように持つが、唯一人差し指は、杖に沿わせるようにして伸ばしている。

「ふつ……ぐつ……」

噛み締めた小枝が、細かく湿った音を立てる。涙が滲まなかつたのは助かつたが、全身が強張り、冷や汗でなく脂汗が滲んだ。

ナイフの刃が、右手人差し指の肉を切り開く。地面にボタボタと、真つ赤な血が流れ落ちた。

今更、ナイフの刃を消毒していなかつた……とか、指の付け根を縛つておけばよかつた……など、そんな考えが浮かぶ。興奮しそぎて、そこまで頭が回らなかつたらしい。

そして、肉と血の間から、真珠のような骨が見えた。

「…………！」

急いで、契約を行う。

通常の杖の契約は、それなりの日数を要する。しかし、生まれてから今まで付き合つてきた骨は、異常な速度で適応した。

「…………ははつ…………ははははははつ……」

その場に身を投げ出したアクセルは、さながら、新世界の神の如き笑い声を上げた。

こんなこと調べた限りでは見当たらなかつたし、こんな異常な実験を行つた者もいなだろう。

実験は、成功した。人差し指の骨は、無事に杖として機能し、動かなくなつた指に治癒を行う。

耐えられた。死なないため、殺されないためだからじゃ。

（そう、これで……杖を手にしていなくても、魔法が……！）

しかし。

こんな真似をしておきながら、アクセルの中身はやはり、小心者

だった。

いや、本当に小心者ならそもそも、こんなことをしないのかも知
れない。

まあ、はっきり言ってしまえば、ネガティブではあった。

徐々に、笑い声が消えていく。

もしも、人差し指を切り落とされたら？

いや、そもそも、右腕を切り落とされていたら？

右手、左手……それらを、じつと見つめる。

「…………なあ…………嘘だろ？ ほ、ほら、キリがねえじやん？」

そうすべきだ……そんなことを言つてくる、恐ろしい自分がいる。

「俺は別に、そんな特殊な性癖があるわけでもなし……異常者で
もなし……」

その手は虚ろ。しかし、手はあるで別個の意思に支配されたかの
よつこ再び、ナイフを握った。

「……嘘だと黙ってくれ、誰か……なあ？」

もしも、両腕ともに切り落とされてしまつたら？

その日、アクセルは初めて高熱を発し、寝込んだ。生まれてこの方、風邪すら引いたことのないアクセルだけに、屋敷中、大騒ぎになつた。

両親は……特に母親は、ベッドの横で泣き叫ぶし、リーズも無理な訓練をさせたと自分を責めて泣き出した……。朦朧とした意識の中、大丈夫だからとそれだけを繰り返していたアクセルは、やがて失神した。

一日後、無事に熱は下がつた。しかし、アクセルは頭を抱え、ベッドの上で悶えていた。

十本全部の指と契約しなくとも、腕の骨一本と契約すれば良かつた事に気付いて。

“骨”を杖にしてから、変わった事がある。

以前は感じ取れなかつた“力”的存在に、気付き始めた。

やはり、魔法を発動させるための道具を、自分自身の身体の中に作り上げたことが影響しているのだろう。

現在、アクセルの予備の杖は14本。両手指、両腕の橈骨^{うじい}、両足の脛骨。

(……無茶したなあ、俺)

流石に、両足の膝から下が破壊されたら……と考えるのは、やめておく。喉もと過ぎれば何とやら、の心だが、ともかく幸いなのは、あの苦しみを一度と味わう必要が無いということか。

自分の肉体を必要に傷つけて、快感を得る趣味は無い。

魔法を使う時確実なのは、両手の人差し指の一本だけ。それ以外ではやはり性能が下がり、特に両足の骨では、コモンスペルすら失敗することがある。人差し指の相性がよいのは、イメージの問題かも知れない。まあ、流石に文字通りの無駄骨だった、なんてことは避けたいので、両足で魔法を使う訓練もするつもりだ。

そして、自分は確かに、感覚を掴んだ。

(……魔力……って言えばいいのかな、これ)

田に見えるわけではない。それでも、田を閉じ、息を止め、耳を塞ぎ……五感を封じていけば、はつきりと感じ取ることが出来る。その力を、取りあえず魔力と呼んでいる。まあ、相談する相手もないのだが。

両親やリーズなど、メイジの周囲に漂うもの。メイジでない平民、使用人たちも纏つてはいるが、その範囲、濃度ははつきりと違う。普段は頼りなさ気に漂っているその力は、魔法使用時に途端に意志を持ったかのように流れ、収束し、そして……発動する。

勿論、自分の周囲にも漂っている。

「あの……魔力さんですか？」

一応尋ねてみたりするのだが、もとより反応は無い。反応するのは、魔法を使う時だけ。

端から見れば、見えてはいけない友達が見えているようなので、あまりアプローチはかけられない。そもそも、自我を持っているのかも謎だし。

ともかくそのことは、いい方向に働いた。試してみたいことも益々増え、24時間では少なすぎる。

(……充実し過ぎだな)

前世では、決して得られなかつた感動。あそこの自分は、ただ周

囲に流されるまま、確たる夢も持たず、漠然とした時間を送っていた。

時計を見るたびに、まだ残っている時間に溜息をついたり。

そんな事を考えていた時、父親に呼ばれた。

曰く、領内の村が盗賊に襲われるようになり、それを鎮圧していく。

まだ、年端もいかない子どもだ。勿論、アクセルに何かを期待している、というわけでもないだろう。いくら魔法の成績が優秀でも、やはり所詮は、子どもなのだから。

討伐隊を率いるのは、アクセル。補佐するのは、リーズ。

実質的な責任者は、リーズだつた。メイドとは言え、彼女は風のラインクラスの魔法使い。そこらの盗賊に敗北する筈はない。

今回のこれは、アクセルの教育の一環なのだろう。人の上に立つということ、また、魔法を使って平和を守るということ。杖を振ることではなく、どんなことが起きるか、その田で見据えることが、ラヴィス子爵の望み。

(……あのお父さん、結構スバルタなんじゃないか?)

あつという間に全ては整えられ、アクセルは馬上の人となる。とは言え、アクセルは乗馬が苦手であるので、手綱を握るリーズの前に大人しく跨つている。周囲を取り囲む兵は、合計70名。

そう、まだ馬にも乗れないような子どもなのだ。それどころか、同年代の貴族では、未だ杖すら与えられていない者が殆ど。そんな子どもが、名ばかりとはい、討伐隊の隊長。

ひょっとしたら、血や死体に馴れさせておく、という目的もあるのかも知れないが……。

（血生臭い話だなあ）

それはつまり、これから自分の人生で、そんな場面に遭遇することが多いある、ということ。

他の貴族を知らないので何とも言えないが、どうやらラヴィス子爵は、何か秘密を持つているらしい。内政にもそれほど興味を示さず、普段はエリート商社マンか何かのようだに、彼方此方を飛び回っている。ラ・ヴァリエール公爵家からの手紙も一通や一通ではないし、屋敷を留守にしているか、屋敷でのんびりしているかどちらかしかない。

ともかく、子爵自らが領地を留守にする必要があるのなら、なるべく早くに、自分を成長させておきたいのだろう。アクセルはそう考えた。

ラヴィス子爵領パリュキオの村に到着したのは、夜も更けてからだった。予め連絡はされており、兵士は宛われた集会場で休み、アクセルとリーズは村長の家に招かれる。

「アクセル・ベルトラン・ド・ラヴィスだ」

緊張した面持ちで出迎える村長に、アクセルはそう告げる。年上とはいえ、平民に敬語を使うのは不自然であり、しかしなるべく威圧感を「えないよう、声色も選んだ。

「これはこれは。こんな遠くまで、よくぞ来て下さいました」

一応、領主であるラヴィス子爵の名代としての来訪なので、扱いも子爵本人と遜色ない。が、略奪を受けた村に蓄えは少なく、歓迎

の宴、という雰囲気でもなかつた。それが村長の気がかりだつたらしく、アクセルが寝床を用意してくれただけでいい、と言つと、ホツと表情を緩めた。

村長や集まつた村人たちからの情報を総合すると、盗賊……というより山賊は、全部で30人ほど。メイジはいなが、傭兵崩れや破落戸、逃亡奴隸などで組織され、近くの山にある廃墟を根城としている。隣の男爵領から流れてきたものと、元々この地にいたものが統合され、ついに一ヶ月前から略奪が始まつた。

「一ヶ月前？」

アクセルは思わず聞き返す。何か不味かつたのかと、村長は青くなりながら頷いた。

流石に山賊の略奪を、一回程度ならなかつたことじよつか、などとはならないだろ？。一度でも略奪が起きた時点で、領主に連絡がいく筈だ。

今回の討伐隊は既に準備が出来ていたので、その結成にどれだけ時間がかかるかは分からないが、それでも遅すぎる気がする。兵士達も確かに屋敷からは、遠くても半日の場所に駐屯していた筈。やはり、いくら何でも遅すぎる。

（……どんだけなんだ、うちの内政は……）

いくら領主が頻繁に領地を空けるとはい、これは酷すぎる気がする。これなら、代官でも用意した方が、ずっとうまくいくのではないか。

つまり、この周辺の村々は、少なくとも一ヶ月前から略奪され続けているわけで……。

反乱でも起きやうなものだが、やはり、平民と貴族を隔てる壁は、

果てしなく高く、絶対なのだろう。例え不満はあっても、文句を言うという発想すらないのかも知れない。天災と同じく、どうしようもないことと諦めているのか。

そして、それがこの世界の常識。

取りあえず、一通り情報を集めた後、アクセルは宛われた部屋に戻った。

「いいですか、若様。明日は私から、くれぐれも離れないよ」としてください」

リーズが同室なのは、そもそも村長の家の部屋数の問題と、アクセルの護衛の為。その彼女は、もう何度もわからぬ注意を、また繰り返していた。

「うん、わかってる。僕に何かあつたら、みんなの責任になっちゃう」

「……それがお分かりなら、何も言つことはありません」

どうせまた言い出すんだろうなあ、と、アクセルはそつと苦笑する。行きの馬上でも、この会話は何度かしている。

考えてみれば、これが初めての遠出だった。普段は子爵の屋敷と、その周辺に行くことしか許されていない。スバルタなのが過保護なのか、よく分からぬ父親だ。

未だ馬に慣れていなかつた尻をさすりながら、アクセルはベッドに潜り込んだ。

誘拐された。

な、何を言つてゐるのかわからねーだろうが……思わずポルナレフ。朝日が窓から差し込む中、後ろ手に縛られて、薄汚れた広間に立たれたアクセルは、山賊の手際の良さに驚いていた。

(まさか……向こうからやつて来るとは……)

アクセルが立てた……と言つより、リーズが立てた計画では、今晩は兵を休ませておき、明日の朝一番で出立、本拠地へと向かい、兵隊で包囲、そしてリーズ達が攻撃する、というものだつた。勿論、アクセルは包囲網の外に置かれる。

しかし、討伐隊の情報を得た山賊は、奇襲に出た。討伐隊が到着したその夜中に囮部隊が村を襲い、村人に化けた手下がどさくさに紛れて、眠りこけていたアクセルをかつ攫う、というものだつた。

流石に、メイジ……リーズを恐れたのだろう。数の上でも討伐隊が勝つているし、まともに来られては逃げるしかないと考え、領主の息子であるアクセルを手に入れた。つまりは戦う前から、勝敗を決めてしまつた、ということになる。

(……うん。そうだ。ぶつちやけ、舐めていた)

たかが山賊という、そんな驕りがあった。そしてそれは、討伐隊全体のものだつた。

考えてみれば、リーズもいくらメイジとはいって、集団戦のような経験はない。せいぜい、盗人を倒すくらい。兵隊を率いるなども、知識としては知っていたのだろうが、初めての体験だった筈だ。

(「そうだよな、まあ、山賊だつてバカじやないよな）

彼等も、必死なのだ。勝つて当たり前の戦で、どこか余裕があつた……はつきり言つて弛んでいた討伐隊とは違い、死に物狂い。

（俺も、いつの間にか、平民を舐めていた）

平民にだつて恐れるべき者はいると、そう考えて今まで修行してきたのに……山賊など、所詮は雑魚が集まつただけだと、そう、どこかで悔っていた。

「ようつし……これで、俺らにも勝ち目が出来たな！」

山賊達の中心で、がらがらとした笑い声を上げる、髭の大男。筋骨隆々とした男で、傭兵か何かだつたのだろう。言つまでもなく、この男がボス。

奇襲をかけて貴族を誘拐するなど、思いついても普通は実行しない。それを実行に移す判断力、度胸……ただの力自慢ではなく、それなりに知恵もカリスマもあるようだ。

（「う……悔っちゃいけない）

こんな状態になれば、貴族には何も出来ない。騒がれないように猿轡をされ、勿論のこと、杖も取り上げられている。例えアクセルのように、思い掛けないものを杖にしていたとしても、呪文を唱え

られなければ意味がない。

確かに身体は鍛えているが、相手は目の前の筋肉男を筆頭に、人が三十人近く。太ったヤツもいるし、チビなヤツもいるが、それでも大人は大人だ。単純な腕力では、まず敵わない。せめて猿轡さえなければ、何とか出来るだろうが。

（いや……幸運に思うんだ。そうだ、そう思え）

アクセルは静かに考える。ここまで冷静でいられるのも、相手に自分を殺す気がないからだ。よほどのことが無い限り、死の危険はない。

対して、自分は彼等を殺しても、何の問題もない。貴族を拐かせば、それだけで死刑だし、何より相手は山賊、殺そうが功績にしかならない。

つまりは……格好の“実験台”が、三十個もある。

「お頭、これからどうしましょう」

「そうだな。とりあえず、村には連絡したか？」

「へい。さつき。村から一步でも出れば、ガキを殺すと言つておきました。見張りも、一人ほど残してます」

「そうか。それじゃ、まずは金をありつたけ集めさせろ。こうなつたら、こんな場所さつさとおさらばしねえとな。村中の金を集めさせたら、一回に分けて運ばせるんだ」

「へ？ 一回？ 何でそんな面倒な……」

「バーカ。さんざん俺らがしゃぶった村だ、そんなトコに、口クに金があるわけねえだろ。しかしそれ、村人も貴族は怖えから、隠してた金を出すかも知れねえ。それでも、タ力が知ってるが……。

一回目に兵隊に運ばせて、またそいつらを戻して、一回目を運ばせる。しかし、一回目の金を運んで来た時にや、ここは無人になつて

るつてわけだ」

「それで……？」

「兵隊どもがモタモタしてる間に、ガキを連れて子爵の屋敷に乗り込む。そこで、ありつたけの金を吐き出させるわけだ」

「さつすがお頭！ 貴族の屋敷なら、唸るほど金があるー。」

「当たり前だ、俺を誰だと思ってやがる」

やはり、金に目が眩んだ雑魚ではない。小さな利を捨て、大きな利を取ることを知っている。子爵の屋敷に乗り込む、といつのはともかく、ここを脱出するなかなかの良策だ。

まあ、人質となっている自分が、その成功率を上げているわけだが。アクセルは猿轡のまま、小さく溜息をついた。

なかなか修羅場をくぐっている、こんな男を相手にして、リーズと彼女が指揮する隊は、勝てるのか。恐らくは無理だ。数は勝つているとはいえ、知恵で遅れを取る可能性が高い。

「ガキは、隣の部屋にでもぶちこんどきますか？」

「いや、やめとけ。どうせすぐにここを出ることになるんだ。隅つこに放つておけ」

手下の一人が進み出て、アクセルを掴む。その時、それまで大人しくしていたアクセルは突然騒ぎ出した。うーうーとうなり声を上げ、身体をじたばたと動かす。

ボスの目配せを受けてから、手下は猿轡を外した。

「何だ、クソガキ。暴れんじゃね……」

「おしつこーー！」

部屋中に響くよつた大声で、アクセルが叫ぶ。

一瞬の静寂の後、何人かが笑い出した。ボスも首を振り、苦笑している。

「くそ度胸の座ったガキだなあ、おい。流石は貴族様」

「あ、くそで思い出したけど、大きいのも！」

相変わらず、子どものような……まあ、子どもなのだが、大声で喋るアクセル。

「ここで垂れ流されても迷惑だ、連れてけ」

ひらひらと手を振り、笑いながら、ボスは命じた。

「あう、一人で大丈夫かあ？」

「ついてつてやろうか？」

アクセルに、ではなく、アクセルを引っ張る手下に、山賊達が声を掛けている。うるせえっ、と、一言だけ叫んでから、手下はアクセルを連れ、廊下に出ると、近くのトイレに押し込んだ。しかし、アクセルは突っ立っている。

「おい、何してやがる」

「脱がせ」

手下は、呆れた。このガキは、自分がおかれている状況を理解していないらしい。屋敷でも、使用人達に任せきりなのだろう、と。

「ちつ、テメエでやりやがれ」

ナイフを取り出し、少年を縛っていた縄を切断し、両手を解放す

る。杖も取り上げているし、そして何より、相手は小生意気なだけのガキだ。

「う、ただのガ……」

「？ 何して……」

少年はこちらに人差し指を向け、何か咳いている。再び聞き返そうとした手下、彼の一十一二年という人生の最後を飾った光景は、首のない自分の身体だった。トイレの天井にまで達する血飛沫が、噴水のようだった。

ドアが開きかけ、止まる。その僅かな隙間から、何かが転がつてくる。

床に、足跡のような血痕を残しながら、それは山賊達の足下を擦り抜け、ボスの足にぶつかった。呆然とした光を宿さない目と、それが生首であると確認したボスの目線が、合わさる。

次に、軋んだ音を立てて、ドアが開いた。

血をバケツで被つたような姿の少年が、準備体操のように首を捻りながら、入ってくる。

沈黙が支配する空間で、少年はそっと左右を見回すと、ボスの隣のテーブルに無造作に転がる、自分の杖を発見した。

「それ……返してくれる?」

人差し指を向け、アクセルは軽く微笑んだ。

「……テメエ……」

ようやく、近くの少年の左隣に立つ一人が、声を絞り出す。驚愕は薄れ、だんだんと激情が広がっていた。

「なんなんだつ、テメエ！！」

そう叫んだ、瞬間。アクセルは右の人差し指を向けたまま、左手でその男の顔面を叩く。拳で届くか、微妙な距離。よつて、手は軽く広げたままの、素早い目眩ましのような攻撃。

大して力も込めてはいないが、日頃の鍛錬で、その指は既に尋常でないほど硬くなっている。鼻つ柱を打たれ、男は鼻を押されて目をつぶつた。じわりと、涙が滲んでいる。

打たれた瞬間、男がヒュツと、息を吸い込んだ。

鼻を押されて、蹲るように頭の位置を下げる時、ハツと息を吐く。血が何滴か、床に散つた。そしてその時、アクセルは足を動かし、男を真正面から見据える。

そして、次。男は再び、ヒュツと息を吸い込む。

その呼吸音に重なるようにして、

「ハツ」

アクセルのかけ声。さんざん練習した正拳突きを、男の腹部に突き刺した。

相手が息を吸い込む時に攻撃すれば、ダメージが倍増する……そんな知識は、前世から。単純に正拳突きの威力かも知れないし、タイミングが遅かったかも知れない。人体に試したのは初めてなので、何とも言えないが、クリティカルヒットと感じられる手応えがあった。

男は顔と腹を押さえたまま、文字通り、崩れるようにその場に倒れ、嘔吐した。てっきり悶絶するだけだろうと思っていたのだが、床に広がる血の混じった吐瀉物を見て、アクセルは少し驚く。同時に、今までの鍛錬が、無駄になつていなかつたことを確認した。

直後、室内で怒号が暴発する。

一つの怒鳴り声の直後、集団パニックに陥ったように、皆が皆一斉に武器を手に取つた。その衝動の矛先は、言つまでもなくアクセル。唯一皆を抑えようとしたボスの声は、搔き消される。

悶絶する男を踏み台にして跳躍し、手斧を振り上げていた男の顔面に右膝をめり込ませるアクセルの表情は、ポーカーフェイス。強いて言つならば、あまりにも落ち着いた自分に驚いている。

武器を抜いたヤツは全員、背の低いアクセルを叩き潰そつと、武器を振り上げている。

何人かの……特に剣を振り上げた敵は、うつかり天井に突き刺してしまつていて。

アクセルは上からの攻撃を気にしていればいい。

これで金的でも狙えば簡単だが、それはしない。折角の実験台だと、そう思つていた。

金的を狙うことなくこの場を切り抜ければ、少しは自信がつく。周囲の熱気に反比例するように、アクセルは冷静になれた。

(確かに……一人が相手だと、結局は一度に数人しか攻撃できないな)

漫画で得た知識。周囲の熱気にてられ、自分がパニックになれば、恐らく自分は殺される。パニックになるのだけは避けなければならぬ、そう思つて、実際にそれが出来てゐるからこそ、頭にある知識も役に立つてくれた。

小さな身体に似合わぬスタミナにモノを言わせ、常に動き回り続ける。

相手が振り上げても、攻撃するにはそこから更に振り下ろさねばならない。対して自分は、振り上げる動きがそのまま攻撃に直結している。

周囲に気を配りながら、一番早く攻撃に移れそうなヤツを捜し出し、ジャブや平手の叩き付けで眩まし、隙を見て止めの正拳突き。ガンシューティングゲームのよつなものだ。

助かつたのは、山賊達に傑出した人材がいなかつた点。恐るべきなのは、どうやらあのボスのみで、彼がまとめ上げていたからこそ、の戦闘力だつたらしい。

しかしそれも、自分たちが襲撃されたのは初めてで、まさか山賊が襲われるとは思つていなかつたらしく、ボスも止めると云ふだけで、まつたく生かせていない。

十人ほどを床に転がした時点で、初めて、勢いが弱まる。流石に、アクセルがただの子どもではないと氣付いたのだらう。一旦下がる……というか、腰が引け始めた。

(逃がすな……)

アクセルは、攻撃に転じた。

不意打ちを食らつたその男の目に浮かぶのは、恐怖と、そして一本の指。流石にまだ子どもの手では大きさが足りず、アクセルは両手の人差し指を並べ、男の両目に突き刺した。

ぬるり、とした暖かさ。

周囲に恐怖を与えるための攻撃だが、これはアクセル自身の試練でもあった。

幸い、意識は大分この世界に染まっているらしく、山賊程度の命など重視していない。自分に害を及ぼす相手であれば、尚更だ。眼球を破壊する。それは即ち、その相手の残りの人生から、永久に光を奪い去るということ。

殺すことと失明させること、どちらが重大か……それはともかく、やはり自分は、必要とあらば命を奪うタイプの人間で、それが今証明された。

どちらにしろ、一人も生かしておくわけにはいかない。

自分の戦い方が、この世界で異質の部類だからこそ、今も自分は生きていられる。その優位性を崩せば、それだけ、自分の命が危険にさらされる。

だからこそ、この場にいる全員、生かしてはおけない。そう、全ては……アクセル自身が生き延びる為に、殺されない為に。

両目を破壊された男。子どもの指では脳までは達さず、ただ眼球を破壊されただけだが、それが周囲の不幸だった。ほとんど半狂乱になり、手に持った剣を振り回している。それはアクセルには当たらず、仲間達を傷つけるのみ。

両手の人差し指に残る、イヤな感触を押し殺しながら、アクセルは振り下ろされた剣を避け、それを握る指を殴りつける。小指をへし折られた男は思わず剣を落とし、蹲るが、落下した剣はアクセルに受け止められ、逆手の刃で首を裂かれた。

山賊のボスはただ、呆然としていた。外見に似合わず、理性的な人間である彼は、未だ衝撃から立ち直れない。半ば機械的に止めろ止めろと言つだけで、それに耳を貸す者はいない。

御伽噺のような光景だった。

逆手で一人の首を切り裂いた子どもは、剣を握ったまま、柄頭に右掌底を当て、飛び込むようにして次の男の腹部を貫いた。剣の切っ先が、背中から飛び出る。

ああ、そうだ。それでいい。そのまま後ろから斬りつける。

アクセルの無防備な背後に向かつて、剣を振り上げるのが三人ほど。が、少年は剣を握ったまま、たつた今突き殺した男を傘のように扱う。その男の死体を支点として、身体をぐるりと入れ替えた。目の前にあるのが少年の背中から、仲間の死体の背中へと変わり、三人は驚いて動きを止める。

突如として風が起こり、死体が吹き飛ぶ。それに巻き込まれる形で、三人は床に転がつた。

今は……確かに、魔法。しかし何故、どうやって？　予備の杖

を持っていた？

あれだけ動いても、少年の動きは衰えない。主に、手下達の顔面を狙つて動きを止め、隙を見て破壊。

それでも、何とか少年を掴むことが出来たヤツはいる。素早いし、妙な体術を仕込まっているようだが、流石に腕つ節では敵うはずはない。

そうやって、窮地に追い込むたびに……魔法が炸裂する。

意地汚く視界を奪われ、木々を避けるように飛び回る少年に翻弄され、追いつめれば魔法でやられる。

何だ、あれは。悪魔か？

首を切り裂かれて倒れる者。

倒れた所で顔面を踏みつけられ、動かなくなる者。

ああ、一人、逃げ出したヤツがいる。そいつらの背中が、魔法で切り刻まれる。

そして、あとは……あとは……残ったのは？

未だ生きてるヤツも多い。痙攣している者もいる。風の魔法で、両腕を切断された者は、ズリズリと這つて逃げようとしている。

その、芋虫のような手下と目が合つた。しかし、首に剣を突き立てられ、床に縫いつけられ、その瞼は閉じていく。

無傷で立っているのは……ボス、一人だけ。

「いち。にい。さん」

アクセルは人差し指を動かし……確認するよつこ、数を数える。
具体的には、転がっている顔の数を。

（ああ、確かに、死体がこんな有様じや、顔で数えるのが確実だ
な）

ボスの頭の中、どこか醒めた部分が、少年の行動に同意していた。

「じゅうきゅう。にじゅう。にじゅういち」

声変わりしていない少年特有の、美しい高音。

「……さんじゅう」

その声が、最後の数を数える。
その指が、ボスの顔に向けられる。

そう……最後の、一人。

「……ははつ」

アクセルは笑いながら、軽く首を振った。

「流石に……疲れたよ」

風の刃が襲いかかる。

世界は、闇に包まれた。

全ての山賊に止めを刺した後、アクセルは風呂場に向かった。いくら何でも、返り血を浴びすぎたし、掠り傷も数カ所。相手が武器を持った山賊、三十人だったことを考慮すると、少々出来すぎな結果だったが……それでも、まだ安心は出来ない。

もし、あの戦力差で、自分が襲われる側だったら？

もし、の中に一人でも、メイジ……いや、経験豊かな強者がいたら？

自分の格闘の有用性は実感できだし、杖を持たないメイジが、いかに無力なものであると考えられているかも分かつた。

「……ふう」

バスタブの水を流し、飲み水として使われていた清潔な水、そして凝縮の魔法で作り出した水で満たし、少々苦手である火炎魔法で熱して……服を脱ぎ、ゆっくりと身体を沈める。一旦潜つて、ガシガシと髪の毛を洗いながら、顔を上げる。入浴剤でも入れた時のように、湯が真っ赤に染まっていた。

死体だらけの屋敷で、風呂に入る。弁解の余地無く、異常者の部類であるが、それでも一刻も早く洗い流したかった。

傷を治癒で処理しようと思ったが、無傷というのもまずいだろう。そのままにしておく。血染めの衣服も、軽く湯にくぐらせただけで、

そのまま着用した。

ボタボタと、体中から水をまき散らしながら、再び先ほどの屠殺場に入る。

そして壁に手をつくと、アクセルは嘔吐した。胃の中のものを粗方追い出したところで、あらためて室内を見回す。

死体だということは、わかる。自分が作ったのだから、尙更だ。今嘔吐は、精神的な要因ではなく、血の香りが原因。やはりあの時は、嘔吐を忘れるほど気分が高揚していたのだろう。

どうせ、自分のような臆病な生き方をする以上、人殺しは避けては通れなかつた。早い段階で“童貞”を捨てられたことに、感謝をしよう。

(……さんざん見たもんな)

あの日。骨を杖にするために、自分の身体を切り刻んだ時。血塗れの肉をさんざん見たせいか、死体に対しても嫌悪感はなかつた。

「さて、やるか」

吐き出すものがなくなり、スッキリしたのか、アクセルは呟くと、傍らの剣を拾い上げる。

片手で。両手で。逆手で。

既に物言わない死体を、切り刻む。

それは、練習だった。腕や首を、切断出来るまで切りつける。使

い物にならなくなる度に、死体も剣も次のものに取り替え、ひたすら振るひ。

始め……あの、自分をトイレに連れて行つた山賊は、上手に首を切斷できた。

しかし、最後。あのボスは、確かに一撃で死んだが、切断までには至らず、動脈を切り裂いただけ。疲労があつたかも知れないが、それでも、ここにある死体を有効に使う。

魔法は、イメージが大きく影響する……気がする。

人を斬るには、どうすればいいか。それを自分の身体に教え込まれるのは、決して無益なものではない筈だ。そのイメージさえ、自分の中で完成させれば。あの、最初の殺しは、恐らくはたまたま。まぐれ。

やがて、切り刻むものも、切り刻むためのものも無くなつた時、アクセルは死体を漁つた。主に、指輪。財布。その他アクセサリー。自分に目利きなどは、出来ない。片つ端から集め、それを一つの袋にまとめる。窓から放り投げた。

続いて屋敷を歩き回り、宝物庫を発見すると、それも窓から外へ。

少し迷つたが、山賊達から漁つたものはそのままに。宝物庫にあつたものは一部を屋敷の傍に埋めた。

台所にあつた油を全て、屋敷中にばらまき、火を付ける。その火が屋敷を包み、内部で二階の床が崩れる轟音を確認すると、アクセルはその場を立ち去つた。背中の布の包みには、山賊のボスの首が入つている。

早く、リーズ達を安心させてやらないと。

村に戻ったアクセルは、リーズに治癒をかけてもらひと、村長の家で泥のように眠った。

実際は、そんな一文で語れるようなものではなく……血に染まつたアクセルを抱きしめ、人目も憚らず号泣したり、とにかく大変だつたが。

村の見張りをしていた山賊二名は、アクセルが無事に戻つたことであつさりと捕縛された。

山賊が仲間割れを起こし、同士討ちを始めた。

自分は杖を奪われるも、逆に剣を奪い、死に物狂いで戦つた、といふか逃げ回つた。

ボスは宝を抱えて逃げる途中だつたので、襲いかかつて剣を突き刺した。

誰かが火を放つたらしく、燃える屋敷から命からがら脱出した。びしょぬれなのは、山を下りる途中の小川で転んだから。

要約すると、それが、アクセルの説明だつた。

明らかにした功績は、ボス一人を討ち取つた、それのみ。子爵の嫡男、盗賊退治の初陣の手柄にしては、これだけで上出来だらう。

屋敷の焼け跡に散らばる宝は、後始末と称して、全て兵士達が回収した。まあ、それが彼等の報酬なのだから、止めはしない。埋め

ておいた宝はどうやら見つけなかつたらしく、運がよい誰かが、後に見つけることになるだろう。そもそも、燃やすのも勿体なかつたからだし、運ぶのも重そだつたし、必要になるか、何かの折には、その時に発見されていなかつたら回収しよう、という、極めて優先順位の低い理由で埋めたのだ。はつきり言えば、どうでもいい隠し財産。多分、自分だつて忘れ去るだろう。

略奪を受けた村に関しては、屋敷に帰つたら速やかに税を下げなければならぬ。というか、自分がやらないと、誰もやらないだろうし。村人達も、逆らわないだろう。

そうそつ、リーズや兵達の責任についても、結局は囚われた自分が一番間抜けだつたわけだし、なるべく父親に掛け合つて、軽い罰で済むようにしないと。

凱旋の馬上、自分をしつかり抱きしめるリーズに身体を預けながら、アクセルは静かに微睡んでいた。

ところで、魔力についてわかつたことがある。

まず、外見。丸い頭、十字架のような身体の薄っぺらいヤツ。その集合体だと、日に日ににはつきり見えてくるそれを観察して、わかつた。例えるなら、千と千尋の神隠しで、竜体のハクを襲っていた、式神のよつなあれ。あれを、もつと縮小させたもの。

魔法を使う時、それらが変色するのもわかつた。

メイジの周囲に漂うそれは、魔法を使う時に変色し、それ自体が魔法となる。ファイヤーボールを使うときには、赤くなつて集合し、炎の塊となる。

どうやら、どこにでもいるものらしく、焚き火の傍を漂つっていたり、湯船を出たり入つたりしていた。

火の周囲に漂うのは赤色、水の周囲に漂うのは薄い青色、一際素早く、風の中を漂つっているのは若草色、地面にいるのは茶色。

実に、わかりやすい。

それが見えることのアドバンテージ……優位性は、最近ようやくわかつた。

例えば火炎の魔法を使う時、何もないところからいきなり炎を生み出すわけだが、その際に魔法使いの周囲の魔力が集合し、赤く変色したと思ったら火炎が生まれる。

しかし、よく見てみれば、すぐに赤く変色するもの、少し時間がかかるつて変色するもの、まるで変色を嫌がっているようなものなど、様々。

結局、真っ白一色のように見える魔力達にも、個性があるという結論に落ち着いた。

リーズを見ていると、火炎の魔法を使うとき、すぐに赤く変色するものも変色を嫌がるものも、まとめて無理矢理、火炎にしている。それは、試してみた自分も同じだった。

原作では確か、理をねじ曲げるのがメイジの系統魔法で、理に沿つて使用するのがエルフの先住魔法だった……等。

つまりは、魔力の個性を無視して、魔力と統一して、一緒にたにしているのが、メイジということか？

メイジよりエルフの方が強いなら、魔力の個性を重視すれば、並のメイジより強力な魔法が使える？

アクセルは早速、部屋の中に四つ、置物大のインテリアを作った。

デザインを考え、木材を自分で削り出し、寝る間も惜しんで製作を続ける。一刻も早く、仮説を試したくて。

一つ目は、火のインテリア。燃え盛る火炎を象つたもので、周囲に蝋燭を立てられるようになつてている。おまけで、火という漢字も彫り込んだ。

二つ目は、水のインテリア。どんなデザインにすればいいんだ、と大分迷つたが、以前行商人から買った、人魚姫の置物を思い出し、そのまま木製の土台にくつつけ、人魚姫の周囲を削り込んだ。堀が出来たわけだが、一応は、海に突き出た岩に腰掛ける人魚姫、とい

うイメージである。そこに、水を流し込んだ。これも、土台に水と
いう漢字を彫つてある。

三つ目、風のインテリア。水と同じくデザインで迷つたが、竜巻
にした。ただ、バランスが悪くすぐに倒れるので、一本の串を両側
に立てて支え、ついでに紙を切り出して作った風車をくつつける。

勿論、風という漢字を彫り込んだ。

四つ目、土のインテリア。土台に土を盛るだけにしようかと思つ
たが、いくら何でも寂しすぎるし手を抜いた感があるので、自分が
持つてている一番価値の高い宝石を、小さなティアラのようなものを
削りだしてはめ込んだ。そのティアラの内側に、土を山型にして積
み上げる。やはり、漢字で土と彫つた。

まあ要するに、祭壇を作つてみた。

アクセルも、ここまで来るともはや魔力ではなく、精靈と呼び直
している。今見えているのが精靈なのかどうかはともかく、自分に
しか見えていないのなら、何と呼ばうが問題はない筈だ。

火のインテリアに蠟燭を立て、火を点すと、自分からいくつかの
精靈が離れ、インテリアの周囲を漂い始めた。他も、同様。自分の
身体から離れ、インテリアに留まる。

改めて自分の身体を見回すと、周囲を漂う精靈は、大分減つてい
た。これは、一般的な平民より少し多いくらいか。

残つたのは、四つのインテリア、どれにも反応を示さうとしない
精靈達。

(ひょつとして、これが……虚無の精靈？　いや、違うか？)

失われたとはいえ、虚無の属性も、立派な系統の一つだ。とはい
え、虚無のインテリアなど、何をモチーフにすればいいのか。

そもそも、虚無の使い手は、現在世界で四人だけの筈。努力とか、そういう問題ではないだろう。

というか、虚無って何だ？ 無属性って考えていいのか？ いや、そもそも無属性の物質って、何だ？

考えても仕方ないので、自分の身体に留めたままにしておく。試しに系統魔法を使ってみたが、特に可もなく不可も無し。四つの属性、全てに対して、目立った反応の違いは見られない。取りあえず、無属性としておいた。

さて、それからが大変だつた。

「……ちょっと、いらっしゃい、喧嘩しない！ ほら、仲良く。……え？ ああ、ひょっとして、水が古くなつた？ ジャあ取り替えないと……だからそこいつ、ちょっとかい出さない！」

託児所の職員も、こんな感じなのだろうか。

精靈達はやがて、それぞれの色から変化しなくなつたが、それだけにはつきりと、居場所や行動が分かる。火属性のくせに、他の属性に喧嘩を売つていたり、風の属性が他のインテリアの乗つ取りを進めたり……。

それらを引き離すのも、一苦労なのだ。

アクセルがトイレに行く為に部屋を出て、戻つてみれば水のインテリアを火の精靈が乗つ取り、水の精靈達が途方に暮れたように漂つていたり、火の精靈が他のインテリアに攻め込んでいる隙に、風の精靈が火のインテリアを強奪していたり。

それだけならまだしも、四系統の精靈全てが入り乱れ、部屋の至る所で己以外全て敵、な大戦争を繰り広げていた時は、流石に無視

して寝てしまおうかとも思った。

「ほらっ、大人しくしろ！ 自分とこに戻れ！ 行儀の悪い子には、お菓子やらんぞっ……て、お前らほんと……食欲には忠実なんだな」

インテリアの前に食べ物をお供えしてみたら、意外にも好評だった。いや、好評すぎた。

比較的大人しい水のインテリア前に置いたところ、四つのインテリア全てから、全精霊が突撃した。流石に四色の奔流は見事で、暫し見とれてしまつたが。

とはいって、基本的に精霊達は物質を擦り抜けるので、備えた食べ物は全く無傷。どうやら、食べ物の中の何かを食べているらしいが、それが何なのか全くわからない。重さも変わらないし、味も変わらない。

食べ物よりも、お菓子が好みらしい。では飲み物は、と、試しにワインをコップでお供えしてみたら、群がるのは水の精霊だけ、残り三系統の精霊たちが羨ましそうにしている、といつ、なかなか面白いものが見られた。

喧嘩になるので、食べ物やお菓子は同じものを、四つにきちんと等分してお供えしている。それでも、喧嘩は絶えないのだが。

（……日に日に増えてるのは、気のせいだよな……？）

前は確かに、精霊達は漂つほどしかいなかつた筈だ。それなのに今や、インテリアの周囲を忙しく流れている。

精霊同士は、同じ系統ならすんなり重なるので、いくら増えようが、体積は変化しない。他の系統同士だと反発しあうが、それはそういうものなのだろう。つまり、系統精霊全てをコンパクトにしてみたら、僅か四つ分の体積で済む。なのに、それをせずにバラバラ

になつてゐるのは、あつとくつりでいるからだ…… そう考へておく。

お菓子の脅しが有効なよつて、だつやうにかかるの言つては理解している。こちらからは見ることしか出来ないが、それでもだいたいの動きで、精靈たちの気持ちは大まかに判断できるようになつてきた。

故に、意思の疎通が出来ることが嬉しく、楽しく、もつと会話したいのだが…… 流石に横から見れば、自分の部屋で、自作のインテリア相手に独り言言つてはいる、頭の危ない少年だ。部屋のドアはきちんと閉めるようにしてゐるし、父親は相変わらず留守にしがち、母親は音楽が唯一の趣味であり生き甲斐があるので、四六時中楽器に触れているから、用心すべきは使用人達なのだ。

肝心の魔法の威力については、一度試したきりだつた。

ウインドブレイク…… 風を爆発させるような魔法を、試しに、風色に染まつた精靈達のみを行使してやらせてみたら、自分が吹き飛んだ。狙つたのは、三メートルほど前方に立てた木の杭だつたのだが。

本当に、こつそり試して良かつた。

いぐら何でも、きっとあれだ、純度が高すぎたのだ。自分の周囲の、無属性らしき精靈で薄めれば、いつも通りの威力になつた。

最大出力を試してみたい気はするが、やめておく。絶対に、自爆する。それ以前に、それをこつそり試せるような、秘密が厳守される場所がない。

そもそも、ラインクラスになつたばかりの自分が、スクウェアク

ラスの威力を出せる方がおかしいのだ。言つてみればこれは、チートコードだつ。

禁じ手として、封印する。まあ、極限のピンチに陥つた時に、自

爆覚悟で封印を解くとしよう。

属性が固定された精霊たちを、格闘に利用できないか、現在の目標はそれだつた。

ベッドの上に胡座をかき、膝の上に手首を乗せ、十本の指に意識を集中する。周囲のインテリアから精霊を集め、指でバラバラに操るようにして、奔流を作り出して操作する。

火の精霊が暖かい。

水の精霊が体内で流れる。

風の精霊が頬を撫でる。

土の精霊が集合する。

それを感覚として察知できるのもやはり、自分だけだつたようだ。試しに精霊を集め、リーズに向かってこつそり放つてみたが、彼女が何か気付いた様子はなかつた。それはそうだ、風の精霊をいくら走らせてても、そのままで髪の毛一本たりとそよぐことは無いのだから。

属性が固定されようと、あくまでそれ自体では、何の影響ももたらさない。

まるで、マスゲームの練習をさせるとおり……精霊達に、号令を出す。普段は我が儘だが、こちらが強く願えば、それに応じてくれるので。

ノックの音。見られても特に問題ないので、

「若様、旦那様がお呼びです」

「ああ、わかった。すぐ行く」

メイドの声に返事をし、立ち上がる。

じつとしては、そして集中していれば、精霊への命令も難しいものではないが、行動しながら、他人と会話しながらだと、その難易度が強烈に跳ね上がった。

すぐに行動を乱し、ばらける精霊達を見ながら、理想とはほど遠いと溜息をつく。

いや、今の自分だって、相當に強い筈なのだ。少なくとも、十歳にも満たない年齢でラインメイジになつてている時点で、なかなかに非常識なのである。

しかし……これから先、自分の非常識さなど、通用しなくなる……そんな非常識な物語が始まること、生き延びる為には、まだまだ足りない。

相手として想定すべきは、メイジや幻獣、亜人たちだけではない。タルブの村のゼロ戦、それに、ロマリアの虚無の担い手が使うという世界扉から引っ張つて来られるであろう、近代兵器。もしも、自分の未来で、あれを相手にする可能性があるのなら……。

(まだだ。まだ足りない)

あんなもの、相手にしたくはないというのが本音だ。従つて、オ

人と敵対するのは避ける。

だが、もしも……彼が将来、自分の前に立ちはだかる事になれば？
確か機関銃なら、水の壁でも作り出せば、銃弾が自壊して防げた筈。もしくは風で軌道をそらすという方法もあるが、才人の主な武器である、インテリジョンスソードの「デルフリンガー」には、魔法を吸収するという特技があり……それが怖い。

それを考えれば、手は抜けない。その余裕が無い。せめて、サイヤ人クラスの存在にならなければ、安心は出来ない。
いや、それが無理だとしても。この世界での、最強と呼べる存在の一角にならなくてはならない。

(……デカ過ぎるだろ、夢が)

ただ、長生きしたい。殺されたくない。

そんな当たり前のような願いを叶えるためには、最強とならなければいけないのか。

平穏な人生というのも、案外楽ではない。

ただ、己の小心さ故なのだろうが。

「おお、来たか。アクセル」
「三ヶ月ぶり……ですね、父上」

ラヴィス子爵は、バタバタと部屋中を歩き回っていた。レビティションで彼方此方の書物を浮き上がらせ、表紙を確認しながら、何冊かを手に取り、机の上に積み上げる。

この父親は、忙しいかのんびり休んでいるか、そのどちらかしかない。先ほど、メイドがアクセルを呼びに来た時、そこで初めて、子爵が帰っていることを知った。それが、日常。アクセルがもっと甘えれば変わるだろうが、既に独り立ちしそうな我が子に、かえつ

て自由に動けると喜んでいたりしない。安心して、アクセルが知らない仕事に精を出せるのだろう。

寂しい家族だとも思うが、両親の仲は悪くない。亭主元氣で留守が良い、なのか。

たまに帰ってきた時は、アクセルが敬遠するほどべつたり愛し合つていて。

父親が留守の間、母親も特に寂しくはないようだ。お茶を飲むか、音楽を楽しむか。アクセルを愛していないわけではないが、これもまた、一つの家族の形なのだろう。

「どうか、そんなになるか」

ふむふむと頷きながらも、子爵の動きは止まらない。先ほど帰つてきたりしいが、またすぐに、次の出張の準備をしていた。

「それで、父上。御用は？」

「ああ。アクセル・ベルトラン・ド・ラヴィス。ラヴィス子爵領の代官に任ずる」

アクセルはそつと、頭に手を当てた。

「父上。一体何を……」

「まあ聞け、確かに珍しいが、前例がないわけじゃない。私はこの通り忙しい身だし、いつ仕事の日途が付くかもわからん。しかし、子爵が不在というのは問題だ。そこで、名ばかりではあるが、息子のお前を領主代理とする。心配するな、座つてるだけでいいんだ。細かいことは、ゼルナの部下達がやつてくれる」

「Jの屋敷から徒歩で一時間ほど歩いたところに、ゼルナの街があ

る。ラヴィス子爵領の中心地とも言つべき場所で、言つまでもなく、子爵領最大の街。そこには執政館が建てられており、官吏が詰めている。

一応、そこで政治を取り仕切つているのは元執事のメイジだが、そろそろ老体なこともあり、後方へ退かせたい。

「わかりました。アクセル・ベルトラン、謹んで拝命致します」「おお！ 相変わらず聞き分けが良いな！」

「父上に似たようです」

「……そうか。まあ、慣れるまでは向こうで寝起きをするようにしろ。要領がわかつたら、週に一度か一度は屋敷に戻り、母さんを安心させてやれ。それと……」

「はい」

「……リーズを、同行させよう

少し迷いを匂わせながら、ラヴィス子爵は告げた。
アクセルの教育係であるリーズだが、同僚のメイドや使用人達からは、あまりウケが良いとは言えない。

平民に堕とされたとはい、彼女の根は貴族であり、他の平民を見下す言動が目立つのだ。勿論、メイジであるリーズに表立つて喧嘩を売る者はいないが、使用人達の不満が、そろそろ無視できないレベルにまで達している。

没落貴族の娘が、理由もなく威張つている……快いものではない。

「わかりました」

聞き分けよく、アクセルは頷いた。

しかし、ラヴィス子爵はどうも、リーズに甘い気がする。

仮にも貴族の屋敷で働くメイド達は、通常の平民などとは比べ者にならない程の教養を身につけていた。貴族に使用人を世話するギルドがあり、メイドは皆、そのギルドの試験をパスした才女たち。貴族として育てられたリーズと比べても遜色はなく、そしてメイドはメイドとしての自負があるからこそ、平民になつても高圧的なリーズを苦々しく思つていた。

はつきり言つてしまえば、リーズがまともに身につけているのは、魔法のみ。試験をパスしたわけではなく、ラヴィス子爵の独断で引き取られた娘だった。

アクセルは父親の部屋から出たその足で、リーズに異動を伝えに行つたが、彼女は寧ろ、屋敷を離れることが出来てせいせいする、という風だった。

まあ、これが普通の貴族といつものなのだろう。

三日後、一台の馬車が、ゼルナの街に到着した。
ラヴィス子爵領最大の街とはいえ、所詮は片田舎。城壁に囲まれた街であるので、大した大きさはない。

出迎えた元執事だという男の目には、クマが出来ていた。鳥の骨、などと呼ばれている……現在は、まだ呼ばれていないが……マザリ一一枢機卿と同じく、相当に苦労しているらしい。

自分の仕事を子どもに奪われることで、怨みに思つて何か仕掛けてくれるか? というのは、杞憂だった。早く家に帰つて、のんびりし

たい。孫と遊んで暮らしたい……そう語る老人の頬を、涙が伝う。思わず、今までありがとうございました、と、両手を取つて頭を下げてしまった。

さて。

館の一階、執務室の奥、代官の机に腰を下ろしたアクセルは、周囲に集まる人々を見回す。

「さて、と。まあみんな、頑張るよ!」

それだけ言つと、さつさと文官たちを仕事に戻した。

そう、こんなものなのだ。自分はただ、形式的に派遣された代官。ここにいるだけでいいし、文官たちも、それ以上のことを望んではいないだろう。決まり切つたいつもの仕事を、今日もまた、繰り返すだけ。

「リーズ、ちょっと散歩に行つてくるよ

「しかし……」

「大丈夫、ちゃんと変装して行くからさ」

山賊のボスの首を持ち帰つた時、同時に、アクセルは魔法の腕前を示したことになる。

お忍びで、なら、供を連れずとも問題ないと判断され、リーズも快く、というわけではないが、そつと頷いた。ラヴィス子爵の代理のアクセル、その彼の代理を務める彼女なので、文官達に混じつて書類仕事に向かう。

整えられていた髪をグシャグシャに搔き乱しながら、運び込まれたばかりの荷物を漁り、着古された平民の服に着替える。リーズが見れば、こんなボロを纏つなんてつ、と、拒絶反応を起こしそうだ。

続いて、風呂敷くらいの布に、適当に予備の衣服を詰める。それを背負えば、世間の荒波に揉まれつゝも健気に生きる、飲んだくれの父と病弱な母と幼い弟妹を背負つた、平民の長男（いな行商の旅）……ともかく、どう見ても貴族ではない少年が出来上がった。

人など滅多に通らない裏門から出て、軽く地面を転がり、更に砂埃を頬に叩き付ける。

（これで、バレる心配はないな？）

疑問符が浮かぶが、アクセルはそのまま大通りへと向かった。

文官たちは、その目で、その足で、街の様子に触れる事はない。お飾りの代官ではあっても、本当のお飾りであつてはならない。というより、少しでも良い方向へと持つて行きたい。

転生者とはいえ、自分には原作知識以外、何の武器も無いのだ。政治も知らないし、外交も知らない。農業の知識も、軍事の知識もない。あるのはお決まりの、アニメやら漫画やらゲームやら……それと、どうでもいいような豆知識群。

出来ることからやるつ。そう、例えば、捜査とか。

することがなくて暇で暇で、勸善懲惡の水戸黄門じつこでもやろうか、そんな理由であることは否定できないが。

領内第一の都会らしく、様々な人間が溢れている。まあ、そりや街なのだから人だらけなのは当たり前だが。

取りあえず、地理を把握するためにひたすら歩き回る。時折露店や大道芸人を見物しながら、店の場所、道路の様子など、なるべく頭の中に入れていった。

「……やれやれ」

一時間後、街の中心部を一通り歩き回ったところで、アクセルは噴水のベンチに腰を下ろす。

(……なんもねえや)

自分に出来ることが、である。昼間から酒を飲んでる大人達が暴れ、露店で万引きしようとした少年がぶん殴られた。アクシデントは、その一つだけ。

街は、平穀無事な時間の中にある。

目立った悪も、目立った善もなく。可も無し不可も無し。

(まあ流石に、漫畫みたいなわかりやすい悪役はないか)

もしいたとしても、その悪役を懲らしめてめでたしめでたし、といつほど、簡単ではないだろうが。

「ん？」

そして、アクセルはその男に気付く。

自分の右奥に見える、建物に挟まれた薄暗い通り。その陰に、じつと一点を見つめる、無精髭の男がいた。年齢は見たところ、一十歳前後か。

「……」

既に冬も終わったといつのこと、厚手のコートをしつかりと着込み、フードを被つてこる。その両手はざらざらと、刃のような輝きをし

ていた。

背を丸め、片手をコートの中に忍ばせ。

（殺すつもりか……？）

男が見つめているのは、噴水を隔てて広場の向こう側に建つ、街一番のホテル。今は貸し切りとなつているらしく、見張りに立つ傭兵達を避けるように、誰も近づかない。

別に、殺氣を感じたとか、そんなことはなかつた。そもそもそんな真似、本当に出来るのかわからない。

しかし、季節外れの分厚いコート、その内側に入れられた手、そしてシリアスな表情。

まさか、隣の菓子屋で限定発売されている、ナツツベリーケーキを買うわけでもないだろ？

再び男を見ると、彼は目を閉じていた。そして……肩を上下させて何度も深呼吸し、目を見開くと、裏通りから広場に出た。

「ぶつ殺す……」

彼がアクセルのすぐ前を通り過ぎた時、彼のぶつぶつとした咳きの正体がわかつた。

やはり目的は、殺し。恐らくは、あのホテルを貸し切つている人物。

それにもしても、咳きとはいえ声に出すとは……格好だつて、あんな“それらしい”もので。

殺し屋ではないが、強い決意がある。

(ちよつと……ちよつとだけ。見るだけ)

少なくとも、あの男には自分の命を脅かすほどの力はなさそうだ。いい加減、退屈で、暇だったのも理由。アクセルは膝に手を当て立ち上がると、ホテルの隣の裏通りへと入った男を見た。

「はい、ちよつとめんよオ」

軽く声を上げながら、人混みを擦り抜ける。頭に籠を乗せたおばさんの前を通り、子どもを背負った女性の背中を掠り……。

「おいつ、そこの薄汚い小僧。このホテルは貸し切りだ。さっさとどつか行け」

「なんだよオ、ちよつと近づいただけじゃんかよオ……」

口を尖らせながら、見張りの傭兵に言われたとおりホテルの前を横切る。そして、先ほどの男と同じように、見張りの視線が外れた時を狙つて、裏通りへと飛び込んだ。

街一番のホテルというだけあって、面積も広く、途切れない壁が続いている。そこを少し進んだところで、アクセルは「ミミ箱の陰に隠れた。

(見つかってるし……)

少し先、ホテルの裏口の前に、男が三人。さつきの男は路地に倒れ、亀のように蹲っている。それを蹴りつける、一人の傭兵。

(見張りか……そりや、裏口にだつているだろ？)

近くに、男がコートの下に隠し持っていたのであれば、一振りのナイフが落ちていた。

しかし、何がどうなっているのか。

「コートの下に武器を隠し持つた男を、そのまますんなり通すわけにはいかない。そのくらいの理屈は言つまでもないが、男は誰を狙つたのか。

貴族……というわけではないだろう。貴族だつて傭兵を雇うが、それならホテルの前に、これ見よがしに馬車を待たせておく筈だ。いや、宿泊しているのなら違うが。そうだ、貸し切りなのだから、当然宿泊してるだろうし、貴族の可能性もあるか。

しかし、それなら当然メイジであるわけで……メイジを殺しに行く男の武装が、ナイフ一本？ あり得ないだろう。

いや、待て待て。この街には、貴族は自分しかいない。そこへお忍びでない貴族が来るのなら、余計なトラブルを防ぐため、当然真っ先に自分に連絡が来る筈で……。あ、でも、到着してすぐに街に出てから、自分にまで連絡が来ていないのであるかも。もしくは、単純に皆が伝え忘れたのか。

（あああっ、もう！ バシッと正解出してくれよっ、俺の脳みそ！…）

まあ……自分の頭脳にそこまで期待する根拠もないのだが。別に、答えを一つに絞る必要はないのだ。ホテルが貸し切りなのだから、宿泊しているのは当然、それなりのステータスを持つ人間。即ち……貴族か、それなりの商人か。

蹴られ続ける男が、だんだんと動かなくなっている。

(……バカか、俺。あの男に聞けばいいじゃねえか)

アクセルは立ち上ると、三人に向かつて走り出した。

「兄ちゃんっ！」

そう声を出すと、傭兵一人が攻撃を止め、少し驚いたようにこちらを向く。アクセルはそのまましゃがみ込むと、蹴られていた男にしがみついた。

「兄ちゃんっ、何してんだよっ、こんな所で！」

「兄ちゃん……ああ、小僧。こいつ、お前の兄貴か？」

合点がいった、という表情で、傭兵の一人が声を掛ける。

「そうだよお！ お前らっ、兄ちゃんに何しやがるー！」

あくまで自分は、この男の弟。男は気絶してはいないが、かなりのダメージを受けており、喋ることも出来ない様子だ。突然現れた自称弟を確認しようと、彼の目だけが動く。

「何しやがる、じゃねえよ。この野郎、よりもよつて、バルビエ様を狙うたあなあ」

バルビエ……その名で、商人だと判明した。

確かに、主に骨董を商う男で、出身はかなり遠くの……忘れた。今ホテルを貸し切っているのは、そのバルビエ。

「親父の敵討ちか？」

「敵討ち？」

聞き返したのは、もう一人の……若い傭兵。壯年の傭兵は顎鬚を撫でた。

「そうだよ。三日前……だつたか。こいつの親父が、分相応な逸品を持つてゐるって聞いてな。バルビエ様が自ら出向いたんだが、頑として譲ろうとはしねえ。時間の無駄だつてことで、俺らが忍び込んで、一家皆殺し。ブツは日出度くバルビエ様の手に……」

事も無げに話す傭兵。アクセルは、蹲る男の身体に力が込められるのを感じた。

「運悪く……こいつにひとつは運良く、だろうが、こいつだけ外出しててな。まあ、敵討ちに来るかもつてんで、一応警戒していたわけだ」

言つまでもなく、その傭兵が告白しているのは犯罪。

しかし、それを易々と口にしているのは、口封じをするからではない。勿論、口封じに男とアクセルを殺すつもりだろうが。

つぐづぐ、弱者に厳しい世界だ。

この男だって、帰宅して家族が皆殺しになつていれば、勿論通報しただろう。

しかしその通報も、受けるのは下つ端。バルビエがばら撒く金の力で、すぐに止められ、握り潰されてしまつ。一家皆殺しですら、所詮は金さえあれば黙らせることが出来る、些細なことなのだ。

近所の人間だって、関わりたくないはな。

せいぜい、通りすがりの盜賊にやられた、可哀想な一家……そのような結論に落ち着き、やがて風化する。

ガンツ

アクセルが事情を把握した時、思いも寄らないことが起つた。

「……何しやがる」

壁に手をつき、殴られた頬を擦る壮年の傭兵。拳を握り締め、鋭い目つきになつてゐるのは、若い傭兵。

（え……何？ 仲間割れ？）

思い掛けない展開に、アクセルは一人の傭兵を見比べる。

「ふざけるなつ」

若い傭兵の怒声。

「そんな……そんなことの為に……人の命を、何だと思つてる！」

（おお……熱血だ）

軽く感動したアクセルだが、それに比べて自分の、あまりにも冷徹な……無機質な感想に、自己嫌悪に陥る。

確かに、酷い話だ。自分だって、バルビエを放つておくつもりはない。

しかし、この若い傭兵ほどの激情は、遂に生まれなかつた。

「……あのなあ、新入り」

バシイツと乾いた音が響く。平手打ちの反撃を喰らい、若い傭兵は背後の壁にぶつかると、そのまま尻餅をつく。

「きやつ……」

（弱つ……しかも、女みたいな悲鳴……え？ きやつ、て？）

すっかり蚊帳の外となつたアクセルを横切り、壮年の傭兵は、女のような悲鳴を上げた傭兵の兜を掴むと、それを素早く外した。

（……女だつたのかよ……）

兜で、顔の大部分が隠れていた為か、気づけなかつた。声変わりの遅い新米傭兵が、兜を外せば、栗色の髪が露わとなり、そしてその顔つきは……紛れもない女の子。

「バレてねえと思つてたのか？ もう、全員知つてんだよ

「……い……痛……やだあ……」

少女は座り込んだままボロボロと、大粒の涙を流し始めた。

（……つうかさつき、倒れた人間ガシガシ蹴つてたじやん。ストンピングだつたじやん。浦島太郎の悪ガキBだつたじやん）

男勝りで勝ち気な少女が、男を見返すために性別を隠して傭兵にと、そこまで広がつていたアクセルの想像は、一瞬で打ち碎かれた。

チツ、と、壯年の傭兵は手を伸ばす。少女の鎧に付いていた飾り布を引きちぎると、それを無理矢理、泣きじゃくる口に押し込んだ。ズボンを引きちぎれば、少女の下半身が露わとなり、白い太腿と、清楚な下着が晒される。何をされるのか理解したのか、少女の顔は、恐怖で一層歪んだ。

「いいか、新入り。テメエが昨日食つた飯だつて、そうやつて殺されたヤツらの持ち物で買った、血塗れの飯だ。おかわりもしてただろ？ いい機会だ、ようつぐ、そのちつさい身体に叩き込んで、教育してやるよ」

その前に……男は呟くと、剣を抜いた。

「わいつと始末しとくか」

倒れ伏した男は、顔を上げ、傭兵の剣を見つめる。その顔には既に憎しみではなく、恐怖が張り付いていた。

「……ん？ そういうや、あのガキは……」

倒れ伏す男に寄り添つていた、弟がいない。

「いや……そもそも、生き残つたのはこいつだけで……それに、息子は一人で……」

「今更かーい」

傭兵の右後方に回つていたアクセルの、突つ込み。ただし、手の甲ではなく、ナイフで。

ベルトと鎧の間から、脇腹を深々と刺され、痛みで声を上げることすら叶わなかつた傭兵の身体が折れ曲がり、やがて路地裏に転がる。何が起こつたのか、理解できないといった瞳から、暫くして光が失われていつた。

アクセルは首を振る。

弟だと偽つたのは、失敗だつた。たまたまこの傭兵が気付かなかつたから良かつたものの、これがもつと頭の回るヤツだつたら……それだけではなく、腕も立つヤツだつたら……。

（まあ、ともかく……）んな危ない橋、渡るもんじやないな（

切つ掛けは、ただの好奇心。それがいつの間にか、一人命を落とすよつな結果を生んでしまつた。

（そうだ、あの娘……）

壁に目を向けると、少女は失神していた。口を塞がれていたおかげか、悲鳴を上げることはなかつたが……座り込んだ地面が湿り、湯気が立ち上つてゐる。

（……何で、傭兵に……）

（……からか烈風力リンの噂でも聞きつけ、憧れたのか？ まさか？

気になるが、今は話を聞ける状態ではない。アクセルは傭兵の死体を踏み越えると、未だ倒れたままの、ボロボロの男に歩み寄つた。

「……やあ」

軽く微笑み、右手を擧げる。

どういう対応で行こうかと思ったが……謎の少年、といふこととする。

強烈な第一印象を与えておけば、これから主導権を握り易くなる筈だ。

そう、これから……。

出来ることないんじゃないか、とはいってみたましいことはある。その為には、自分以外の人間を引き入れる必要があるのだ。

ところで、自分に人を見る目があるのか……多分、ない。とりあえず、前世ではなかつた。だから今生でも、期待出来ない。

流石に、主人公組など、原作で登場する人物達については、ある程度信頼出来るだろうが……それでも、絶対ではない。彼等だって、騙されたり、操られたりする。モブキャラの一人である自分は、その時に近くにいれば、あっさり殺される可能性が高いのだ。皆が過ちに気付いた時には既に遅く、アクセル・ベルトラン・ド・ラヴィスの名が刻まれた墓標の前、沈痛な面持ちの誰かが、「アクセル、あなたの死は無駄にしない……」とか言いながら、夕陽の中、涙を拭つて黒幕を倒しに向かう……。

……何だか、笑えなさすぎる想像だ。

いや、じゅうぶん無駄死にだし。

それくらいなら……。

……原作キャラを庇つて……出来れば女の子の胸で、惜しまれながら死ぬ。

あり、か？ それはそれで。よし、その時には“可愛い顔が台無しだぞ”とでも言つてから死のう。いや、“いい女になれよ”も良い。“死ぬ前に一発ヤラして”は……キャラを選ばないと、引かれ可能性が……まあ、[冗談だと理解してくれる相手なら、言つてみようか。

いつの間にか、思考が随分脱線していた。

「こちらを見上げる男は、目を見開き、呆然とした顔のまま。流石にそろそろ、名前くらいは知つておきたいのだが。

いやその前に、こちらが名乗るのが常識だ。しかし、今アクセルと名乗るのも……。じゃあ、ミドルネームで……。

「ベル、と書いつ。そう呼んでくれないかな？」

右手を自分の胸に当てながら、アクセルはそう書つた。

「キミの名前は？」

ゆづやぐ、男は答えてくれる。

「……ナタン」

……むう……結構イケメンだな、畜生が。

無精髭が生えているし、殺意に満ちた表情だったので気付かなかつたが、今の呆然とした顔をよく見れば、二十歳手前か。老け顔だとしても、高校生くらいだなつ。

髪は少しクセがあるらしく、微妙にウェーブがかかっている。

「ナタン、か。……傭兵の数は、知つてる？」

「え？」

「今、バルビエが雇つてる傭兵だよ」

「……確か……七人」

「成る程、七人の傭兵か。生意気な数だ」

アクセルは隣のホテルを見上げ、鼻で嗤つた。

「それで、今もまだ七人かい？」

「……いや……今は……六人」

ナタンの視線が、脇腹にナイフが突き立つたままの死体に移る。その隣で失神しているがつかり男勝りは、多分再起不能だろう。となれば、残りは五人。ホテルの正面入り口の見張りが、四人だつた。ならば、残り一人は中か。そして恐らくは、バルビエの傍に。

いや、ナタンも、“確か”と言つていた。この傭兵もどきの女の子だつて、つい昨日雇われた可能性もある。断定は出来ない。数え間違いだとして、あと二人か三人くらいはいると、覚悟しておこう。

「立てる？」

「ああ……何とか、な」

攻撃されていたのは、背中。確かに背面は前面の五倍の強度があると、バキで見た覚えがある。だんだん回復してきたのか、ナタンは壁に手をつきながら立ち上がつた。

「怪我は？」

「……なさそう、だ」

地面を見たまま、彼はふうと溜息をつく。そして……

「……ありがとう」

「ひらを見ずに、ナイフを拾い上げた。しかし、彼はアクセルの方へと向かつて歩き出す。勿論、襲いかかるつもりではない。そのままアクセルの横を擦り抜け、裏口のドアに手を伸ばし……。

「あ？」

自分の後ろに、順番待ちのように並んだ少年を振り返り、じっと見つめる。

「……何なんだ、坊主」

「いや。僕も、こっちに用がある。偶然だね？」

「……いいか……坊主。俺は、これから……人を……」

人を殺しに行く。そう言おうとしたのだろうが、彼は、背後の少年の殺人を目撃している。

「出来るの？ 初めてなんでしょ？」

アクセルがそう言つたのは、半ば確信があつたから。普通、ここまで情報を得れば、ナタンが人を殺したことがないと、完全に結論づけられるだろうが……もしかしたら、と、そんな気もあつた。

ナタンが言葉に詰まつたところを見ると、本当に初めてで間違いなかつたが。

「……遊びじゃねえんだ。バルビエはともかく、傍には恐らく、傭兵のリーダーがいる。そいつは……」

「これを言えば、大人しく帰ってくれるだろつ……ナタンは、そう考える。

「メイジだ。ラインクラスのな」

ナタンとて、勿論メイジに勝つ自身があるわけではない。為す術もなく殺されるに決まっている。

そう……ナタンは、殺されるために来た。バルビエの身体に、傷の一つでも付けてやるために。それが叶わずとも、顔に睡でも吐きかけてやる。

流石にアクセルも、田の前にいるのが、自殺志願の鉄砲玉だと悟つた。それに付き合わせるつもりはない、と、そういうことだろつ。

「ラインクラスの……メイジ」

「ああ、そうだ。だからさつとおうかこ」

「そういうことは、早く言つてくれ」

ナタンの脇を擦り抜けて、アクセルはさつとドアを開けた。死ぬ覚悟をしていたとはいえ、突然の出来事に、ナタンは慌てる。

「さて。どこにいるんだる」

「お……おいつ、待て！ 何してんだつ、坊主！」

「静かにした方がいいよ。貸し切りとはいえ、従業員は大勢いるだろうし」

冷静な口調で告げられ、ナタンはまたしても、呆然とし……結局、

少年のあとに付き従つた。

少年は、“早く言つてくれ”と、確かに言つた。普通そういうのは、ドアを開けて中に入つてからの台詞だろつ。

ナタンの自分を見る目が、得体の知れない化け物か何かを見るそれがになつたことは、アクセルの理想通りだつた。

そう。突如として現れた、得体の知れない子ジモ。このインパクトは大きい。

ナタンが慌てるほど、アクセルは反比例して冷静になつていつた。

「しかし……おかしいね」

「な、何がだよ?」

「従業員すら、誰もいない」

「……そりや、バルビエが貸し切つてるから……」

「いくら何でも、全員でバルビエを世話してゐつてわけでもないだろう。みんな暇で、スタッフルームで休んでいるのだとしても……」

⋮

廊下に放置されたワゴン車を、とんとんと叩く。

「ここまでだらしないものかな? だとしたら、街一番のホテルなんて、大袈裟すぎる」

もつと探索すれば、どうこうとかはつきりするのだろうが、アクセルは階段を上つていいく。外から見た時、最上階のスイートルームだけ、雨戸が閉まつていた。

あまり時間をかけすぎて、ナタンが冷静を取り戻してしまつのも、おいしくない。

最上階に到着した。雨戸が閉まつていたのは、たまたま改装中だつたから? いや、バカと何とかは高いところが好きなものだ。それに、折角ホテル丸ごと貸し切りにするのだから、一番上等の部屋

で過ごしたいに違いない。少なくとも、自分はそうだ。

スワイートルームの、重厚そつな扉に耳を押し当てる。果たして、話し声が聞こえた。

アクセルはナタンを振り向く。

「うん。やっぱり、ここにいるね」

「バルビエも……か？」

「さあ。ちょっと見てみようか」

「え？」

鍵はかかっておらず、ドアは簡単に開いた。

中にいたのは、三人。

でつぶりと太った、ごでごでした衣服の男。恐らく、商人バルビエ。

軽装の鎧を身につけた、精悍そうな中年男。恐らく、例の傭兵のリーダー格。

もう一人。椅子に縛り付けられた、初老の男。その太腿には何本もの針が突き刺さっており、顔は腫れ上がりしている。拷問されたということは、すぐに分かった。

それは、開くはずのない扉だった。

バルビエ、メイジの男が、信じられないようなものを見る目をしている。拷問されていた初老の男は、荒い息を吐いているだけ。

二人の目線の先、ドアの隙間にいるのは、一人の……若草色の髪の、少年。

「…………」

「…………」

「…………」

やがて、少年の顔が隠れていき……再び、ドアは閉じられた。

「それっぽいのがいたよ、ナタン」

「な……な……」

怒りすら通り越し、顔を真っ青にして口を開閉させるナタン。流石に意地悪しすぎたかと、アクセルは反省した。

「あ、閉めない方がよかつた？ そうだね……」
「じじゃ何だし、入るうか」

再び……今度はドアを全開にして、アクセルが部屋の中へと歩き出す。ナタンの手を引いて。

「…………ど……どつこつ…………ですかっ、モ里斯!」

メイジの名前らしい。バルビエは、傍らに立つ彼を怒鳴りつけた。

「は……いえ……どつこつ…………？」

モ里斯も、状況が掴めていない。

たった今、雨戸を少し押し上げ、正面玄関を見張る四人の部下達を見下ろしたばかりなのだ。

あの四人が無事ならば、残るは、裏。モ里斯の部下の内、一番の手練れを張り込ませた。一番の足手纏いも一緒にだが。

しかし、それしか考えられない。こんなことなら、あの間抜けな小娘を雇うべきではなかつたのだが、それはそれ、バルビエの趣味。このホテルでの目的を遂げたら、飽きるまで弄り、どこか娼館にでも売るか、適当に放り捨てるつもりだった。

「ナタン」

アクセルは、立ちぬくしてゐる彼に声を掛けた。

「あのメイジを片付ける。少し待つて」

「……え？」

ナタンが止める間もなく、アクセルはモ里斯へと歩み寄つた。

誰の目に見えでないが、彼の周囲には現在、風の精靈が渦巻いてゐる。流石に四系統を一度に、は無理だが、一系統だけならば、何とか制御できていた。

風を選んだのは、戦闘やトラブルが起きた場合、一番応用力が高いから。

（頼むよ……嘘）

精靈達に意識を集中させる。

やがて、モ里斯の目の前に立つた。相手が何か言おうとしたが、アクセルはそつと右足を上げ、モ里斯の左足を蹴る。もつとも、爪先が当たつたのは鉄の脛当で、何のダメージも無いが。

さながら、ノックをする時のよ。

「ンンッ……ンンッ……ンンッ……」

続けざま、二回。何をしてるのか、欠片も理解できず、モリスはじつと少年の頭を見つめる。

「わからぬいか？」

アクセルはモリスを見上げ、首を傾げた。その表情がどこか、嘲りを含んだものであることに気付くのに、少しの時間を要す。

続いて……

腕を伸ばし、人差し指を丸め、少し高めの位置にある鼻先を、ピシッと弾いた。

「売つてゐるんだけど……喧嘩を」

モリスの顔が、歪む。

腰に差していた杖を引き抜き、横薙ぎに払った。激昂しているとはいえ、その動きは素早い。何の用意もしていなかつたら、きっとあの杖に、頬を殴られていただろう。

（案外……早かつたな、キレるの）

まだ声変わりもしていない、年端もいかぬ少年。その幼い声による嘲りは、発火装置として十分だつた。

もし、逆の立場だつたら……自分も激怒していたかも知れないと、アクセルは頭の片隅で考える。

「「」のつ、小僧があああ！」

振り抜いた姿勢のまま、モリスは詠唱を始めた。杖をアクセルへ向けようと、動かす。

先ほどの横薙ぎを、バックステップで避けたアクセルは、風の精靈に意識を集中させた。無属性の精靈とブレンンドし、右拳へと収束させる。

モリスが構える杖の先に、火球が出現した。

(フレイムボール……火のラインクラスか)

もしも水のメイジだつたら、仲間に引き込む可能性もあつた。しかし、既にアクセルを攻撃する意志を示している以上、アクセルにとつてモリスは、実験台でしかない。

と言うより、メイジ……しかも、同じラインクラスの相手は初めてなので、手加減をする余裕も、度胸もないが。

別に、難しいことはしない。

ただ、風の力を解放するだけ。それならば、無詠唱で十分。

目の前には、力を強め続ける火球。どうするか。このまま、相手がこちらへ向けて飛ばすのを待つてもいいが……。

いや、まだ実験だ。それに、さつさとした方がいいだろう。

前方……火の球体に向かつて、跳躍。右腕を首に巻き付けるようにして、左耳の近くまで右拳を引く。

着地すると同時に、火球を裏拳で殴りつけた。インパクトの瞬間、収束させていた風の精靈を、一気に解放する。

放たれようとしていた火の玉は、床と水平に弾き飛ばされ……三

メートルほどしたところで、嘘のようにかき消えた。

モリスの顔から、憤怒が消えていく。その様は、ひどく間抜けなものに思えた。

両足の裏に、先ほどと同じように、風を起こす。ふわりと、アクセルの身体は宙に浮いた。フライと同じようなものだが、それよりも遙かに簡易。

飛び上がりつつ、身体の上下を入れ替える。啞然としたモリスの顔が、こちらを追つた。

そして、モリスの顔が、天井まで向いた時……その顔を、そつと、両手で包む。

（痛いな……）

右手の甲が、若干の火傷を負っていた。もつとタイミングを正確にすれば、無傷で弾けただろう。やはりいきなり、飛んでくる火球を弾き飛ばすなどという無謀をしなくて、よかつた。

また、風の精霊を……足の裏のそれを意識して、解放。

部屋の中に、グショリという音が響く。

石造りの床だが、もしも板張りだったら、下の階まで突き抜けていたかも知れない。

モリスの後頭部は、床にたたきつけられ、絨毯にぬるつとした血液を零していた。その彼の頭の両側には、彼自身の脛当てがある。モリスの身体は、腰の辺りで二つ折りにされていた。

出来るだけ、派手な殺し方をしよう……そう思つたからこそ、

行動。

アクセルが、永遠に凍り付いたままであるうモ里斯の顔から両手を離し、腰を曲げて足を床に置いた時、バルビエは尻餅をつき、その肥満体を震わせ始めた。

「ひ……」

何の緊張もない、アクセルの顔が向けられた時、バルビエの股間が濡れ、湯気が立ち上った。

それが、裏口のあの娘を連想させ、アクセルは流石に顔をしかめる。少女の失禁で興奮するような性癖はないつもりだが、それでも、こんな醜悪なものを見せられるよりはマシだ。

急いで窓、そして雨戸を突き破り、大声を出せば、入り口にいる傭兵たちが気付く可能性もある。

しかし、今のバルビエにはその選択肢はなかつた。いや、選択肢はあつても、頼りのメイジが二つ折りにされたことで、彼もまた、完全に心をへし折られていた。

「ナタン」

アクセルは後ろを振り向くと、突つ立つたままの男に声を掛ける。同じく放心状態だった彼は、はっとしたように意識を戻した。

さて……しかし、今のこのナタンに、人を殺せるのか。

噴水を横切つた時なら、出来ただろう。裏口に踏み込んだ時なら、出来ただろう。見張りに蹴りつけられている時なら出来たはずだ。

だが、彼の目の前にいるのは、もはや何の……何の武力も持たない、太った男。

己の欲望を満たすためなら、平民の命など、吹けば飛ぶ塵屑同然と思っていた悪の権化というヤツも、既に巨体を震わせるだけの、肉の塊。

（少し……調子に乗りすぎたか？）

自分が……アクセルが、である。

ナタンの心に、出来るだけ強い衝撃を与えようとしたのだが、それも度が過ぎたか。あまりに衝撃が強く、彼の中の殺意まで踏み潰してしまったのではないか。

バルビエの姿は、あまりにも憐れなのだ。

もう、ここまで哀れな存在になり果てたのなら、殺すこともないかも……。

そんな事を考え、そして何もしない今までいることを決めたのなら……その時は、自分がバルビエを殺す。

ナタンは……出来れば、殺したくない。そして、協力して欲しい。

どうなのだろう、ナタンは、未だ動かない。

……わかった……後、一押し。ほんの、一押しだけ。
それでも……無理なら……。

アクセルは人差し指を、そつと、バルビエに向けた。
彼の口から発せられたのは、ただ一言。

「報いを」

ナタンの視線が、アクセルへと向けられる。そして、バルビエにも。

スウ……と、小刻みに震えていた瞼が静止し……田線が定まる。

アクセルの駄目もとの一押しは、彼の心を押し出した。

隠していたナイフが、コートの内側から姿を現す。その握りを確かめるように、数回、指が動いた。ゆっくりと、踏みしめるようにしてバルビエに近づいた……。

「ひつ、やつ、やめつ、やめろオオオ！」

バルビエは、絞り出したような絶叫を上げると、ナタンに背を向けて、這つて逃げようとする。腰が抜けたのか、立ち上がることもなかつた。逃げ場が無いことなど、バルビエも理解しているだろうに……。

絶叫に呼応するかのように、ナタンが飛びかかると、その背にナイフを突き刺した。その場に両膝を付くと、再びナイフを振り上げ、二度、三度、四度……一心不乱に、刃を突き立てる。

やがて、バルビエがピクリとも動かなくなり……そして、ナタンは続けられなくなつたのか、ぜえぜえと荒い息を吐きながら、ナイフを落とす。石造りの床で、乾いた音を響かせた。

「……お美事」

もつと氣の利いた台詞を言えるようになりたいものだ。

アクセルは、椅子に縛り付けられている、初老の男に向かつた。酷い有様だ。太腿に突き刺さっているのは、小枝ほどの長さの針。殺し屋イチの、変態組長が持つていそうなアレ。とりあえず、それ

らを全て引き抜く。

あとは、へし折られた指。腫れ上がった顔。

しかし……失敗だつた。水の個性を持つ精霊、というか魔力は、全て祭壇に解放してしまつてはいる。勿論、減つた魔力は時間と共に回復するが、今の無属性魔力がほとんどの自分では、大したヒーリングも使えないのだ。

こんなこともあらうかと、密かに入手しておいた、治癒の秘薬。早速その出番が来たことを、喜ぶべきか恐れるべきか。

薬を飲ませようと、瓶の蓋を開けた時、ナタンが歩いてきた。振り向いたアクセルは、彼の雰囲気の違ひを感じる。とはいへ、曖昧なもので、その詳細まではわからないが……。

そう……例えるなら……“兄貴の言葉が心で理解出来た”ペッシになつてゐる。

「……どうだつた？ 初めて人を殺した感想は？」
「別に……。思つてたより、全然……大したことば、ねえ」

うん。やはり、ペッシだ。

流石に、まだ顔を青くしているが……それは、余韻のようなものだろう。

「手伝つて。この人、そのソファに寝かせるから」

「……ああ」

素直に、手を貸してくれた。鍛えてるとはいへ、こいつは単純な力仕事は、流石に未だきつい。

初老の彼は、見たところホテルの従業員。こんな年齢のボーイな

ど見たことがないので、支配人か、それに近い人物なのだろう。

薬は問題なく効果を発揮したが、目覚めるにはまだ、大分時間がかかりそうだ。近くのテーブルにあつた水差しを持ち上げ、今更ながら右手の火傷に注いでいると、ソファの手すりに腰掛けたナタンが口を開く。

「……これからどうすんだ？」

「これから……？」

それを聞くということは、少なくともアクセルを、自身より上に見ている証拠か。

「そうだねえ」

アクセルはそつと、窓に近づき、雨戸を僅かに動かす。しかし既に眼下には、見張りの四人の姿はなかった。

(……まさか)

スワイートルームの、開放された扉。その、更に向こう。階段の方から、忙しない足音が聞こえてきた。

「とりあえず、残りの四人を片付けてからにしよう

向かってきているのは、四人の傭兵。奴らがよほど急け者でない限りは、無断で持ち場を離れたりはしない。つまり、その四人が、持ち場を離れる必要があると判断したこと。

見た限りでは無人だったが、もしかしたら未知の傭兵が、一部始終を見学していく、慌てて報せに行つた、という可能性も、まあ……数パーセントはある。

しかし、普通に考えれば、裏口の死体が見つかったか、意識を取り戻した娘が報せたか。

…… どうだよ、死体だよ。すっかり忘れてた。

ナタンに、自分をいかに非常識な存在であると見せるか、それに気を取られすぎて、死体の始末を失念していた。近くにゴミ箱もあつたんだから、隠し様もあつただろうに。いくら狭い路地とはいえ、誰も通らないと考えるのは、あまりにも楽観的過ぎる。

次からは、もっと慎重に行動すべきだ。今回の失敗は、自分を都合よく印象付けようとしての失敗という、何ともお粗末なもの。

ナタン、と声を掛けようとしたが、既に彼はナイフと……メイジが装備していた剣を、それぞれの手に握っている。テンションが上がっているだけか、それとも、傭兵を殺さなければ自分が死ぬと、冷静に判断したからか。

どちらにしろ、仇を討ち果たしても、まだナタンは、生きることを捨ててはいない。

良い結果だ……と、アクセルは内心満足しながら、階段に向かって走り出した。足音は、更に大きくなつていく。

ちょうど、階段の向こうに誰かの頭が見えた時、アクセルは跳躍した。

咄嗟に見えたのは、一列になつて駆け上がつてくる、四人の傭兵達。その先頭の男が、思わず立ち止まり、驚いたようにこちらを見ている。

その傭兵は、反射的に両腕で防御しようとするが、その間を擦り抜けるようにして、アクセルの両足が顔面に叩き付けられた。いくら子どもの身体とはいえ、30? 近い物体が顔面に衝突したら、耐

えられるものではない。そのまま、後方の三人を巻き添えにする形で、五人は団子のように転がり落ちていった。

階下まで、何とか下敷きにならないように転がり落ちた後、アクセルはいち早く体勢を立て直すと、団子状態の傭兵達から距離を取る。近くにあつた花瓶を持ち上げると、とりあえず「こちらで一番近い頭に目がけて、ぶん投げた。

それが碎け散つた時、階段の上から、雄叫びを上げつつナタンが落下してくる。傭兵達をクツショソにしつつ、彼も素早く起き上がると、引っかかった鎧を外そつともがく彼等に、剣を振り下ろした。

斬る…… のではなく、叩き付ける。傭兵達を、まるで一個の物体としか見ず、ほとんど半狂乱となつて剣で殴りつけた。忽ちにしてそこら中が血の海となり、もはやどれが生きていて、どれが死んでいるのかもわからない。

「…………… もう。 もうここにだれいり

全体的に見て動かなくなつた団子に、未だ剣を振り下ろし続けているナタンを、そつと落ち着かせる。彼は剣を握つたまま、隣の壁に背を預け、先ほどと同じく、荒い呼吸を繰り返した。今回は、精神的なショックはほとんど無いらしい。

ドロップキックと花瓶投げしかしていなかつたアクセルは、ナタ
ンからナイフを取り上げると、四つの首をそれぞれ順番に突き刺し、
止めを刺す。

あつせつと上づいてくれたが、まだ終わりではない。

「わて……わいの、キミ」

バレていないとでも思っていたのか。植木の陰の少女は、ビクリと身体を震わせたが、やがて……バツと飛び出し、背筋を伸ばした。

「フフフ、……まさか、見破られていたとはね」

（「れはひょっとして……ギャグでやつてるのか?」）

ナタンを見てみるが、彼も困惑しているらしい。命のやり取りで血を燃やした後に、冷や水を浴びせられたような……そんな表情だった。

少女は腰に手を当て、引きつった笑みを浮かべている。彼女の中では、余裕たっぷりの笑みのつもりなのか?

「なかなかやるじゃないか、君達」

「……一つ聞いていいかな?」

「フフフ、何かな?」

「何で、田、つぶつてんの?」

そう。

ふんぞり返る少女は、しつかりと田を閉じていた。

「……実は、私はすごい糸田なのだよ。これでもちやんと見えている」

「ふうん。じゃあ、これ何本?」

「なんばん? ……フフフ、簡単だ。三本だろ?」

……。

ひょっとして、“なんばん”と聞いたから、“こっぽん”や“にほん”でもなく、“さんほん”だと思ったのか？
彼女の脳みそは、実にどうでもいい所で、どうでもいい方向に動いているらしい。

「残念。六本でした」

まあ、勿論、指を上げてみせたりもしていないのだが。

「…………フフフ…………騙したな？」

「ああ、何て言つか……何て言えぱいいんだ、すごい面倒。わざと田を開けてくれないか？」

「フフフ、何故私が、君の言葉に従つ必要が？」

「…………。ところで、傭兵さん達が生き返つて、すげに田でキミを睨んでるんだけど」

「えつ！？」

少女はようやく田を開け、そして……血塗れの肉団子と化した、四人の先輩達を田にして……軽く躊躇めくと、壁に手をついた。

「貧血？ 大丈夫？」
「…………フフフ、貧血だと？ 何を馬鹿なことを……。血で血を洗う、数多の戦場を潜り抜けてきたこの私が、死体を見たくらいで貧血？ 何を馬鹿な…………」

(うおおおおおおおつ、もつつ、イライライするううううーー)

年齢は、アクセルより少し上ぐらいか。

まあ、美少女だとは思つ。ほつこり微笑んでくれれば、可愛げもあるだろつが、今はとにかくムカついて仕方がない。

「そりか……。安心したよ。ベテランの傭兵さんなんだね?」

「フフフ、ベテラン? 違うな、少年よ。そんじょそちらのベテラン如きと一緒にされるなど、そんな不愉快まりないことは……」

両足は震えているし。

さつきより一層強く目を瞑つてゐるし。

顔は真っ青になつてゐるし。

冷や汗らしきものはダラダラと流れているし。

「……。それじゃ、そろそろ死んでくれないか?」

「え?」

「傭兵は、あとはキミ一人だけなんだ?」

ナイフを振つて、血を払つと、アクセルは突進した。少女はそつと、恐る恐る片田を開ける。

狙いは、喉もと。表情を固まらせる少女に構わず、最後に一步踏み込むと、ナイフの切つ先を顎の下へと滑り込ませる。

勿論、突き刺しなどせざ、ギリギリで停止したが。

「…………」

表情を作ることすら出来なくなつた少女は、ぺたんと、その場に女の子座りで崩れ落ちる。

「ひ……」

その顔が、くしゃくしゃに歪んだ。

「ふえ……え……ふええええええんっ」

少女は両手で顔を押さえ、決壊したかの如く泣き出した。

（何というか……あれだな。アニメスにヘタレを足して、そこから更にアニメスを引いたような……そんなキャラか）

再び、少女が座り込む床に、なま暖かい液体が広がっていく。

（……つ、かよく見れば、そのズボン、俺のじゃねえか。まあ、別に惜しくはないけど……）

路地裏で気絶する前、あんなに出してたのに……ぐつしょりと濡れた自分のズボンを見ていると、アクセルは溜息をつきたくなった。

「さて、ナタン。これからのことだけ」「えつ！？ ちょっと……“それ”放置なのか？」「いい加減、疲れた。それでこれからだけど、無かつたことにしよつと思つてゐる」「…………どうしたことだ？」

「ここでは、誰も死なかつた。貸し切つていたバルビエは、もうしばらくこの街に逗留することになるし、雇つていた傭兵たちは雇用を打ち切られ、どこかへ行つてしまつた。そういう結末だよ」

協力……してくれるよね？

微笑みながら、アクセルがそう尋ねてみると……ナタンは、何故か震えながら、一度大きく頷いた。

七日後。ゼルナの街の執政庁を、二人の男が訪れた。

「主・バルビHの代理で参りました。ナタン、と申します。よろしく」

「お初にお目にかかります。ホテル『初月の館』の、ローランと申します」

身なりのいい平民。そして、アポ無しの平民がその日に対応されたということは、それなりの財力と、権力を持っているということ。

応接室にいるのは、来訪者であるナタンとローラン、そして、リーズと名乗る若い女性、更に、未だ椅子の背もたれを向けたままの、領主代理。

派手ではなく、堅実な金のかけ方をされた服装に身を包んだナタンは、精悍な美青年といったところ。

ローランも、初老ではあるが、未だ未だ体力の衰えを感じさせない佇まいで、礼儀正しい老紳士。

未だ男というものを知らないリーズは、若干頬を染めて戸惑っている。

「それで、ご用件は？」

「この街の東地区の、再開発の提案です」

ナタンが取り出した書類の束は、その表紙に、『ゼルナの街の東

地区における再開発計画書』と記されている。

東地区といつのは、この街の最下層、澁みのような場所だ。城壁と無許可の建築物によって、満足に陽の光が差し込まず、職を失った人々や、障害を持つ者たちが追いやられている。更には、各地からの浮浪者たちが集まり、勝手に住居を造ってしまっており、それが城外にまではみ出している。あたりには悪臭がたちこめ、そんな地区の門番など誰もやりたがらず、門番までもが最下層の兵士。可もなく不可も無いこの街の、不可の部分を、丸ごと押し込めたような、掃き溜めの如き地区。

そこが生まれ変わるのなら、魅力的な提案だ。

しかし……。

「これは……どうこうことですかっ！－！」

リーズは激昂した。それは、計画書の出来がどうのではなく、ただ、女としての部分の拒絶反応。

その計画の中心となるのは、娼館……つまり、風俗店だった。東地区を一大繁華街に作り替え、そこを特別行政区とする。

この街の娼婦は、夜の街に立つ者がほとんど。草むらや裏路地に入れば事の真っ最中だった、というのも珍しくない。組織が結成され、縄張りを管理し、彼女たちは上納金を納める代わりに、その地区で客を確保することが許される。

当然、その日暮らしの生活であり、老後のことなど一切考慮されてはいないし、彼女たち自身もしていない。

「ローラン殿！ あなたもあなたです！ 由緒正しきホテルの主でありながら、何故このようなは……破廉恥な考えに協力を……！」

顔を真つ赤にするリーズは、計画書を領主代理の机に叩き付ける。

タンツ

やがて聞こえてきた物音に、リーズはハツと振り返った。椅子の背を向けていた少年が、くるりと振り返り、机に向き直り、書類の上に判を押印したのだ。

「……若様ああああ！？」

「え？ な、何？ 駄目だった？」

若草色の髪の、貴族の少年は、驚いたようにリーズを見る。

「そつ、それつ、最終許可の判じゃないですかああ！ 何でつ、それ押しちゃうんですか！？ そういうのは、こちでよく吟味した上で……つていうかそもそも、そんな計画、認められません！」「えー。でも、困つてる人、助けなくちゃ。この人たちの話を聞いてると、結構いい考え方なー、って」

「しつ、しかしつ、こんなつ、破廉恥なつ……」

「破廉恥……何が？」

「なつ、何が！？ 何がって、その……」

「そう言えれば、ショーフさんとかショーカンとか……どういう意味？」

「いやつ、あのですね……その、あの……」

怒りではなく、困惑で顔を真つ赤にしたリーズは、ブツブツと俯く。

少年が、ちらりと来訪者の方を向くと……驚愕して目を見開くナタンと、叫ぼうとした彼の口を押さえるローラン。少し驚いた顔を

していたローランは、すぐに表情を戻すと、少年の合図に従い、軽く挨拶して退室した。

質問攻めから解放されたはいいが、肩を落とし悄然と去つていくリーズを見送ると、アクセルは平民の変装をして執政庁から抜け出し、彼等との待ち合わせ場所へと向かつた。

場所は、酒場『風と雨の舞踏亭』。その片隅のテーブル。

「……これからは、様付けで呼びやいいのか？　“ラヴィス様”」「女性を困らせるのは、あまり感心出来ませんな」

皮肉混じりのナタンに、呆れた様子のローラン。一人のテーブルに腰掛けると、アクセルは軽い食事を注文した。まだ昼間だというのに、酒場は騒々しい。

「騙してたのは悪かつたけどさ。文句は言わないでね？」「ふふ、わかりました。恩人のお言葉なら、従いましょう」「おいつ、爺さん！　それでいいのか！？」

あの時、バルビエに拷問されていた老人は、ホテルのオーナー、ローランだつた。

何のことはない、彼が個人的に所有していた骨董品を、バルビエが欲しがつたという……ナタンと同じような理由。

ホテルマンなら、信頼できる人種じやないのか。そう思ったアクセルは、彼も仲間に引き込んだ。

あつさりと不問にしたローランに不満をぶつけるナタンだが、特に損はしなかつたという諭すよづな言葉に、不承不承ながら黙つた。

「……僕はね。お飾りの代官でいるつもりはないよ」

アクセルは話し出す。

「お飾りと思われるのはいい。でも、本当の飾り物になるつもりはない。いずれ、ラヴィス子爵領は僕のものとなる。今から、この領土を磨いていきたいんだ」

「その為の、再開発計画か？」

ナタンの言葉に、軽く頷いた。

再開発の発案者は、十歳にも満たない少年。

「人間の最も大きな欲求は、三つ。食べること、寝ること、そして性的なもの。この性欲を利用して、東地区を発展させていく。何しろ、あそこは土地はやたら安い。やがて、旅人たちの間でここが有名になっていき、この街に多くの金を落とすことになる。雇用問題も、改善されるだろ？」

「ふむ……」

「そう言えば、ここからはまだ話してなかつたね？ 勿論、娼館を中心にするとはいって、客は男だけではない。賭場や、様々な娛樂施設も作る。たくさんの雇い口が出来る事になるだろ？ けど、大きな問題は……」

「治安の悪化」

「そう、その通り。流石ローラン。金が動くつてことは、それを手に入れようとするヤツが出てくる。この一週間、娼婦の元締めたちと交渉してきたけど、あいつらみたいなのが、どんどん街に入つてくることになる」

「いや、あれ交渉か？」

「この一週間の、日常生活のような暴力沙汰を思い返したのか、ナ

タンが顔を引きつらせる。特に反論する材料も気持ちないので、アクセルは黙殺した。

「領主の兵士たちでは、間に合わない。いや、逆に取り込まれる兵士も出てくる。人の出入りの監視を強化する方法もあるけど、それは発展の足枷になりかねない。そこで、この街の裏の顔役を、ナタンにする」

要するに、この街に根を張る、強固なヤクザ組織を結成、それをナタンに纏めさせる。

「非合法の、治安維持組織。ファミリーの結成さ。この街に落ちは、金だけではない。娼婦相手の会話、賭場での会話……膨大な情報がもたらされる。それらを収集し、整理。情報と、暴力、金。東地区の全てを支配するのは、実質ナタンであり、僕でもある。……わかりやすく、僕の目的を言つと……この街の表と裏、全てを握ることだ」

現代社会で言えば、市長がヤクザの親分を兼任するということ。

「僕は、あまり目立つつもりはない。せいぜい、可もなく不可も無しの、何の変哲もない置物領主。そう思われる方が気楽だし」

「……恐ろしいガキだな。お前は」

「しかし、楽しくもありますなあ。一介のホテルのオーナーで終わると思つていましたが、人生の終盤で、こんな面白いことに関わるとは」

顔を強張らせるナタンに、初老の顔に似合わぬ笑みを浮かべるローラン。

「そう、これは陰謀さ。この先、この街を支配するのは、ここにいる三人。“表”的“官”である僕に、“表”的“民”である口ラン、そして“裏”を管理するナタン。昔……遙か遠くの場所で、義兄弟の契りを交わした三人の男達がいた。それは桃の園だつたし、契りの盃ももつと上等だつたらしいけど……。ここが、僕らの桃園、ということになるかな」

アクセルは、水の入ったコップを持ち上げた。

「乾杯しよう。まずは、東地区の発展の成功を願つて。そして……僕ら三人の、明るい未来に」

「そう言えば、あの失禁してた小娘は？」

「いや、小娘つて。お前より年上だつて。……あいつなら、ローランのホテルで寝てるぜ。どこにも行く当たがないらしいし。一応、宿泊料金はツケつてことにしてるけど」

「ふうん……。まあ、戦力にはならなくとも、人手が足りてないのは現実問題だし。あの小娘も、行く当たがないなら、それなりに役には立つてくれるかな？」

「小娘小娘つてなあ……」

「だつて、名前知らないし。あれから一週間、特に氣にも留めてなかつたし」

「アニエスだとよ」

「…………え？」

「名前聞いたら、アニエスって書つてた

嘘だろ承太郎

東地区に建築中の建物も、完成まであと僅か。半分は娼館のためだが、あとの半分は、ヤクザ事務所としての役割を持つ。

“清掃活動員募集。食事出ます。”

バルビエの金をふんだんに使用し、行つたのは、清掃活動。生ゴミですら上等なご馳走である東地区に、ゴミと呼べるものなど皆無だつたが、綺麗にするという概念自体失われているらしく、排泄物などが放置されていた。

完成間近の娼館の周辺から、清掃を推し進める。指示を出しながら、自らも積極的に動くナタン。ナタンの弟分ということで、彼の指示に従いつつ、アクセルは人糞をシャベルですくう。ローランに昼食に招待されたということになつていてる領主代理が、排泄物の中で清掃活動に励んでいるなど、リーズが知れば卒倒どころの騒ぎではない。

活動開始初日、ボロ服を着てマスクをしたアクセルに、ナタンは驚いていたが、人手が足りないのでから当たり前だろうと、少年は事も無げに告げた。

確かに、貴族がこんな平民以下の仕事をするなど、ハルケギニアの月が一つになるようなものだ。

「兄貴い。」しつれ、終わつたぜえ！」

「よしつ、ベル！ 今度はこっち手伝ってくれ！」

ナタン、その弟分の少年ベル。一人が率先して行う清掃活動は、日毎に規模を拡大していった。

勿論、文字なんて読めない人間がほとんど。敢えて、宣伝も勧誘もしなかつた。初日は、誰も加わったりせず、ナタンとアクセルに奇異の視線を向けるだけの者ばかり。

次の日には、文字を読める者とそれに誘われた五人が来た。その次の日には、倍に増えて十人。

更に次の日が来れば、一気に四十人まで増えていた。食事だけでなく、僅かではあるが金まで貰える。そもそも、出来るような仕事すらなかつたのだ。

人数が増えるにつれ、チームに分けられ、部隊として展開していく。

名簿も作つた。食事や金を渡す際、名前と性別、年齢を確認する。チーム編成のために使つたが、人別帳のための情報収集でもあつた。

「あいつ、ベル君！」

マスクの下から、少女の声が放たれる。

「何故私がつ、このような事をしなければならな……うわつ、嘘ですごめんなさい、せつせとやりますから許して下さい！」

アクセルが、排泄物山盛りのスコップを振りかぶる仕草を見せ、アニメスを黙らせる。

そう、アニメス。涙目になりながらも、せつせと動く彼女の名前。

（「これが……あれになるのか……）

一体、この小便垂らしのヘタレ娘に何を混ぜれば、あんなオメガモンにジョグレス進化するというのか。

行く当てがないところに、結局そのまま居着いた。

確か……例の虐殺事件から、既に十年近くは経過している筈。

こんな多彩な表情を見せてくれているのなら、少なくとも外見を取り繕える程度には、立ち直れているらしい。村一つ滅ぼすような虐殺の中、生き残った少女……そんな悲壯さは、未来を知らない者には察することも出来ないだろ？

（しかし……初めて知り合ひ原作キャラが、まさかアニメスで、しかもこんな形だとはな）

彼女なら、ある程度信用しても問題ない。自分と関わったことで、性格が捻れに捩れてしまう可能性もあるが、基本的には善人だ。

内面まである程度知っているからこそ、原作キャラとの……特に、善人に分類出来るキャラとの邂逅は、密かに楽しみだつた。まあ、正直に言えば、すぐがつかりしたが。

「言つとくけど、ホテルの宿泊料金に食事代、その他諸々。しつかり記録してあるからね？ そして未だ、その十分の一も稼げてないからね？」

「…………フフフ、ベル君。提案があるんだ。私の身体で払う、

「どうのはどうかね？」

「ふーん。具体的には？」

「フフフ、その、な。な、何と！ わわ、私の下着を……見せてやつてもいい。フフフ、その価値たるや、それはもう……」

「うん、すいぐ言いにくいんだけど、言わせて。無駄口叩くな」

「フフフ、おやおや坊や、照れてるのかい？」

「…………じゃあ、見せてもらおうかな？ 濡れてない下着を」

「…………ふえ…………ゆ…………言うなああああ！」

「泣くなよ、面倒くさい」

さてと……。

東地区の清掃は、まだまだ序盤。しかし、東門から娼館を結ぶ大通りなど、ある程度の土地の浄化は日途が立った。

「むほほほほ」

ホテル『初月の館』の一室にて、ナタンとローランが今後について相談し、アニエスがぐつたりソファに寝そべっている時。そんな、妙な笑い声が聞こえてきた。直後、ノブが回る。

従業員たちには、大事な話だと伝えておいた。ノックもなしに開けるなど、考えられない。

三人が見つめる中、ドアが開き、姿を現したのは……肥満体の男。

いや、知っている。三人は、この男によく見覚えがある。

「…………バツ…………ー？」

バルビエ。仇であり、雇い主であり、加害者であった商人。

「むほほほ、おバカさんですねえ。私ですよ」

力チカチと、乾いた音をさせつつ、バルビエは自分の顔をはぎ取つた。手には、なめし革のようなバルビエの顔が、ぶらんと垂れている。

「……ベル！？」

肥満体の身体から、アクセルの顔が生えていた。その身体も、すぐにはずるじと崩れ落ちる。

「……な……何なんだよ、それ……」

「ああ、作つた。この為に、バルビエを生きてることにしてるんだ。もう少し、バルビエに表で動いて貰おうと思つてね」

バルビエの小柄な体躯を見た時、思いついたことだつた。

アクセルは確かに、今やつているように、貴族とは別のベルという少年として動ける。

しかし、所詮は少年。子どもでは出来ることが限られてくるし、何より子どももらしくないことをすれば目立つてしまつ。

肥満体ではあるが、背が低いバルビエなら、天狗のそのような高靴さえあれば、自分は商人バルビエという顔を手に入れられるのではないか。

「……つうかこれ、よく出来てるなあ。本物そつくり……。……。なあ、ベル。一つ聞いていいか？ この変装セット、材料は？」

「えーっと、三人ほど」「まさか人数で答えられるとはー。」

なめし革にしようかと、自分でなめし方を調べて試してみたのだが、皮膚が思ったより伸びなかつたのだ。

まあ、何のことはない。最初から、固定化の魔法を使えばよかつた、という結論に落ち着いた。

「結構、大変だつたんだよ？ サイズは問題なかつたんだけど、皮の裏まで脂肪がビッシリでさあ、それをナイフで削つて行つたんだけど」

「ぎやああつ、聞きたくない！　聞きたくないぞおお！」

耳を両手で塞ぎ、ぶんぶんと首を振るナタンに、既にぐつたりとソファに倒れ伏しているアニエス。そんな二人とは対照的に、暫く人皮のマスクを見ていたローランは、落ち着いた声で尋ねた。

「それで。これを使って、どうなさるおつもりで？」

「ああ、奴隸を買いに行くんだ」

「ほう？　奴隸ですか」

「そつ。出来れば、ナタンのファミリーの役に立つような奴隸」

男と女、欲しいのは両方だつた。

男は、なるべく頑丈な人間がいい。ファミリーの構成員として、武力がある人間は必要。更に言えば、自分の技の実験台にしても問題ないくらいの、屈強な男。

女は、なるべく美人。娼館で働かせるつもりだ。ある程度頭が良かつたら、尚のこと良い。

「確かに、人間は東地区に山ほどいる。でも、ファミリーの役に立つてくれるほど有能な人間となると、なかなか難しい。そこで、なるべく裏切る可能性の少ない奴隸を、何人か確保しておきたい」

「なるほど、確かに。しかし、場所に当てが？」

「ちよつといい具合に、隣の子爵領の街で。あまり長く留守にも出来ないし、二日つてといろか。行くのは、バルビエに化けた僕と、

ナタン」「

「え……俺も？」

「当たり前だよ。君の部下になる人間だよ。自分の目で確かめなよ」

「……うー……わかつたよ」

奴隸とはいえ、下に立つ平民として、そんな場所に行きたくはない……というのが、ナタンの本音だろう。

しかし、それでは駄目だ。これから裏社会の人間となるナタンには、裏の世界を見せておかなくてはならない。そうしなければ、折角彼を選んだ意味が無い。

ローランは、社会的地位があるので除外。

「ふむ、わかつたよ。私も同行しよう

「駄目。アニエスには、清掃活動を続けてもらいつ

「いやつ、しかしつ、護衛は必要だろ？」

「普通護衛つていうのは、自分より強い人を選ぶものだろ？」

もしかしたら……。そう思い、アニエスと手合わせしてみたのだが、あっさり勝てた。

それを自分が強くなつたから、などと解釈するのは、あまりにも調子に乗りすぎている。今までは子どもの見た目を利用し、相手から平常心を奪い、一気に畳みかける、そういう戦い方ばかり。用意、始めの合図があるのでから、しかも、相手は将来のメイジ殺しなのだから、どうなるかわからない。

そう思っていた時期が、俺にもありました。

男とはいえ、年下の拳骨に負けるなんて……いや、普通の女の子

なら、そういうものかも知れないが。

ひょっとして、同名の別人ではないか。

今では、そんな気もしている

「じゃあ、ローラン。リーズには、ローランに招待された演劇を見に行つてくる、ということにしておくから」

「畏まりました。お気を付けて」

ローランは、そつと頭を下げた。

ラヴィス子爵領の隣、レオニー子爵領。その中心地、クルコスの街。

バルビHの遺品の中には、そこで密かに開催される奴隸市の情報もあった。勿論、奴隸などこの世界では珍しくない存在であるが、ここの奴隸市は少々違う。ただの労働力ではなく、奴隸の中でも特色のある……もつと言えば、ただの奴隸市で扱うには勿体ない、そんな人材が集められている。

アクセルも、ただの労働力には興味がない。この中でガチムチ、ボンキュッポン、インテリがいれば、全て自分のところに来て欲しい。

「むほほほほほ

聞くところによると、これがバルビエの笑い方らしい。キャラとしては結構面白いので、そして勿論怪しまれたくないの、アクセルもその笑い方を真似た。

問題は声だったが、元から甲高い声だったので、少し努力すれば出来た。審査をさせられたアーネスは、震えっぱなしだったが。しかし、それでも辛い。フェイスチェンジの劣化版で、ヴォイスチェンジなんてのも考えたが、まだまだ未完成。なるべく、口数を減らすようにしなければ。

念力を併用すれば、簡単な動作くらいなら問題ない。

「むほほ、胸を張りなさいな、ナタンさん」
「……いや、けど、こんな場所は初めてで」
「むほほ、さあ行きますよ。ザーボンさん、ドドリアさん」
「誰だよ」

入場料を支払い、薄暗い地下へと下りていく。アクセルもナタンも、仮面を貸され、それを着用していた。

市場は、円形の間取りだった。半円を描くように座席が設けられ、それぞれ個室のように壁で区切られ、客同士は見えないようになっている。中心のステージのような場所に奴隸が引き出され、オーケーションのように値を付けていく。

客席は、十個前後といったところか。ここは地上部分では同じく奴隸市が開かれており、買い手がひしめいているが、上の熱気に比べれば、このVIP用のそれは、至って蕭条としている。

区切られているので、客同士の会話もない。時折、同室の者同士

の微かな囁き合いが聞こえてくる程度。

「……すげえな、こい」

薄暗さにも目が慣れてきたのか、ナタンが周囲を見回している。

「むほほ……ナタンさん、あまり騒がないよ」

やがて、ステージの奥から道化師の仮装をした進行役が現れた。

出品される奴隸は様々だが、だいたいの流れは決まっている。主催者側が特別だと判断した奴隸たちに、更に等級を付ける。そして、最低落札価格を決定し、その低い者から順番に出品される。

老若男女、バラバラだった。やがて、客側のテンションが高まる時に、最高の奴隸を出品。あとは、そのテンションを下げるよう、今度は高い奴隸から低い奴隸へと下っていき、全て終了。

提示金額は進行役が告げる方式。客同士が顔も会わせず、声も出さないのでから、今、誰と競っているのかも分からぬ。それによつて、値段の上昇が加速する。

「それでは、開始致します。1号。男、23歳」

見れば、なかなかに屈強そうな男だが……まだ、様子見だ。サービスのワインを味わつていると、隣のナタンがそつと囁いてくる。

「おい、いいのか？ 他のヤツに買われたぞ」

「むほほ、まだまだ。初めての競売なんですから、何も今回に全てを掛ける必要はありませんよ。最上級の品が出るまでは、一応、

見にしておくつもりですか？」

「……最上級ねえ。一体、どんなのだ？」

「さて。噂では、メイジや没落貴族が出されることもあるそうですが」

競りは、着々と進行していく。最低落札価格も、最高落札価格も上昇していく。

（……「ーん……）

先ほど、ナタンにああは言つたが……アクセルは、迷つていた。それほど多く連れて帰るつもりはない。多くても、四人程度。その四人の枠の中に入れたいと思える人材が、全く出てこないのだ。いや、こんなものかも知れない。適当に選んでしまうのが正解かも知れない。

ステージに連れて来られた後、奴隸の服ははぎ取られるのだが……美女ならともかく、屈強そうな男の股間でぶらんぶらんしているゴーレンバットなど、好んで見たいと思うものでもない。素っ裸にされる美女たちに、ナタンは落ち着かない様子だつたが、自分より十も年下のアクセルが平然としているので、それを必死に押し隠そうとしている。

娼館の主人は、誰か別の人材に任せた方がいいのかも知れない……アクセルがそう思つていると、たつた今落札された奴隸と入れ違いに、進行役が中央へと進み出た。

「次の品に移る前に、申し訳ありませんが……改めて、確認させて頂きます」

「よいよ、例の“最上級の品”というヤツだらうか。

「この競売は、あくまで秘密厳守。皆様のためにも、我々のためにも、どうか口外はお控え頂きたいのです」

決まり切ったことだ。しかし、何故今、改めてそのことを？

「次の品は、ここでは初めての……恐らくは、今後出品されるることもない、正真正銘、史上唯一の逸品に御座います。……よつて、この品を落札されたお客様は、本日のところはお引き取り願います」

連れて来られたのは、布を被った、小柄な何か。

「本来なら、決して世に出すべきではない品。しかし、本日のここにお集まりの皆様は、常人が計り知れぬほどの“力”をお持ちの方々。よつて……我々も、覚悟を決めることに致しました」

布が取り払われ……姿を現したのは、一糸纏わぬ少女。自分の身体を抱き、身を縮め、不安げな目で薄暗い周囲を見回している。輝くような金髪に、幼子のきめ細かな柔肌。世が世なら、手を出せば間違いなく逮捕される年齢だろうが、少なくともこの世界、そしてこんな場所では、格別にとつて珍しいことでもないだろう。

驚きの声が上がった。その理由は、金色の頭髪を割るようにして伸びている、尖った耳。

「そつ……我々の大きいなる敵。恐るべき先住魔法を操り、並のメイジでは束になつても返り討ちにされてしまう……エルフでござります。ですが、ご安心を。この者が納品された時、既に声は潰されおりました。よつて、魔法を使うことは出来ず、このエルフも、最早ただの平民の娘と何の変わりもありません」

(なるほど、エルフか……)

確かに、特別な逸品に相応しい。置いたと知られただけで死刑なのでから、普通の人間では、例え魔法を封じられているとしても、その存在そのものの危険性故に、絶対に手を出すことは出来ないだる。

「お……おいつ、ヤベホーー。」

ナタンが耳打ちしてきた。

「むほ、どうされました？」

「お……お前まさかっ、あれを買つつもりか！？」

「そのつもりですが」

「馬鹿っ、お前っ、何考えてんだ……！　お前はどうか知らんが、俺はまだ死にたくねえんだよ……！」

「むほほ、私とて死にたくはないですよ。しかし、ピッタリではないですか。我々には」

精霊との契約が出来るエルフならば、もしかしたら、自分の能力の発展に一役買ってくれるかも知れない。何かヒントをくれるかも知れない。

もしバレたとしても、買ったのはバルビエで、アクセルではないのだ。

出来ることなら、是非とも手に入れたい。

皆が静まつた時を見計らつて、再び、進行役が告げた。

「それでは。早速、最低落札価格を……」

そこまで言つた時、通路の奥から怒号が響いてくる。何かを追う
ような足音、そして声。

ステージの奥隠し布の下から、何かが這い出し、エルフの少女に向かつて駆け出した。それを追つようにして男達が現れたが、進行役はそつと彼等を手で制した。

「ふむ、またお嬢さんですか」

エルフの元に駆け寄つた少女は、自分が纏つっていたぼろ布を脱ぐと、代わりにそのエルフの身体に被せ、そしてぎゅっと抱きしめると、進行役を睨み付けた。自分の裸体が晒されることなど気に留めた様子もなく、威嚇するように鋭い目をしている。

「しかし……お嬢さん。もはや、あなたに出来ることなど、何も
ありませんよ」

予定外の事態だったが、進行役は冷静だった。駆け出した少女も、例え自分が暴れた所でどうにもならないことは理解していたらしく、エルフの少女を守るみつに抱きしめるだけ。

ぱぶしつ

バルビの口や鼻から、ワインが飛び出す。エルフが出ても驚かなかつたくせに、と、ナタンは不思議そつに首を傾げた。

「……」

進行役は暫く黙っていたが、やがて客席に向き直った。

「さて、皆様。お騒がせして、申し訳ありません。ただ今乱入してきたこの少女、たるやん」となき貴族の娘で、勿論のことメイジ。この娘も同様に、とある特殊な方法で声を潰しておりますので、例え杖を持ったとしても、最早魔法を使うことはありません」

エルフとメイジ。平民にとつては、何よりも恐るべき者。

「勿論、一人とも処女であることは、保証致します。魔法を使えぬエルフに、魔法を使えぬメイジ。恐るべき者と、その恐るべき者を妹のように大事にしている者。突然で申し訳ありませんが、この二人は、併せて一つの品とさせて頂きます。……最低落札価格は、一人の合計、320エキュー。では、どうぞ」

そう……少女とはい、恐るべき者たち。だからこそ、その恐るべき力を持たなくなつた少女達は、平民にも自由に出来る少女達。普通なら、例え魔法を使えないからといつても、恐れを成して逃げ出すだろう。

しかし、ここにいる者達は違つ。平民とはい、下級の貴族よりも大きな財力を有している。そもそもこの場にいることが、選ばれた者であることの証。

少女達はさながら、翼をもぎ取られた天使の如く……。

次々と、競りに参加することを示す事が、合図を受けた進行役の手で掲げられていった。触れられないのは、アクセルとナタンがいる個室、7番だけ。

「590……620、625……」

進行役が次々と最高値を告げる中、7番の個室にいる、バルビエことアクセルは……頭を抱えていた。どうやら参加を諦めてくれたようだと、ナタンはほつとした顔をしている。

（……何でだ？）

金髪の、エルフの少女。その少女を守る、緑髪の年上の少女。

（……ティファニア……それに……マチルダ……）

間違いかも知れない……などという希望は、最早持てない。

モード大公の私生児であるティファニアと、サウスゴータ大守の遺児であるマチルダ。ティファニアは、エルフと子を成したモード大公が殺された後、サウスゴータ大守に母親のエルフと匿わっていたが、発見されて母親も殺され、サウスゴータ大守は取り潰し、遺児のマチルダと共に、ウエストウッド村に隠れていた筈だ。アルビオンの小さな村にいる筈のティファニアが、何故、トリスティンの奴隸市で競売品となっているのか……。

（……俺のせい、ではないよな？）

今まで、原作を大きく変化させるようなことは、して来なかつた……と思う。そもそも今までだつて、所詮は片田舎の子爵領での出来事。

アニエスにしても、傭兵として修行していた時代があつたかも知れないし、ティファニアとマチルダだつて、奴隸として売られた後、上手く逃げ出したという過去があつたかも知れない。声を潰されて

いたとしても、それが治るイベントが起こったのかも知れない。

(どうする?)

自分はここに、ナタンのファミリーの構成員をスカウトしに来た。アクセルが落札した後、逃げ出すのだとすれば、それはそれでいいだろう。結果的に無駄金を使うことになるが、そんなもの、原作が大きく改編されるという損害に比べれば、微々たるもの箇だ。

それに……。

(……放つとけねえや、やつぱりさ)

二人の人柄、そして過去を知っているからこそ……助け出したかった。

スウ、と、バルビエの手が上がる。一瞬呆然とした後、ナタンがその手を押さえつけようとするが、肘を当てて黙らせた。

「！ 750……」

他の客達は、さぞ驚いたことだろう。

競売が始まつてから今まで、一度も上がらなかつた7番の札。それが、今になつて突然上がつたのだから。

基本的に、札は全室分用意されている。例え空室であろうと、客が退出した後であろうと。

7番は空室なのだと、誰もが思つていた。

「810、820、845……」

そこで、一つ、札が下りた。

「900……950……」

既に、下級貴族が一年は生活出来る額。また、札が一つ下がる。

「1000」

千の大台に乗った時、次々と札が下りた。残るは、2番、3番、7番の札。

(正直、キリが無いな)

そう思いながら、バルビエの指を念力で操作する。

「2000」

一気に、一倍。7番の札が頂点に立つ。
やがて……3番の札が下りた。少しの沈黙の後、進行役は2番の札を上げる。

「2010」

(しつこい)

ついに、最終手段。アクセルは懐の包みを取り出した。

7番の部屋から、ステージ上に投げ入れられたそれは、がしゃんと音を立てる。僅かに開いた口からは、大粒の宝石が零れていた。客席からでも、十分に見えただろう。その輝きが、未練がましく

残っていた最後の2番、それに、借錢しても手に入れようかと考えていた客達を黙らせる。

「他には……ありませんね？ それでは、24号と25号の一いつ。7番のお客様が、2010エキュー、それプラス現物にて、落札されました。……ありがとうございました」

「むほほ、なかなか有意義な買い物でしたねえ」

肥満体を揺するようにして笑うバルビエ、中のアクセル。僅か半日の間に、島流しにでもされたかのようにげっそりとしましたナタン。

「エルフが……エルフが……」

「まあまあ、落ち着きなさい。エルフと言つても、ハーフエルフ……つまり、半分は人間なのではないでしょうか？」

「そうだとしてもつ、エルフはエルフで……」

やはり、エルフというのは恐怖の対象でしかない。何とかナタンを宥めようとするも、彼は頭を抱えるだけだった。

「つうか、バレたらきつと、俺まで縛り首に……」

「大丈夫ですよ、オーケーションの主催者だってプロなのですから。ハーフエルフを出すなどという剛毅なことが出来る以上、彼等も相当に根を張っていますねえ。ナタンさん、いづれは貴方のファミリーも、あれくらいの力をつけて頂きますよ」

「そうなる前に、死ななきやいいけどな」

果たして、あの一人が本当にティファニアとマチルダなのか……。アクセルは未だに、それを疑つていたりする。

声を潰されているから、返事は出来ないだろうが、貴族の娘なら文字は書けるだろう。

それに、髪の色や一人の関係を考慮すれば、まず間違いない筈。流石にアルビオンも、国王の弟がエルフとの間に子どもを作つていた、などということを、他国に知らせることはないだろう。逃亡した一人が、極秘裏に手配されていたとしても、あくまでアルビオン国内のみ。

よつて、浮遊するアルビオンではなくトリステインにいるのは……と言つより、地上に逃げ出したのは、正しい判断だ。相当な厳戒態勢だつただろうに、どうやってフネに乗つたのか。

しかし、原作のティファニアは、何故わざわざアルビオンに残つていたのか。彼女自身が復権を狙つていた様子は無かつたし、ただ単に脱出出来なかつただけか？

まあ、その理由を知る機会は、もしかしたら永久に失われてしまつたのかも知れないが。

新聞の記事で、モード大公とサウスゴータ大守が死んだことは知つていた。連想する形で、ティファニアとマチルダのことも思い出したのだが、特にアルビオンに行く機会も無かつたし、何が出来るというわけでもないので、その時は記憶に留めるだけにしておいた。

しかし……これがもし、原作の流れの一部だというのなら。

ティファニアは、やがてアルビオンに戻ることになるだろう。どんな理由からか、そんなのは見当も付かないが。

マチルダは、そんなティファニアや孤児達を養うために、怪盗・フーケとなつて金を稼ぐようになり、トリステインの貴族を恐怖に陥れる。よつて、マチルダがトリステインにいることについては、特に不思議も無いのだが。

原作開始までに、声が戻るイベントが発生するのだ。それはひょっとしたら、自分が治すのかも知れないが。

しそつちゅう使つてゐるせいが、自分の治癒の腕は相当なものになつてゐる自信がある。まあ、一番得意なのは自分自身への治癒なのだが。

しかし……声を奪う技術か。この世界なら、何らかのマジックアイテムか、または何者かによるギアスがかけられている可能性もある。治癒だの回復の魔法だの、そんなものが全く関係ないようなものだったら、自分にはお手上げかも知れない。

……ん?

……。

いや……いやいや、ちょっと待て。その前に。その前に、ちよつと。

何か妙か?

いや、そうだ、確かに何かが妙だ。

(……こんな年頃だったか?)

モード大公が殺された時、確かにティファニアはもつと、年齢が上

ではなかつたか？

大公が死亡したという記事を見たときは、ああそんなこともあつたな、じゃあマチルダもティファニアも、今頃は逃亡中か、と、軽く流していたが……幼い一人に、ふと違和感を覚えた。

そもそも、アルビオンにおける例の反乱が起きたことの一因が、あのモード大公の事件だつた筈。いくら何でも、まだ原作開始までには十年以上あり、そんなに長い間レコン・キスタが動いている筈がない。事実、モード大公死亡のニュースはアルビオンを揺るがしたが、それでも未だアルビオン王室は厳然と君臨している。

確かに、ここは所詮異世界。あの原作通りとはいがず、多少は異なる部分があつてもおかしくないが……それにしても、この違いは大きすぎないか？

確かに、レコン・キスタの背後にいるのはガリア王ジョゼフだった筈だが、そのジョゼフは未だガリア王ではない。先代の……と言うのも妙だが、とにかく国王、つまりジョゼフとシャルルの父親は健在だ。

バタフライ効果だ何だと言つても、自分の影響が、遙々アルビオンにまで届くものなのか……？

（まあ……仕方ないんだけどな）

そう、仕方がない。原作知識があるとはいえ、既にいくつか違いがある以上、それは参考程度にしかならないだろう。

結局は、その場その場で対応していくしかないのだ。

「さて、と……」

奴隸競売を取り仕切る組織が用意したホテル。アクセル……とうよりバルビエは、特別にそこに招待されていた。

いくら何でも商品が商品である故に、慎重になつたのだろう。このホテルの一室に一人を届け、バルビエから現金を受け取つた後は、主催者側は一切の責任を持たない。

「やつぱ怖え」

ナタンは嫌がり、一人だけ別の個室を取つていた。

バルビエの為に用意されたのは、離れのよつな一室だつた。庭を突つ切る渡り廊下を渡ると、小綺麗な、茶室のよつな建物がある。だいたい、平民一家族の家くらゐの広さか。

マチルダとティファニアは、既にその離れに運び込まれていた。眠り薬か魔法でも使われたのか、一人とも、ベッドの上で大人しく寝息を立てている。

（……まあ、流石にな）

今の自分と同じくらゐの年齢のマチルダに、妹と言つていい年齢のティファニア。二人とも、将来大変な美女に成長することは分かっているが、この時点ではただの幼女。流石に、身体の一部が硬質化したりはしない。

時刻は、そろそろ夕飯時。バルビエは夕食を注文し、ボーアに金を持たせて果物を調達させる。女の子の食事量など見当も付かないが、自分だつて子どもの胃袋だ。取りあえず、大人と子どもそれぞれ一人分の量を目安にしておいた。

ナタンは遊びに出かけたらしく、留守だった。

やがて料理が運ばれてきたが、起こすのも可哀想だつたので、自分は一人で食事を済ませ、大人一人分と果物、そして水を、二人が寝ている部屋に運んでおく。

バルビHの肥満体を、窓の傍の椅子に沈めながら、アクセルはぼんやりと双月を見上げた。

マチルダとティファニア……奇しくも、善人と判断していい原作キヤラと接点を持つことが出来た。が……一人を、どうするか。はつきり言つてしまえば、衝動買いのよつたものだつたのだ。

勿論、娼館で働くつもりはない。マチルダは、秘書として学院に潜入できるくらいだから、事務仕事の才能もあるだろう。表の文官見習いにするか、裏の情報整理をやってもらうか。ティファニアの方は……未だ、幼すぎる。それに、問題はあの尖つた耳。今の自分には、フェイスチェンジなんものは使えない。

(まあ、それは帽子か何かで隠すようにして……。あとは、ナタンドだな)

彼の意識を変えさせないと、どうにもならない。いつそ、アクセルが連れてきた、という風にしてもいいが、リスクが高すぎる。王の弟でさえ殺されるのだから、たかが子爵の息子など、あつという間に潰されるに決まっている。

それに、今までそういうことをしてこなかつた自分がいきなり、「将来有望そうな女の子がいたので、光源氏計画を発動しようと思いまーす」などと言い出しても、怪しまれるのは間違いない。

(……もっと、Hロガキとして振る舞つておけばよかつたかなあ)

幼い頃から性欲を自覚し、それに対処し続けてきたせいか、どうも、性欲が減退している気がする。まあ、まだ思春期にも入っていないし、これからどんどん盛り返していくことだらつ……と思つたが。

東地区の構想は、まだまだアイディアが出しきれてないし、清掃事業もまだ終わらない。無秩序に建てられた家屋は取り壊すとして、新しく長屋のようなものを用意する必要もある。そして何より必要なのは、自分が思い描くものを、現実に作り出せるような能力を持った人材たち。

(まあ、初めから全てうまくいく筈もないし)

やつてみたら、ゴロゴロと不都合が出てくる。それに、いち早く対処していけばいい。

人材についても、作成中の名簿を更に改良していけば……。

そこまで考えたところで、気付いた。背後から忍び寄る気配に。いや、気配と言つても、達人か何かのように第六感が働いたわけではない。

吐息。足音。衣擦れの音。

(さて……。起きたか)

恐らくは、マチルダだろう。こつそりと、背後から近寄ろうとしているらしいが、はつきり言つてバレバレだ。未来の大泥棒とはいへ、今はただの、幼い少女でしかない。

「……むほほほほほつ……」

「……?」

アクセルは、なるべく大声で笑い出した。

それに驚いたらしく、忍び寄ろうとしていた少女は、仰け反るようにして床の上に尻餅をつく。金属音が響いた。

椅子を回し、背後を振り向く。

唚然とした顔でこちらを見上げるマチルダ。彼女の傍には、料理の皿から持ってきたナイフが転がっている。それで、後ろから首を突き刺そうとしていたらしい。

(……怖えな)

そんなもので突き刺されるのも怖いが、そんなものを突き刺せると思っているマチルダも怖い。バルビエの首周りは、まだ相当脂肪が蓄えられており、よほど力が要る筈だが、ぶつつけ本番でこんなことをしようとするなんて。

(「……で、エロいお仕置きとかするのが定番なんだうけどなあ……」)

そんな気は、ついに起きなかつた。

(……わい。やつぱ……やらなきゃダメか……)

内心溜息をつきながら、バルビエの右手を振りかぶる。我に返つたマチルダが、再び襲いかかってきたら厄介だ。まだ驚愕が抜けき

らない「うひ……」。

バシイツ

ずんぐりむづくりな右掌が、マチルダの左頬を弾き飛ばした。

（ヤツベニ！ 思つたより強かつた！？）

せいぜい、パシッ……くらいの力で良かつただろう。

マチルダは床に倒れ伏したが、左頬を押さえつつ、こちらを見つめる。

その瞳にあるのは、怯え。今更ながら、両者の力関係を理解したのだろう。魔法も使えない今となつては、マチルダが例え数人いようが、バルビエのビンタで弾き飛ばされる。

奴隸市場も、売り物に傷を付ける筈はないし、もしかしたらビンタされた事など、殆ど無かつたのかも知れない。

別室から見守っていたらしいティファニアが、慌てて駆け寄ってきて、マチルダの身体を支える。いや、支えているつもりなのだろうが、ほとんど抱き付いているようなものだ。彼女も同じく、バルビエに怯えた瞳を向けている。

「……むほほほ、お馬鹿さんですねえ」

心の中でマチルダに謝りながら、バルビエは再び笑つた。安心してくれるかも、と淡い期待を抱いたが、その笑い声も、恐怖を焚きつける油にしかならなかつた。

「仮に、ここで私を殺したとして。逃げられるとでも思つてゐるのですか？」

いや、逃げてもいい。何も、一人の心を無視してまで、縛り付けておこなとは思わない。良心がどうのこのうの言つよりは、二人になるべくプラスな印象を持つていて欲しいといつゝ、少々情けない理由ではあるのだが。

しかし、逃げ出すにしても、成功させて欲しいのだ。

「お嬢さんだけならともかく、そちらの妹さんは、お耳が大変目立ちますよ？ このホテルの敷地から逃げ出したとしても、お二人とも、よく知らない街の中で、どうやって逃げるのですか？ どうやって、飯を食べていいくのですか？ 一体どこで安心して眠るのでですか？」

やはり、そこまでは考へていなかつたのか、マチルダは俯いた。

「……せめて、確実に逃げ出せるよつになつてから、お逃げなさいな」

アクセルが立ち上がると、二人は震え出しながら、様子を窺つ。

「では、そろそろ私はベッドに行きますよ。お一人も、お部屋にお戻りなさいな。明日には、この街を出ますから、ちゃんとご飯は食べておいて下さいね？ それでは、おやすみなさい……」

バルビーハの身体を、別の個室へと移動させる。そしてそのまま、ベッドの上に寝転んだ。

（……説教臭いのは嫌いなんだけどなあ……）

これで、あの二人も大人しくしてしてくれる筈……だ。多分。ひょっとしたら、また殺しに来るかも知れないが、彼女の力では、内部のアクセルにまでは届かないだろう。

何か用心の為にしておくべきか、とも考えたが、マチルダもそれほど愚かではない。

(寝よ)

そのまま、アクセルは目を閉じた。

翌朝、起きてから鏡を見てみるが、バルビエの身体には傷一つなかつた。

(まあ、あつたら困るんだけど)

取りあえず、隣の……一人が寝ているであろう部屋へ行く。

「むほほ、入りますよお?」

少し待つたが、返事は無い。そっとドアを開けて見ると、粗方消えた食事と……。

(……そつか)

部屋は、無人だった。マチルダも、ティファニアもいない。

「そのままバルビエの奴隸でいる危険性と、一人きりで逃げる危険性……それらを比べての結論か。それにしても、やはり、浅慮だと思うが。

（追うか？　流石に知らんふりも出来ないぞ？）

考えていると、ナタンがやって來た。

「おや、ナタンさん。どうかされましたか？」

「お客さんだ」

ナタンに続いて、顔に真一文字の傷のある男が入ってくる。奴隸市場の者だと名乗った。茶でも用意しようとしたが、彼はそれを丁重に断る。

「私は、ただの使いとして参りました」

「むほほ。それで、ご用件は？」

「昨日の競売の、2番。あなたと最後まで争っていたお客です。

我々は、彼にあなたの情報を漏らしました」

そこまで言われた時、だいたいの見当ははついたが……アクセルは、黙つて聞き続ける。

本来、決して漏らす筈のない情報。しかし、主催者側が人質を取られ、バルビエの……更に言えば、バルビエが落札した一人に関する情報を、漏らしてしまったという。

2番の客の名前は、商人ドリューブ。彼は奴隸市場の責任者を人質にすると、主催者側の人間達に命じ、ホテルからマチルダとティファニアを盗み出させた。

「盗み出したのは、私です」

「ふむ……」

傷の男は、淡々と告げた。バルビエの指が、顎に添えられる。

「ちなみに、人質というのは……あなたがたのボスで？」

「はい。昨日、道化師に扮していた進行役です」

彼が、責任者だつたらしい。

「今、ドリューブは？」

「既に街の外に。ドリューブに雇われているのは、メイジ二人に傭兵が六。ボスは自分を見捨てるよう吶告げましたが、次のボスは未だ決まっておりません。組織の混乱を避けるため、知っているのは上層部のみ。大々的に手下を動かすことは出来ません」

「ボスは、未だドリューブに？」

「はい。何人かで追っていますが、どうやら近くの森の中を通り

らしく……」

「成る程」

「私からは、以上です」

そして……。傷の男は、素早く……しかし、何の違和感も感じさせないような動作でナイフを取り出ると、その切っ先を、自分の胸へと向けた。

アクセルが、バルビエの手を操作してナイフを止めることができたのは、その予感があつたから。

あまりにも、男は喋りすぎた。自分の組織の内情まで。

「お……おいつ」

ナタンが慌てて、男のナイフを取り上げた。

「本来、客の情報を漏らすことはない……。それが漏れてしまい、あなたは礼儀として、この私に情報を漏らした。しかし、情報を漏らした者を、生かしておくわけにはいかず……ですか？ そして、何も知らない手下達が、あなたの死体を処理すると？」

そう言いながら、アクセルはペリー口口さんを思い出していた。

傷の男は、黙っている。流石に全てではなくとも、大部分は当たりなのだろうな……そう思いながら、アクセルは再び笑い出す。

「むほほ……。命がけの礼儀には、命がけの礼儀で返さないといけませんねえ。ナタンさん」

「ん？ 何だ？」

「追いかけますよ、泥棒さんを」

バルビエに情報を漏らしたのは、その男の独断だった。勿論、彼もただ何が起こっているのかということを説明に来ただけで、ドリューブへの対処、ボスの救出を期待していたわけではない。

追っているのがバレれば、人質であるボスの身も危ない。しかし、それはあくまであちらが脅威を感じるからであって、相手との戦力差に明らかな分があれば、そんなこともないだろう……ということで、バルビエは一人、馬を走らせた。ナタンや組織の人間たちには、

森に潜みながらついて来てもうつ。

「むほほほほ、見つけましたよ。泥棒さんたち」

森を抜け、平原に出たところで、バルビエは彼等の馬車の前に飛び出した。肥満体のバルビエだが、実質皮膚と服と、アクセルを足した重さしかない。相手も、気付いていたがスピードを読み違えていたらしく、馬車は軽く滑りつつ停止した。

馬車は二台。前の一台に乗っているのが、傭兵たち。御者を含めて六人。後の一台に乗っているのが、恐らくドリューブ、マチルダ、ティファニア、ボス、そして一人のメイジ。

傭兵達が動き出し、後ろの馬車からメイジ一人、そしてドリューブが飛び出し……あつという間に、バルビエに武器を向けた。

「ドリューブさん、いけませんよ。人のものを勝手に持つて行つちや」

さて……メイジが一人か。一人の周囲に渦巻く精霊を見てみると、どうも、乱雑な印象を受ける。十中八九ドットクラス、そうでなければラインクラス。間違つても、トライアングルなどではないだろう。まあ、根拠は乏しいのだが。

傭兵達は……弓を構えているのが一人、剣を構えているのが四人。もう一人は槍。少々広がり、こちらを包围している形になっているので、魔法で一掃というのも難しい。

いつも通り、まずは、会話からスタートすることにした。

「おーい、お一人さん。処女はまだ無事ですかねえー？ ついでにボスさんもー」

後ろの馬車にいるであろう一人に、「冗談交じりにそう声を掛けてみるが、失敗だと気付いた。一人とも、喋れない。それに、理解できるのかどうかも怪しい。

開け放された馬車から、三つの顔がのぞいていた。周囲の状況を確認しようとしたマチルダ、ティファニアと……あの老人と言つていい年齢の男は、話に聞くボスだろ？

自分を無視されたことに気分を害したのか、ドリューブが口を開いた。

「お前がバルビエか？」

「むほほ、そうですよお。あのお一人は、あなたには少々手に余るのではないかねえ？ 大人しくお返し願いたいのですが」

もしかしたら、ドリューブはアルビオン王国の手の者で、二人の素性を知っているのではないか……そんな予想も浮かんだが、それならば競売の時、借金をしてでも購入しようとした筈だ。いくら何でも一介の商人と一国では、資金力が違います。

「殺せ」

ドリューブは、会話に付き合わなかつた。

バルビエだと確認した後、僅かに口元を歪ませ……一言、告げる。

矢が空気を切り裂き、バルビエの胸に突き刺さつた。

「ぐつ……」

バルビエは小さく呻きながら、身体を傾ける。そして落馬すると、

横たわったまま動かなくなつた。

「ドリューブ様。ヤツの持ち物、頂いても？」

「好きにしろ、それに早くな。出来るだけ、森から離れたい」

いくら人質を取つているからとはいへ、このまま組織が指をくわえている筈がないのは、当然のことだつた。メイジ一人が相手だろうが、彼等は死に物狂いで反撃に出る。恐らくは、既に森の中に潜んでいるだろう……ドリューブはそう考えていた。でなければ、バルビエが単騎で来る筈がない。何らかの作戦を立てていたのだろうが、交渉も会話もせずにさつさと殺せば、相手の予定は大きく狂うことになる。

バルビエというのが、相当の商人であることも知つていた。だからこそ、バルビエ自身には手を出さなかつたのだが、こうも早く情報が漏れてしまつたのなら、仕方がない。寧ろ、文句を言つてくる人間が一人減つたことを喜ぶべきか。

当初のドリューブの予定では、このままレオニー子爵領を抜け、組織の手の届かない場所まで逃げることになつていたが……。

その時、森から一騎、飛び出してきた男がいる。右手に片手剣、左手には手綱。

そして、それに続くよつにもつ一騎。弓に矢をつがえた、顔に傷のある男。

「……おい、さつさと片付ける」

傭兵達は、バルビエの死体漁りに忙しいだろう。ドリューブは、メイジ一人にそう告げた。

たかが一人の平民。それに対するのは、二人のメイジ。

もしも、森に大勢が隠れていて、それらが一斉に飛び出してくる

のであれば、人質を盾にする発想も出ただろう。しかし……そんな面倒なことをする気にはならなかつた。

ただ、手早く、殺してしまえばいいだけだ。

ドリューブは、自分の馬車へと戻つていく。

もはや、あの貴族の娘とエルフの娘は、自分の所有物だ。何をしようとも、誰も咎める者などいない。

傭兵達には、少なくない金を払つてのことだし、彼等が通報する筈もない。

奴隸市場の人間たちも、繩張りとしているのはたかが一つの街だけ。

馬車に近づいたドリューブは、マチルダとティファニアの表情に、違和感を覚えた。

一人とも、呆然と、どこかを見ている。それは決して、自分に向けられているものではない。

おかしい、と、ドリューブは思つ。

今、あの娘達の視線を集めているのは、自分であるべきだ。抵抗できない強者となつた自分を、貴族が、エルフが、怯えに満ちた瞳で、恐る恐る……その一拳手一投足を窺いながら、身を縮めているべきなのだ。

「おいつ！」

怒りを露わにしながら、ドリューブは怒鳴つた。ふとこちらを振り返るメイジー一人に、お前らに言つたのではない、心の中で毒突く。

それでも、マチルダもティファニアも、瞳すら動かさなかつた。彼女たちは……いや、その傍にいる人質も、じつと同じ方向を見つ

めている。

そしてそこで、ついたきこちらを振り返ったメイジ達も、呆然として彼方を見つめていることに気付き……。

ドリューブは、ついにそちらを振り向いた。

「……やつてくれたね、全く」

聞き覚えのない、少年の声。それが発せられたのは、尻餅をついたり武器を構えたり、様々な反応をしている傭兵達の中心に立つ、バルビエの“内部”からだった。

胸に矢を生やしたまま立つバルビエの身体が、脱ぎ捨てられた衣服のように萎んでゆく。そして、彼の背中を幼い両手が突き破り……バルビエだったものが完全に地面に落ちると、そこには一人の少年が立っていた。

「“帰り”も、使わなくちゃならない道具なのに……」

アクセルは足下のバルビエを眺めながら、右手の杖で軽く自分の首を叩く。

（杖……！）

何が起きたのか、理解など出来はしないが……決してドリューブの味方側ではないであろうメイジが一人、出現した。それだけは、全員が分かった。

子どもである。そう、まだ幼い子どもであるが、メイジの恐ろしさなど言つまでもない。

反射的に叫ぶ。

「おいつ、一人はあのガキを……」

ドリューブに雇われたメイジの一人はその命令を受け、急いで駆け出そうとして……転倒した。傷の男が放った矢が、左の太腿に刺さっている。更に矢が放たれ、それはうなじへと突き立ち、メイジの口から血塗られた鎌が飛び出した。

もう一人のメイジは、仲間の死を見て心を引き締める。『』を持つ騎馬にファイアボールを放ち、落馬させると、既に田の前に接近していたもう一騎に向き直った。

「おらあつ！」
「『ブレイド』！」

騎乗したナタンがすれ違いざま、屈むようにして振り回してきた刃を、メイジは杖を剣として防ぐ。

メイジはナタンを後回しにして、バルビHの中から現れた少年に向かおうとしたが、ナタンはすぐに馬から飛び降り、再びメイジに斬りかかる。

再びブレイドの魔法を唱え、近づきすぎたその男に応戦するメイジは、罠であったことを悟った。

ナタンは決して、退がらない。メイジがどれだけバックステップ、サイドステップを組み合わせて距離を取ろうとしても、執拗に食いついてくる。離れようとはしない。

剣もそうだ。ナタンが剣で攻撃すると、メイジは魔法剣で受けるが、反対にメイジがさつさと男を切り捨てようとしても、身体を捻

つて避けるか、軽く弾いて反らすか。決して、“受け太刀”に回らうとはしない。受け流すのではなく、例えば直角に刃を受けてくれれば……剣で魔法剣を受け止めようとしてくれれば、その剣」と叩き斬つてやるのに。

少年のメイジという、予定外の敵が出現したといつのに、そのメイジはナタンに対処するしかない。勿論、こんな距離で魔法を使おうとすれば、刹那に致命傷を受ける。

(「いっは……何で向かってくる…?）

メイジは、混乱していた。

仮にも武器を持つ者同士、互いにタダでは済まない。一生モノの怪我を負つても、何の不思議も無い。

ある程度慎重になるのが定石だろう、この平民はまるで刃を恐れない。メイジの振るう魔法剣に怯えない。

(「の、平民の男が強い……?）

一瞬頭に浮かんだ疑問を、メイジはすぐに打ち消す。自分と違い、この男はまともに剣術の訓練をしたことなどないのだ。その証拠に、男の身体には次々と切り傷が増えているのに對し、自分はまだ、二力所ほどしかやられていらないだろ、と。

いくら平民とはいえ、この状況で剣の腕の差を認識しないほど愚かではない筈。

(「な、何で……メイジであるこの俺に近付ける……?）

メイジは、己が氣迫負けしていることに遂に氣付かなかつた。

何故これだけ痛みを与えていたのに、ナタンは動きを鈍らせないのか。何故これだけ斬りつけても、自分は一度も強烈な一撃を食ら

わせていないのか。

何故……メイジである自分だけが、後退つているのか。

そう……彼が、自分が後退つていることに気付けたのは、人質達が乗る馬車の車輪に、背中をぶつけた時だった。

（俺が……退がつていた？　いや、それより……もう……退かれ……）

田の前の男が、剣を横薙ぎに払う。

左脇腹に達しようとするその刃を、メイジは右手の魔法剣の切っ先を地面に向けつつ、受ける。衝撃に備えようと力を入れるが、刃と刃が接触した時、そのあまりにも軽すぎる感触に違和感を覚え、驚愕した。

驚愕したのは、宙に浮いた相手の剣を見て……相手が、剣から手を離したことを知った故。

（剣と剣の戦闘で……剣を……手放して……？）

ナタンは、メイジの……防御しようと、身体の左側へと移動して、いた右手首を、右手で掴む。そして左拳を握りつつ、その中の差し指と中指の第一関節を尖らせると、振りかぶらないまま、メイジの右腕の上を滑るように真っ直ぐ、喉を突いた。

「…………」

痛みと衝撃に、メイジの口が開く。耳には、持ち手を失った剣が、地面に落ちる音が届いた。

（喉を突かれ……詠唱できるのか……いやまでは……魔法剣で……）

混乱しかける中、右手の魔法剣を手の中で回転させ、男を斬りつけようとしたが……メイジの右手の中で、ぐるりと杖が回つただけだった。

既に、魔法の刃は消え去つてゐる。

（そ、うだ……まだ……左手が……ナイフが……確か……腰に……）

しかし……そのメイジの左手は、予定とは別の方向に動く。互いの右手を封じたままで、ナタンの左フックが脇腹に突き刺さり、痛みと苦しみに思わず停止……そして、視界に広がるナタンの額を、反射的に防ごうとした。

「ゴッ……

「……つひつにっ……」

メイジの左手は遅く、顔面に頭突きを浴びた。鼻血により、口の奥が鉄臭くなる。目は涙で滲み、なかなか視界が回復しない。

その闇の中、左手首が握られたのがわかつた。

ナタンは何度も何度も、額を叩き付ける。メイジの頭は、後ろの馬車の板壁と、前から迫るナタンの頭との間を、何度も何度も往復した。

両手で捕まえている相手の両手から、徐々に力が失われていくのを感じたが、ナタンは構わず額を叩き付ける。

やがて、ナタンの額が割れ、顔も髪も血達磨となり……体力が続

かなくなつた時。ナタンはよつやく頭突きを止め、相手のメイジのボロボロの顔面を確認する。

その時、馬車の中の……ティファニアと、目が合つた。ハーフエルフの少女の感情は、容易に確信できる。恐怖だ。

「……は……ははつ、はつ……」

息が出来ない。苦しい。

ナタンは崩れるよつにして倒れ込むと、地面に大の字に寝転がつた。

（……俺、今、どんな顔になつてんだる……）

相當に酷いのは、鏡がなくても分かる。

（しかし、なあ……エルフに怖がられるつて、俺……）

恐怖の対象である存在が、怯えた視線を向けた。それも、自分に。それが何だか、とてつもなく痛快なことに思えて、ナタンは笑顔を作る。顔を掌で軽く撫でると、そこにはべつとりと血が付いていた。

（うりや、子どもも泣き出しそ……）

視界の端で、アクセルが杖を振つてゐるのが見えた。取り囲んでいた傭兵達の最後の一人は、首筋から血を噴出させつつ、地面に転がる五人の屍への仲間入りを果たす。

（ハツ。そうだよな……あのガキの方が、よつぽどの化け物……か）

」のまま眠つてしまいたくなり、ナタンはそつと、目を閉じた。

しかし次の瞬間、彼の身体に衝撃が走る。何かが、覆い被さるようにして落ちてきたのだ。

「……？」

続いて、打撃音。どうやら本当に眠り掛けていたらしく、ナタンは急いで意識を引き戻し、目を見開く。

また、あの妙な移動法を使つたらしく、いつの間にかすぐ傍に来ていたアクセルと、彼に顔を蹴飛ばされて転倒するドリューブ。

打撃音が“あれ”で……それなら、今、自分の身体に落ちてきた“これ”は？

「…………？」

急いで起き上がり、自分の上にのし掛かっていた老人を助け起こう。

「…………チツ、遅かつたか」

アクセルの忌々しそうな舌打ち。老人の背に、ナイフが突き刺さつていた。

（……バカか俺はつ！）

ナタンも、歯を軋ませる。

ドリューブを、完全に意識から外していた。所詮戦闘員ではない、

何もしないだろ？

しかし……ドリューブは既に、恐慌の直中にいた。自分の敵であるナタンを、無我夢中で消そうとしたのだろう。

一太刀でもドリューブに浴びせていれば、結果は変わっていたかも知れない。なのに、あんな状況で眠ろうとするなど……気を抜くなど……。

「……落ち着けや、坊主」

猿轡を外された老人は、上体を起こすと、叱るように告げた。
死が近づいているというのに、その声には一種の威厳のよくなものがあり……昨日の道化師と、本当に同じ人間なのか疑わしくなった。

アクセルが駆け寄り、ヒーリングを施す。いつの間にか、ドリューブの背に剣が突き立てられていた。
すぐにナイフが抜け、傷は塞がつていったが……アクセルは表情を変えないまま、溜息と共に立ち上がった。

「……やつぱり、分かるもんなのか？ メイジには
「ああ、まあね」

老人の問いに、少年は軽く返す。

ガン……と呼ぶべきなのか、果たして本当にガンなのかは分からぬが、この老人が病気で、既に余命幾ばくもないことは分かつた。傷は治つたが、僅かに残ったダメージが最後のダメ押しを行つたらしく、生命力は着実に低下している。

そのことを薄々勘付いていたのだろう、老人は「そうか」とだけ呟き、次に声を張り上げた。

「バルシャ！ 来いつ」

反応したのは、先ほど落馬したまま気を失っていたらしい、顔に傷のある男。さながらバネ仕掛けの人形のよう跳ね起ると、全速力で駆け寄ってきた。

「ボスつ、『ご無事で！？』

「いや、そろそろ死ぬな」

詰め寄る男、……バルシャといつ名の彼を、少し煩わしそうに押しやりながら、老人は他人事のように言つ。

「……負けたな」

ふと、瞼み縫めるように呟いた。

「客の情報を漏らし、客の購入した品を盗み出し……まったく、負けた負けた。人生の最後の最後で、こんな醜態を晒すとは。あの世で先代に殺される」

「……な、なあ、爺さん」

「黙れ坊主、邪魔をするな」

ナタンを黙らせ、頬杖を付く。

「そう言えば、バルシャ」

「はつ」

「後継者の問題が……まだ片付いてなかつたな」

「はい」

「折角だ、コイツにする」

老人が見もせずに指した先にいたのは……ナタン。

「……はあ！？」

「だから黙れ。何度言わせんだクソ坊主が」

「け……けど……」

「こんな大失態やらかした以上、組織は終いよ。新しいボスの元、生まれ変わる必要がある」

「じゃあ、俺じゃなくとも誰か」

「いいや、お前だ」

老人は首を振った。ナタンは加勢を求めるようにバルシャを見るが、彼はじっと老人の話に集中している。一言一句たりとも、聞き逃すことのないように。

「……昔の話だ。ワシは奴隸を救いたかった。だから奴隸商人を殺し、運ばれていた奴隸を解放しようとした。しかし、彼等は奴隸になるしか生きる道は無かつた。だから買われて来たんだ。逃げれば当然、故郷の家族が責任を負わされる。青臭い正義感に走ったガキの、よくある話だが……そのガキは捕えられ、仲間に加えられて……いつの間にか、奴隸市場を仕切っていた。その頃にはもう、“怒り”を忘れていた

「怒り？」

「そうだ、怒りだ。怒ることを忘れれば、心が凍っていく。怒れないヤツには、未来が無い。希望が無い。夢も無い。笑えねえことに、奴隸を扱う自分たちまで、奴隸になっちまつた。このバルシャ達だつてそうだ。見ず知らずのヤツに、理不尽にぶん殴られたつて、怒りはしねえ。ただ、ボスの命令だけを聞く、人形みてえなもんだ。そんなのが上に立つちまつたら、また、今回みてえなことが起きる。客よりボスの身を優先するなんざ、あっちゃならねえ」

「……その、怒りがありやいいんなら、尚更俺じゃなくていいじ

やねえか

「ああ、そうだな。けどな、この場にいる中で、お前以外に誰に任せろって?」

「消去法かよ……」

「そうだ、消去法だ。だが……お前は、青臭い。こつから的人生、何度も何度も怒りを持つだろう。怒つたってどうにもならねえもんはどうにもならねえし、現実は変わらねえ。けどな、その怒りに身を焦がし、苦しんで……それでも、怒りを忘れるな。燃やし続ける。死ぬまでだ。そうすりや、お前は……負け犬達を……導……」

徐々に……老人の声が、弱まる。

「くそ……まだ……まだ、あるといつのに……何んならん、な……。バルシャ、お前達で……この男を……助けてや……れ」

そつと、瞼が閉じる。バルシャに向けられていた指が、膝の上に降りる。

老人の身体は、一度と動くことは無かつた。

一方的だった。

縁もゆかりもないナタンを指し、後継者になれと告げて、老人は息を引き取った。

「……なあ、ベル」

老人の身体を抱いたまま、ナタンはアクセルを見上げる。

「何？」

「……俺に……何をさせようってんだろな、この爺さんは。見ず知らずの俺を、命を捨てて庇つて……恩に恩つなら、後を引き継げつていうことか？」

「好きに取ればいいんじゃないかな。こんな場所でも、遺言は遺言だ。それも、命を掛けた言葉。ナタンが真剣に考えた結果なら、その人も許してくれる……と、思うけどね」

どちらにしろ、アクセルにとつては悪くない提案。

役に立つ人員が増えるし、あちらの組織のノウハウも吸収出来る。これで、ナタンに後を引き継げと命令すれば、彼は……。

しかしそうに、アクセルはナタンに任せた。

この場でそのような事を告げることが、何かを冒涜するものだと感じて。

「……わかったよ、爺さん。まとめて、有り難く……俺の“家族”にさせもらひ」

「……なあ、行かなきやダメ?」

「勿論。さあ、さつさと」

「け、けど、何言えばいいのやら」

「そうだな……。ここに集まっているのは、あのお爺さん曰く負け犬だ。だから……思い出させてやればいい。負け犬じゃないってことを」

何故、老人はナタンを選んだのか。本当に、消去法だつただけか。それとも、メイジを倒せるよつな強さを見せつけたから? どうせ死ぬんだし、その後のことなど知つたことか、といつ考えから?

今となつてはわからないし、その術も無いが、アクセルはあまり気には留めなかつた。

あの老人はこれまでの人生の中で、何人もの人間を見てきて、何人もの人間と接してきた。

その経験豊かな老人には、人を見る目がある筈だ。人を見る目がある者が、ナタンを選んだというのなら、ナタンは決して無能な人間ではない。人の上に立つ器量があり、組織を任せられる人間である……と、それは言い過ぎかも知れないが、とにかく素質はあるのだろう。

今はまだ、大物でなくともいい。これから、そうなつて貰えればい

い。

「……よう、負け犬ども」

ゼルナの街、東地区の、完成した娼館前。集まつた人々の前で、自己紹介すらせずに、ナタンはまずそう言った。

クルコスの街の奴隸市場は、表のものを残して閉鎖された。それを運営していくために必要な人員を残し、あと、特に裏の奴隸市場を運営していた人材には、全てゼルナの街へと移つてもらつている。

バルシャを筆頭に、揃つたのは屈強な男達。彼等には、少しでもナタンの迫力を増すために、現在ナタンの両側に待機して貯つている。

「お前らは、何故、ここにいる？　何に負けてきた？」

壇上に出る前は、あれほどオドオドしていたのに、既にナタンの顔には、何の迷いも見受けられなかつた。本当に同一人物か？と、少し遠くから見守るアクセルは疑いたくなる。

（蒼天航路の劉備みたいなもんか？）

「自分には何も出来ない。自分には何の価値もない。このまま、死ぬまでずっとこのままか？　このまま逃げ続けるのか？」

拳を握り締め、双眸を鋭くし、集まつた群衆の顔の一つ一つを確認していくように……。

（……ああ、そうか。“怒り”か）

アクセルは静かに、その迫力の正体を認識した。

何に対する怒りか……それは薄々としか分からぬが、とにかくナタンには“怒り”があり、その“怒り”の火炎を広げようとしている。その熱氣で、煽動しようとしている。

「ふざけるなあつ……」

人々が、震えるよじござわめいた。

「いいかつ、ijiにはつ、この糞溜めは！ テメエ等の崖つ縁だ！ ijiから一步でも逃げてみろつ、真つ逆さまに落つこちて、糞みてえな結末を迎える！ そうなるくらいならつ、テメエの足を信用して、前に踏み出せ！ テメエの足も信用できねえってんなら、仕方がねえ！ この俺を信じてつ、ついて来い！！ そうすればつ、いつかテメエ等だつて、イヤでも氣付く！」

一層の大声を張り上げた後、ナタンの言葉は途切れる。

最早群衆の中に、喋る者はおらず……不思議な静寂が訪れていた。

そんな中で、ナタンは再び口を開き、黒鉄のように重厚な声で、告げた。

「自分たちが結局、何も……負けちゃいねえことに」

アクセルは指で合図を送りつつして、その動きを止めた。群衆の彼方此方から、雄叫びのようなものが沸き上がり、それは一つの巨大な流れとなつて、広場を支配する。

誰も彼もが、叫んでいた。

アクセルが予め、群衆達の中に仕込んでおいた、歓声要員。合図

と共に声を張り上げ、場を盛り上げようとしていたのだが、アクセルは、それが無用の小細工だったことを知った。仕込みの彼等ですらが、熱狂して無我夢中で雄叫びを上げていて……例え合図をしたとしても、気付きもしなかったのではないかと感じる。

（まさか……ナタンめ、自力で二三神さんの名台詞に辿り着くとは……）

最初、アクセルがナタンに目を付けたのは、その身長とスタイルと、イタリア人モデルみたいな顔と……要するに、外見であった。事実、少々身綺麗にさせるだけで、ダンディが服着たみたいな男になつた。

イタリアと言えばマフィアだよね、じゃあマフィアとかヤクザとかの親分させようかなあ、と、いい加減にその後を決めていったのだが、既にある程度満足している。取りあえずは、こんな、人々を熱狂させるような男ではあつたのだから。

「テメエらは今日つ、たつた今からつ、この俺の家族だ……」

最後にそう言い、ナタンが壇上から去つた後も、人々の雄叫びは止まなかつた。

「ベルつ、来いつ」

命令するような口調に、アクセルは大人しく従う。ナタンはそのまま、まだ誰もいない事務所の中へと進んで行き、その中の一室へと入ると、ドアを閉めた。

「ベル、この部屋は何だ？」

「えーっと、皆のデスクの隣だし、ナタンの仕事部屋にしよう

思つてゐる。ナタンのお爺さんが来たら、ここで迎えるのもアリだし。扉も特別製だし、外に音が漏れる心配も少ないから、内緒話の時もいいかもね

「 そうか。つまりここなら、基本的に何してもいいわけだな？」

「 まあな

そう答えた、次の瞬間だつた。

それまでアクセルに背を向け、こちらに顔を見せなかつたナタンが突如振り向き、崩れ落ちるよつにして、アクセルの腰にしがみついた。

「 ……え？」

「 ひつここひつ、怖えええかつたあああああ！」

流石に、涙は流さなかつたが……ナタンは絶叫して震えながら、アクセルの小さな腹に顔を押しつける。

「 石とか泥とか投げつけられたらどうしようつて！ 一人でどんどん熱くなつちゃつて、みんな白けてたらどうしようつて！ ぶつちやけると昨日からつ、全然眠れてねえんだあああ…」

「 ……あー、よしよし。スティール氏か、お前は。え？ じゃあ僕ルーシー？」

「 なあつ、俺つ、やつてけるのか！？ あの爺さんの死に顔がちらついて、ついついあんな突つ走つちまつたけど、本当に俺がボスでいいのか！？」

「 ……もつと自信を持ちなよ

跪いて縋り、震える青年に、先ほどの思いがガラガラと無かつたことになりそうになるが、アクセルはそつと彼の頭を撫でた。

「そ、そつか？ あの演説で、大丈夫だつたか？」

「ああ、勿論。期待以上だ」

「本当か！？」

「ああ、本当だ。大丈夫、もつと胸を張つていいよ

ある程度個人情報を収集し、何とか形になつた名簿を見ているうちに、役に立ちそうな人材が大勢埋もれていたことに気付いた。

足が不自由になつたせいで、お払い箱になつた建築作業員がいた。彼を監督官として雇い、他の作業員達の指導と育成を任せ、東地区的建築物整理に貢献することにした。

貴族の不興を買い、追放された音楽家がいた。肉体労働者のテンションを上げ、疲労を軽減させるため、音楽隊を作り現場で演奏してもらつた。

農地を奪われ、職を求めて流れ着いた農民の家族がいた。表の内政で、農業の効率化と品種改良を目的とした試験農場を作る予定だったの、そこを管理を任せることにした。

盗賊団に放火され、店を失つた料理人がいた。建築現場の食事を任せ、ゆくゆくは店を持つてもうことにする。

屈強そうな男は、自警団を組織させてナタンのファミリーの傘下に組み込み、東地区の治安維持をさせた。

極少数ではあるが、メイジもいた。水のメイジは医者として、土のメイジは建築作業の補助として雇い、あの一系統のメイジは取りあえず自警団に入れた。

「……人材の、総合デパートやー」

「え？」

「いや、何でもない」

こちらを向いたナタンに、微笑みつつ首を振ると、アクセルはソファの上に寝そべつたまま、頬杖を突いた。

この子爵領に流入する難民の数は、多い。偶然かも知れないが、原因を挙げてみるのなら、やはりそれだけ出入りが甘いからだろう。ラヴィス子爵がし�ょっちゅう隣接した領土を通るためか、それともまたな代官がないので舐められているのか、とにかく人々が入つて来やすい環境ではある。もしかしたら周囲の領主も、面倒な難民は全て、ラヴィス子爵領に任せようとを考えているのかも知れない。

まあ、アクセルとしては好都合だった。クルコスの街の奴隸市場の組織と連携し、金持たちがこのゼルナの街に遊びに来るよう仕向け、また奴隸市場に出品する前に、めぼしい奴隸はこちらに送つてもう。そんなことがスムーズに行える事の一因は、この領土の気質によるもの。

（そうだな。取りあえず東地区に必要な施設は、まずこの事務所。娼婦の健康状態も万全に保たなきやならないし、病院も早く完成して欲しい。店なんかは勝手に出来ていくだろけど、バルビ工の財産も少なくなつてきたり、賭場も必要か。……娼館の完成形としては、日本の遊郭みたいなのを目指しているから、宿泊施設は……い

や、やっぱり必要だ。客が全員男ってわけじゃないんだし。けどそうなると、男娼も必要だよなあ。まあ、そういう趣向の客がどのくらいいるのかは分からぬけど。それに、男娼が一日に相手できる数なんて、多寡が知れてるし。……いっぽ、ホストクラブを作るか？）

いや、焦るな……先走るな……と、アクセルは自らに言い聞かせる。

娼館も早速オープンさせ、ボチボチ商人らしき客も来たが、早速問題が持ち上がった。

馬車を停車させておくスペースが足りなくなったり、予約のダブルブッキングが起こつたり。細かなことで言えば、予定していた料理が届かず、急遽アクセルが知識を総動員して、珍しい定食を作つてお茶を濁したり。

（たかが東地区一つ……更に言えばその中の娼館の管理ですら大変なのに、一つの街の内政だなんて……）

ついつい後ろ向きな思考に陥りそうになるが、原因は人手不足であるとはつきりしている。四則計算どころか、足し算引き算を完全に出来る人物も少ないので。

（やっぱり、文字を知っているのは当然として、四則計算もマスターして欲しいな）

12×12 の暗算ならまだしも、 7×8 の暗算で尊敬の目を向けられるとは思わなかつた。これで前世がインド人だったら、神として降臨していただろう。

「すみません」

ナタンの仕事部屋に駆け込んできたのは、バルシャだった。

「櫻の間のお客さんの所なんですが、女の子が足りず……」

「すまねえが、頼めるか？ ベル」

「あら。この姿の時は、アリスでお願いしますわ“お兄様”」

言葉遣いを改めつつ、そう言つて立ち上がったアクセルの姿は、成る程少年には見えなかつた。

黒と白を基調とした、所謂ゴシックロリータのワンピースドレスに、同じく黑白縞模様のハイソックス。黒髪のカツラの毛先が、小さな身体の太腿にまで達している。

源氏名はロリカードかEASYのどちらにしようかと迷つたが、結局アリスという名に落ち着いた。

「さて、一応練習を……。初めまして、アリスです。特技は楽器演奏と歌を歌うこと。あとは正拳突きですわ」

「似合いすぎて怖えーし、特技の後半も怖えーし。……そう言えば、その妙にリアルなカツラつて……いややっぱ聞きたくない」

実はアクセル自身、なかなか楽しんで演じていたりする。

音楽については、母親の生き甲斐もあるので、必然的にアクセルにもそれなりの腕はあつた。どうせ声変わりすれば、こんな高音は出せなくなるし、今のうちに堪能しておこうと思つてはいる。

初めは緊張したが、一度経験してしまえば度胸がついて、不慣れな新人よりも接待が上手くなつていた。

(……じこか)

応援要請は、“櫻の間”。部屋には階級ごとに、大きく分けて三つの種類があり、上級は花の名前、中級は木の名前、下級はその他の植物の名前だった。

応援とは言え、年若すぎる女の子は娼婦ではなく、繫ぎの役割を果たす。ただ酌をしたり、話し相手になつたり、その他の雑用だつたり……。勿論今回のアクセルの役割も、避妊具の準備が出来ておらず、娼婦が部屋に到着するまでの助つ人だ。

「失礼致します」

「遅えぞ！」

「大変申し訳ありません」

部屋に入る前から、怒号が響いた。ああ、そういうお密さんかど、大方の日星をつけて、アクセルは入室する。

いかにも不機嫌、といった感じの男だった。足下には一本ほど、ワインの空き瓶が転がつており、手には中身が入つたものが一本。だらしなく椅子に腰掛け、ワインをラッパ飲みしつつ、濁つた目が、アクセルに向けられた。

「……ほお」

なかなか体格のいい男だった。恐らくは、傭兵か何かだろう。一仕事終えて、まとまった金が入つたので……と、そんなところか。

男はアクセルを見て、感心したような吐息を漏らすと、もう一口ワインを飲み込み、椅子から立ち上がった。

「お前、名前は？」

「アリス、と申します」

小さなヴァイオリンケースを床に置き、広がったスカートを両手で摘み上げ、なるべく礼儀正しく挨拶をする。顔は、微笑を忘れない。

「特技は」

そう言いかけた時、男の手が自分に向かって伸びているのに気付いた。そのまま気付かない振りをして、足下のヴァイオリンケースを持ち上げると、くるりと回りながら男の手を避け、男の後ろ、テーブルの前に移動する。空振ったその男は、二歩ほどたたらを踏んだ。

「楽器演奏と、歌です。一曲如何ですか？」

テーブルに置いたヴァイオリンケースの留め金を外し、蓋を開ける。が、今度は背後から、肩を掴まれた。流石に知らない振りが出来る状況でも無いので、どうしようかと考えていると、そのままベッドへと放り投げられる。

「あの、お客様？」

慌てず、騒がず……ベッドの上で上半身を起こしつつ、アクセルは首を傾げた。男が、ベッドの上へと登り、膝立ちになつてのしかかってくる。

「一曲と言わば何曲でも、歌つてもうおつか。身体でな」

男はニヤリと口の端を吊り上げると、ワンピースの襟部分に指を入れ、左右に引き裂いた。あつという間に上半身が露わになり、肌が晒される。

（サムいんだよおお！ 何だその台詞！ プレイボーキ取るんならつ、女の子の服くらい、テメエの手を使わず脱がせてみろつてんだ！）

アクセルの服は、上の部分が左右に破れていた。キスでもしようとも顔を近付けてきたら、容赦なく掌底を叩き込むつもりだったが、男はアクセルの両肩を掴んで阻めないようにながら、一心不乱に上半身にしゃぶり付いていた。

（……うわあ）

嫌悪感はあるが、意外に冷静だつた。舌先で乳首を舐め回されても、くすぐつたいだけで特に問題ない。爬虫類か何かが這い回っていると考えれば、寧ろ嫌悪感は薄れた。

じつと、忙しなく動く男の頭頂部を見下ろしてみる。人間の男ではなく、何か下等な生物のように思えた。

（そう言えば俺、前世では結局童貞のまま死んだけど……初体験の時、きっとこうなつてたのかなあ？ うわあ、じゃあそうなつたら、相手の女の子にこんな目で見られてた？ あはは、乳首吸いまくつてるよコイツー、全然気持ちよくなつてのー、とか？ あもつ、清いままでよかつたー）

もしかしたら、現実逃避だつたのかも知れない。
ふと、アクセルは尋ねなければならないことを思い出した。

「あの、お客様？ 私の前にお相手をしていた女の子がいた筈ですが、その子は……」

返事は、聞くまでもなかつた。

自分の、頭の左。ベッドと壁との隙間に、小刻みに震えている、藍色の何かが見える。

「…………」

すうつ、と、冷静だつた脳が、別の冷たさに支配されていくを感じた。

男は舌舐めめずりをしながら、自分のシャツに手を掛ける。そして、男が衣服を脱ぎ去るうとした瞬間、顔が隠れた時……アクセルは拳を握り、中指の第一関節を尖らせると、起き上がりつつ男の脇腹に突き刺した。

「む、じつ……？」

視界が効かない中、予想だにしなかつた衝撃と痛みを受けて、男の身体はベッドの上から、部屋の中央側へと転げ落ちた。

アクセルはその反対側に降りると、しゃがみ込む。

藍色の髪の少女が、膝を抱え、身を縮め、ぶるぶると震えていた。

「大丈夫？ どこが痛い？」

顔、腕、脛……体中に、アザが出来ていた。全身痛いに決まっているだろ？と、質問の馬鹿馬鹿しさに自ら呆れつつ、アクセルは少女に手を伸ばす。少女は大きく身体を震わせて、恐る恐る、アクセルの……いや、アクセルの手を見つめた。また殴られるとでも思つ

たのだろうか。

「てんつ、め……」

「お客様。この娘は未だ見習いです。何か不作法がありましたか？」

見習いの娘には手を出れないよ、と、十一分に説明がなされていにも関わらず……。

ベッドから落とした男は、ようやく服を脱ぎ去ったのだろう、怒りに満ちた表情でアクセルの背後に立つ。

「ここは娼館だろうが！　こちちは、金払ってんだ！　なのに、そのガキがよお、股の一つも開きやしねえ！　テメエの身体で許してやるうつて、何なんだ一体！」

藍髪の少女の衣服は、ボロボロに引き裂かれていた。

「……その、大変はしたない言葉遣いなのですが……“突っ込んで”いないんですね？」

「そうだよつ！　そのガキつ、必死になつて抵抗しやがつて！　見てみるつ、このひつかき傷！」

「……よかつたですね」

「ああつー？」

「“突つ込んでたら”……くたばつて貰つてましたから」

精霊の力を使うつもりはなかつた。それが、精霊に対する冒涜であるよにも思えて。

再び中指を立て、振り向かざま、肝臓目がけて拳を叩き付ける。

「つ……つ……！」

声にならない悲鳴と共に、男は膝をつく。足を上げ、ちゅうどい
い高さまで落ちてきた顔を蹴飛ばすと、男の身体は背後の棚にぶつ
かり、今度は仰向けのまま崩れた。

「……つ……！」

額にねばついた汗を浮かべ、身体を丸めて悶絶する男の頬を、軽
く叩く。

「もし。もし、この娘に、その汚物と変わりないモノを、1サン
トでも突っ込んでいたら、根元から切り取つて……汚物は汚物らし
く、あなたの後ろの穴に突っ込んでいました。例え突っ込んでいな
くても、是非ともそうしたい気分ではあります、追放一号の記念
に、やめておいて差し上げます」

そこまで言つた時、バルシャが駆けつけた。

「バルシャさん。この人、お帰りです。“たつぷりとお土産を持
たせて”放り捨ててあげて下さい」

藍色の髪の少女が、よつやく立ち上がつたのは、それから一時間
後。アクセルに抱きしめられ、頭や背を撫でられながら、何とか落
ち着いてくれた。

「おいつ、べ……じゃねえつ、アリス！ 無事かー？ 純潔はー！」

「ふざけた事言つてると、唇を縫い合わせますわよ。お兄様」

「……うおおおつ、ち、乳首丸出しじやねえかああー！」

「こんなもん、ただのピンク色したホクロですよ。もしくは一キビ。それと、他の部屋のお客様に迷惑です」

ナタンには仕事を続けるように言つてあつたが、連絡を受けて一時間後に来たということは、ちゃんと終わらせたのだつ。心配して駆けつけてくれたことについては、感謝しておく。

アクセルは少女と抱き合つたまま、地下の大浴場へと向かつた。この事務所の中で、アクセルが一番拘つた場所もある。偶然ではあるが、地中深くから温泉がわき出していることに気付き、わざわざメイジまで動員して、地下から汲み上げるようにした。掛け流しの温泉という、贅沢なもの。まだ人が少ないので、入浴時間をずらすという方式だが、いすれはもつと広くして、男湯女湯混浴の三つを作りたい。

そう言えば、確か温泉には火山性と非火山性があつた筈だ。近くに火山はないので、非火山性なのだろう。とすると、地熱ででも温められているのだろうか。

「……ここに来るのは、初めて？」

アクセルの問いに、少女は少し頷いた。入浴という文化も無いことは無いのだが、せいぜい小さなバスタブに湯を張る程度。ここまで大きい、入浴のだけの為の場所は見たこともないらしく、ランプや天井を見回している。もっとも、その仕草はかなり控え目なものだつたが。

「それじゃ、入り方を説明しようか」

服を脱がせ、腰にタオルを巻いた状態で、浴場へ入る。ナタンの名前付きで、壁には手順のパネルを嵌め込んである。

「まず、身体と髪の毛を洗って。それから、ゆっくりつかるの」

少女は未だ何も喋つてくれないが、膨らんできている体付きから見るに、アニメスと同じくらいの年齢か。

(……変だな)

前世では、中学生どころか小学生の一次絵でもイケたのに、ついに息子は反応しなかった。まあ、流石に自分の肉体年齢が幼すぎるし、それにこの少女をどうこうしようとは思わない。何だか、肉親妹を風呂に入れている気分で、性欲よりも父性が勝る。

「しみるけど、ちょっと我慢してね？」

石鹼を泡立て、少女の身体を洗つていく。こびり付いた血を拭い取り、同じく石鹼を泡立てて、髪も洗つた。流石に女の子であるのでシャンプーを使うべきかも知れないが、そもそも成分を知らない。股の間の大事な部分も、念のため、裂傷などが無いか確認しつつ、洗う。

「よし。それじゃ、あとは傷を……」

少女が大分リラックスしてくれたのを見て、両手を伸ばす。

まず、左右の手をそれぞれ一本ずつの杖に見立て、ディテクトマ

ジックの要領で、怪我や病気の場所を探す。ここで引っかかることがあれば、更に指を一本一本杖に見立て、十本の指でディテクトマジックを行うのだが、幸い骨にも異常は無かつた。

「はい。ちちんぷいぷいっ、と」

「」の程度の怪我なら、別に詠唱は必要なくなつたので、代わりにおまじないのようなかけ声と共に、ヒーリングを使う。引いていく痛みに驚いたのか、それとも杖を使わずに魔法を使つたことに驚いたのか……両方か。

（やうだ、つい杖を忘れて……。まあいいか）

自分を見つめる少女に構わず、

「わあ、風邪引かないつむじひ入れ」

手を引いて湯船に誘つた。腰のタオルを取つた時、少女が驚いたことで、そう言えども、そうだったと思い出す。

「普通はタオルを取るべきなんだけど……まあ、どうでもいい

」

タオルを置み、頭を上に乗せると、少し迷っていた少女もそれに習い、アクセルの隣に腰を下ろした。

「あつ、と」

何か背中に違和感があると思つたら、すっかり忘れていた。アクセルは髪の毛を手早くまとめると、頭上に持ち上げた。女装したま

ま湯船に入ったことが無いので、結い上げる方法がわからない。

(……しかし、話わないな)

少女を盗み見ると、水面に顎を浸し、じっと揺れる湯を見つめている。

「……髪」

「？」

「いや、自分では結つたことなくて……。お湯につけちやも黙目だし、ちよつとやつてくれる?」

少女に背を向け、アクセルはカツラの黒髪を示す。迷った風もなく、彼女は長い髪を一纏めにすると、頭上へと結い上げてくれた。

「ありがと」

「……」

少女は、何も言わずにそっと微笑んでくれた。

あの客に殴られた時も、悲鳴ぐらには上げただろうに、誰も気付けなかつた。ということは、悲鳴も上げなかつたのか。

「……喋れないの?」

そう聞くと、少女は僅かに頷き、そしてボロボロと涙をこぼし始めた。

「そつか」

肩に手を伸ばし、抱き寄せると、少女も抵抗せずに抱き付いてき

た。

「……頑張ったね。偉かつたね」

恐らくは彼女も、奴隸として売られて来たのだろう。確かに可愛い顔をしているし、将来有望と判断してこの街に送った組織の行動も、間違つてはいない。

少女は声も出さず、ただ涙のみで、泣いていた。

（……どう思うかな）

彼女がこうやって、アクセルを信頼しているのは、同じ境遇の子どもだと思っているからではないのか。

しかし、アクセルは管理側の人間である。この少女を含む、女達を買い取った側の人間。決して、味方ではないのだ。それを知った時、彼女はどうするか。

「……何だろうね、君の名前は」

ふと、呟いてみる。すると、少女は抱き付いたまま、アクセルの背に人差し指を這わせた。

すぐに、文字を書いているのだと気付く。

（文字が書けるのか……。そう言えば、身体を洗っている最中にも、特に恥ずかしがってる様子は少なかつたような……。没落貴族か？）

ミシェル……アクセルの背にそう書いた後、彼女は涙を拭つた。

(〃シル……か。うん、よくある奴だ。うん、よくあるよくある。)

確認してみたい気もするが、それはゆづくつとやつた。共通点もせいぜい、髪の色と名前だけだが……正直に言つて、ビビッていた。

(何? 原作キャラつて、スタンダード使いみたいなもんなの? 引力でも発生してんの?)

何度考へても、結論は田を背けたくなるような場所へと辿り着き、アクセルは天井を見上げて溜息をついた。

つまり！この地は特異点なのだよー やたらと原作キャラが集まつてくるー

な、なんだつてー！？

（……いやでも、ミシェルはアニメだけのキャラだから、セーフだよな？ よな？）

結局、ミシェルは娼婦見習いから弾き、貴族であったことを確認し、事務を手伝わせることにした。

（これで……計、四人か）

マチルダ、ティファニア、アニエス、ミシェル。

（いや……そりゃ少しくらいは、美人な原作キャラとお近づきになりたいとは思つたけど……近すぎるー）

どうあっても、自分の行動は、彼女たちに多大な影響を与えてしまつだらう。

（マチルダ、ティファニアはともかく。ミシェルも、まあとにか

く。アーニエスは、乖離しすぎだろー！）

確かにミシヨルは……父親がリッシュ・シュモンの部下で、リッシュ・シュモンに責任をなすりつけられて没落して……リッシュ・シュモンが、父親の没落は國のせいだと唆して……それで、トリスティン王國に怨みを持つて……。

（うん、これは別に大丈夫か。どうせリッシュ・シュモンは、アーニエスに殺されるんだし）

そうなるとやはり、一番の問題はアーニエスだった。はつきり言つて、クレイモアのラキのような超進化を遂げるとは思えない。

以前……そう、ちよつて、ナタンとアーニエスを仲間に引き入れた後。

アクセルがナタンに、剣の稽古をさせようとしたら、アーニエスもくつついてきた。

剣の技など知らないし、ダメなら護衛を付けければいい話なので、アクセルはナタンの才能に賭けることにした。

（確かに、剣客商売の鰐売りの男が、こんな稽古を付けてもうつてた筈）

要するに、まずは刃物に慣れさせようと思つた。そこで互いに真剣を持ち、皮一枚を斬ろうとしたのだが、自分にそんな芸当が出来る筈がないことに気付いた。しかし、それと同時にもう一つ。自分が、ヒーリングが出来ることに気付いた。

だから斬った。結構ざつくりと。

その時アーネスは、裏切り者と叫ぶナタンの悲鳴を無視して、さつさと逃げ出した。

(……いくら何でも、女の子にあんな事しないっての)

しかし、その翌日、覚悟を決めたように剣の稽古を付けてくれと言つてきたアーネスを、正直見直した。

(つとこつか、何で俺に言つの。まあいいけど)

近くの森に赴き、木を切り倒し、木製の剣をいくつか用意して、更に十字架のような練習台も作つた。

「とりあえず、打ち込みまぐれ。木剣が全部折れたら、また用意する

それだけ言つて放置していたが、なかなか真面目に取り組んでいるらしい。

(まあ、俺が焦つてるだけか)

正直、今の成長スピードで、メイジ殺しになれるのかと言われれば、恐らくノーだろう。しかし、成長スピードが一定というのも考えられず、これから何らかの経験を経て、ぐぐーんと成長してくれたらなあ……と、半ば希望的観測に縋ついている。

最悪の場合は、自分がリツシュモンをこいつそり暗殺するところもあるのだ。

しかし、所詮それらの心配は、未来のこと。

今だって、大事なのだ。ようやく娼館も軌道に乗り出し、東地区も発展を続けている。アクセルも、ベルとアリスといつ一つの顔を使い分けて、こつそり様子を見ていたが、もう女の子が足りなくななるなど、そうそう無いだろう。

アクセルは、自分自身の魔法について整理してみる。

今、自分がどの程度かは分からぬが、リーズに見せてるのはラインクラスの実力。皆、だいたいラインクラスで壁に当たるのですよ、と励ましてくれるところから察するに、成長が停滞していると見られているらしい。

勿論、魔法を使う時は杖を使っているが……実は、杖を使っていない。杖を構えているふりをして、人差し指で使っている状態だ。杖に添えた人差し指では使っても、杖自体は使えなくなっていた。少し焦りもしたが、そもそも手を失えば杖を持つことなど出来ないので、バレる可能性などないし、問題ないことに気付いた。

停滞していると言えば、魔力の総量だ。

通常、失った魔力は休んだりすれば回復するのだが、自分は魔力をだいたい祭壇に解放してしまっていか、その回復能力が鍛えられたらしい。特に眠つたりしなくても、立ち止まつたりしているだけで、どんどん魔力が回復していく。

(まさか……そのせいか?)

回復速度が速いのは助かるが、保有できる魔力の総量は、なかなか

か思うように伸びなかつた。重い単発の攻撃か、早い連発の攻撃か
といふのはよくあるが、このまま総量が伸びなければ……つまり、
最大MPが伸びなければ、大量に魔力を消費する大きな魔法など、
永久に使用できないだろう。それはつまり、FF9の、成長しない
ダガーのようなもので……。

勿論、祭壇に解放してある魔力を使う方法もあるが、自分の最大
MPを超えると、そもそも都合良く祭壇近くにいるとい
うのは、考えない方がいいだろう。

（最大MPの上昇は、メイジのランクアップに絶対必要なんだよ
な……。スペルの難易度がドットからラインに上がれば、必要MP
は一倍どころか三倍四倍になるし）

どんな敵にも、自分一人の力で対処出来るようになりたい、と思
うのは欲張りだらうか。

しかしそれでも、もつと強くなりたかつた。自分はナタンの弟分
や妹分ということでファミリーに関わっており、正式な一員かと言
われると微妙な立ち位置だが、現在の総合的な戦闘能力で言えば、
最強であると自負している。それが自惚れだとしても、この外見と
相まって、ジョーカー的な存在ではある筈だ。

折角、組織が出来たのだ。例えどんな強大な敵が現れようとも、
自分さえいれば蹴散らせる……それほどの強さが欲しい。

（このまま、最大MPが伸びないとすれば……やっぱり、道
具に頼るしかないのか？）

流石に、今すぐに解決出来る問題ではなかつた。

「ヒュッ……」

アクセルは軽く息を吐きながら、身を翻しつつ、後ろ回し蹴りを行つ。天井から吊した木切れに当たり、コンッと小気味良い音が響き、揺れる。

地下浴場の隣は、地下鍛錬場として整備されていた。

「……今のも、違つか」

他には誰もいない。独り言の相手は、自身の魔力……精靈だった。

独自の近接格闘術を編み出す上で、アクセルが重視したのが“土”と“水”だつた。“土”で拳を強化し、“水”で体運びをして威力を乗せる。例えを用いるなら、いざれ自分の打撃を、“水銀の鞭”的先に鉛玉を付けたような”ものにしたい。

精靈に尋ね、調節し、精靈の好みに合わせていく。文字通り、自然なフォームを作り出そつと模索する。

だんだんと、動きの無駄が削ぎ落とされていく感覚は……勘違いであつて欲しくはない。

何度も試している内に、確かに、全ての歯車がガチリと噛み合つたような快感を覚える……そんな動きが、出来る時がある。

その快感を、もう一度得たくて。あの高揚が欲しくて。

何度も何度も、繰り返した。

自分自身へのヒーリング能力が上がるにつれて、少々無茶な鍛錬も行つよつになつた。

正拳突きと同じ要領で、但し、拳ではなく平手で。藁袋の中に小石を詰め込み、そこに突き刺すよつにして……確か、貫き手という技だつた筈だ。

はつきり言わなくても、痛い。爪が割れたり突き指、骨折は当たり前で、酷い時には折れた骨が皮膚を突き破つたりと、かなりグロテスクなことになった。そりや独歩ちゃんだつて、指を切り落としちくもなるなあ……と、納得する痛みだつたが、我慢できるまで続け、我慢できなくなつたらヒーリング、といつのを繰り返すうちに、更に治癒の腕前は上がり、最長でも五分ほどで完治するまでになつた。

我ながらよく続くなあ、とも思つが、やはり、どんなに痛くてもどんなに酷くても、ヒーリングをすれば絶対治るという安心感が大きい。そうでなければ、きっと正拳突きの時点で投げ出していただろう。

流石に周囲にバレるわけにはいかないので、程々にしておいた。

隣の浴場で軽く汗を流し、再びアリスとなる。アクセルであることを隠すのなら、異性の方がいいと思ったので、最近ではベルよりもアリスの姿にお世話になつていた。

地下から出ると、バルシャに声を掛けられた。

「アリス殿。魔術書ですが、手に入ったものはお部屋に運んでおきました」

「あら。ありがとうございます、バルシャさん」

「いえ。それでは、失礼します」

本当に有能な男だと思う。それでも、バルシャのボスは、彼の能力を人の下に立つ者の能力と判断したのだろう。

あまり表情も変わらず、無愛想だが、よく働いてくれるし、眞面目。既に、ファミリーにとつて無くてはならない、中心人物の一人

だつた。

魔術書は、行商人や他の領土からかき集めたもの。様々なルートを通じて、手に入るだけ手に入れた。勿論、噂など立たないよう注意を払いながら。

何とかしなければいけないのは、マチルダとティファニア、ミシエルに施された、声を奪う術。

（まつたく、便利な術だ）

メイジにとつては、ただ喋れなくなるだけではない。最大の拠り所である、魔法を封じられるという呪い。

ナタンの寝室の隣に作られた、アクセル用の部屋。戻つてみると、木箱が二つほど、部屋の隅に置かれていた。

早速開封して中身を取り出し、テーブルの上に積み上げ、その中から水系統に関係するものをベッドの上に分けると、早速表紙を捲つた。

最初は、周囲の音を消し去る風系統の“サイレント”の応用かと考えた。が、サイレントの魔法は、基本的に術者の周囲の音を消し去るもので、対象を設定するようなものではない。自発的にサイレントを行つてはいる、と言つては行つよう呪いをかけられている、としても、マチルダとミシエルならともかく、虚無の系統であるティファニアが使える筈もない。

次に考えたのは、水系統の禁呪“ギアス”。対象に制約を強制する魔法。流石に禁呪だけあって、その名を言及する書物すら殆ど無い。だが、あれは確か、条件発動型のものだった……ような気がする。いや、単純に“声を出してはならない”というギアスなのか。

しかし、発動時に目に魔力の光が現れる箒であり……それも、完璧なギアスなら現れないのだが。どうも、声を封じるというのは肉体的なものであり、水系統による精神的なものではない気がする。声を出そうとする意志を封じるものなのか。とにかく、ギアスについて詳しく解説した書など、早々手に入るものでもないので、保留としておくしかない。

(……でもなあ)

ギアスが禁呪だとすれば、たかが奴隸の呪いなどに使用される箒もないのではないか。もし習得していることがバレれば、間違いなく罰を受ける。

三人を連れて来た奴隸屋を辿つてみたが、収穫は無かつた。何でも、近年ガリア周辺で密かに流行し出したマジックアイテムを使うそうなのだが、その制作者の名は不明。手掛かりは途切れていった。そもそも、メイジが奴隸にされるなど滅多にないので、需要が多いわけでもなく、流通量も極僅かだ。

「……ふう」

一冊、一通り目を通したところで、置んだ。今回手に入れたものと、事務所の中の書庫とを再び併せて、また考えてみなければならない。

それに、マチルダにはあと十年で、トライアングルクラスにまで成長して貰わなければならない。今のランクは不明だが、早めに声の問題を解決しておきたかった。

ヴァイオリンを手に、部屋を出る。前世ではせいぜい、ピアノで猫踏んじやつた高速演奏しか出来なかつたが、これも母親の情操教

育の賜物というヤツか。弾けるようになれば、なかなか楽しいものだと感じた。

時刻は既に正午近い。娼館の中庭、日当たりの良い岩の上に腰掛け、得意な曲を弾き始めた。

まだ眠っている娼婦もいるので、控え目な、柔らかな曲を選ぶ。演奏を始めるとき、身体の周囲の精霊達が、嬉しそうに流れ出すのを感じた。普段お世話になっている彼等への、感謝の気持ちも込めている。

何人が、娼婦達が手すりに寄りかかりながら、演奏に聴き入っていた。

奴隸奴隸と言つているが、それは正式名称ではない。いや、書類上は、奴隸など非人道的なものは存在しないことになっている。

彼等が売つたのは身体ではなく、あくまで“労働力”。奴隸一人一人は、正式な労働契約を結んでいるのだ。しかし“労働力”を發揮して貰うには、彼等の“肉体”が必要不可欠なので、仕方なくおまけの肉体ごと管理している……と、表向きにはそういう理由になつてゐる。

奴隸を禁止する法も、法律の隅つこには一応あるが、事実上何の効力も発揮していない。

本格的な奴隸禁止が謳われ出すのは、このままだとまだ何十世代と先のことだらう。いや、もしかしたら永久に来ないかも知れない。奴隸は奴隸として生きていくしか道はなく、社会も、奴隸抜きでは考えられない。

(…… あのお爺さんの言つていたことも、よく分かる……)

奴隸が必要不可欠な社会でありながら、奴隸がいなくなれば、世纪末の世が訪れるだらう。何の制御もルールも無い、文字通りの弱

肉強食の世が訪れるだろ？

それを、当たり前のことだと、どうしようもないことだと、他に
答えなどないことだと……そう考えていながら、理解していながら
尚、奴隸を必要とする世界に怒りを抱く。踏みにじられる人々がい
ることに、怒りを抱く。

（……せめて、俺の手の届くところまでは）

奴隸に、完全な奴隸となつて欲しくはない。そう、ジヨジヨ五部
の台詞を借りるならば、“眠れる奴隸”でいて欲しい。

希望を失つた人形となつたとしても、その人形に、怒りを忘れな
い人間の姿を見ていて欲しい。その人間の、怒りの火炎に照らされ
ていて欲しい。

アクセルが思い描くのは、ナタンの姿だった。

（俺じゃ、無理だなあ……）

自分が死にたくないから。少しでも安心して生きていきたいから。
アクセルの行動理由は、それが全てだった。

（……過ぎた仲間を持ったもんだ）

アクセルの中でも、ナタンは大きな存在となつていた。值踏みし
ていたあの頃とは違い、今では、尊敬の念すら持つている。

（まあ、それを表に出すことは無いだろ？けど）

少し心配していた、娼婦達の反乱も、今はまだ特に無かつた。
アクセル自身、娼婦を奴隸と考えていた面もあったが、彼女たち

の明るさ……といふか活力は予想外だつた。奴隸として娼婦として売られて来て、明らかに気持ちが沈んでいる娘もいたのだが、殆どの娘がすぐに元気を取り戻していた。覚悟を決めた女は無敵だそつだが、なるほど確かに。腹の据わつた彼女たちは、笑顔で客に接していた。

(強いなあ、彼女たちは)

女装は出来ても、勿論心まで女にはなりきれない。永久に理解できぬいであろうその強さに、畏敬の念を抱く。

「ん？」

そろそろ昼食だ……そう思い、曲を終わらせ振り向くと、ティファニアがいた。

流石に耳を露出させてはおけないので、耳の大部分が隠れる、獣耳をモテルにした帽子を作り、常に被らせている。そろそろ暑さが厳しくなつていくので、もっと涼しいものを考えねばならない。いつの間にか来ていた少女は、演奏に聞き入つていたらしい。立ち上がると、左手を握り、引っ張つた。

「ああ、お昼ご飯だね。呼びに来てくれたのかしら？」

軽い微笑に、満面の笑顔を返してくれた。

(ああもう、ほんと可愛いなあ……)

たまらない気持ちになり、ティファニアの頭を撫でる。

二人並んで厨房に行くと、マチルダやミシェルたちが調理器具を用意していた。

「さて。それじゃ、始めましょうか。今日は……ローランさんから、お野菜を頂きましたし、シチューにしましょう。ミシヨルは、お鍋の準備を。マチルダは、お野菜をお願いします。テファちゃんは、一緒にミートボールを作りましょうか」

料理のスキルは、覚えていて損はない。特に、この三人は貴族の娘だったので、包丁すら握つた事が無いようなお嬢様ばかり。

（やっぱ、女の子の手料理も食べてみたいしなあ）

メイドの筈のリーズも、料理は出来なかつた。どうやら料理というのは、貴族にとつて比較的下等なスキルと思われてゐるらしい。

「しつかし、何でも出来んだな、お前」

仕事が一段落したのだろう、ナタンが厨房の入り口でアリスを眺めていた。

「お兄様もやつてみたら如何かしら?」

「いや、俺は食べるの専門だから。やっぱ、家でも料理とかするのか?」

「うーん、お菓子作りが主ですわねえ」

「もうお前、女として生きたらいいんじゃねえの?」

「声変わりするまでは、そうしましょうか。……あ、マチルダ。入れるのは硬いお野菜からにして下さこね」

料理が出来れば、ナタンにも手伝わせて、テーブルに食器を並べる。その頃には、鍛錬していたアニエス、そしてバルシャも集まつてきて、皆でテーブルを囲んだ。

「始祖ブリミルよ、以下省略致します。それでは、頂きます、と
「毎度のことだが、ブリミルが可哀想だ」

あの、食事前の長つたらしの台詞も暗記させていたが、アクセルはあまり使う気にはなれなかつた。いただきます、だけでいいのではないかと。

「ところで、バルシャさん。大衆浴場の件ですが」「順調です。あと三日ほどでオープン出来るかと」

「その近くに、屋台村でも作りましょうか」

「屋台村？」

「ええ。お風呂でわつぱりした後に、冷たい飲み物やお手軽な食べ物などを、気軽に楽しめる場所。廃材を再利用して、出店を作れば」

「……なるほど。特に料理修行が必要ないものなら、すぐにオープン出来ますし」

「お兄様はどう思われます?」

「そうだな。これから暑くなるし、外で涼みながら、つてのもいいかもな」

「では早速、暇そうな人達を集めましょうか。出来ることなら、大衆浴場のオープンに合わせ……?」

そこまで言いかけて、アリスは隣を見た。ティファニアが、咎めるような視線を向けて、くいくいと袖を引っ張つていて。

「……ああ、そうですね。確かに。『めんなさい、お行儀が悪かつたですね』

「どうかしたのか?」

「いえ、ティファニアが……」飯中に、お仕事の話は止めなさい、と

「お、おう、確かにそうだな。すまねえな、テファ」「申し訳ありません」

アリス、ナタン、バルシャの謝罪に満足したのか、ティファニアは再び笑顔になってくれた。

既にナタンも、ヒルフがゼウスのいうのとは言わなかつた。少なくとも、この少女に関しては。こんな小さな女の子を怖がるのが馬鹿しくなつたのか、家族の一員と認めたからなのか。

食事が終わりかけた頃を見計らつて、アリスは厨房へと入る。用意していたデザートのケーキを切り分けると、テーブルへと運び、それぞれ小皿に取り分けた。

「ほら、バルシャさんも取つて下さい」

「しかし、貴重な砂糖を自分などに……」

「頭を使う人は、もっと砂糖を取るべきですわ。と言つわけで、はいもう一つ」

「そ、そんな」

「ベル君。バルシャさんはケーキが嫌いらしいし、私が食べてあげよう」

「ほら、バルシャさん。隣の餓鬼に奪われちゃいますよ?」

「餓鬼!?」

「と言つことで、ミシヘルとマチルダにも一つずつ。テファにも、

一つ

「おいつ、おかしいだろ? 何で私だけ一つなんだ!?」

「おう、アニエス。心配すんな。俺も一つだ」

「お兄様もアニエスも、あんまり頭使わないじゃないですか」

食事を含めて、昼休憩は通常一時間としている。マチルダやミシエルには、その後も少し書類仕事をして貰つてゐるが、昼寝するティファニアが起きて一人だと寂しがるので、相手をするように言つておいた。

「それでは、お兄様。参ります」

「おう。いつまでも斬られてばっかだと想つなよ?」

初めの頃は悲鳴と絶叫ばかりだったナタンも、今ではアクセル流に慣れていた。抵抗を諦めた、とも言える。

勿論、いつも付きつきで修行を見ているわけではないが、やる度に確かに、少しずつ成長していくのを感じられた。

アリスが持つのは長剣。ナタンの両手には、それぞれ剣が一振りずつ。

以前ドリューブが雇つたメイジを相手にしたが、結局飛び道具を持たない平民は、接近して魔法を使わせないのが基本となる。それならば、両手に剣を持って素早く振り回した方がいいのでは……と、それはナタン自身の考えだった。

「あれ? そう言えばお前、杖を持ってない時でも魔法使ってね?」

「ああ、指の骨を杖にしてるから」

ナタンにそれを教えた時には……そして、どんな方法を使ったのかも教えた時には、すごい顔をされた。それからは、剣の傷も魔法の傷も、どうせヒーリングで治せるしと、開き直つて剣と魔法で相

手をしている。

「がつ、畜生！」

容赦なく傷つけられ、ナタンの服は見る間に真っ赤になっていく。その為に、修行の時はいつもボロ服だった。傍目から見れば、なぶり殺しにされているのと大差ない。

そして、本日の修行も終わりかけた時。

片方の剣を投げつけられ、それを弾いたアリス。が、既にナタンは接近しており、振り抜かれたもう片方の切っ先を避けられず……。

「つ……」

アリスの脇腹が裂け、ワンピースが血に染まった。

「……いよっしゃああああ……！」

剣を掲げ、歓喜の雄叫びを上げるナタン。彼自身、既にボロボロで傷だらけだが、最早大概の痛みでは動じなくなっている。

「……あ……」

一頻り喜びを噛み締めた後、彼は漸く、マズい事態ではないかと思いつた。

脇腹の傷に手を当てるアリスは、俯き、だらりと剣を下げている。

「……強くなりましたね、お兄様」

てつきり報復の攻撃が来るものだと身構えていたが、アリスは年寄りじみた口調と共に微笑んだ。

「お、おう。まあな。……その、何だ。傷は……大丈夫か？」
「ええ、勿論。この程度なら、もう治りました」

アリスはそう言って手をさげると、傷のない肌を見せる。

「……まさか、これほど成長するなんて。嬉しいです」
「そ、そうか？」
「ええ」

ズシャツ

「だがあああ！？　きつ、斬られ！？　何で！？」
「いえ、お気に入りの服だったもので、つい」
「んなもん着てんじゃねえよ！」

ナタンの成長速度に比べて、アーニエスのそれは、実にゆったりとしたものだった。

なので、アーニエスには他の技も練習させている。

「……おい、ベル君。こんなのが役に立つか？」

口ではそう言いながら、彼女は手を休めない。ヒュンッと小石が放たれ、木にぶら下がった的に当たった。

「今はアリスですよ、アーニエス。……投石は、非常に役に立つ技術です。何しろ、石いりさえあればいくらでも攻撃出来るんですか

「こんなものより、早く剣術を覚えたいんだが
「別に、剣術である必要はありません」

アニエスは未だ、自らの過去について話さない。
ただ、幼い頃から孤児で、その孤児院から脱走し、一人で生きて
いくために傭兵になろうとした。
アニエスはただ、強くなりたいとしか言わなかつた。

「要するに、メイジにも勝てるくらいに強くなりたいんでしよう
?」

「まあ、その通りだが」

「戦場で一番多く人を殺すのは、魔法や剣ではありません。矢と
石と……最近では、銃ですわね。バルシャさんは弓の名手ですが、
彼も最初は、投げた石を的に命中させるところから始めたそうです
わ。そして実際、彼はメイジを倒しています」

「……じゃあ、私も弓を使えるように」

「それはお勧めしません。勿論、弓術の練習は役に立ちますが、
それはあくまで、いざという時の奥の手にしておきなさい。貴女が
殺し合いの場に立つ時、装備すべき武器は剣、それに銃、といった
所でしょうか」

「その二つがあれば、メイジも殺せるのか?」

「勿論、使い手次第ですが。貴女は成長期、修行に専念すべき時
期なのです。そして私の指導を受け続けるのなら、今すべきは持久
力の向上、投石術の修行……それに、最低限の筋力を付けること」

「……わかった。やるよ。やつてやるぞ」

「あとは、お勉強ですわね」

「そ、それは別に必要ないのでは……」

「必要です」

「……絶対に?」

「絶対に」

夕食の時間が近づくと、娼館の方も賑やかになつてくる。

特にアクセル……と云つたが、ベルやアリスが必要になることも無くなつたので、アクセルは書類仕事や見回り、趣味、鍛錬などに精を出していた。

賭場も開設し、人の入りは上々。爆発的に、ではなく段々と順調に、東地区を訪れる人々は増加していった。既にかつての掃き溜めの面影など見当たらず、歡樂街として、近隣の土地にも名が知られ始めている。

それにつれて、利権を狙う輩も流入してきているが、今のところはバルシヤ達が対処していた。しかし、これから先更に発展していくば、強大な武力を持つ者たちも出てくるだろう。それが平民の破落戸ならともかく、メイジなら……。

（もつともつと……力を蓄えないと）

夕食は、昼の時と違ひ皆の予定が合わないことが多いが、それでもなるべく一緒に食べるようにしている。

家族だから……そんな理由もあるが、それよりもアクセルが重視するのは、皆の料理のスキルアップと生活習慣だった。

穀物、野菜、魚、肉、更には魚介類や海藻まで、なるべくバランスの良い食生活をさせるようにしている。米は、レオニー子爵領クルコスの街の行商人から手に入れたので、それを増やすように試験農場に命じたが、残念ながらいつ頃安定供給が出来るのかわからな

い。ともかく、出来るだけ多くの種類を、栄養のバランス良く摂取させる。健康と、それに美容のために。原作キャラの女の子達は、放つておいても美人に育つのはわかつているが、それでも更に美人に育てたいと思つてしまふのは、女装するようになつてからだろうか。

「テファ、頑張つて。残さず食べたら、今日は絵本、二冊読んであげるから」

人参に悪戦苦闘する少女、……ここで叱るべきかも知れないが、そんな事は出来そうになかった。叱るつもりでも、ついつい顔が蕩けてしまう。ミシェルも生野菜が嫌いなようだが、いつも我慢して、残さず食べてくれた。アニエスは特に好き嫌いが無く、何を食べさせてもおかわりを要求してくる。

この三人はともかく、アクセルを常々驚かせるのは、マチルダだった。

「……」

妹分のティファニアが、我慢しながら人参を頬張るのを横目で見ながら……未だ決心がつかないのか、自分の皿の上に取り残された、ハシバミ草の揚げ物を見つめている。

ちらり、と、マチルダが恐る恐るアクセルの目を見た。怒られないと不安気な表情に、アクセルは微笑を返す。

驚きの原因は、やはり、原作のフーケを知っていることだらう。世の中の裏を見てきた、姉御肌の女性……もつとも今は、この前まで貴族の箱入り娘だったお嬢さんなのだが、あのマチルダがこんな顔をするのに、彼女には悪いがたまらなく萌えた。

ハシバミ草の栄養など知らないが、良薬口に苦しと考へ、なるべく苦みが消える調理法を研究した。その成果が、この揚げ物で、ハシバミ草嫌いへの特効薬なのだが……唯一マチルダだけは、まだ苦みが気になるらしい。

「…………」

フォークで刺し、口に運ぼうとして……また皿に戻す。そして時折、ちらちらとアクセルの顔色を窺う。

(……可憐すきいのぞ畜生があああ……)

微笑の裏で悶絶しそうになつたりするのも、一度や一度では無かつた。

「…………？」

くい、と、ティファニアに袖を引かれた。少女はこつそり、マチルダの方を窺いながら……繰り返し、袖を引っ張る。

少しの間考えたが、やがて、要求しているのだと気が付いた。

(え？ まさか……そういう事？ だつたら俺、もう死ぬぞ。萌え死ぬぞ？)

暫く黙っていたアクセルは、そつと、マチルダの名を呼んだ。彼女は肩を震わせて、じらりと向く。

「やあ。やつを食べて、今日はみんなと一緒に寝よっ。」

一瞬の後、意を決して揚げ物を口に放り込み、ぎゅっと目を閉じて噛み碎いたマチルダに、アクセルは思わず顔を背けた。

食事の後は、地下の大浴場で風呂に入る。

体臭を消すために香水を使うなど、認めない。認められない。アクセルは階に、毎日風呂に入ることを推奨していた。

「ん？ ま、またか？」

若干戸惑つたような声を出しつつ、アーニスは風呂の中に入る。しつかりと、タオルで身体を隠して。

「はい、流すよ。ゼバー」

アクセルは椅子に座り、ティファニアの泡だらけの髪を洗い流していた。

流石にもう、石鹼をそのまま使うということはしなかつた。女の子がいる以上、シャンプーを作り出そうと研究し、植物の汁や、海草や香草から抽出したエキス、それに魔気な知識から、椿油やオリーブオイルなどを使うことも考え、自らの髪で実験、水の精霊の助言を得つつ、遂に試作品を完成させ……そして、それを使っている。洗い方にも気を配る。爪を立てず、指の腹でマッサージするように、しかし風邪を引かせないように手早く、迅速に……。

（……前の世界から好きなもの持ち込んでいいよー、って言われ

たら……今なら迷い無く言える。高級なリンスが欲しいこと

ティファニアは両耳を指で塞ぎ、口をしっかりと閉じ、目を瞑り、泡を流して貰つた後、ふるふると頭を振つた。

(もうね、この可愛さだけで、飯が食える)

頭にタオルを乗せてやつながら、アクセルは必死で微笑を保とうとする。

「ベル君。何と言つたか……あまりにも堂々としたスケベ行為だと思わないか?」

「え? 何が?」

同じよつこ、ミシールとマチルダの髪も洗いながら、アクセルは半ば本氣で尋ねた。

アクセルは一応、腰にタオルを巻いているが、他の三人の少女は特に何も隠してはいない。

「……三人の裸の女の子に囲まれて、随分枯れた反応だね」

「あー……うん」

「……。ベル君、ベル君。ほら」

「え?」

アニエスはタオルを少し緩め、ちらりと、膨らみかけた乳房を露わにした。

「……さあ、風邪引かないうちに湯船に」

「おねえさんの色仕掛けが通用しないだと!? ベル君つ、前々から思つてたんだがなつ、男としてどこかおかしいと思うで、その

反応は…

「あー、はいはい。とりや、お返し」

「わやつー？」

立ち上がり、腰のタオルを取り去るアクセル。思わず女言葉に戻るアーニエス。

「ほら、ね？ 勃つてないでしょ？」

「……だ、大丈夫なのか？」

「大丈夫つて何だよ！？ 勃つ時は勃つんだよつ、ちゃんと…」

「いや、今の状況は勃つ時だと思うんだが……ベル君の将来が心配だ」

「あのねえ、僕はまだ九歳なんだよ？」

「すまないが、信用できない。ナタンも言つてたよ、“あいつ絶対俺より年上だ”つて」

実はアクセル自身、密かに悩んでいたりもする。

前の世界では、警察に調べられたらアウトな動画をオカズにしたりもしていたが……今のマチルダやミシェルやアーニエス、そして勿論ティファニア相手には、ついに欲情はしなかつた。恐らくは父性本能が芽生えたからだろうし、そうでなければ困る。

それにきっと、九歳ではまだ身体が性欲に目覚めていないからだと、自らに言い聞かせていた。

「止めてくれるなと、袖を振つて」

大浴場の扉が開き、ナタンが入ってきた。

「うわあ？！」

「何してんだ、アーニエス？ 隠すほどの身体でもねえだろつ！」

ナタンが慌てないのは、アニエスを完全に妹として見ているからだろう。慌ててタオルを直そうとする彼女を笑い飛ばしながら、鼻歌交じりに湯船に向かう。

「……え？」

そして、湯船に入っている四人の顔を見て、固まった。

「ほら、ナタン。湯船に入るのは、身体を洗つてからだつて言つただろ？」

「あ……ああ」

アクセルの注意を、どこか上の空で聞き流しながら、ナタンは慌てて腰のタオルに手をやる。そして洗い場へ向かおうとするが、それをアクセルが呼び止めた。

「ナタン、どうかした？……何で前屈みに？」

「い……いや、何でつて、そりや……」

ナタンが振り向いた時、全員沈黙した。

別に、タオルの締めが緩かつたわけではない。にも関わらず、内側から、押しのけられるようにして、タオルが床に落ちた。そのままで引つかかってくれれば、まだダメージが少なかつたかも知れない。

「……でかあつ！」

思わず叫んだアクセルの両手は、既にティファニアの両手を覆い隠していた。

ナタンは慌ててタオルを拾い上げると、股間の天を衝くドリルに

被せる。そして、大浴場の入り口に向かつて走り出した。

「待て、ナタン！」

ティファニアの目を隠したまま、アクセルが叫び、ナタンは思わず停止する。

「別に、そうなったことを責めるつもりはない！ 男なら当たり前の生理反応だとも思う！ しかし、そうなったことは仕方なくても、そうなった理由は重要だ！ 一つだけ答えるんだ！ …… テファじゃないよな！？」

「ちつ、違う！ それだけは断じてない！」

「なら良し！」

「えつ、いいのか！？」

アニエスが一人を見比べる中、ナタンは大浴場から逃げ出した。

美容のため、歯磨きをさせた後は、日付が変わる前に皆を休ませる。

「そして、その王女様は、コインを湖の底へと投げ捨てました：

…」

絵本の原作者は、アリス・ムーンライト。もともとはアクセルが、前世で見知った物語を忘れないように、また忘れていても適当に繋げたり改造したりして、紙に綴つたものを本にした時、偽名を使つ

たのが始まりなのだが……今ではこつそりと、街中の書店に置いていたりする。ムーンライトの由来は、子どもにベッドで聞かせるような話が多かつたので。

ベッドを一つくつければ、子ども四人くらいは楽に寝られる。本を広げるアクセルの左隣にミシェルが寄りかかり、ティファニアを抱えたマチルダが右隣に。

部屋にはただ、アクセルの声だけが響いていた。

「……おしまい。わあ、寝よつか。お休みなさい」

一冊目の本を畳み、枕元に置く。そろそろ眠くなってきたのか、ティファニアが大あくびをした。

「……」

三人が寝静まつた頃、アクセルはそつと、服を握るティファニアの指を解き、身体の上を通るミシールの腕をどけて、ベッドから抜け出す。そしてこつそりと部屋を出て、地下に向かった。

「『ライト』」

地下倉庫で、魔法の灯火を出現させる。倉庫の隅には作業場のような場所があり、壁際には甕が並んでいた。

昼食時、屋台の提案をしたのは、地酒がよつやく形になつたからだつた。

米が無い以上、日本酒は造れないが、ワインや蜂蜜酒の作り方を知り、要するに糖分さえあればアルコールを足せば何でも酒になるのではないかと考え、実行に移した。映画『大脱走』で、ジャガイ

モの酒を捕虜達が造っていたので、不可能ではない筈だ。勿論、麹や酵母とかそんなものについては知識がない為、手探りでやつた所、強い酒が出来た、くらいにしかわからないが、それでも珍しいものなので売れるだらう。屋台で試験的に売り出してみて、イケたら研究者を増やし、品質を向上させ、娼館などでも扱うつもりだ。この世界の酒は、ほとんどがワイン、次に麦酒であり、他は蜂蜜酒やラム酒など。

(この芋焼酎もじきは……ポテト……だから……ポテロックとも名付けるか。蜂蜜酒は、そのままでいいし。いや、そう言えば、蜂蜜酒はハネムーンの語源だつたな。だつたら、ただの酒と言つてみり、滋養強壮の妙薬として売り出すか)

蓋を開け、ちびちびと味見をしながら、思考を巡らせる。

(とりあえず、暑い時期の商品だな。氷が欲しいけど、メイジを使つたとしても高くつくし、目立ちすぎるのは……テルマエ・ロマエみたいに、牛乳を売り出したいけど、それも瓶が高くつきそうだ。大衆浴場なんだから、出来るだけ安くしたいし。まあ再利用すればいいか。利益は、周囲の店で出せばそれでいいか。……高級浴場は、はつきり言って風俗店みたいなもんだしな。……いやそもそも、大衆浴場にちゃんとお嬢さんが来るかどうか……)

「コップを机に置きながら、首を振つた。

前世では未成年のまま死んだので、ビールやチューハイを軽く舐める程度にしか経験しなかつたが、そのまま成長すればきっと泣き上戸になつていただらう。少し酒が回つてきたのか、思考がネガティブへと傾いている。

(……もう、暗く考えるのはやめだ。失敗したら失敗したで、ま

た他を考えればいいじゃないか）

そういう風に自分を励ましても、やはり心配になり、アクセルは木切れの入った箱をひっくり返した。

あの四つの祭壇を作った時から、彫刻も趣味になった。ナイフや彫刻刀で、不要になつた木切れを削り、装飾を施す。前世でも工作の授業は楽しみだったので、色々と試しに作つてみたりした。

薄く削り出し、大きさを揃えて並べ、鍊金で作り出した金具で端の一力所を固定する。もう一方の端には紐を通し、余計に広がらないようにする。

完成したのは、木製の扇子だった。風呂上がりに、涼むため。それらを十個ほど作り出したところで、だんだんと気持ちが落ち着いてくる。

（……寝るか）

気付いたら、日付が変わっていた。工具を片付け、灯火を消し、階段を上がる。

娼館はいよいよ賑わつていて、中庭から見回すと、ほとんどの部屋に灯火があつた。

（その前に、ちょっと見回るか？）

腕に巻いていたバンダナを、頭に被る。そうして下働きの少年ベルに化けると、アクセルはそつと娼館の壁を飛び越えて外に出、壁伝いに正面へと回つた。

『イシュタルの館』……そう名付けたのは、アクセルだった。皆

には、東方に伝わるとされる娼婦の守護神と誤魔化している。

建物は四階建て。防音も考慮した、頑丈な造りのもので、ホテルを真似たような間取りになつていて。食事も出来るし、金次第で連泊も可能。

吉原か祇園を参考にしようと、そう思つた。ただの娼婦ではない、男を癒す女神達。流石に女神という名詞を使えば角が立ちそうなので、表立つてはレディを付けている。性交だけの場所ではなく、唄や踊り、そして遊戯など、あらゆる交流がなされる。

彼女たちは、諜報員としての顔も持つていた。訪れた男たちとの会話は、最終的に事務所へと伝えられ、それを整理して有益な情報へと仕上げる。得意げに語られる成功や、恨み言、愚痴、噂話……女の前では男達の口は軽くなり、あらゆる情報がもたらされ、今はその整理が追いつかなくなっていた。

完全な娼館と語つより、それにキャラクターを混ぜたようなものだらうか。

「やあ、バルシャ」

「え？ あつ…………ベルさん」

正面の門の近くに、バルシャがいた。最近アリストでいることが多かつたからか、彼は少し沈黙した後、よつやく少年の呼び名を思い出した。

アクセル自身、三つも名前があるのはややこしいこと自覚していたが、今のところ改めるつもりはない。

「さん付けじゃなくて、呼び捨てだつてば」

「あ、ああ。そうだつたな、ベル。夜の散歩か？」

「うん。少し、寝つけなくつて。何か問題とかあつた？」

「いや、特には。強いて言うなら、破落戸どもが利権の一部を要

求してきたが、それはいつものことだ。お引き取り願つたんだが、その頃にはてめえの足じや歩けなくなつてたんで、他の奴らが捨てに行つてゐる

「そうか……。ありがと」

「いや、仕事だからな」

「明後日は、この館も休みになる。明日のパーティーは、楽しみにしててくれよ。とつておきの酒を出すから」

「ああ、わかつた。他の奴らにも伝えておく」

正面の門を抜けると、人工池がある。『ベニティエ（シャーマン）の泉』で、形もシャーマンをモチーフにして、アクセルが自ら設計した。泉の中央には、背中から翼を生やした女神像。一応、イシュタルをモデルにして……と言つより、イメージして製作された、アクセル会心の像だつた。だいたいの形に鍊金し、あとは少しづつ削つていつたので、それほど手間がかかつたわけではないのだが。

中央のその泉を左右に回り込むと、いよいよ娼館の入り口が近づいてくる。

一階の入り口では、履き物を脱ぐのが決まりとなつてゐる。そして受付を済ませ、絨毯敷の廊下を歩いていけば、宴会場や娼館事務室、倉庫、控え室、応接室、厨房などがある。また、老齢の客のために、人力で稼働するエレベーターも作つた。

一階、三階、四階は個室で、客はそこまで上ることになる。そして上の階の個室ほど、値段は高くなり、女の子の質も上がる。基本的に、娼婦達には一人一部屋を与えており、まだ子どもの女の子は見習いとして、娼婦の弟子となり配属される。

勿論、この『イシュタルの館』で遊べるのは、それなりの金を持つ者だけ。この街の娼婦は全て取り仕切ることにしたのだが、そうなつてくると金を持たない男達の相手をする者がいなくなる。ので、

『イシュタルの館』で働けるのは一定以上の水準の娼婦だけとし、その他は風俗店のように小規模の娼館を作り、それで需要を満たすこととした。

娼婦の元締めを全て潰したことにより、現在それらの管理を一手に引き受けるのは、ナタンの組織となつた。娼婦達にとつては、上納金を支払う相手が変わつただけなので、働き場所が固定されるのも大した問題ではない。

しかし、街の中にはまだ何人か、商売を続いている娼婦もいる。そのことについての対応も、考えなければならなかつた。

(さて……戻るか)

暫く泉の傍で建物を見上げていたアクセルは、遠回りに娼館を通り過ぎ、その奥の事務所の建物へと向かつた。

寝室に戻つた時、他の二人は目を覚ましていた。泣きじやぐるティファニアが腰に抱き付いてきて、アクセルは慌てて受け止める。

「どうしたの？」

尋ねてみると、ティファニアは顔を埋めたまま、両手でアクセルの身体を叩く。マチルダ、ミシェルの二人も、やがて両目を潤ませながら、左右から抱き付いてくる。二人とも若干アクセルより背が高く、埋もれる形になつた少年は、部屋の隅で腕を組んで立つアニメスに目を向けた。

「どうしたの？ 何でみんな泣いてるの？」

「男として、嬉しい状態だらう？」

「冗談言つてないで、教えてよ。アニメス」

「……そんなの、寂しくて心細くて不安だったからに決まつてゐる

だろ？「

何となくではあるが……アクセルにも、理解できた。

彼女たち三人は、声を封じられてる。一応、ミシヨルとマチルダは筆談という最終手段を持つが、ティファニアは文字を知らず、それすらも出来ない。

誰も、彼女たちの素性など知らない。ただ、奴隸市場で買われた娘としか思わない。

しかし、ただ一人、アクセルだけがそれを知っていた。彼女たちがこうなってしまった理由を。勿論、彼女たちが教えてくれるまでは知らない振りを続けるつもりだが、それでも、やはり配慮した対応をしてしまう。

自分を裏切る筈がないと、信じられる者。彼女たちが必要とするのはそんな存在であり、アクセルは格好の立ち位置にいた。

「……ごめんね」

そう言いながら、ティファニアの頭を撫でる。

ふと、アニエスがこの場にいる事に疑問を持ったが……彼女たち三人に言えることが、アニエスにも言えることだと気付き。

「ねえ、アニエス

「ん？」

「折角だから、一緒に寝ようよ

「な、何を馬鹿な。私は……」

「お願い。僕が、そうして欲しいんだ」

「……そうか。わかった。仕方がない、可愛い弟分の頼みだしな」

アニエスは持参した枕を持ち上げると、誰よりも早く、真っ先にベッドに向かった。

第七話「決意」（前書き）

お陰様でPV500000超、ニーク30000超です！
皆様ありがとうございます！

次の日。

昨夜の大浴場での失態が、アクセルにどんな影響をもたらすのか
……密かに震えていたナタンの元にやつてきた少年は、明らかに悄然としていた。書類を整理していたバルシャも、心配そうにアクセルを見ている。

「おはよう、ナタン。バルシャ」

「お、おう」

「……おはよう御座います」

「気付いたんだけどさ……」」って、子どもの教育上よりしくないよね」

「「いまさら!？」」

思わず二人は声を合わせた。

「……考えてみれば、ミシェルもマチルダもティファニアも、ついでにアニエスも、子どもなんだし」

お前だって九歳児だろう、とは、ナタンもバルシャも言わない。本当に九歳児だったとしても、一人ともそれを信じるつもりはなかった。

「今朝、わかつたよ。僕が最低な人間だということに」

「……何があつたんだよ?」

「少し寝坊してね。先に起きたテファアが、飛び乗つて起こしてくれたんだ」

「微笑ましいですね」

「その時……本人はただの真似つこのつもりなんだらうけど……僕の下腹部に跨つて、上下運動を」

「「うわあ…………」」

「しかも。気付いたら、勃つてた」

「「…………」」

アクセルは椅子の一つに座り込むと、溜息と共に天井を見上げた。

「……どうしよう」

「どうしようもねえだろ。つづうか俺は、そいら辺のことお前は承知の上で、ここに住まわせてんのかと……」

「しかし、他に場所もありませんしね。テファアの耳は勿論ですが……アーネスはともかく、他の三人は、明らかにアクセル様に依存していますし」

「そう……どうしようもない。」

ティファニアがエルフであることを知るのは、アクセル、ナタン、バルシャヤと、マチルダ、ミシェル、アーネス……そしてローランの、七人。あとは、あの時奴隸競売に関わっていた数人。

女の子達……特にティファニアは、この娼館の敷地から外に出たことは無い。今まで特に不満を言わなかつたが、考えてみれば不満など表現しようが無いのだ。

（住居の問題は別として、もつと考えるべきだったなあ……）

安心できる住まいはここしかない。そのことは仕方ないとして、ティファニアを遊びに行かせるなどという発想すら無かつたのは、

大きな落ち度だと感じた。

「……バルシャ。少し時間を作つて欲しいんだけど。ナタンも」

「あと三十分ほどすれば、一段落しますが……。本日は、明日か

らの休業の為に縮小営業ですし、人手は少なくて済みます」

「よし。じゃあバルシャ、馬車の用意をお願い。ナタンは、仕事を片付けたら荷物運びを。僕は、厨房で料理」

「なあ、何すんだよ？」

「ただのピクニックさ」

ピクニックの行き先は、ゼルナの街を出て馬車で一時間ほど北西へ向かつたところにある、清らかな小川だった。

「……よしつ、ティファフ、網貸して！」

隣の小さな手から網を借り受け、アクセルは糸の先に食らいついた魚を掬い上げる。

「あー、やれやれ。何とか全員分釣れたね。よかつたよかつた

帽子を外したティファニアに連れられ、皆が待つ、焚き火へと戻る。そして火の番をしていたナタンに手伝わせ、七匹の魚をそれぞれ串刺しにし、塩をまぶし、焚き火の周囲に突き刺した。ティファニア

ニアがしゃがみ込み、興味深そうにそれを眺めている。

「おーい、ベル君。これでいいか？」

「……うん、よしよし。あ、待つて。これとこれ、毒きのい」

「どこが違うんだ？」

「ほら、傘の裏。放射状に縦線が入ってるでしょ。モリルトキノ

「だ。食べると、数日は手足が痺れる」

「よく知ってるなあ、貴族のくせに」

「事務所の書庫に、図鑑があるんだよ。……ニアース、ちゃんと

読んでる？」

「いや、まあ……ボチボチとは

ニアース、マチルダ、ミシェルの三人が集めてきたキノコや野草を、食べられるものだけより分け、シチューの中に放り込む。バルシャが馬車の中からワインやジユースを運び出し、七つのコップに注ぎ、配った。

「さて。それじゃ、初ピクニックに。かんぱーい」

車座に皆が座る中、アクセルは自分のコップを掲げた。

椅子も、テーブルもない。皆が皆、野原の上に座り込んでいる。昼食は、釣った魚の塩焼きに、近くの林で採ったキノコ入りのシチュー、そして用意してきたサンドウイッチ。

「……なあ、バルシャよ」

頬杖をつき、アクセルと、その周りの少女達を眺めながら、ナタソンは隣の男に声を掛けた。

「何でしょうか？」

「どう思つ？　あいつら」

「あいつら……？」

「アニエス、マチルダ、ミシェル、テファアの四人だよ。俺の知る限り……ベルのヤツは、自分の利益を最優先するヤツなんだ」

「……」

「あいつらは、もう俺の妹なんだ。邪魔に思つてるとかじやねえぞ？　そうじやなくて、ベルは何を考えて、あいつらを匿つているのか。マチルダとテファアは、お前も知つてるだろ？　が、ベルが一枚叩いて買い取つた。すぐにでも娼婦として働く女か、すぐにでも荒事の頭数に入れられる男。本当は、そのどつちかを買うつもりだったのに……結局あいつは、幼い少女一人を買うだけだった。しかも、一人はエルフ。先住魔法が使えるつてのなら少しさは分かるが、喋れもしない。声の封印を解く自信があつたとは思えねえ。まだヒントすら無えようだし、そもそもエルフだつてバレれば、処刑されるに決まってる。帽子が取れて、あの耳を見た誰かが騒ぎ出しゃ、それで俺ら全員アウトだ。考えてみれば、慎重なあいつらしくない」

「確かに。現に今も、もし誰かが通りがかれれば、大騒ぎになる危険もありますし」

「ミシェルは、同じく喋れねえ。声を封じられてるつてことは、メイジなんだろ？　……そりや俺だつて、あんな小さな女の子を殴るヤツは許せねえ。けど、あのまま娼婦の見習いさせてた方が、今この事務員見習いより、よっぽど稼いでくれたんじゃねえのか？　最後にアニエスだが、あいつへの対応が一番分からねえ。あいつだけは、奴隸なんかじやなく、いつだつて放り出せるんだ。頭がいいわけじやねえ、腕が立つわけでもねえ。才能なんてなさそうなのに、ベルは衣食住も全部立て替えて、修行まで付けて……色々と面倒を見る。……俺が心配なのは、ベルがあの四人を、一体何のために確保してるのかってことだ」

「……単に、好みだつたから……ではありませんね」

「ああ。あの四人に関しては、どうも……ベルの行動つてよりは、

俺みてえなタイプの行動なんだ。損得より感情を優先させちまつて
る、よう見える。あいつらしくない」

「……」

やがて、長めの昼食が終わった。

「……。さて、片づけは男どもでやろつか

「珍しいな、ナタンがそんな殊勝なこと言い出すなんて」

食器や鍋の片づけを始めた、ナタンとバルシヤ。

アクセルはティファニア達に、目の届かない場所に行かないよう
に、誰か来たらすぐにティファニアの耳を隠して知らせに来るよう
に、と注意すると、一人に続いて、川の中へと入った。
三人で並び、食器を濯いでいると、ナタンが尋ねてきた。

あの四人への対応の理由を。

「……」

アクセルは、暫し沈黙する。そして、洗い終えた皿を陽光に照ら
しながら、ぽつりと言つた。

「実は、ね。僕の中では、あの四人とも、素性の見当はついてる
んだ」

「え？！」

「……！？」

絶句する一人には構わず、少年は次の皿を手に取る。

「まだ、何の確証もないし、はつきりしたことも言えない

「……俺達に教えてくれるのは、はつきりしてから……か？」
「いや。もしもはつきりして、それが僕の予想通りなら、それこそ言えない」

「そこまで危険なのですか？」

「うん」

「四人とも、か？」

「そう」

その答えに、二人は更に疑問を感じる。それほどの重大な秘密を持つ人間を、四人も抱え込むなど、危険すぎる行為だ。

「まあ、危険だつてことは百も承知さ。でも、野放しにしていたそれこそ、とばっちりを受ける可能性もある。どうせ危険だつてわかってるなら、積極的に関わろうと思つたんだ。せめて、自分の身を守れるような力を持つまでは……僕は、あの四人を守るよ」「……存在を知られる恐れがあるから、娼婦としては働かせなかつたんですか？」

「それもある。それもあるけど……。いや、それもあつた、か」

「？」

「もう忘れたよ、そんなの。とにかく、ナタン、バルシヤ。秘密ばつかりで申し訳ないけど、僕の考えに賛同して欲しいんだ」

「……ああ、そうだな。俺だつて、可愛い妹たちを危険に晒したくなえし」

「私は元より、御意のままに」

その答えに満足したのか、アクセルは軽く笑みを漏らした。

娼館は、明日から三日間の休業に入る。

理由としては、色々。大掃除に人員配置の調整、書類整理など。あとは、意見の交換会。

しかしそれも、二日目からであり、休業前夜である今夜は、慰労パーティーを企画していた。

「……ねえ、ティファ。そろそろいいか？」

アクセルの胡座の上に座る少女は、ぶんぶんと頭を振ると、絵本の続きを要求する。ちょうど第一章の終わりに来たので、切り上げようかと思ったのだが。

今夜の慰労パーティーには、子どもは出席しない。恐らく夜通しで宴会が続くだろうし、ミシェル、マチルダ、ティファニアの三人は、事務所で休んで貰うことになつていて。アニエスには給仕を手伝うように言い付けてあり、そして企画した張本人であるアクセルは、パーティーが始まる前に、執政庁へと戻ることになつていた。

明日は、母親が待つ屋敷に戻る日なのだ。勿論、これが初めてではなく、だいたい一週間か一週間に一度のペースで帰宅している。

この娼館に入り浸ることが出来ているのも、リーズがアクセルの魔法の腕前しか興味がない事の他に、彼女が自分の代わりに仕事をしてくれているからもある。そのリーズの、休みの日でもあるのだ。

これからローランのホテルに戻り、着替え、いかにも彼のホテル

から戻ってきた、という体裁を整えておかねばならない。

「…………」

しかし、ティファニアはまだ、退いてはくれない。いつもなら、渋々とではあっても、手を振って送り出してくれるのに。何故か今回に限って、駄々をこねる。

「…………まあいいか」

「お前ほんと、テファには甘いよな…………。いや…………俺以外には、か？」

隣には、アクセルが作った数学のドリルを前に唸るナタン。ティファニアのあまりの可愛さに、つい少年が漏らした言葉に、ふて腐れたように愚痴つた。

「…………さて、全部読んじゃったね。じゃあ…………」

机の上の本を、全て読み終えたら、今度はアクセルの胸にもたれてくる。そして少女は目を閉じ、静かに呼吸を繰り返す。

「…………ひひ。ひひひひ。嘘寝だらう。いけない娘ですねえ」

人差し指で頬を突き、脇腹をくすぐると、観念したように笑いながら身を捩る。

（ああもう…………ほんと、一生にひとつしてたい）

思わず抱きしめると、ティファニアもぎゅっと抱き返してくれた。

しかし、確かに幸せだが、このままでいられないのも事実。あまり遅くなれば、誰かがローランのホテルまで迎えに来るかも知れない。

「……ねえ、ティファ」

抱きしめたまま、そっと囁く。

「今日は、楽しかったね。みんなで外に出て、みんなで水遊びをして、みんなでご飯を作つて」

小さな背を、優しく撫でた。

「……」めんねえ

その言葉に、ティファニアは小さな身体を離した。驚いた様子で、じつとアクセルの顔を見る。

「僕がもっと優秀なら、もっと自由に動けたのにねえ」

相変わらず優しい手つきで、アクセルは少女の尖った耳を撫でた。

「もっと優秀なら……みんなの、声だつて……」

すう……と、アクセルの下瞼から涙が流れ、頬を伝い、ティファニアは狼狽した。何気なく見ていたナタンも、啞然として口を開いている。

「あ、あれ？」

当のアクセル自身、突然溢れた涙に慌てた。

ティファニアもナタンも、今までアクセルの涙など見たことがない。ナタンなど、生まれた時も黙つてたんじゃないか、と考えていた。

怪我をしても泣かない。腹が減つても泣かない。寂しくても泣かない。感動の嵐を呼んだとか言われている小説を読んでも、感動はしてもやはり泣かない。

「……あーっ、と」

アクセルは袖で涙を拭つた。見ると、つられてしまつたのか、ティファニアまで涙目になつてている。少女は表情を歪めると、アクセルの胸に抱き付いた。

涙の理由は、だんだんと自覚できた。自分の不甲斐なさだ。

声を封じるマジックアイテムが、どの程度のレベルのものなのか、それは関係ない。問題なのは、声を封じる、ただそれだけの呪いを解除できない、自分の力不足。

勿論、今だつて死にたくないとは思つてはいる。強くなければ不安だし、得た強さを表に出すのも怖い。

しかし。

（たかが、原作に出てこない程度のマジックアイテム……そんなものくらい、もつと軽く、何とか出来ないのか）

マチルダも、ティファニアも、ミシヨルも、三人とも大好きだし、大事だ。原作キャラがどうのこいつの、ではない。日々の触れ合いの中で、もうそんな利害意識など、彼方へと度外視されていた。彼女たちを苦しめるものがあり、そしてそれを前にして何も出来ないと

「いつ自分の不甲斐なさに、悔しさがこみ上げる。

「……大丈夫」

「未だ、解呪の日途が立つてはいるわけではない。
しかし、やる。出来なくても、やる。やって見せる。やるしかな
い。」

「絶対に、大丈夫だから……」

アクセルは目を閉じ、またティファニアの頭を撫でた。

「皆、よくやつてくれた！　客入りは上々だ！　今夜は好きなだけ食つて、好きなだけ飲んでくれ！　それじゃあっ、乾杯だ！」

最高責任者であるナタンの音頭で、飲み物を持つ皆の手が掲げられる。

娼婦達に、自警団メンバー や娼館の事務員……ナタンのファミリーである者は、粗方が集められ、宴会に加わっていた。こんな時でも襲撃される可能性はあるので、警備のメンバーが交代で見張りに立っている。哀れなのは一番最後に見張りに立つ、酒が一杯しか飲めないチームだが、彼等には次の宴会でいい目を見てもらうことに

する。

アクセルが自作した酒は、なかなか評判が良かつた。今までにない味で、しかも強い。ラム酒など、度数が50。を超えるものも存在するのだが、そもそもラム酒はこの世界で高級品であり、庶民がおいそれと手を出せるようなものではない。

勿論、酒税というものがあり、許可無く酒を造れば処罰されるのだが、許可を出す立場のアクセルが行っているものなので、実質的に問題はない。今の時点で皆が騒ぎ出せば問題になるが、そんな真似に走るような人間は、少なくともこの中にはいなかつた。

皆が騒ぐ中、ナタンはそっと、隣のバルシャに顔を近付け、先ほどのアクセルとティファニアの一件を伝えた。

「……そんなことが」

「ああ。まあ、俺はベルのこと勘違いしてたつてことだ」

ぐるぐると酒を揺らすその表情は、どこか嬉しそうでもあった。

「あいつだつて、結構、情で動いてんだな。ティファを買ったのだつて、ただ珍しい物が欲しかつたからかとも思つたが……あいつは、ただ単純に助けたかつたんだろうよ」

「……そうですね」

「いやあ、まあ、いい弟分と妹分を持つたもんだ」

既に酔いが回ってきているのか、ナタンは笑いながら膝を叩く。

「……。では、私はこれで」

「あ？ まだ大丈夫だろ？」

「いえ、少々酒乱の気がありますので」

「初耳だ」

バルシャはすっと立ち上がると、宴会場を後にした。

通常の予定ならば、彼はあと一時間はあの場に居続け、その後表の見張りと交代するのだが……それは、咄嗟の判断だつた。

宴会場を出て、更に厨房の裏口から娼館の外に出る。周囲は既に日が沈んでおり、微かに聞こえるのは騒ぐ従業員達の声。バルシャは音を立てずに渡り廊下に飛び乗ると、そのまま前方の人影を追つた。

近くの柱に取り付けられている、マジックランプの灯火。それによつて鮮明になつた人影は、二十歳ほどの女。娼婦の一人だ。

外からの襲撃には十分備えてあるが、まさか慰労の宴会中に娼婦が抜け出し、立ち入り禁止の事務所側に侵入することは予想外で、見張りも一人ほどしか置いていない。しかもその一人は、主に脱走者が出ないかを見張つていた。

今までも、脱走者が出なかつたわけではない。しかし、すぐに解決した。脱走を試みようとしたのは、まだ奴隸として売られてきたことを自覚していない者であり、外に出て、ここ以外に行き場がないといつことに自然と氣付くと、自ら戻つた。

バルシャは、アクセルの密命を帯びていた。密命と言つても、ナタンに秘密にすると言つよりは、可能性の話なので、密かに警戒していた方がよい、というレベルのものだ。

事務所に侵入した娼婦は、階段を上つていく。そして廊下の角に身を潜めると、スカートの中に仕込んでいたナイフを取り出した。中庭側の窓の向こうに、眠たそうに目を擦りながら歩く、一人の

少女がいた。トイレにでも起きたのだろう、ミシェルはざわざ足を動かしている。

娼婦はその姿を確認すると、また廊下の角に身を隠した。ナイフを構え、じつと、ミシェルが通り掛かるのを待つ。

(……有罪)

冷徹に判断し、バルシャは娼婦の背後に忍び寄ると、左手で口を押さえて右手でナイフを奪つた。こんな事態を日常茶飯事として処理するバルシャに敵う筈も無く、娼婦は突然の襲撃に驚愕すると同時に、腹部をナイフの柄頭で突かれ、意識を手放した。

急いで階段の下へと娼婦を引きずり下ろすが、間一髪、ミシェルは気付くことなく通り過ぎていった。

(やはり、か)

『イシュタルの館』は、他にも娼館を知るバルシャとしては極楽のようなものだった。

客の有無に関わらず、最低限の生活は保障されている。この娼館のみを使って私腹を肥やす、というわけではないので、娼婦達が稼いだ金は半分以上が彼女たち自身のものとなる。通常、娼館の主人などは、いかに女を効率よく使って利益を上げるか、のみを考えるものであり、それが普通なのだ。

彼女たちは娼館の持ち物であり、通常では外出など厳しく制限されるのだが、ここの中は営業時間外であれば自由に街中を歩ける。アクセルが付けた条件は、オシャレをして出かけることのみ。これは、宣伝も目的としていた。

更にバルシャが驚いたのは、娼婦達は、娼婦でありながら身体を開くことを強制されなかつたことだ。客は娼婦を選んで部屋に入るが、娼婦もまた客を選ぶ。だからと言って、そのまま何もしなけれ

ば、自由に使える金が手に入らない。娼婦達にはそれぞれ、奴隸市場などでの購入額が知られており、その額と利子を払えば自分を買い戻すことも出来た。

バルシャが最も驚いたのは、それでも利益が出たことだ。

既に足腰も弱くなつたが、お気に入りの娘と一緒に風呂に入り、身体を洗つてもらえばそれで満足という、商家の隠居がいた。時折襲いかかる死への恐怖を忘れるため、一晩中女に抱き付いて頭を撫でて貰うだけという軍人がいた。

大酒飲みの娼婦と、一晩中酒盛りをしてバカ話をして、翌朝颯爽と帰途につく、どこかの貴族であるうメイジがいた。

全ては、集められた女の質の高さだった。その形は数あれど、アクセルの語る“女神”に相応しい女達の……。

バルシャは腕の中で氣絶する娼婦を見下ろした。

ミシェルを殺そうとしたのではない、攫おうとしたのだろう。女の懷には、ロープがあった。彼女が喋れないというのは、娼婦達の中にも知っている者は多い。確かに、悲鳴を上げない者ほど攫い易い対象はないだろう。ということは、ティファニアやマチルダであつても、その対象となる。

そして攫う理由は、勿論人質とするため。ただの娼婦ではないが故に、人質としての価値も高いと思われたらしい。それは間違つてない。あの三人のうちの誰か一人でも誘拐されれば、アクセルは何としてでも取り戻そうとする筈だ。

では更に、人質とする理由は。この娼婦が、ただの金目的ならば特に問題はない。しかし、人質の対価として求めるのが、もつと大きなものであるなら。

(……「Jの街の、裏の利権か）

組織が軒並み潰されたことで、東地区の最大勢力となつたナタンのファミリーは、実質的に裏の全てを支配するようになつた。娼館も賭場も賑わいを見せ、大きな利益を上げつゝある。手に入る可能性があるのなら、誰だって欲しがるだろう。今まで簡単に対処できていたが、今回の相手は、内部の娼婦を味方に引き入れていることからしても、今までのそれとは違うと確信できる。

(調べてみる必要があるな)

折角の休みだが、バルシャにとつてそこまで惜しいものでもない。

(……Jの“炎”だけは)

今、彼は自らの内に、沸々と、熱を持ったものが沸き上がつているのを感じていた。

それを、彼自身は“炎”と表現した。

今まで、ただ命令に従つたことが人生だつた。そして、ナタンとアーセル……その二人に会つてからも、それは変わっていない。しかし、いつの間にか、自分の中には“炎”が生まれていた。

(何だつて、出来そうな……そんな愚かな気持ちが……)

ともすれば、自らの能力の限界を超えたような力すら、引き出せるような気になつてしまつ。

滑稽だと、愚かだと思った。

だが、それが何とも心地よかつた。

(やうせぬ……しない)

翌日の昼過ぎ、アクセルは自分が生まれた屋敷に戻った。母親や執事、メイド達に挨拶し、紅茶を楽しんだり母親の一重奏に付き合つたりしている内に、あつという間に日が暮れる。

一日田は、リーズを釣れて馬を飛ばし、試験農場の様子を見に行つた。流石に、もう彼女と相乗りせずとも問題ない。

「 おお、これは若様」
「 やあ、『苦勞様』

農場の広さは、5000?ほど。農民の家族の三世帯が家を構え、ここで農作業を行つている。

事実上、米の栽培の為に作られた施設だった。稻作は高温多湿で雨が多い地域に適しているそうだが、アクセルには勝算があった。ラヴィス子爵領を流れる川は海まで続いているが、その水源は、ガリアとの国境にあるラグドリアン湖である。トリステインは、このラグドリアン湖の水によつて生かされていると言つてもいい。そのあり得ないほどに豊富な水が、この国に豊穣をもたらすのだ。要するに、よほど無茶なものでなければ、まず失敗することはないと考えられる。これは、水の精霊のチートっぷりの恩恵だらう。

田には水が張られている。

「具合はどう?」

「一応、仰った通り水を張つて、また耕しておきました。それで、育っていた米ですが……」

農夫が持つてきたのは、なかなかに成長した苗。確かに前世で見たのも、これと同じようなものの筈だ。

「……どうでしょ?」

恐る恐る尋ねてくる彼に、笑顔を返す。新しいものを栽培するといつのは、しかもそれが貴族直々の命令によるものなら、相当なプレッシャーだったのだろう。

「これは、成功するかも知れないね」

「本當ですか!」

「いやあ、まだ何とも言えないけど、なかなかよく育つてるし。うまく行けば、収穫は……ラドの月（9月）になるかな」

アクセルはマントと服、靴を脱ぐと、ほぼ下着姿になつて、田んぼの中に踏み込もうとする。リーズが慌てて止めた。

「わっ、若様! お止め下さい、泥の中になど!」

「……ああ、そつか。そうだね」

「ええ! ですから、早く服を……」

「ちゃんと田下駄とかつけないと」

「あのつ、そういうことじゃなくて……」

勿論、フライヤーレビューションを使えば、更に言えば念力を使え

ば、わざわざ泥の中に踏み込まなくてもいいのだが……。体験してみたい、という気持ちもあった。

広めの板きれに縄を通して、しっかりと足に固定する。リーズもう諦めたのか、何も言つてこなかつた。

「間隔は……このくらいか?」

まだ少し、土の塊があるような気がするが……恐らく大丈夫だろうと、苗を数本ずつ差し込んでいく。倒れないよう、少し土を固めた。

「だいたい、このくらいで。まあ初めてなんだし、やる内に調整していけばいいと思つよ」

だぱんだぱんと田下駄を鳴らしながら、田から上がる。

「足腰にかなり負担がかかるから、休みながらでね。また時々様子を見に来るけど、苗を植えるのが終わったら、あとは基本的にすることが無いから。害虫が出ないか、見張るくらいかな? もし何かあつたら、ゼルナの執政庁か、ラヴィスの屋敷に知らせて」

そう言いながら、アクセルも不便さを感じていた。

ゼルナの街に滞在し続けることが出来ればいいのだが、母親は屋敷から離れるつもりはないし、まだ子どもの自分がずっと詰めているわけにはいかない。電話などというのは無いものねだりだとしても、何か一発で自分の元へ繋がるような、そんな直通のものが欲しかつた。

(いや……作れるか?)

恐らく、材料さえあれば何とかなるだらうが、知識が無い。マジックアイテムを作ろうかと思ったこともあつたが、普段田に対するこのなじようなものも含めた、膨大なローン文字を習得するだけではなく、専門の教育を受けなければならぬらしい。よつて、制作者も数える程しかいないそうだ。

（まあ、仕方ないか。……他の方法を考えないと）

マジックアイテムという単語で思い起こすのはやはり、あの娘たちにかけられた声を奪う呪い。解呪が無理でも、それを上書きするよつな方法を探っているのだが、相変わらず手詰まりだつた。

（H立図書館に行けば、或いは……でも、ツテがなあ）

今、最も可能性が高いのは、そこだつた。或いはアカデミーの誰かに診察してもらつとこつ手もあるが、それだとティファニアが殺される可能性がある。

（……まあ、そうだな。片つ端から試していくしかないが、今は）

アクセルは憮然としたリーズと共に、農場を後にした。

「……『存じの通り、ファミリーはこの街の“娼売”を、一手に仕切っています」

アクセルとナタンを前に、バルシャは静かに告げた。

「今回、あの娼婦を使って誘拐を企んだのは、ラパンです

「……つかぎ？」

「はい。勿論通称ですが。彼女たちは娼婦の集団です」

「……ファミリーが仕切ってない娼婦。未だ、自分たちで独自に客を取つている娼婦たちかい？」

「ええ」

バルシャの肯定に、アクセルは天井を見上げて溜息を吐き出した。

誘拐未遂の報告を受けてから、アクセルは一度も、微笑みすら漏らしていない。その表情には憤怒などではなく、能面のよつな無表情が貼り付けられていた。

ナタンもバルシャも、アクセルは逆鱗に触れられた、ということを理解している。

「娼婦を取り仕切つていた組織が壊滅していく中で、それを好機と見たのか、“ラパン”の異名を持つフラヴィという娼婦が仲間を集め、小規模ながら組織を作りました」

「……そいつは、人質を取つて何を要求しようとしてたんだい？」

「あくまで推測ですが、やはりナタン殿の地位かと。娼婦の元締めは、同じ娼婦であるべきだ、という理屈も分からぬでもあります。念のため、他にも内通している娼婦がいるか、密かに確認しましたが……どうやら、単独だったようですね」

「ただの意地なら、可愛いもんだけね」

「そして更に、傭兵团も雇つたようで」

「ん？ そんな金、どこから？」

「後払い、ということでしょう。ここには女も金もありますから」

「よし。潰そう。いいよね、ナタン」

「……ああ」

ナタンとて、妹と呼ぶ者を狙われて、黙つていられる筈が無かつた。

「相手にだつて、言い分はあるだらう。……けどまあ、どうでもいい。知つたことか」

それだけ告げると、アクセルは部屋を出た。

夕方から降る雨は勢いを弱めず、今では雷鳴を伴つて暴れ回つていた。

今日もまた、一つのベッドをくつつけ、畳で眠る。幸い、アクセルがベッドに戻つても誰も目を覚ましてはおらず、ぐつすりと寝入つていた。

一際大きく雷鳴が轟き、部屋を震わす。

「……どうしたの？ アニース」

そつと寝室に入り込んできた少女に、視線も向けずに尋ねてみた。

「いや、なに。ベル君が、雷を怖がっているだろ? なあと。姉として、そんな弟分を安心させてやるうと……」

「うん。怖いよ。だから、安心するまで一緒に寝てくれる?」

「仕方ない、そうしてあげよう」

燃え盛る炎と、そして轟音。アニエスは、それに対して怯える。今日のよつに雷が鳴り響く夜は、大抵アクセルの寝床に来た。

「ああ、もう大丈夫だ。お姉さんがいるからな」

そう言つて、アニエスはアクセルに抱き付いた。小さな胸に顔を埋め、彼の寝間着をぎゅっと握り締めている。

「うん。ありがと」

からかう気など、毛ほども起きなかつた。アクセルもそつと腕を回し、彼女の頭と背を抱きしめる。

雷の度に、自分よりは少しだけ大きな体が震えた。

アニエスは相変わらず、喋り方を年相応には改めなかつた。それは、彼女が目標とする理想像が、既に完成形に近いからだろ?。

男の格好をして、男の言葉遣いで、剣を振るつて敵を倒していく……イーヴアルディの勇者のよつな戦士。そう、要するに、男の強さにある種の憧れを抱いていた。

このまま成長すれば、いざれはアンリエッタに召し抱えられ、銃士隊の隊長として活躍することになる。

(……目的は……立身出世か、仇討ちか)

恐らく彼女の中で、その一つは別ではない。出世していけば、必ず、自分たちの村を滅ぼした相手を探り当てることが出来ると、そう考えて……その為に、強さを求めている。

復讐の相手は、当時実験魔法実験小隊を率いていたコルベールと、その部下達。そして命令を下した、リッシュュモン。

ナタンのファミリーが総力を挙げたとしても、今ので程度の勢力では、魔法実験小隊にすら届くのがも怪しい。未だ、所詮は片田舎の子爵領、その中の街に根を張る、極小のヤクザだ。

（復讐がどういづれは置いとくとして……とにかく、今はまだ、一人には出来ない）

男に化けて傭兵の真似をしたのも、実践で鍛えようとしたからだろ？しかし、いくら何でも早すぎる。せめて、一人旅が出来るよう強さを持つて貰いたい。

もしも、ファミリーが順調に勢力を拡大したなら、いざればリッシュュモンにまで届く。

それが無理なら、アニエスは兵士としてトリステイン王国に仕合し、自らの手で探し出す。

（……どちらでもいい）

アニエスの目的が復讐である以上、ナタンのファミリーもアンリエッタ王女も、その手段としかならない。ならば、どちらの手段を選ぶべきか……それも、どちらでもいいのだ。

ファミリーを選ぶなら、才能ある戦士が、ナタンの力となつてく

れる。

アンリエッタを選ぶなら、王女はメイジ以外で構成された、優秀な部隊を手に入れることが出来る。

原作通りなら後者だが、前者でも構わないのだ。彼女のその後の主な役所は、才人を鍛えることだが、それは別の人間でも問題ない。そう、いざとなれば、アクセル自身が師匠となるか、代役を向かわせることが出来る。全ては、その時の状況。

そう、今から考えておく必要のない問題だ。

今の問題は……。

「……そんなに怖いのかい？」

より一層、自分を抱きしめたアクセルに、アニーはそつと尋ねてみる。

「……ああ。怖いよ。怖くて……怖くて……

もしもまた、新たな誘拐犯が現れれば、そしてそいつが、自分で到底敵わないような敵ならば。

（攻めるしかない。こちらから……）

訪れる可能性のある、不幸な結末が……ひたすらに、怖かった。

東地区は今日も、不夜城の如く君臨している。
あそこでは、娼婦達は着飾り、輝き……咲き乱れる。

あれが光であるならば、こちらは陰だ。闇だ。

あれが出来る前は、希望もあった。

今まで娼婦達を絞り上げていた連中が、次々と潰されていき、ようやく少しはまともな生活が出来るようになつた。その前が酷かつた、というのもあるが。

しかし、結局は違つた。支配者が変わつただけだった。全ての娼婦達は集められ、東地区で支配されている。

“ラパン”のフラヴィイは、やがてイシュタルの館の方角から目をそらすと、近くのベッドに座り込んだ。彼女の家ではない。元締め組織のアジトだったのだが、壊滅してからは空き家となつていた。カムフラージュのために倉庫とされていたので、怪しむ者もいない。

ラパンという異名の由来は、足の速さと、赤い瞳。

(……リリースは、失敗したらしいわね)

リリースという娼婦は、潜入したのではなく、初めからイシュタルの館に組み込まれていた。何とか彼女に渡りをつけてみると、今までよりも遙かに待遇が良いという。それならば、とも思つたが……

…。

最近、野良の娼婦達が消え出した。イシュタルの館に組み込まれていなかつた、または警戒して逃げ回つていた娼婦達は、十人ほど。しかし、今では六人まで減つている。

全て、行方不明。ここを逃げ出して、東地区に奔つたといつながらわかるが、そんな情報は無かつた。

少し前、傭兵を名乗る男が来た。何が起つているのかといつことは、その男が説明した。

早い話が、狩られていたのだ。東地区の者に。街の娼売を一手に握る、それを東地区の者が目的とする以上、支配体制に組み込まれていない野良の娼婦は見逃せない。だから、密かに攫う。殺され、死体でもあれば、また別だつたろう。しかし、この街は……というよりこの子爵領は、人の出入りが多い。いなくなつたのなら、どこかに蒸発したと見なされる。

東地区の再開発の熱気の中で、それでも、その発展に関わろうとしなかつた者たちもいる。それが、フラヴィを始めとする娼婦達や、物乞い、浮浪者たち。彼等彼女等は、清掃活動にも参加しておらず名簿にも名がないため、尚更、いる筈のない存在として扱われる。

まだ二十歳半ばのフラヴィであるが、娼婦達のリーダー格である。過去、何度か行われたことがある浮浪者狩りでも、その足の速さと機転で、仲間の娼婦達を導いて逃がしていた。

再開発に加わらなかつた理由は、疑念だ。うまい話に潜む罠にはまり、ゼルナの東地区に墮とされた人間など、山ほどいる。

ナタンの演説を聴いた者もいた。しかし、ナタンという男が本当の救世主なのか、それともただの煽動者なのか、すぐに結論を出さない者もいた。或いは彼自身は善意であつても、彼を取り巻く人間にどれほどの悪意が隠れているか、想像も出来ない。

傭兵を名乗る男の言葉は、そんな懸念を肯定するものだつた。東地区で働く娼婦達は、最初こそ優遇されていたものの、少しでも役立たずと判断されたり、また不都合な真実を知つてしまつと、密かに外部へ売り扱われるそうだ。それもまだマシな方で、最悪の場合は家畜のように処理されるという。

そして、攫われた野良の娼婦達も生死不明で……わかつてゐるのは、既にこの街にはいないということ。

堂々と売春宿でも構えれば、すぐに見つかってしまう。かと言つてこのまま隠れていっても、客は取れず干上がるしか未来はない。

逃走か、闘争か。その一つを突きつけられ、フランガイが選んだのは後者。

(見せてやるつじやないか。売女の意地つてもんを)

第七話「決意」（後書き）

いつもじ覽下せり、ありがとひりやれこます。溜めていた分を全て吐き出したので、次は先になりやせりです。

一話あたりの文字数ですが、多すぎると思われる方は、また御意見下さい。

ところで疑問なのですが、100デーニーが1スウなのか、10デニエが1スウなのか、どちらが正しいのでしょうか？ ご存じの方いらっしゃれば、お教えて下さい。

第八話「困餌」（前書き）

いつの間にかPV10万突破、ありがとうございます！

雨上がりの中庭で、今日もアリスはヴァイオリンを奏でる。恵みの雨に感謝を込めて。雷雲に別れを告げて。

しかし……その音色の違いに……子守歌の曲でありながら、それに潜む荒々しさに気付いた者もいる。子守歌の曲が、獰猛な魂を押し隠すものであることに。

だが、気付いた娼婦達は何も言わない。娼館の助つ人でありながら管理側の人間でもある、特異な少女。その彼女に確認することを、恐れて。

アリスは演奏を終え、自室まで戻ると、ヴァイオリンを片付けた。そして、ナタンとバルシヤの元へ向かう。

「さて。それでは、参りましょうか。お兄様、バルシヤさん」

「おう」

「はい」

と言つても、すぐに動くのは一人ではない。これは、行動開始の報告だ。

アリスは地下へ行くと、倉庫の片隅に鎖で繋がれた娼婦の前に立つた。

「……あなたは……」

娼婦は驚いた顔をしたが、アリスはそれには構わず、鎖の鍵を外す。

「お静かに、リリーヌさん。お兄様やバルシャさんに気付かれてしまいますが」

捕縛された、誘拐未遂犯である娼婦……リリーヌ。彼女は監禁されてしまいだが、拷問されていたわけでも、乱暴に扱われてもいない。このことを知っているのは、バルシャ、ナタンのみ。他の娼婦達も、リリーヌはお忍びの貴族に呼ばれ、ローランのホテルで休日勤務を行っている……と思つていて。

「アリス、どうして……？」

「話は後にしましょう」

声を潜め、緊迫した状況であることを印象づける。

「とにかく、何があつたのかは知りませんが……あなたはもうここを出るべきです」

「逃がしてくれるの？　どうして？」

「……大切な女の子が傷つけられるのを、黙つて見ていられないだけ、です」

その言葉はアクセルの本心であり、何一つとして間違つてはいなかつた。

彼女の衣服を、目立たないものに変えさせる。ちょうど出入りの商人が来る時間帯だったので、それに紛れるようにして娼館の敷地から脱出した。

既に時刻は夕暮れ時だが、つい一日前にオープンした大衆浴場は、アクセルの予想に反してなかなかの賑わいを見せていた。周囲の屋台はまだ六軒ほどだが、珍しい酒を仕入れているということもあり、また、大衆浴場自体もオープン価格として値段を下げているので、仕事を終えた人々が大勢集まっている。

アリスはリリースを連れて、更にその中に紛れた。

「リリースさん、ここまで逃げて来ましたが……行く当てはありますか？」

「……ええ」

「それでは、私はこの辺りで戻ることにします。いいですか、すぐこの街を出て下さいね？ それが無理でも、東地区には絶対に近づかないで下さい」

人通りの少ない裏道まで来た時、アリスはリリースに別れを告げる。

しかし、リリースは少女の手を掴んだ。引き留めるようにして。

「……どうかしましたか？」

「……お願い。私を、連れて行つて欲しいの」

当初の予定では、別れた振りをしてリリースを尾行するつもりだった。

（もし、リリースの考えていることが、予想通りなら……）

彼女が、未だアリスに同行を求める理由が、人質にする為なら、素直に連れて行つて貰つた方がいいかも知れない。

少し考え込む振りをした後、アリスは彼女の要求を受け入れた。

リリースが向かったのは、東地区と南地区との境目にある倉庫。裏口の、古ぼけたドアを押し開けると、彼女はアリスを招き入れた。

（さて。そろそろか？）

すたすたと歩みを進めるアリスは、軽く倉庫内を見回す。背後から攻撃の気配がするが、見当は付いていた。恐らくリリースが、ドアの近くに立て掛けた棍棒を振り上げているのだろう。

「ここが、目的地ですか？　どなたかお友達が？」

背後を振り向かず、アリスは軽く尋ねた。

リリースは、未だ殴りかかってこない。そうしてくれないと、アリスとしても話が進まないのだが。

ガランッ

「……リリースさん？」

ついにアリスは振り向くと、床に転がる棍棒、それに座り込み俯くリリースに目を向けた。

（流石に、良心が咎めたということか？）

捕えられた彼女は、アリスが助け出すまで、一体何を想像していたのだろうか。

リリースは決して訓練を受けたスペイなどではなく、ただの一人の女性なのだ。恐怖に浸食され、予想できる結末は最悪へとエスカレートし……。

目的としていた誘拐の対象をアリスに変えたのも、自然なことだろつに、リリースはアリスを恩人として見ていく。

「……そいつが、向こうの“弱み”かい？　リリース」

薄暗い倉庫の中に、静かな声が響いた。

「待つて！　お願い、この娘はやめてあげて！」

絞り出すようにして、リリースは懇願する。その願いが聞き入られるとは思つていなかつたし、事実、つい先ほどまでは、そんなことを願うつもりもなかつた。

その決意が打ち崩されたのは、年端もいかぬ少女の、あまりにも無防備な背中を見せつけられたが故。

「やめてどうするんだい、リリース？　その娘が黙つてくれるとでも？」

「でもつ……！」

「リリース、これは戦争なんだよ。もう後戻りなんか出来はしない。」しつちが滅ぶが、ヤツらが滅ぶか、そのどちらかだ

闇の中、赤い瞳が現れた。

破れた窓から僅かに差し込む夕陽の中に、一人の女が姿を見せる。

（彼女が……“ラパン”のフラヴィイか）

流石に、まとめ役となるだけのことはある……アリスは素直にそう感じた。双眸には静かな決意が宿り、その物腰は堂々としている。

「……生まれて初めて、ブリミル様に感謝してえ気分だ」

また、別の男の声が聞こえた。ギシギシと、闇の中にある階段が軋んだ音をさせ、誰かが近づいてくるのを教える。その声は、アリスにとつて特に印象に残るものではなかつたが、やがて現れた男の顔を見て、頭の片隅から記憶が蘇つた。

（協力者の傭兵つてのは、こいつのことだったのか）

以前、ミシェルを殴りつけた男だつた。バルシャ達に大分痛めつけられた筈だが、もう完治したのだろう。相変わらず、嫌悪感を催すような笑みだと思つた。

「残念だつたなあ、お嬢ちゃん。悲しいお知らせだ。もう一度と、おうちには帰れねえ」

アリスは一つ、溜息を吐くと、そつと両手を挙げた。

“彼”がこの一件に手を貸したのは、暇だつたから、ただそれだけ。

レオニー子爵のドラ息子が、道楽で始めた傭兵稼業。本人もラインクラスのメイジであり、戦闘ではなかなかの強さを誇る。まあ、そんな強さなど、“彼”にとつては猿山の大将と何ら変わりないも

のであつたが。

隣のラヴィス子爵領に最近出来た娼館、そこで叩きのめされたので、復讐したいという、特に珍しくもない話だつた。女々しい男だと、そんなことは以前から分かり切つていたので、別に軽蔑したりもしない。“彼”自身も、己が善人ではないといつゝとは自覚していた。

しかし、あのドラ息子は違う。自覚していない。自分を高尚な存在であると信じ、それを否定される言動を極端に嫌う。いや、本當は心のどこかで、自分を信じ切れていないからなのだろうが。そう考えれば、“彼”よりはまともかも知れない。

ドラ息子の作戦は、単純だつた。野良の娼婦達を攫い、それを娼館の仕業にする。苦境に立たされた娼婦達に、善人面をして近づき、唆す。

“彼”はこの一件に、傍観者として参加していた。勿論、何かあれば手を貸さねばならないが、今のところそれはなさそうだ。

あのアリスという小娘一人のために、娼館の人間は果たして、全てを明け渡すのかと言えば、恐らくNO。見捨てられるだろうし、それが当然だ。誰かの身内だとしても、周囲が切り捨てる。

娼婦達は、自分たちの自治を勝ち取ることを望んでいる。

あのドラ息子は、叩きのめされた仕返しが出来ればそれでいい。

そして……その他の傭兵達は、利権を手に入れることを目的としている。

“彼”が求めるものは、そのどれにも当てはまらなかつた。

“彼”はただ、倉庫の天井の梁に寝そべり、そつと下界を見下ろしていた。

色々と予定変更になってしまったが、想定外ではなかつた。アリスの両手首は麻縄で縛られ、その小さな身体は倉庫の一階から吊されている。爪先が辛うじて床に触れ、アリスはふらふらと揺れていた。

「お願い……離してよお」

今にも涙を溢れさせそうな表情で、アリスは声を絞り出す。木箱の上に腰掛け、真正面からその顔を眺める男は、相変わらず下卑た笑みを浮かべていた。

フラヴィイは腕を組んで険しい顔をし、リリースはアリスに背を向け、耳を塞いでいる。

他の女達は娼婦で、男達は傭兵だらう。

「さて。どこがいい？」

男はナイフを取り出し、木箱から腰を上げた。

「……ラファラン、何をするつもりだい？」

少々咎めるような声で、フラヴィイが尋ねる。ラファランといふ名を聞いて、アリスが思い浮かべるのは一人。

（確かに、隣のレオニー子爵の息子の名前だな。放蕩息子だという噂だったが……。いや、流石に偽名の可能性もある。とはいえば本当に貴族なら、死なれると厄介だな）

ラファランは右手でナイフを弄びながら、その切っ先をアリスへと向ける。

「これから、イシュタルの館の連中に手紙を出すわけだが、……無視されねえよう、土産をつけようと思つんだ」

「……土産？　まさか……」

「まあ、そうだな。指の一本でも添えてやるか？」

「そこまでする必要があるのかい？」

フラヴィイも流石に躊躇した。いくら敵対する人間とはいえ、まだ幼い少女を傷つけたくない。ナタン達が大人しく出て行き、行方不明の仲間の居所が分かれれば、それでいいのだ。

「甘えよ、フラヴィイ。お前らは舐められてる。だから攫われるんだ。だから奪われるんだ。……俺は、俺を舐めるヤツを許さねえ」

それも正しい考え方ではあるが、ラファランの表情を見ると、これは彼の個人的事情や嗜好が大きい。

「ひイッ……お願いつ、助けて！　助けてよおー」

徐々に自分の身体に近づく刃に、アリスは悲鳴を上げた。フラヴィイは険しい顔をしているが、まだ迷っているらしい。リリーヌは更に身を縮め、音を遮断しようとしている。

フラヴィイとリリーヌ以外の娼婦達は、互いに顔を見合わせ、誰かが行動を起こさないか待っている。

ラファラン以外の傭兵は、五人。ラファランはメイジだとして、その五人の中にメイジはない。ただの傭兵だ。判断理由は魔力の流れ。

（……ナタンとバルシャが来る前に、終わらせるか？）

そう考えていた時、突然拳が襲いかかってきた。

「ぐつ……」

殴られたのは、顔面。ぽたぽたと鼻血が垂れ、床に染み込む。一瞬、表情が崩れそうになつたが、アリスは何とか“怯えた少女”的顔に戻した。

（甘かつたな。流石に女の子の顔は大丈夫と思つてたけど……そういう言ひ方こいつ、ミシェルもさんざん殴つてたつけ）

女の顔を殴り、痛みに悶えるその表情に興奮する性癖らしい。ラファランは、拳に残つた余韻を楽しむように、何度も指を曲げ伸ばしながら、ニヤニヤとアリスを見下ろしていた。

「一発……だつたよな？ あの時は」

再び、拳が迫る。今度は真っ直ぐではなく、左頬を殴られ、不安定な身体がくるりと回った。繩が捩れ、一階の方から軋んだ音が響く。

「俺は、倍返しがモットーなんだ……」

右頬を殴りつけられた。

そして最後の一発は……ラファランはまたナイフを握り……。

「やめとくな」

アリスと彼との間に割つて入ったのは、フラヴィイだった。

「……邪魔すんじゃねえよ」

「あんたとこの娘の間に何があったのかは、知らない。けど、もう十分じゃないかい？ これ以上、しなくちゃならないのかい？」

「うるせえ、どけよ、フラヴィイ。まず、テメエを可愛がつてやろうか？」

グスグスと、アリスの泣き声。少女は涙を流しながら、フラヴィイの背に向かつて訴えた。

「お願い……何で……私がこんな目に……？ 帰してよお……おうちに……帰して……」

「うつとおしいんだよー」

「ひいっー？」

振り返りざま、フラヴィイはアリスの襟を掴み、自分の方へと引き寄せる。アリスは顔を背けながら、恐る恐る、彼女の顔を窺つた。

「まず、あんたのボスが、あたしの仲間を返すのが先だ。殴られたのは可哀想だと思うけど、悪いとは思つちやいないよ。……あたしらにとつてそんなもんは、傷つけられた内にも入りやしない。……あんたらみたいな……！」

フラヴィイの指に、力が込められる。

彼女の脳裏に蘇るのは、攫われた仲間の娼婦達。勿論、彼女たちの奪還も目的だが……薄々と、気付いていた。それは不可能だうとこりに。生かされている理由などないのだ。恐らく彼女たちは、もう既に……。

「あんたらみたいなつ！ 守られてのうのうと暮らしてゐるガキどもなんかつ……！」

忌々しげに、彼女はアリスの襟から手を離した。

アリスは確かに、リリースを助け出してくれた。そのことに恩は感じてゐる。だが、目の前の少女の泣き声に、だんだんと怒りが沸き上がってきたのだ。

その可愛らしい服も、普段食べている食事も、全ては何の努力もなく……ただ、生まれた境遇の幸運故に得たもの。たつた一杯のスープのために、ゴミ以下の存在と自分を照める生活など、想像も出来る筈がない。

「……あんたら……です、か

「ああ？」

俯き、ぽつりと呟いたアリスに、フラヴィイは三丘眼を返した。

「何の苦労もなく、常に誰かに守られて……縄の衣にくるまれ、のううと生きてきた……私は、そんな人間です」

すう……と、アリスはフラヴィイの瞳を見つめる。

フラヴィイが異変に気付いたのは、その時だった。
常に彼女を助けてくれた、驚異的な危機察知能力……それが
けたたましく警報を鳴らし、うなじの産毛を逆立たせる。

「でも、“あんたら”って……言いましたよね？ つまり、私以
外のあの娘達も、私と同じように扱つた……そう言つことですよね
？ ……ふざけるな」

か弱い少女の目ではなかつた。
か弱い少女の声ではなかつた。
無力な小娘の顔ではなかつた。

「ああ、どうじよつ……一人を待つべきなのに……駄目、もつ
……自制が……」

アリスは両手を広げると、そつと、自分の顔を覆つた。

「……え？」

誰かが、そんな間抜けな声を出した。

アリスを吊していたロープは、既に切断され……少女の両手首を
束縛していたそれも、バラバラに散らばつてミミズのように床に落
ちる。

「確かに……あの娘達を狙つたのは、正解です。あの娘達は、既に私の一部とも言えます。あの娘達に何かあつたら、私は……。だから、お願ひです。死んでください」

アリスの足が、地を蹴る。そして未だ呆然としたままのラファランの前に立つと、彼の腹部に、両掌を押し当たた。

そして次の瞬間、ラファランの巨体は鞠のように吹き飛ばされ、倉庫の壁に叩き付けられる。悶絶するその口から、血の混じった吐瀉物が零れていた。

（他は……五人か）

取り出した杖を、必死に握るラファランだが、あれでは詠唱もままならない。横目で見つつそう判断し、アリスは一番近い傭兵に向かつた。

「なつ

驚愕するその男の腹部に、有無を言わさず正拳突き。近付けてくれた顔面に、跳躍し膝を叩き込んだ。

二人、剣を構えて接近してくる。

（ちょうどいい位置だな……実戦で使うのは初めてだけど……）

アリスは一度、動きを止めた。

そして二人の傭兵が打ち掛かってくる直前、身体を翻し、背を向け、後ろ回し蹴りを放つ。

届かなかつた。一人の手前、半メイルほどの場所で空振つた。

「『嵐脚』」

眩きと、身体の向きが戻ると、二人の傭兵の腹が蹴りの軌道に沿つて切り裂かれるのは、ほぼ同時だった。

“六式”をモデルとした、魔力を利用する近接戦闘。元ネタのOPEN PIECEのように、斬撃を飛ばすのはまだ無理だが、1メイルほどの風の刃を作り出し、攻撃の間合いを伸ばすのは可能だった。

「『月歩』」

長らく名称の無かつた、足裏での風の爆発による移動も、そう名付けた。まともに姿勢を保つていられるのはせいぜい三回まで、四回目にはあらぬ方向へ飛んで行ってしまうことが殆どだが。

文字通り、空を蹴るようにして接近、焦りで剣を抜けていない傭兵を殴り飛ばす。倒れ伏した拍子にすっぽ抜けたその剣を奪い、逆さに持ち上げ、一直線に喉に突き刺した。

「……」

そこで、アリスは周囲を確認する。

ラファランは未だ蹲つたまま、傭兵は一人がたつた今死亡。腹を切り裂かれた二人は重傷で、恐らく放つておけば死ぬだろう。最初に膝蹴りで沈めた傭兵は、四つん這いになつて顔を押さえている。あと一人、まだ攻撃を受けていない傭兵は……。

ズスツ……

すっかり怯えていた傭兵の手から、剣が転げ落ちる。彼の右耳から入り込んだ矢は、左耳から飛び出していた。

「……あなたらしいですね」

「また、派手にやつたなあ……」

『』に次の矢を這わせるバルシャと、両腰に剣を下げたナタンが、呆れた様子でアリスを眺めていた。

「確かに、ね」

ふつ、と、アリスは苦笑する。一人の言葉を否定できるほど、盲目になっていたわけでもなかつた。

しかし……アリスが苦笑し、死体に突き刺さつた剣から手を離した刹那、何も見えなくなつた。

「……？」

少しの後、倉庫内の灯火が全て搔き消されたのだと理解する。確か、マジックランプだった筈だ。その灯火を一斉に消せるのは、メイジしかいない。

間の悪いことに、双月も黒雲に隠され、完全な闇が訪れる。

その中で、何かの動きを感じた。

(……いる！ 何かが……！)

アリスは咄嗟に構えるが、相変わらず、漠然とした存在しか感じ取れない。

「またお会いしよう」

静かなその声は、さながら暗闇そのもののようだった。

闇を切り裂くように、窓が破られる音が走る。ようやく気が付いたアリスは、自分の鈍さに舌打ちしながら、周囲の灯火を再び蘇らせる。

死体となっていたり、死体のような状態の傭兵達。
我を忘れたように、呆然としている娼婦達。
周囲を警戒しているナタン、バルシヤ。

蹲つっていた筈のラファランの姿が、消えていた。

残されていたのは吐瀉物、窓の破片、そして……アリスの耳にま
とわりつく声。

(……また、か……)

遂に、訪れるべき時が来てしまったかと……アリスは冷や汗を流しながら、唾を飲み込もうとする。乾いた鼻血がへばり付く喉が、砂漠のように渴いていた。

第九話 <邂逅4> (前書き)

PV15万、ユニーク1万突破しました、ありがとうございます！

外見で惑わし、驚愕させ、相手の動搖が収まるまでに殺す。それが、アクセルの戦い方だった。

そして、そんな戦い方でこれから先もやって行ける筈がないという事は、誰よりもアクセル自身が理解していた。

魔力の系統属性に関するアドバンテージがあるとはいえ、九歳児の肉体では、まだ筋力が足りない。そこいらの平民相手なら何とかなつても、腕の立つメイジ相手ならば……。

（何者だ？）

あの時……ラファランを連れ、逃走した謎の男。あまりにも鮮やかな腕前に、戦慄を覚える。そして彼は言っていた、『また会おう』と。

（メイジ、それも強力な……。初めから倉庫に潜んでいたのか？
ラファランの仲間だとすれば、どうしてもつと早く現れなかつた
？……どちらにしろ、敵には違いない。参ったな、もう戦える所
は見せてしまつた。流石にメイジと杖の固定観念は強すぎるから、
ただのメイジ殺しとでも思つてくれればいいんだけど。……取り
あえず、暫くアリスの姿を封印すべきか？　いや、でもきっと、ナ
タンとバルシャは顔を覚えられているだろうから……）

「おい、ベル？」

ナタンの声に、意識を現実に引き戻した。アクセルは顔を覗き込んでくる彼に、そつと手を挙げた。

「少し、問題がね……」

「例の、謎のメイジってヤツか？ そんなに気にする」とか？

アクセルが悲観的すぎるのか、ナタンが楽観的すぎるのか……。ともかく、この問題を放つておくことは出来なかつた。

「ナタン、少し留守にするから。その間、よろしく頼むよ」

「どこに？」

「レオニー子爵に、『」と挨拶を。ついでにクルゴスの街で、情報を集めたい」

あのラフランが、本当にレオニー子爵の息子だとすれば、その方面から謎のメイジの情報を掴めるかも知れない。子爵本人との直接の面識は無いが、ローランが知り合いだったので、その伝手を使わせてもらひうことにした。

「いや、けど、結局フラヴィはどうすんだ？ あの娼婦達も、あさま放つておくれには……」

「放つておいても、問題はないだろ。頼りの傭兵達がいなくなつたんだ。しかも、僕らが攫つたと思いこんでいた娼婦達は、その傭兵達が売り払つていた。いいように利用されたショックは大きい。売り払われたとすれば、恐らくクルゴスの街の奴隸市だろ。その義理も無いけど、発見次第確保しておくよることは言つてある。……もし、また何か企むようであれば……今度こそ、消えて貰つけどね」

「……少々、驚きました」

「ん？」

馬車の向かいに座るローランの言葉に、アクセルはメモから顔を上げた。

「あれほど、慎重に事を運ぼうとする貴方が……」

「本当は、臆病な、って言いたいんじゃないかい？」ローラン

石ころでも踏んづけたのか、馬車ががたんと揺れる。メモの文字が大きく歪み、アクセルは舌打ちすると、紙と羽ペンを片付けた。

「アクセル様。一つ、お願いしたいことがあるのですが……」

「何？」

「“ラパン”のフラヴィの命、許して頂きたいのです」

「いいよ」

事も無げに聞き入れたアクセルに、ローランは目を見開く。

「……と言づか、どうでもいいと思ってる。マチルダやテファたちを狙ったのは許せないし、許すつもりも無いけど、もうあの女は無力だ。これ以上厄介な真似をされない限りは、僕は放つておこう

と思つてゐる

「ありがと「ひざ」いま

「と、言つたかねえ」

アクセルは狭い馬車の中で、ぐつと上半身を突き出した。所詮は子どもの体格なので、圧迫感などないのだが、その視線は好奇心を以つてローランを射る。

「由緒正しいホテルのオーナーで、名士として知られるローランが、何でたかが娼婦一人にご執心なのか、そつちがすこい気になつてきたよ」

「実は、私の隠し子でして」

「マジで！？」

「嘘です」

ホテル『初月の館』をあそこまで大きくしたのは、ローランだった。

まだ先々代のラヴィス子爵、つまりアクセルの祖父が隠居する前だつた頃、盗賊に襲われた彼の馬車を、通りがかりに剣を振るつて護つたという、なかなか豪胆な武勇伝が残つている。

当時のラヴィス子爵はこの武功を大いに讃え、彼に家伝の秘宝を与えたという。嘗てバルビエが存命中に求めた宝は、まさしくそれを指していた。

アクセルも、アニエスがもう少し成長すれば、ローランに正統派の剣術を指導して貰おうかと考えている。

「本当は、友人の種でして。その友人も、既に他界しています。あの娘の母親から、何かの折には助けてやつてくれと遺言を受けました」

「じゃあ、娼婦やめさせて、ローランのホテルで雇つたら?」

「フラヴィイは、私との繋がりを知りません。それに彼女はもう、いい大人なのです。今回のこれは、たまたま私とアクセル様が知り合っていた、それだけの理由です」

暫くローランを見つめていたアクセルは、やがて背を立てると、再び馬車の席に収まつた。そして窓枠に肘を立て、頬杖を付くと、うつすら見えてきたクルコスの街を眺める。

アクセルがクルコスの街にやつて来るのは、これで四回目だったが、アクセル・ベルトラン・ド・ラヴィイスとしてなら、今回が初めてだつた。

（考えてみれば、公式には初めての外出だなあ）

今まで、アクセルとしてラヴィイス子爵領から出たことはなかつたし、そうでなくとも東隣のレオニー子爵領以外には入つたことがない。近隣の貴族同士、パーティなどで招待し合つたりしそうなものだが、ラヴィイス子爵がしそうに領土を留守にするせいか、そういうものに誘われたことは無かつた。

もつとも、アクセル・ベルトランの名は近隣では有名だつた。十歳にも満たない年齢で、ラインクラスに成長した麒麟児……アクセルとしては、あまり好ましいとは言えない評判である。やはり、魔法学院に行く、などという年齢になるまでは、精々ドット止まりで在りたかった。

理由はやはり、リーズの喜ぶ顔が見たいから。

（俺いつか、女が原因で死んだりするんじゃないの？）

暗澹とした予感を、頭を振つて追い出す。

クルコスの街は、ゼルナの街とほぼ同じ規模だった。しかし、今でこそゼルナも賑やかになり始めたが、街の活気はクルコスの方が上。鉱物資源もなく、特に農業などが盛んでもないが、この街の特徴はギルド（同業者組合）だった。

商会は大きなものだけでも三つあるし、使用人斡旋、ギルドはラヴィス家を始め、周囲の貴族や富裕層に大勢の使用人を世話している。職人、ギルドもあるのだが、規格化という概念が存在しないここでは、完全に商会の下つ端という位置づけになつていて。また、大勢の人々や物が出入りする中継基地でもあり、常に何かしらの飯の種はある。

この街でドロップアウトした者の行き先が、隣のラヴィス子爵領・ゼルナの街であるとも言えた。

普段はさつさと馬車から降り、露店を冷やかしながらゆっくり進むのだが、今回はそのまま街の中心部へと向かう。屋敷は別にあるのだが、レオニー子爵は眞面目な仕事人間だそうで、だいたいこの街の執政府にいる。そこがほとんど自宅のようなもので、街の北の一画は丸ごと執政府の敷地となつていた。

（見事なもんだな……）

アクセルは溜息を漏らした。

ゼルナの執政府のような、無機質なものではない。門や堀にまで装飾が施され、敷地内に入れば庭園の花々に迎えられる。そこで、ローランと共に馬車から降りた。

色彩豊かな花々の間を、護られるようにして歩いていき、やがて
庁舎の入り口に到着する。今度は大勢のメイドや執事が迎えてくれ
た。

(うちの父親と話が合いそうだ)

ちらりとメイドの顔ぶれを見、余計な事を考えていると、執事の
一人が歩み寄つてくる。

「ようこそいらっしゃいました、アクセル・ベルトラン・ド・ラ
ヴィス様。セバスチャンと申します」

「うひやましー」

偽名やあだ名などではなく、本名がセバスチャンといつ執事が、
である。

「？」

「あ、いや、何でもない。一晩、よろしく頼むよ」

「お荷物、お運び致します」

とは言つても、一人分の衣類と小物が少々なので、そんなに多い
わけではない。

メイドに導かれて客室へと向かい、マントを脱ぐと、ローランと
一人で応接間に待つ。

三十分ほどして、レオニー子爵は姿を現した。

「初めまして、レオニー子爵。アクセル・ベルトラン・ド・ラ・ヴ
イスです」

「うひやましーそ、初めまして。フィルマン・ルノー・エクトル・レ

オーネーだ

思ったより小柄で、アクセルの田線の高さに首がある。

「久しぶりだな、ローラン」

「ご無沙汰致しております、子爵様」

ローランもまた、先々代ラヴィス子爵の伝手で、レオニー子爵と知り合っている。

「二人とも、楽にしてくれ。忙しなくて申し訳ないが、私はまたすぐに、仕事に戻らねばならん。夕食は」一緒に出来るだらうが……

そうだ、アクセル君

「はい」

「ラヴィス子爵領からの外出は初めてかな?」

「ええ、楽しみにしていました」

「それならローランを連れて、街の中を見て回るといい。夕食まではまだ時間があるのでな」

「ありがとうございます。お忙しいところお邪魔して、申し訳ありませんでした」

「いや、最近は私の息子達も顔を見せなくてな、寂しかったところだ。夕食は皆に腕を振るわせるから、楽しみにしていてくれ」

軽く挨拶を済ませると、子爵は再び執務室へと戻つていった。正式な訪問というわけでもないし、また、そこまで歓迎される理由もないのに、アクセルも少々申し訳ない気持ちになる。どうやら間の悪いことに、多忙な時期に来てしまつたらしい。

アクセル、ローラン、そして執事のセバスチャンの三人で、街へと繰り出した。兵士は人数に余裕が無く付けられない、と、申し訳

なさそうにされたが、アクセルにとつては都合が良い。ローランと二人きりで、いや、寧ろ一人きりで歩きたいくらいだ。

「何だか、大変な時にお邪魔しちゃつたみたいだねえ。事件でもあつたのかな？」

「……実は、傭兵ギルドが襲撃されました」

「傭兵ギルド？」

振り向き、背後のセバスチャンに聞き返す。

「はい。わかりやすく言えば、期間限定で兵士を派遣したり、兵隊と個人契約を結びたいと考える人に入材を斡旋したり……。更には、傭兵志望者の育成も行っています」

「どうやら、傭兵ギルドとは何なのか、といつ説明を求められたと受け取つたらしい。自分が九歳児であることを、今更ながら思い出しつつ、アクセルは黙つて聞いていた。

「ちょうど今朝方、その傭兵ギルドの本部が襲撃されるという事件がありまして、現在調査中なのです」

「その割には、街中は平然としていますね」

普段と変わらぬ様子の町並みを眺めながら、ローランもセバスチヤンを振り向く。

「この街では、ギルドのトラブルなど日常茶飯事ですから。それに、あそこはならず者の集まりで、人々にも嫌われていました」

「ふうーん。行ってみようかな」

「お止め下さい、危険です」

「そつか……」

暫く散歩を続けていたが、セバスチャンは相変わらずピッタリとくつついており、離れてくれない。出来れば奴隸市と連絡を取り、攫われた娼婦についての情報を得たかったのだが、それは帰りがけに行つことにした。

夕暮れ時になり、一行は執政庁へと戻る。

どうやら仕事も片づいたようだ、レオニー子爵と食卓を囲む。

「しかし……君の年齢で代官とは、初めて聞いた時は驚いたよ
「腰の落ち着かない父として。僕はただ、父の代わりに椅子を暖めているだけですよ」

「いやいや、謙遜する」とはない。私には三人息子がいるんだが、長男も次男も、君くらいの年齢の時は遊び呆けていた

三男のラファランについては、子爵は何も言わなかつたが……アクセルも、何も聞かない。三人の息子がいる、と言つたのは、子爵にとつてはミスなのだろう。

貴族の三男坊が、不良メイジとなつて傭兵じつこをしている……お世辞にも、好ましいと言えるものではない。レオニー子爵家について、そのことは恥部に等しい。

食事の後、団欒の時、アクセルは用意してきた模型を見せた。

「実は、これを見て頂きたくて」

そう言いながらテーブルの上に、細長い金属製の梯子を寝かせる。そして更に、四つの車輪を付けた、荷車のよつなものを置いた。

「これは？」

レオニー子爵が見つめる模型を掴み、梯子の上を転がしてみる。

「トロッ！」といつもの話を聞きました。鉱山で鉱石を運び出す際、このようなものを用いるそうです。『ご覧の通り、揺れも少ないので、より小さな力で走らせることが出来ます』

物資、情報など、少しでも早く伝達させる手段は無いか……そう考えた時、鉄道が思い浮かんだ。

勿論、蒸気機関など詳しい仕組みは知らないし、機関車を走らせるなど夢物語だが、線路を敷いて走らせる、というのは、案外有効なのではないかと考えた。貨物車のよつな物を作り、それを連結させれば、一度に大量の物資を運ぶことが出来、牽引する馬の数も少なくて済む。

そして、そのアイデアを是非とも誰かに教え、意見が聞きたかった。

「なるほど、面白い考えだな」

「盗賊に狙われる可能性も高いので、高価なものは運べませんが、木材や食料品などを大量に運ぶのには適していると思います」

「街道を舗装する場合との、コストの違いは……。ふむ……。いや、なかなか……いやいや、素晴らしい発想だと思うぞ」

興味深そうに模型を眺めるレオニー子爵に、アクセルも嬉しくなる。とにかく、発想の方向性は間違つていなかつたのだ。

一人で問題点や改善点などを話し合つていると、いつの間にか結構な時間が過ぎていた。そのことに気付いたのは、セバスチャンがやって来た時だった。

「旦那様、少々宜しいでしょつか」

「何だ、急ぎか？」

話の腰を折られたから、レオニー子爵は憮然とする。

「それが……」

「おいつ、親父！」

言いにくそうにするセバスチャンを押しのけ、大柄な男がズカズカと入ってきた。この場合は正に、“土足で入り込んだ”という表現が合う。

「控えろ、ラファラン。客人の前だ」

「客人？ そのガキのことか？」

「……ラヴィス子爵のご子息だ」

「はあ？ 何でそんなヤツがいるんだ？」

自分の息子ながら、レオニー子爵は啞然としたが、既に彼と二度も顔を合わせているアクセルは、特に驚きもしなかった。

いくらお飾りとは言え、アクセルは正式に任命された、子爵領の代官なのだ。それを知りながらの、しかも本人を目の前にしての暴言は、ラヴィス子爵家への侮辱とされてもおかしくはない。

「まあいいや、金をくれ。仲間と祝杯を挙げるんだ」

「……金が欲しいなら、働け。簡単なことだ。まだ十にも満たない年齢で、立派に代官を勤める貴族もいるというのに」

仕事のほとんどをリーズに任せきりにしているアクセルにとっては、少々居たたまれなくなる言葉である。

「さて、行こうか、アクセル君。話の続きは、私の書斎で」

暫く言い合っていたが、家族内のトラブルを見せられて居心地悪そうにしていた少年に気付いたレオニー子爵は、ラファランを黙殺した。未だ背中に罵詈雑言を投げつけてくるが、二人はそのまま部屋を出た。

レオニー子爵との話は、なかなか有意義なもので、アクセルも心地よい充実感に包まれ、そのままベッドに潜り込んだ。

「…………はあ

月明かりの下、寝間着の上にマントを羽織るアクセルは、杖で肩を軽く叩きながら、溜息をつく。足下には、心地よい充実感と安眠を、見事に奪い去ってくれた存在が倒れている。

微睡むアクセルの部屋に、お座なりなノックの後踏み込んできたラファランは、魔法の稽古を付けてやると、彼を無理矢理に外へ連れ出した。

ある意味、厄介な相手である。殺すわけにもいかないので、手の内を晒すことは出来ない。単純な魔法のみで戦わねばならないのだ。

ラファランは、火のラインクラスのメイジだった。

過去に戦った火のメイジもそつだつたが、アクセルが見る限り、どうも火属性は練度というか、鋭さに欠ける気がする。攻撃力が強力すぎるので、単純に威力を上げることを優先しがちになってしまふのか、それとも属性に性格が引つ張られ、火のメイジはだいたい派手なもの好きになつてしまふのか。

フレイム・ボールも、なるほど直径がアクセルの身長の半分ほどと、大した大きさだつたが、風の刃であつさり切り裂けた。唖然とする彼を、ウインドブレイクで吹き飛ばし、さつさと氣絶してもらう。

(……これで三度目だ。いい加減、飽きたぞ)

再び、溜息が出た。

貴族としても、平民としても生きられない……それが、不良メイジというもののなのだろう。友好的なそれならいいのだが、敵対するそれは、アクセルにとつて厄介者以外ではない。

九歳児をベッドから引きずり出し、己の鬱憤晴らしに利用しようと考えるような男など、出来れば放つておきたい。又は殺しておきたい。

だが、彼はそれでも、レオニー子爵の息子なのだ。ひょつとしたら、兄一人へのコンプレックスや、末っ子としての僻みなど、色々あつてこうなつてしまつたのかも知れないが、歴とした貴族なのだ。

(何というか……お互い、無視し合いたいというか……)

流石に九歳児に返り討ちにされたなどとは、恥ずかしくて言えないだろう。事を大きくすれば、結局ラファラン自身が恥をかくので、大々的な仕返しはして来ない筈だ。となれば、密かに復讐の機会を窺う、という行動に出る可能性もあるわけで……。

（うーん。つい、苛ついて伸しちゃったけど……これなら、わざと負けてた方がマシだったかもなあ）

考えれば考えるほど、溜息をつきたくなった。

「綺麗な月だな」

その声が聞こえたとき、アクセルの甘い悩みなど焼き消されてしまった。思わず硬直する彼の背後に、火炎の壁が出現する。

「あの時、『また会おう』と言ったのは……私が、それを望んだからだ。だから、なのか？ その願いを、あの月は聞き届けてくれたのか？ こうして君の方から、私の元に来てくれるなんて」

暗闇の倉庫での声と同じ、壮年男性のそれ。
火炎で紅に染まつた景色の中に、いつの間にか、その男は立つていた。

（……嘘だろ）

自分はまだ、九歳だ。

自分はまだ、ラインクラスだ。

自分はまだ、転生して九年しか経ていないのだ。

自分はまだ、満足できる強さを手に入れてないのだ。

それなのに、何故？

「ああ。ダンスの時間だ」

メンヌヴィルは両手を広げ、楽しげに告げた。

“白炎”のメンヌヴィル

トリステインの下級貴族だったが、『魔法研究所実験小隊』に配属され、約10年前のダンブルテールの虐殺を始め、トリステイン王国の様々な裏仕事をこなす。が、そのダンブルテールの虐殺時、上官のコルベールに杖を向け、返り討ちにされて失明する。小隊を抜けてからも、相変わらず殺し合いの渦中に身を起き続け、コルベールとの再戦を心待ちにしている。

（今は、そんな情報はどうでもいい……系統は火で、確かクラスは……トライアングルだったっけか？）

アクセルは舌打ちした。

（“こうこうの”は、まだ求めてないんだよ！ 早すぎる！ 僕の人生の“この位置”にいいボスキヤラじゃねえ！）

せめて、自分もトライアングルまで成長していれば……。

いや、メンヌヴィルの恐ろしさは、魔法の実力だけではない。あのメイスのような杖は、それだけで十分すぎるほどの凶器。あの巨躯によって生み出される暴力は、単純な蹴りだけでも、アクセルの身体など吹き飛ばせるほどの威力がある。

そして何よりも恐ろしいのは、光を失つたが故に身につけた、熱を探知するという異能。暗闇の倉庫で、誰よりも自由に動き回れたのも、その能力があつてこそ。

はつきりと、自信を持つて断言できる。

メンヌヴィルは、前世を含めても、自分の経験の中で最強の敵だと。

背後で煌々と燃え盛る赤は、周囲を地獄のような色に彩ついていた。そしてアクセルにとつて、この事態は地獄にも等しい。

「 わあ……俺を、楽しませてくれ」

メンヌヴィルはアクセルに杖を向ける。

（それつまり、燃やされてくれつてことだろ……）

バトルジャンキー、パイロマニア、焦げ臭フェチ……メンヌヴィルを表現するとしたら、それらの言葉が全て当てはまる。全て、アクセルにとつては鬼門に当たる個性だ。

（落ち着け。正に、“ いじつ状況 ” を考えて来たんだろ？）

指を杖にしたのは、何のためだ？

格闘術を磨いてきたのは、何のためだ？

全てはそう、“ いじつ状況 ” でも生き残るため。

（……けど、まだ、圧倒的にレベルが足りないんだよなあ）

杖を奪われても魔法が使えるというアドバンテージは、はつきり言って、魔法の実力が上の相手には通用しない。格下なら杖を奪おうとするかも知れないが、メンヌヴィルは、そんなことをせずともアクセルに十分勝てる。というか殺せる。

「あの……人違いでは？」

一縷の望みを託して、知らんふりをしてみた。いくら何でも、あの黒髪の幼女とこの若草髪の少年が同一人物だとは……。

「くく、怖い怖い。あの倉庫での化け方も、なかなかのものだつたぞ」

そう言えばメンヌヴィルは、外見ではなく、その人物の熱によって人間を識別する。アクセルの優位性を、悉く無に帰してくれる天敵だ。

しかしいくら何でも、執政庁の敷地内でこれほどの火事が起これば、誰かが気付く。

（そうだ、思わず戦う方向で考えちゃつたけど……ぶっちゃけ、付き合う必要は無いんだよな）

相手は大人のトライアングルメイジ、こちらは子どものラインメイジ。例え逃げ出したとしても、誰が咎めるというのか。幼気な子どもを、殺し合いに付き合わせようとするメンヌヴィルが悪い。

「……自己紹介くらい、してくれていいんじゃないかな？」

杖で軽く肩を叩きながら、アクセルは溜息をつく。こんな怪物を相手になどしていられないでの、さつさと逃げることにしたのだが、その素振りを見せる訳にはいかなかつた。

「ああ、そうだつたな。非礼を詫びよう」

メンヌヴィルは杖を持つたまま、右腕を腹の前に横たえ、そつと、ダンスを申し込む時のようにお辞儀をする。

流石に下級とはいへ、貴族だつただけのことはあり、その仕草に何ら不自然な部分は見受けられなかつた。

「俺はメンヌヴィル。『白炎』のメンヌヴィルだ」

勿論知つてゐる。

アクセルは努めて平然とした動きで、同じよつてお辞儀を返した。

「アクセル・ベルトラン・ド・ラヴィス。済まないね、二つ名は未だ考へていないんだ」

この場合、本名を名乗らねば不自然だらう。

永遠に逃げ切れる筈もない。が、とにかくこの、一人で立ち向かうという状況がまずい。初代ドラクエじやあるまいし。

何とかこの場を逃げ切り、メンヌヴィルを大勢でボコる。それがベストだ。

最悪の場合は、コルベールの居所をバラしてやればいい。彼には可哀想だが、どうせ十年後には、己の過去と向き合わなければならぬ時が来るのだ。十年後に勝てるのなら、今だつてきつと勝つてくれるだろう。

まあその場合はメンヌヴィルに、何故魔法実験小隊のことを知つ

ているのか、と追求されるだろうが。

自分が今、こいつって狙われている理由は……。

アクセルは首を捻る。自分は一体、何故、メンヌヴィルに襲われなければならぬのか。本当に、ただ単に、メンヌヴィルの興味を引いてしまったからなのか。

「ひょっとして、彼の敵討ちかい？」

アクセルは杖の先を、倒れ伏すラファランの背に向けた。
一瞬キヨトンとしたメンヌヴィルは、やがて苦笑いしながら首を振る。

「いやいや、違うぞ。そいつは俺の舍弟のようなものだが、それはただの成り行きだ。放つておいていいぞ。面倒だからな」「そうか、なら、戦う理由もないし……寝かせてもらひよ。生憎と、育ち盛りなんでね」

「つれない事を言わないでくれ。求め合つ一人が、月夜の晩に奇しくも邂逅を果たした……それなのに、はいサヨナラ、といつ法もないだろう？」

「申し訳ないけど、僕はこれっぽっちも、それこそトカゲの爪垢ほども求めてはいしないんでね。そうだな……王都にでも行けばいいんじやないか？ ダンスの相手には事欠かないだろ？」

確実に逃げ切る手立てが無い以上、メンヌヴィルの方から興味を無くしてくれるのが一番良い。

（興味を失え、とまでは言わないけど、もつちよつと先に延ばしてくれないかなあ。ヒソカだって、青い果実を見逃すくらいの自制

心はあるつての(六)

アクセルはちらりと火炎の壁を振り返り、それに沿つて歩き出した。メンヌヴィルも一定の距離を保つたまま、少年と平行に歩き出す。

（助けてーー！と大声で叫んでも、無駄だろ？な。兵隊も出払つてるし、今屋敷に残つてゐる人間なら皆殺しに出来る、そう思つてゐんだろう。そして事実、こいつなら出来るだろ？。トライアングルとはいえ、スクウェアにだつて勝てそうだもんなあ）

急いで、ではない。今晚のメニューを考えながら陳列棚の前を通りの主婦のよう、求める元ネタの同人誌を漁るオタクのよう。

「……傭兵、ギルド襲撃の一件は、聞いているか？」

突然、メンヌヴィルはそう聞いてきた。アクセルは相変わらず、カタツムリのように進みながら、肯定の返事を返す。

「実行犯は、俺と、そのラファランだ」

「理由は？ いや、そもそも、理由はあるのかい？」

「全て、お前の為だ」

アクセルの髪が、僅かに揺らいた。

「ゼルナの街を最後に、消息を絶つ傭兵の数が多くてね。しかも、その中にはメイジも含まれてゐるというのだ。ギルドはこう考えた、ゼルナには何かがある……と。しかも、そのラファランが、主に黒髪の少女についてあること無いこと騒いだのでね、ついに調査が入ることになった。それをさせるのは、俺にとつて好ましくなかつた。

た。今のギルドを潰し、新しいギルドを牛耳る。……と、リファランを唆すのは簡単だつたよ」

「つまり……余計な詮索が行われる前に、傭兵ギルドをぶつ潰した、そういうことかい？」

「ああ」

「僕が、迷惑するだろ？ から？」

「その通りだ」

メンヌヴィルのメイスが、双月の光を受けて煌めぐ。その煌めきはいつぞ、蠱惑的ですらあつた。

もう、猶予の時間は無くなつた……。そう判断し、アクセルは立ち止まる。そして首を回し、それに身体を追従させ、メンヌヴィルを真正面に見据えた。

メンヌヴィルも、元より準備は出来ている。相変わらず無駄に白い歯を見せたまま、楽しげに笑つていた。

「さあ、俺にここまで口説かせたんだ……。恥をかかせてくれるなよ？」

（やるだけやつて、隙を見てトンズラ。これしかないか）

アクセルは軽く息を吐くと、杖を振りつつ、走り出した。

「『エア・カッター』！」

風の刃を放つと、腰を落とし、その後方に隠れるよつとして走る。

「ウル・カーノ！」

メンヌヴィルはアクセルに杖を向け、発火のスペルを唱える。杖の先の孔に火の粉がまとわりついだかと思うと、火炎の奔流が放たれた。

刃は奔流を通り抜け、奔流もまた、二つに切り裂かれながらも勢いを弱めない。

互いに右側に避けた二人の脇を、それぞれの攻撃が掠めていった。

熱を探知する……その特性について、アクセルは考えてみた。

大抵の蛇は、舌を頻繁に出し入れすることで匂いの粒子を付着させ、それによつて獲物を感じ取る。そして一部の蛇にはピット器官というものがあり、動物の体温……というか赤外線を探知することが出来る。その仕組みを応用して発明されたのが、サーモグラフィ。いくら何でも、メンヌヴィルの身体にピット器官が生まれるわけはない。彼は確か、熱を肌で感じ取ると言つていた。風のメイジが聴力を強化されるように、火のメイジも熱に敏感になると言う。そう、考えてみれば、理屈は通つている。昔、よりよい香水を開発させるために、奴隸の目を潰して嗅覚を上げたと言う話もあつたが、それと同じなのだ。

視覚を奪われたメンヌヴィルは、肌で温度を感じることが出来るようになつた。

（そうだ。別にその点については、化け物つてわけじゃない。火メイジの元々の特性が、強化された……それだけのこと）

赤外線は、絶対零度を除く全ての物質から放出されている。それを感じ取れるということは、結局、盲目というハンデなど無いも同

然となる。

（いや待て、流石にそれだとお手上げだ。いくら何でも、そこまで精度が高い筈がない。だとしても……肌で感じ取っている、ということはつまり、死角がないってことだ。視覚が無い、故に死角も無し。……バカか俺は、落ち着け）

一度に行使できる精神力は、メンヌヴィルの方が文字通り一つ上。精神力の容量も、同じく。

ただ、普通は休まないと回復しない筈の精神力が、アクセルの場合は立ち止まつていれば回復する。そのアドバンテージは幸いかも知れない。

（つまり、メンヌヴィルの感覚を欺くには、サーモグラフィを欺く方法を考えればいいわけか。……MGSのステルス迷彩しか思い浮かばないな。風魔法を極めたら出来そうな気もするけど、とにかく今は無理）

「ふんっ！」

「イル・ワインデ『ストーム』」

メンヌヴィルほどの使い手なら、火炎放射くらい無詠唱で出来る。彼にとつては軽い感じで放たれた炎は、それでも無視できない威力が込められており、アクセルは竜巻を起こして散らした。熱が肌を焦がし、痛い。

（待て……メンヌヴィルの特性なんて、普通は思い至らないぞ。俺は原作を知っているからだろ。つまりメンヌヴィルは、未だ俺が、目が見えないことを気付いていない訳で）

アクセルは右手の杖を振るい、詠唱を開始する。反対側の左手は胸に当て、指を動かして密かに寝間着のボタンを外していく。

幸い、メンヌヴィルは楽しむための戦いを求めている。一気に勝負を決しようとはしない筈だ。

（と言うか、本気で殺しに来られてたらとっくにお陀仏だつた。
……これに勝つコルベール先生、マジパネエつす……って感じだ）

アクセルは全てのボタンを外し終えると、再びメンヌヴィルに向かって突進する。相変わらず凶悪な笑みで顔を歪ませるメンヌヴィルは、その場を動かず、じつと待ち構えた。

「ラナ・デル・ワインテ！」

アクセルの詠唱は、エア・ハンマー。

それを聞いたメンヌヴィルは、杖の先に火炎を纏わせる。

「ウル・カーノ……『フレイム・ボール』！」
「『エア・ハンマー』！」

しかし、風の槌が放たれたのは、メンヌヴィルの攻撃に対してもない。彼が火球を放った直後、アクセルは杖を地面に向かた。風の爆発により、アクセルの小柄な身体が舞い上がる。

（上空からか！）

メンヌヴィルは心を躍らせた。

確かに大柄なメンヌヴィルは、対人戦に於いて、自分より高い位

置から攻撃を受ける経験は少ない。それに目を付け、上空から攻撃を仕掛けようとしたのなら、大した子どもだ……そう、彼は考えた。だが、それはメンヌヴィルが視覚に頼っていた場合の話だ。肌で熱を感じ取る彼にとって、視界は全方位と言つていい。

「燃えろオ！」

メンヌヴィルは吼え、斜め上空へと杖を向け……はつとした。

熱源が、二つに分かれている。どちらを追うべきか、その判断が遅れ、放たれた火炎は結局、二つの熱源の間を擦り抜けた。メンヌヴィルの鼻腔に届くのは、肉が焦げる匂い、そして羊毛が焦げる匂い。

片方はアクセル、もう片方は、体温の移つた寝間着だった。

「何と……！」

子どもの発想ではない。立て続けに一度、メンヌヴィルは驚かされることになつたが、彼は寧ろ感心していた。

「ラナ・デル・ワインデ……」

メンヌヴィルの頭上を飛び越えたアクセルは、再び『エア・ハンマー』の詠唱に入る。

しかしそこも、メンヌヴィルの射程範囲。

「ふんつ！」

振り向きつつ杖を向け、アクセルへと火炎を放つ。今度は、外れ

はしなかつた。

「うあああつー！」

少年の、悲痛な叫び声が耳に届き、肉が焦げる匂いが鼻腔を満たす。

笑い声を上げるメンヌヴィルの足下で、アクセルは転がって火を揉み消した。

（よつやく……してくれたな、油断を）

アクセルは、エア・ハンマーを放つつもりは無かった。ただ、形だけ詠唱してみせただけだ。彼が本当に使ったかったのは、物体を操作する『モンスペル』『念力』。

「……！？」「

メンヌヴィルの顔に、脱ぎ捨てられた寝間着がまとわりつく。アクセルは寝ころんだまま、右手の杖と、左手の人差し指を向けた。

『鍊金』、そして『発火』。

鍊金術で寝間着の汗を油に変え、それに火を付ける。

「がああああー！？」

今度は、メンヌヴィルが絶叫した。地面に倒れ、転げ回り、寝間着を掻きむしるようにして引きちぎる。

顔面を襲う火炎は、やはり、多少のトラウマだったらしい。それでも杖を手放さないメンヌヴィルに、失望と驚嘆を覚えつつ、アク

セルは杖を構える。

「つはあつ、つはあつ、つはあつ！？」

ようやく寝間着の呪縛から解放され、メンヌヴィルは地面に両手をつき、荒い呼吸を繰り返していた。

今のアクセルには、止めを刺すような決定打が無い。このまま逃げたとしても追いつかると判断し、可能な限りの精神力の回復に努めた。

「…………！」

遠くから、人々の怒声が聞こえてくる。

（ようやく……応援が……）

アクセルはメンヌヴィルを警戒したまま、そっと溜息をつく。メンヌヴィルが作り出した火炎の障壁は、いつの間にか、花壇の花々にも燃え移っていた。火事になつた庭園に誰かが気付き、騒ぎ出してくれたのだろう。

「さて……どうする、メンヌヴィル君。口喧しい親たちに見つかってしまった。一人の逢瀬も、ここまでかな？」

口調だけは努めて余裕ぶり、アクセルはそう言つた。

メンヌヴィルなら、全てを燃やし尽くしそうな氣もするが、そこまで自棄になる男ではない、と信じたい。彼にも、自分の両目から光を奪つた男と再会するという、人生の目的が存在するのだ。逃げられるのなら、逃げる道を選ぶ筈だ。

「……くくく

やがて、メンヌヴィルは立ち上がった。
トラウマを掘り起こし、精神を揺さぶることは出来たらしいが、
ダメージはそれほど大きくはない。

（やつぱり……まだ、圧倒的にパワーが足りないな）

精々、焦げ跡を残しただけ……といった所か。アクセルは腕を組み、軽く杖を動かして首筋を叩いた。

メンヌヴィルは満面の笑みをアクセルに向け、立ち上がる。

「何を言つ、これからだ……。運命の相手を逃すべしなら、誰も出会いなど求めはしない」

（だから……お前の運命の相手は、コルベールだろ）

消防活動は始まっているだろうが、この場所まで救助が来るには、まだ相当時間がかかりそうだ。

「どうか、なら仕方がない。死ぬまで踊れ」

勿論、殺し合いに最後まで付き合つつもりはない。これ以上痛めつけることは出来ないだろうが、何とか防御に徹して、火勢が弱まつた時を見計らつて逃げる。

大まかな予定を立てると、アクセルは杖を振り上げた。

その直後、襲いかかってきたフレイム・ボールに、彼の身体は弾き飛ばされた。

(……え?)

裸の背中に感じる、熱さと痛み。予想外の方向からの攻撃に脳が動かず、アクセルは傍らの石灯籠に額をぶつけた、地面に落とした。

(……そりか……実戦だもんな。こいつこいつとも……あるか……)

朦朧とした意識の中、視界の端に、こちゅうに杖を向けるラファランが見える。

(あー、くそつ。こんな事なら、そりやと殺しておるべきだったなあ……)

何かに引きずられるようにして、意識が遠のいていくのを感じた。

「なあ、メンヌヴィル……助けてくれないか?」

そんな、馬鹿馬鹿しい言葉が飛び出した。

意識を失うのは、死と似ていた。いや、このまま意識を失えば、それこそ死んでしまうかも知れない。

ある種、快感なのだ。それはとても魅力的で、楽園へと導かれる光の中にいるようで。

自分から手放したのか、それともついに“その時”が来たのか……アクセルは眠るように停止した。

「…………ははっ…………はははははははは」

紅蓮の中での、男は壁に壁に、身を捩り、腹を抱え、天に吐くようにな。

「ざまあ見ろ！ ザまあ見やがれってんだ！」

あらゆるものが地獄の色に染まるその場所で、ラファランもまた、悪鬼のように輝いていた。

「焼かれちまえっ！ 兄貴に！ 炎に！ 黒焦げの消し炭になつちまえっ！」

ラファランにとつて、この場の火事などどうでもいい。
気に入らなかつた。お飾りの代官のくせに、ただ座つているだけの代用品のくせに、得意氣な顔でいることが。

気に入らなかつた。九歳でラインクラスに達した少年が。十二歳でスクウェアクラスに達したガリアのシャルル王子よりも、身近な分、より憎悪が湧いた。

父親であるレオニー子爵と、一人きりで話していた事も気に入らなかつた。

一体、書斎で何を話していたのか。貴族社会に誇れる職を持たない自分のことか。一人の兄より出来の悪い出涸らしのことか。必死になつて魔法の修行を積んでも、結局トライアングルクラスになれ

なかつた、厄介者の三男坊のことか。

「お前なんぞつ、燃えてしまえぱいー！」

一頻り笑い声を響かせると、ラファランは唇を結び、メンヌヴィルの元へ駆け寄つた。

「おーい、兄貴！ わざわざ逃げようぜー。いくら何でも、やり過ぎちまつたしなつ！」

周囲の火炎の熱気を振り払つよつて、ラファランは掌で顔の周りを仰ぐ。

汗一つ見せないメンヌヴィルは、そつと、口を開いた。

「今のことフレイム・ボールは……お前か？」

「ああっ、そりや別に、兄貴が負けるなんてこれっぽっちも思つちやいないが……勘弁してくれよ。俺だつてこいつにや、煮え湯を飲まれたんだ」

「……」

「それよりも兄貴つ、これからゼルナの娼館をかつ攫おうぜ！ 前みたいに、余計な小細工なんかいらなかつたんだー。どんなヤツがいようが関係ねえつ、兄貴と俺がいれば無敵だ！」

「……そう言えば、一つ聞きたいんだが」

「ん、何だ？」

「お前はどうして……俺を、兄貴と呼んでるんだ？」

言葉にではなく、その声によつて、ラファランは口を開けなくなつた。

戦闘の時は勿論、その他のどんな時も……傭兵ギルドを襲つた時でさえ、メンヌヴィルはそんな声を出さなかつた。

ただひたすら、その声は、氷雪のように冷たかった。

その冷たい声の主は、杖に炎を纏わせる。

「ラファランよ。お前は俺にとって……ただの、『蛇の足』だ

クルコスの街の執政庁を襲つた火事は、夜が明ける頃、ようやく鎮火した。

庭園は四分の一が完全に焼失し、四分の一が半焼。幸い庁舎まで及ぶことは無かつたが、焼け跡から成人男性一名の遺体が発見される。体格、そして身につけていた装飾品から、レオニー子爵の三男、ラファランであることが判明した。

そしてもう一人、焼け跡から発見されたのは、来訪していた隣の子爵領の代官・アクセル。背中には魔法による火傷の跡、肩にはラファランのナイフが突き刺さっていた。

更に、前夜にラファランが、アクセルの客室の場所を聞き出したというメイドの証言。

止めに、傭兵、ギルドの襲撃で辛うじて生き残った傭兵が、死の間際、犯人はラファランだと遺言した。

アクセルは風のラインメイジ、ラファランは火のラインメイジ。

全てを総合して出された結論は、火の元はラファランの魔法で、

アクセルはラファランに殺されかけた。

水メイジの治療によつて目覚めたアクセルは、狼狽するレオニー子爵にカバーストーリーを提案する。

アクセルはラファランに誘われ、夜の庭園を案内されていた。

しかしそこに、狼藉者の火のメイジが襲いかかる。

二人は共に杖を振るつて立ち向かうも、相手はトライアングルクラスのメイジであり、ラファランは戦死して何とかアクセルだけが生き残つた。

庭園は襲撃者の魔法によつて火事になり、騒ぎが大きくなつたことで犯人は逃げ出した。

その後、襲撃者の行方は杳として知れなかつた。

犯人の逃亡先として可能性の高い候補に、ラヴィイス子爵領も挙げられるのだが、そこはレオニー子爵に手心を加えて貰つ。

火事の後始末や、大怪我を負つたアクセルへの負い目もあり、レオニー子爵は結局、その提案を有り難く受け入れることにした。

王都トリステインから一人の兄も急遽帰郷し、三日後、ラファランの葬儀が執り行われた。

そしてアクセル・ベルトラン・ド・ラヴィイスは、葬儀から四日後、よつやくラヴィイス子爵領への帰路につくことが出来た。

「……災難でしたな」

馬車の向かいに座るローランは、気遣うように言つ。彼はアクセルの家臣ではないので、護衛の義務も無かつたのだが、彼自身はそ

うは思つていないらしい。

あの夜の真実を、アクセルはローランにのみ話していた。

「まあ、厄介ではあつたけど。命があつて万々歳……かな

ラファランを殺したのは、恐らくメンヌヴィルだろう。勝負を邪魔された腹いせか、流石に足手纏いだと切り捨てられたのか。どちらにしろ、アクセルは彼を惜しんだりはしなかつたが、憐れみはした。ラファランが死者となつてしまつた今なら、尚更だ。

葬儀に集まつた家族や親族の間には、その死を悲しむと言つよりは寧ろ、厄介者が消えたことに安堵する雰囲気が漂つていた。

ふと、アクセルは前世を思い返し……自分の葬儀も、あんな感じだつたのではないかとを考えた。

「……ねえ、ローラン」

「はい？」

ラヴィス子爵領に入つた頃、それまで肘をついて窓の外を眺めていたアクセルは、口だけ動かしてローランに呴いた。

「僕の臆病さは、知つてるよね？」

「……？」

「だから。僕があの夜、何があつたかをローランに打ち明けたのは、それ程にローランを信用しているからだつて、それを認識して欲しいんだ」

ローランとて、人を見る目はある。いや、無ければ、貴族から破落戸まで様々な人間の相手をしつつ、街一番のホテルを切り盛りすることなど出来なかつた。

アクセルは臆病なまでに用心深い。子ども故か、時々馬鹿な程に抜けている事もあるが。それでも、重大な話を打ち明ける人間は選んでいた。

「……お言葉有り難く。身に余る光栄にて……」

「いや、『じめん。言いたいのは、そういう事じやないんだ。ローランにも、僕を信じて貰いたいんだ』」

「……元より、私めも共犯者で御座います」

「僕を信じて、これから言う事をよく聞いてくれ。まず一つ、何があろうとド派手クリとも動かないで。一つ、僕が許可するまで黙っていて。声を上げないで」

「……？」

アクセルは相変わらず、窓の外から田を離さない。不思議に思いながら、ローランは言われたとおり、己を石像か何かのよひにした。

「……入つて来ないのか？」

十秒ほどして、ふと少年はそう呟き……ローランの心臓は跳ね上がった。

アクセルが眺めていた景色の中に、黒い革製のブーツ……いや、何者かの足が割り込む。それはするりと窓枠から侵入し、驚くほど静かに、馬車の中へと入り込んだ。

恐らく、壁越しとはいえ、アクセルの背中に触れられるほど近い御者も、牽引する馬も気付いてはいないだろう。いや、頭の上にいながら、ローランにすら気配を感じさせなかつた。

姿を見せた大男は、窮屈そうにしながら……それでも相変わらず

衣擦れの音すら立てず、アクセルの隣に腰を下ろす。

逆立つ真っ白な髪、顔の半分を覆い隠すマスク……そして、田を含ませた者に、深淵を思い起しにせしむるよつた左田。

「そつ言えば……明るい時に会つのは初めてだつたね」

アクセルは相変わらず、ほんやりと景色を眺めている。

「そつなる、か。俺には昼だつうが夜だつうが、あまり違いはないが」

ローランはふと、この男が例のメンヌヴィルであることに気付いた。

アクセルが平然としていられるのは、ある種の諦念であった。相手にはある程度力を見せてしまつたし、そしてその相手とはよつによつてメンヌヴィルである。何も出来ない。

何故あの夜、自分が生き残れたのか……といつ疑問はあるが。

「今、唐突に思い出したんだけど……よくも肩を刺してくれたね」

「その点は、素直に謝罪しよう。あれくらいしか手は思い浮かばなかつた。そしてそれを、お前はきちんと利用してくれた」

メンヌヴィルは杖を抜いていない。

いや勿論、ただ単に襲いかかるつもりだつたなら、わざわざ乗り込んで来たりはしないだろう。

少なくともアクセルには、彼が戦いに来たとは思えなかつた。

「ところで、御用は？」

アクセルは漸く窓から目を離し、メンヌヴィルに向き直る。

「？ 何故、そんなことを聞く？」

対する男の表情は、怪訝そうなものだった。アクセルの問いを、まるで愚問であるとでも切って捨てるような顔。寧ろ、自分が何故そんな質問をされなければならないのか、本当に理解などしていなさそうだった。

質問そのものを否定するような彼の態度に、アクセルは更に疑問を深める。

「……じゃあ、他の質問。何で、僕を助けた？」

「お前が言つたんだろう、『助けてくれ』と」

確かに、アクセルも忘れたわけではない。

「……言つてない。僕はただ、『助けてくれないか？』って尋ねただけだ」

「いいぞ」

「……何がだよ」

「助けてやる、お前を」

一瞬、頭を抱えたくなつたが……頭を抱えて、理解出来る筈が無いといつ結論が出た。

メンヌヴィルは確かに強烈なキャラクターだったが、それは彼の特性が理由だ。彼がどういう経緯で小隊に入ったのか、どういう人生を送ってきたのか……そして、どんな理由があつて、肉が焦げる匂いを求めるようになったのか、明らかにはされなかつた。勿論、

生まれついての異常者という可能性もあるが。

別に、狂人という訳でもないだろ。近づく者全員燃やし尽くす
という人間ではなく、傭兵として仕事をして報酬を得るといつ、極
めて真人間と言える面もある。

「ふーん……助けてくれるんだ。僕を?」

「ああ」

「僕の、大切なものも含めて?」

「ああ。だから……」

「だから?」

「俺も、助けてくれ。と言うか、匿ってくれ。お前のせいで、子
爵の三男坊を殺したお尋ね者だ」

「それは間違いない、お前自身の責任だろ?」

「俺はお前を助ける、お前も俺を助ける。俺もこいつおつか
アクセル、助けてくれないか?」

「いいよ

アクセルはごくあっさりと、そう返した。

既にメンヌヴィルと知り合つた以上、彼との奇縁から逃れる術は
無い。ティファニアも、勿論未だ忘却の魔法を習得していない。そ
してアクセルは、メンヌヴィルよりも弱い。

それに、メンヌヴィルの人生の目的を叶えてやる、といつ手札は、
アクセルの手の中にある。

メンヌヴィルは太い腕を伸ばすと、アクセルの肩に回し、抱き寄
せた。

「感謝するぞ、友よ

彼の口から飛び出したとは思えない二つの単語だが、流石にそつ感じるのは酷すぎると、アクセルは密かに反省する。

分厚い胸板に頬を押し潰されながら、アクセルは溜息をついた。

「僕も、助けてくれたことにはありがとう、と言いたいけど……殺し合いで育まれる友情なんて、聞いた事もないし、信じたくもないね」

「だからこそ、だ。“まさかの友は眞の友”といつヤツだな」

陽気に、そして豪快に笑い声を上げるメンヌヴィル。

そこでようやく侵入者に気付いた御者が、仰天し、慌てて馬車を止めた。

今回、メンヌヴィルと出会う羽目になつた原因を辿つていけば、命の軽視にある……アクセルはそう結論付けた。

別に、今までの殺人の罪悪感で心が押し潰されそだとか、そんな事は無い。敵として現れた傭兵を、たかが戦闘員……言ひなれば、経験値をくれる果実のように考えてしまつた事が問題なのだ。

彼等とて、木に実るわけではない。歴とした人間であり、雇用主との繋がりもある。

例え傭兵として個人契約を結んでいたとしても、そうなる前はギルドに所属しており、当然その繋がりもある。

行方不明にするだけでは駄目なのだ。傭兵など大多数は破落戸と
変わりないが、家族や友人なども当然おり、消息は求められ……そ
して特に大きな戦争なども無いのに、そんな実例が多くなれば、流
石に怪しまれる。メイジまで含まれているのなら、尚更だ。

盗賊や山賊ならともかく、傭兵は立派な職業なのである。傷害や
殺害が発覚すれば無罪放免とはいかないし、ギルドを襲撃すれば犯
罪者となる。

“ラパン”のフラヴィを急襲した一件についても、怒りにまかせ
て、という部分があり、アクセル自身も失態を認めざるを得ない。

（流石に、歴とした組織を相手取るのはまずいな……。怖がられ
るのはいいけど、興味を持たれるのはイヤだ。もう、いつそファミ
リーを宣伝しまくるか？）

そう考えれば、メンヌヴィルが味方についたのは幸いだ。敵にな
る可能性のある存在が、マイナス1となり、味方がプラス1となっ
た。

しかし、メンヌヴィルは所謂“悪者”のキャラである。原作でも、
異常者として描かれていた。

（……アニエスみたいに、俺の予想を裏切ってくれることを祈る
(う)

そう……アニエス。メンヌヴィルもまた、彼女にとつては仇の一
人である。

内緒にしておく、といつ結論は、一瞬で出た。

そしてアクセルが留守にしている間、ゼルナの街の事務所でも、

変化があった。

「……フラヴィイを、ねえ」

「……ああ」

娼館の全ての権限は、ナタンが握っている。その彼が、実質的な経営を誰に任せようと、何も不都合など無い。アクセル不在の間に、ナタンは、フラヴィイを部下として雇い入れ、娼館の管理をさせることにしていた。

ナタンは明らかに、アクセルの攻撃を警戒しており、事務室には妙な緊張感が漂っている。アクセルを怒らせたフラヴィイを、勝手に味方に引き入れたことで、きっと何らかの制裁があると考へているのだろう。

「……惚れたのかい？」

「いや、違う」

もしかしたら……と思い、尋ねてみたが、ナタンは静かに首を振つた。

「理由は、まあ、色々だ。流石に、男相手に出来ないような相談だつてあるし……それに、管理側が男だけってのもバランスが悪い。あとは、罰つてことかな」

「罰？」

「……俺は……その、ここが好きなんだ。いい場所だと思つてるし、もつと良い場所にしていきたい。フラヴィイだつて、もう行き場所が無えんだ。ここを居場所にして、ここを好きになつて貰いたい。ほ、ほら、あれだ。ただ殺すよりも、生かして協力させようと思つたんだ。自分たちが誘拐しようとしたのが、どんな子ども達な

のか。自分たちが傭兵まで巻き込んで敵対してたのが、どんな組織なのか……それとかを、全部知つて、やつぱりここを潰そうとするんなら、そん時は改めて……」

後半は、若干情けない口調になつてしまつたが……アクセルはじつと黙り込んだまま、ナタンを見つめていた。

(全く……主人公みたいな事を言いやがつて)

アクセルは思わず、ふつと微笑む。

「……イシュタルの館の管理は、全部ナタンに任せてるんだ。そのナタンが選んだ人間なら、好きにすればいいよ」

「あ、怒つてない……のか？」

「別に。ところで僕も、一人、仲間を連れて来たんだ」

「え？」

合図を受け、部屋に入ってきたのは、顔に火傷跡のある大男だった。右目を含めた顔半分は、マスクで覆われており、口元の笑みは凶氣を感じさせる。

「紹介しよう、”白王”のスルトだ。火のトライアングルメイジ」

「よろしく頼む」

「お……おお」

異様な風貌の男に、若干気圧されつつ、ナタンは取りあえず返事をしておいた。

「特技は殺し合い。好物は、肉が焦げる匂い……」

「あいつ、ベル！？ 何かヤバイ趣味持つてそなんだけど、こ

「いつ！」

「何を言つてゐのやら。彼はただの、類い希なるステーキ職人の素質を秘めたオジサンです」

「嘘だつ、絶対嘘だ！　いいのかよつ、こんな危険物を……」

「酷いなあ、僕の友達に向かつて」

既に一通りの葛藤を終えたアクセルは、余裕を持つてナタンに話しかけることが出来る。

「天災……みたいなものぞ」

「冗談めかしてそう言つが、アクセル自身、その言葉が一番しつくり来ると感じた。

流石に傭兵の世界で、メンヌヴィルという名は有名なので、単純にスルトに変えさせた。そして彼が、再びメンヌヴィルと名乗る時は……恐らく、アクセルから離反する時だろう。

彼はアクセルにとって、正しく天災のようなものだった。人の手では立ち向かえず、それ自身をコントロールすることなど出来ない。出会つてしまつた以上、何とか受動的に対応していくしかないのだ。

（……そうだ、裏切られたらどうしようもない。束になつたつて敵わない。だから、無駄なんだ、考えるだけ。気のしても仕方がない）

未だ何か言いたげなナタンだが、彼もまた、アクセルを一応信じてはいる。よつて、最終的には受け入れるしかなかつた。

ナタンと別れたアクセルは、スルトを従えて、バルシャを探そうとした。

「おや、坊や。何でこんな所にいるんだい？」

少年を見つけ、そう尋ねてきたのは、赤目の女……フラヴィだつた。声を掛けたから、後ろにいる大男に気付いたらしく、若干慌てた素振りを見せる。

しかしふと、気付いた表情になり、フラヴィはスルトの前に立つた。

「…………」

フラヴィは突如、身体を沈めると、両膝と両手を……そして額を地面に擦りつけ、スルトの足下に平伏す。アクセルは初めて、彼の困惑した顔を見た。

「頼める筋合いじゃないってのは……分かつてる」

スルトはフラヴィの顔を知っているが、ラファランが個人で勧誘した彼の顔を、フラヴィは知らない。よつて、フラヴィにとつては初対面の相手である。

土下座したまま、彼女は続けた。

「殺されたつて、おかしくは無かつた。命を助けて貰つただけで、有り難いとは思つてる。けど……何なら、私の命と引き替えだつていい。頼む。攫われた仲間達を、どうか……」

恐らくナタンはフラヴィに、自分の背後にある存在を教えたのだろう。教えたのはその存在だけで、具体的な情報は漏らしていないらしいが。

フラヴィはどうやら、スルトこそがその存在であると見たようだ。

困惑した表情を見せるスルトは、助けを求めるようにアクセルを見た。

「攫われたのは、四人。一人は一週間ほどでここに戻り、あとの二人は交渉中」

クルコスの街での、思わず滞在延長の間に手を回した、アクセルの成果。

少年の声に、フラヴィは驚いたように顔を上げ、跪いたまま背後を振り向く。

「詳しく述べ、ナタンにでも聞いて。……それじゃ」

やはり未だ、どこか、気持ちの整理が付いていない部分がある。単純に、マチルダやティファニア達を誘拐しようとした、感情的な部分。そして、メンヌヴィルと殺し合いをしてしまう羽目になつた原因の一端を、彼女が担つてゐるといつ、損得での部分。

呆然としたフラヴィを残し、アクセルはスルトを連れて再び歩き出した。

「……“熱”に、当たられたな

「ん?」

ぽんやりと、独り言のような彼の呟きに、アクセルは首を傾げる。

「あの女から、静かで、力強い“熱”を感じた。……よほど、仲間を大事に思つてゐるのだろう。……やはり、俺とは違う」

その言葉は、どこか自嘲を含んだようなものであった。少なくと

もアクセルは、そう感じ取つた。

彼の言つその熱が、ナタンのものと同種であれば、フラヴィイもまた、人の上に立つ素質を持つのだろう。

「……スルト」

「何だ？」

「あの女も……僕の、大切なものだと思つていってくれ」

「……了解した」

第十一話「虎穴」（前書き）

今回、本編の後ろにおまけがくつづいています。
人を選ぶ内容かも知れませんので、挿絵OFF（イラストではなく
画像ですが）とプラウザバックのご用意をお願いします。

メンヌヴィル改め、スルト。彼の加入は、ファミリーの戦力に大きく貢献したと見える。そうなつたらそくなつたで仕方がない、と、裏切る可能性は無視しているが、今のところそんな素振りは見せなかつた。

（……考えてみれば、主人公側という、正義にとつての悪なわけで。俺ら……と言うか俺だつて、正義か悪かと言われれば、間違いなく暗黒面だし。意外と、相性いいんじゃないのか？）

そんな風にポジティブな事を考えられる程には、アクセルの意識にも余裕が出て來た。

彼は、呆れるほどに強かつた。魔法すら使わず、杖として契約しているメイスのみで、戦闘を終わらせてしまつた事もあつた。生半可な連中が攻撃を仕掛けて來ても、鎧袖一触と言つた所だつ。

“ラパン”のフラヴィ。彼女もまた、大いに役に立つてくれていた。

彼女はスルトと違い、戦闘能力が無く、その分アクセルとしては対処できる存在だが、そんな未来は先ず無いだろうと思つてゐる。遅参の彼女が頂点に立つことに、他の娼婦達の反発が起きるのではないかと危惧していたが、寧ろ歓迎されているらしい。そもそもフラヴィは、娼館を信用していなかつたから闘争を選んだわけで、娼館側に回つた今は、信用がどうのこうのではなく、自分に何が出

来るか、という問題に変わった。そして、同じ立場の人間が権力を得るのはやはり有益だと考えられたらしく、そこに元々信頼されたいたフラヴィイが収まることに、異を唱える娼婦はいなかつた。

娼館の仕事をフラヴィイに譲つたナタンには、ボスとして、より足場を固めて貰うことにした。東地区全体の顔役としての信用を勝ち取るため、厄介ごとに積極的に介入。代官のアクセルとの繋がりを活かし、その権力を使えば、トラブルもスムーズに解決出来る。

バルシャは、はっきり言って非の打ち所がないくらいに働いてくれている。自警団の運営からナタンの秘書的な仕事、果ては荒事まで、何でもこなせる万能タイプで、能力的にも人柄的にも、アクセルが心から信頼する数少ない人間だつた。

アクセルはここに来て、組織のバランスが取れたのではないか？
…そう考えた。

三本足のテーブルは、傾きはしても搖らぎはしない。バルシャ、スルト、フラヴィイの三人が足となり、上のナタンを支えてくれば、少なくとも搖らぐことなど無いのだ。例え大きく傾いていようが、元々ヤクザなど、社会からドロップアウトした人間。傾いているくらいがちょうど良いのかも知れない。

「……何してんだ？ あいつ……」

最初に気付いたのは、ナタンだつた。

イシュタルの館、事務所の窓の外でまた、アクセルが妙な事をやり出している。

バルシャ、フラヴィイも、窓で切り取られた中庭を見た。

「……くくく

窓の下に座り込んでいたスルトが、小さく笑つた。眞田の彼だが、顔はアクセルの方を向いている。

「お前らには感じられんだろうが……あいつはなかなか、とんでもない事をしているぞ」

「どんな事だい？」

「わからん」

「わからんつてお前……」

「くくく……」

漠然とした答えに、若干呆れ気味のフライヴィとナタンだったが、取りあえず庭に出て、観察を続けた。

アクセルは少し腰を落とし、大地を踏みしめ……指先を揃えた両手を前に伸ばし、何かを支えるような姿勢を保つていて。目は半開きで、自分の鼻先か、地面を見つめるような視線。別に彼は、眠つてはいるわけではなかった。

（北斗羅漢撃！……つてな。そう言えば、俺、前はジャギが嫌いだつたんだよなあ。けど“極悪ノ華”でコロッときちやつて、そんで“北斗無双”のジャギ幻闘編で大好きになつて……）

集中していたわけではなかつた。頭に次々に浮かんでくる、取り留めもない事を流れるままに任せて……そう、全てを……在るがままに受け入れ、そのままに任せて。

「……何をしてるんだい？」

日課の修行を終えたのか、アニエスがそう言いながらアクセルに

近づく。眠つてゐるのかと疑つてしまつ程、少年は無反応だつた。

「おい、小娘。邪魔をするな。こつちへ來い」

スルトが座つたまま、アニエスを手招きする。

一度、びくりと身体を震わせた彼女は、そつとアクセルの後ろに回り……大きく遠回りしつつ、ナタンの隣に並んだ。メンヌヴィルの顔は覚えていなくても、火のメイジに対する恐怖心は大きい。嫌われたもんだ、と、自嘲氣味に笑うスルトも、勿論アニエスの顔を覚えてはいなかつた。

「……おいおい」

数分して、ナタンが呆然とする旨を代表するかのよつこ、呟く。チチチ、と甲高い声を響かせながら、アクセルの肩に小鳥が止まつた。そのまま、毛繕いを始める。また一羽、今度は左腕に小鳥が降り立ち、とんとんと掌に向けて跳ねていつた。

やがて、アクセルがはつきり田を見開くと、小鳥たちは慌てたようになびいていった。

「……決めたよ」

集まつた皆に、少年は微笑む。

「決めたつて、何をだ？」

「僕の二つ目。どうしようか、ずっと悩んでたんだけど……決めた。“大樹”的アクセル。そう名乗るよ。……つて、何なの、その顔は」

通常一つ名は、属性と関連づけたものを付ける。

アクセルの属性は、未だはつきりしていない。普通は既に、はつきりと適正が別れている筈なのだが、どうもアクセル自身、断言は出来なかつた。敢えて言つなら、一番苦手なのが火、風と水が得意で、一段下がつて土。一応表向きには、風のラインクラスとしてある。

よつて、複数の解釈が出来るような、全属性に関連づけられそうなものは無いか……そう悩んだ末での結論だつた。

いいアイデアだと思つたが、どうもナタソの……そして皆の反応は、芳しくない。

「いや……地味じやねえか？」

「いい事じやん」

名乗るとしたら、表向きの貴族として……アクセル・ベルトラン・ド・ラヴィスとして名乗るのだから、地味であるのは寧ろ長所だ。将来当たり障りのない平凡な子爵となつた時、木偶の坊とか、ウドの大木とか揶揄されそうだが、植物のような人生、それこそアクセルの望むところだつた。

「じゃあ、何がいいの？」

一応、皆にも意見を聞いてみた。

- 「“誘惑”のアクセルは？」
- 「“嗜虐”のアクセル」
- 「“黒幕”のアクセル……などどうじょひ？」
- 「“両性”のアクセルとか？」

「“天使”のアクセルだな」

上から順に、ナタン、アニエス、バルシャ、フラヴィ、スルトである。

「おつと、まさかの四面楚歌とは。……皆。スルトが一番まともで好意的って時点で、おかしいと思わないのか？」

自分が、決して善人と呼ばれるような人間ではないと、アクセル自身よく分かっているつもりだが……それでもショックを受けないわけでは無い。

「バルシャ……君だけは、最後の良心の砦だと……僕は、そう思つて……」

「も、申し訳ありません。決して悪意があつたわけでは無いんですけど……」

「……あのね、寧ろ、悪意があつて欲しかった。一番マシなのはスルトなんだけど……僕には、詳しく理由を聞く勇気が無い」

「一般に天使は、両性具有と言られて……」

「だから、聞く勇気は無いの！ 脅威なままでいたせてよ！」

かなり悩んだ二つ名だが、そもそもそんなものを口にするのは、戦闘の時なのだ。言う必要がある状況を迎えてしまったら、寧ろアクセルにとつては不味いのである。結局、アクセルの努力は二つ名を使わない道を選択していくことでもあるので、こんなに悩む必要無かつたんじゃないか……と、それなりに落ち込んでしまった。

「……ところで、あれは何だったんだ？」

部屋に戻ったナタンは、早速アクセルに尋ねてみる。

「ああ、ちょっと実験をね。極限まで心身をリラックスさせて、精神力を巡らせねばどうなるか、試してみたんだ」

自分の能力をどのように伸ばしていくのか、そのアイディアも前世の漫画を参考にしていた。

使えそうなのはONE PIECEの六式、そしてHUNTER × HUNTERの念能力。六式も、特に“剃”は無理なので結局五式までだろうし、念能力ほど汎用性も無いだろうと判断して、新たに構築していく必要があった。

まずは“識”。これは、自分の精神力、……もっと言えば精霊様の存在をはつきり認識し、号令を出して制御することで、既にクリアしている。まだまだ練度は上げられそうだが。

次に“絶”。周囲を漂っている精霊を、自分の体内へと隠して目視できなくなる。何となくやってみたのだが、何の役に立つのか未だ不明。ひょっとしたら意味がないかも知れないが、精霊を操る訓練にはなる筈だ。

そして“焦”。全ての精霊を、どこか一力所に固めて固定する。拳に集めればパンチ力が増す、などということではなく、これも“絶”と同じく、無意味な行動かも知れない。

最後に“然”。これが、先ほどの行動だ。自然物と同化するようなもので、小鳥もアクセルを樹木か何かだと錯覚した。

“識絶焦然”を、四行と名付けることにした。他人に伝授できるような類の物かは分からないので、あくまで、自分の整理の為である。

「ふふーん、ふん、ふん……」

その日、また女装してアリスとなつたアクセルは、やたらと機嫌が良いらしく、常に微笑を浮かべて鼻歌混じりに厨房に立っていた。ナタンは単純に、能力の開発が成功したからだろうと思っている。

「さて、出来た出来た」

ティータイムの予告はしておいたので、食堂には既に皆が集合していた。

ナタン、バルシャ、スルト、フラヴィの、主要人物。そして、アニエス、マルダ、ティファニア、ミシェルの四人。

「どういう風の吹き回しだい……？」

アニエスは紅茶を注ぐアクセルに、怪訝そうな顔で尋ねてみる。配られたケーキは、フルーツや生クリームをふんだんに使用し、砂糖菓子の飾りまでついた、手間のかかったもの。しかも、それが自分にも一切れ配られている。

いつもは、お茶会などとはつきり時間を指定されない。適当に茶菓子が用意されており、それを皆が、手の空いた時に適当につまむ。食後のデザートが出される事もあるが、アニエスには一つしか配られない。

更には今回、アクセルは誰にも手伝わせようとしなかった。全て自分一人で材料を調達し、自分一人で調理し、今も自分一人で、給仕のように皆の世話をしている。手伝いを申し出たバルシャや、立ち上がろうとしたマルダやミシェルを、笑顔で制した。アリスの姿で、エプロンまで着てるので、本当にメイドか何かにしか見えない。

「ああ。それじゃ、頂きましょうか。あ、紅茶のお代わりは、言ってくださいね」

「……おい、アニエス。気のせいいか？俺の皿なのに、ケーキがいつも乗ってるぞ。これは本当に俺の皿か？」

「そのようだね、ナタン兄者。今夜は月が一つになるんじゃないかい？」

基本的にアクセルは、アリスの姿に女装している時は、猫を被る。よって、今アクセルがニコニコと笑顔ののも、別におかしい事ではない。

しかしそれでも、アクセルはアクセルなのだ。

「……何か、盛つてるわけじゃねえよな？」

警戒するナタンの言葉に、既に半分ほど食べていたフラヴィイが、ハツとしてアクセルを見た。彼女には、そうされてもおかしくないという自覚がある。

「イヤですわ、お兄様。テファ達も食べているの」

「お、俺だけだったら盛つてたのか！？」

「それでしたら、カップに塗りつけた方が確実ですし」

「ええっ！？」

「ふふ、冗談冗談」

いつものコイツか……と、アニエスもナタンも思い直し、一つ食べてもまだ一つ残つているという、未曾有のケーキを楽しむことにした。

そして、夕食の時間。

「……おい、質問だ。今日は誰の誕生日だ？」

ナタンは取りあえず、皆に尋ねた。

テーブルに所狭しと置かれた大皿は、ご馳走と呼んで差し支えない。

牛肉も豚肉も鶏肉も、魚介類も野菜も果物も、パンもワインも、そして、アクセルがあれほど大事にしていた試作品の地酒も、惜しげもなく振る舞われていた。

そして、食卓には……社会的地位を考慮して、イシュタルの館に滅多に姿を現さないローランまで来ていた。今晚に限って、何故か、アクセルに是非にと招かれたそうだ。

「いいからいいから。さあ、みんなグラスを持つて。……あ、いや、やっぱ持たないでいいよ。疲れるだろ？」「

アリスでもなく、ベルでもなく……そこには、アクセルがいた。

自分以外の九人をさつさと着席させ、グラスを持たせると、一人だけ起立したまま、勿体ぶつて咳払いをする。

「それじゃ、ちょっと長くなるけど、僕に挨拶させてくれ。……まずは、ナタン」

「え？」

突然名を呼ばれ、ナタンは驚いたように肩を震わせた。手に持つグラスの中のワインが、跳ねるよにぐるぐると回る。

「出会ったあの日から、色々な事があつたねえ……

「……いきなりどうした、そんなしみじみと」

「君がいなければ、僕はファミリーを実現出来なかつただろうし、もし出来ていたとしても、とっくに潰してしまつていただろう。……ありがとう、仲間になつてくれて。これからも頼むよ」

「……何なんだ、一体。変な物でも拾い食いしたか？」

アクセルは別に、何か邪心を持つてそんな事を言つたわけではない。それでもナタンが怯えるのは、やはり普段の行動故だろう。

「次に、ローラン」

疑心暗鬼に陥るナタンを余所に、アクセルは今度はローランにグラスを向けた。

流石にローランは、少年が本当に感謝していることを勘付いたが、それは胸にしまつておく。

「いつも、表側から組織を支えてくれている君にも、感謝している。娼館に、ローランみたいな社会的地位がある人間を、おおっぴらに呼ぶことは出来ないけど……それでも、知つていて欲しいんだ。僕も組織も、あらゆる面で、君には本当に助けられている」

「光栄です、アクセル様。こんな老骨がお役に立つのでしたら、無上の喜び」

「ああ。これからもよろしく。……そして、バルシャ」

名を呼ばれた彼は、冷静だつた。ナタンのように取り乱したりせず、背筋を正し、両手を太腿の上で揃え、アクセルに向き直る。

「君みたいな、何でも出来る優秀な人材が仲間になつてくれたことに、本当に感謝している。ナタンや僕の至らない所を支え、常に力になつてくれた。それに正しく報いることが出来ているのか、非

常に不安ではあるけど……これからも、お願ひします

頭を下げるアクセルに、流石にバルシャも驚いた。

「どうか、お止め下さい。私のような者に……」

「“のよくな”……とか、言わないでくれ。少なくとも、君が使つていい言葉では無いよ。……さて、スルト」

この状況の中で、彼だけが、何の気負いも見せてはいなかつた。頬杖をつき、口元には笑みを零しながら、アクセルの言葉を待つてゐる。何を言い出すのか、まるで歌劇の続きをのんびり待つかのようだ、楽し気だつた。

「まず、あの火事の時、助けてくれてありがとう。君がいなければ、流石にもう、駄目だつたかも知れない」

「くく、気にするな」

「そして、ファミリーに加わつてくれたことに……ありがとう。

“友よ”

スルトは、いつメンヌヴィルに戻つてもおかしくは無い。そして そ う な ら ば 、止 め よ う が な い。

それを踏まえた上で、アクセルは彼にグラスを向けた。

「……“友”か。やはり、悪くない響きだ」

「僕も同感だよ。そして君とは、これからも良き友でありたい

「いいだろう、友よ。俺もそれを願おう」

アクセルはフラヴィイに向き直る。

「フラヴィイ。残念ながら僕らの出会いは、決して良いと呼べるも

のでは無かつた。そのことで、色々と大人気ない態度も取っちゃつたけど……感謝してる。君のお陰で、女の子達の不満も大分解消されたようだ。これからも、彼女たちの良き代弁者となつて欲しい」「……あなたに礼を言わると、何だかむず痒くなるねえ」

口調はぶつきらぼうだが、彼女の心には、未だ罪悪感があつた。自分が攻撃しようとしたものを、害しようとしたものを、好きなものへと変える……それこそが罰だらうと、ナタンはそう考えた上で、フラヴィに管理を任せた。そしてそれは、成功したと言える。罪悪感は、間違いだつたことを気付いたあの時よりも、寧ろ大きくなつていた。この居場所を、そしてマチルダやティファニア達を大切に思つようになればなる程、それはこれからも肥大化するだろう。

「頼りにしてるよ、フラヴィ」

「……わかつたよ。どの道、もう私に行き場なんて無いんだし」

拗ねたような口調を、微笑みながら受け入れると、アクセルは一旦グラスを置く。数秒ほど黙つていたが、彼は再びグラスを持ち上げ、アニエスの方を向いた。

「アニエス、ありがとう」

「……何だ、藪から棒に」

アニエスは確かに、特にこの館や組織に貢献してはおらず、彼女自身もそれを自覚している。寧ろ、今までのような感謝の挨拶など、自分にある筈も無いので、早く終わつて目の前の料理に手を付けられないものか……そればかりを考えていた。

「……君は、焦る必要なんか無い。着実に強くなつているしね」

「そうか？ いまいち信用できないんだが……」

「今まで、何本の木刀を駄目にしたと思ってる？ 繼続は力なり、真面目にやっている証拠だ。……まあ、まだまだ僕には遠く及ばないけど」

「うるさいな、すぐに追い抜いて見せるさ。その時は、たっぷりと後悔させてやるから……覚悟し給え」

「はいはい、楽しみにしてるよ」

それでもやはり、楽しそうな、嬉しそうなアーニエスの顔に、思わず顔を綻ばせ、彼は続いてマチルダとミシェル、二人の名を呼ぶ。

「二人とも、ありがとう。ナタンやバルシャも、一人が事務を手伝ってくれているお陰で、とても助かっているよ。そして、いつもお疲れ様。これからもよろしく

シンプルな挨拶だったが、一人は笑顔で頷いた。彼女たちも、言いたいことはあるのだろうが、それは出来ない。

一瞬、表情に翳りを見せたアクセルだが、すぐに笑顔を戻し、隣のティファニアの頭を撫でた。

「ティファ。可愛い過ぎる。以上」

「それだけかよ」

「それ以上の、どんな言葉が必要だい？」

ナタンにすました顔で答えながら、アクセルはティファニアの髪を撫でる。少女はくすぐったそうに身を捩り、白い歯を見せて笑つた。

「慰労パーティ、感謝パーティ……色々言えるけど、とにかく、こうこうのも悪くないだろ？ みんな、僕にとつては必要な人

間なんだ。一度、きちんと感謝しておこうと思つてね

ナタンなどにしてみれば、むず痒いやら小つ恥ずかしいやら、複雑な気持ちだが……それでも、はつきりとアクセルが表した感謝は、嬉しい。得体の知れない少年が、そんな感情を抱いていたことも。

豪勢な夕食の時間は、実に穏やかに過ぎていった。

風呂を終え、マチルダやティファニア達がベッドに入った頃、アクセルは事務室に顔を出してみた。

中にいたのは、大人四人。ナタン、バルシャ、スルト、フラヴィ。

「お疲れ様

「おひ、お疲れ……何だか嬉しそうだな？」

一番付き合いの長いナタンは、やつてきたアクセルの様子を見てそう言つた。確かに、どことなく雰囲気が柔らかで、鼻歌でも歌い出しそうだと感じられる。

「聞きたい？ ねえ、聞きたい？」

「ああ、さつさと言えよ」

「テファアがね、背中を流してくれた」

「それはそれは」

あの少女達に関する事だというのは、予想通りだつた。ナタンがお座なりな相づちを打つが、アクセルは相変わらず嬉しそうに二

ヤついている。

「「う、お疲れ様つて感じでさあ……一生懸命じじじ」と。嬉しくってさあ、ついつい好きなだけ絵本読んであげちゃった」

「……風呂の後？」

「そう、今まで」

ナタンにつられ、フラヴィイも時計に目をやり、彼等が風呂場に向かつた時間を思い出す。

「……あんた、何冊読んだんだい？」

「わかつてないなあ、フラヴィイ。数は問題じやないんだ。喜んでくれたのが大事なんだ」

呆れる彼女に、アクセルも首を振つて呆れ返した。

この少年が、あの少女達に向ける愛情には、ある意味父親以上のものがある……と、父親を知らないフラヴィイは、漠然とそう思つている。

「ついでに告白しようか。あの娘達は勿論、僕はここにいる四人だつて大好きだ。ローランも含めてね」

スルトが顔を上げていた。

盲目の彼に、視界など関係ないが……光を失う前の習慣故か、それとも単純に能力をより發揮する為か……彼は何かに意識を集中させる時、そちらの方向に顔を向ける。今、その方向の先にはアクセルがいた。

「ナタンと、ナタンを支える二人。組織として、実に安定した、理想的な形だと思わないか？」

三人とはつまり、バルシャ、スルト、フラヴィ。アクセルは入っていない。

「つまり、今なら……この状態なら……僕がちょっとばかり、取り返しの付かないかも知れない事をしでかしても、些細な問題で……十分に、組織はやって行けるわけだ」

「やっぱ、何か企んでやがったか」

「まあね」

アクセルはナタンに向かって、肩を竦めて見せた。

「……何を、企んでいる？」

誰よりも早く尋ねたのは、スルトだった。その顔に、いつものゆとりは無い。

彼だけは、アクセルの外ではなく、熱という……ある意味の“内”を見ていた。

「別に……人生は長いんだ。僕に今回許された時間は、明日から四日間。レオニー子爵に招かれ、自領の不祥事に対する改めてのお詫びを受けに行く……それで口裏を合わせるよう、子爵にもローランにも頼んである。だからこれから四日間、僕は……熱血だ。そう決めたんだ。なあに、失敗しても、死ぬわけじゃないから……気楽なもんだよ」

そこでようやく、アクセルは背中に隠していたものを取り出した。その正体に気付けたのは、“それ”がアクセルに届けられた時、唯一傍らにいた、バルシャ。

アクセルが以前から求め、ようやくたつた一つだけ手に入れられた、マジックアイテム。

「最後になるかも知れないから、言っておくよ。みんな、本当にありがとうございます」

アクセルは拳銃のような形状をしたその銃口を、自らの喉に押し当て、引き金を引いた。

マジックアイテム“夢の姑”。効果は、声を封印すること。
ラ・マイユール・ベルメール

以下は、本編と関係ありません

皆様のおかげで、PV30万アクセス、ニーク3万を突破致しました。驚きです。本当にありがとうございます。

何かしよつ、しなければと思ったのですが、絵が駄目なので、どうでもいいおまけを付けました。

ただ、耐性の無い人には強烈かも知れませんので、冗談でも同性愛

が許せない人はバツクしてください。

題・相関図ジエネレータで遊んでみた。

まずは、男性陣の相関図

> i 19900-2695 <

- ・バルシャ離反フラグが立ちました。
- ・スルナタが判明しました。
- ・アクセルとスルトの関係で、逆だとアクセルが騒いでいます。
- ・ローランが大暴れしております。

女性陣の相関図

> i 19901-2695 <

- ・ハーフエルフ最強伝説が始まりました。
- ・銃士隊イコール百合の園疑惑が高まりました。
- ・ミシェル、マチルダにアニエスを寝取られる疑惑が発生しました。

- ・ティファニアとフラヴィの間に、マチルダに関する何か（ドロドロとした取引）があつた可能性が出ました。

アクセルについての女性陣の評判

> i 19902 — 2695 <

- ・所詮オリ主（笑）。
- ・上記以外に言つことがあります。

ではナタンはどうなのか

> i 19903 — 2695 <

- ・風呂場での前科がある為、アクセルに殺されるかも知れません。
- ・アクセルに殺されなくても、全国のハーフエルフファンに殺されます。

最後に、オリ主と、虐殺系火のトライアングルお二人

> i 1 9 9 1 2 — 2 6 9 5 <

- ・アクセルはオリ主から、寝取られ系オリ主に転職しました。
- ・作者はダメージを抑える為、コルベール女体化の構想を始めました（本気度20%）。

最後に、こんな作者ですが、よろしければこれからもお願ひ致します。

第十一話「虎穴」（後書き）

ジェネレータ管理人のらうひません、どうもありがとうございました。

そして皆さん、「じめんなさい。

第十二話「宝光」（前書き）

前話のおまけから、更に妄想がエスカレートしました。
挿絵OFFと、バックの準備をお願いします。
後書きに文体化落書きあります。

薄氷が粉々に砕け散るような、そんな甲高い音が響いた気がしたが……それが自分だけに聞こえたのか、それとも皆にも聞こえたのか、わからない。

喉にじわりと、熱が広がった。火傷するほどではないが、少し熱めの風呂に入ったような、散髪屋でおしごりを乗せられた時のような感覚。

（あー……）

口を開け、発声を試みる。しかし、聞き慣れている声は耳に届かない。確かに唇を上下に開き、肺の空気を喉で固め、声を絞り出した筈なのだが……相変わらず、何の音も聞こえない。

（本当に、声が出なくなつた。偽物だつたら、売つた商人を殺してやううかとも思つてたけど……）

隣に、鏡がある。そちらを向くと、自分と目が合つた。喉元に浮き出たのは、青白いルーン文字。

（このルーンは……逆アンスールに、逆マンか。誤解、情報の混乱、人間関係の不調和……別に、予想外のルーンじゃないな。平凡と言えば平凡、当たり前な……）

やがて、じわじわと染み込むようにして、ルーンは薄れ消えた。

誰一人として、声を出す者はいない。

そのマジックアイテムを知っていたバルシャだけではなく、机の上で頬杖を付いていたナタンも、筆記の練習をしていたフラヴィも。スルトも、見えない目でアクセルを凝視し……何が起きたのか、想像が及んだらしく、啞然として口を開いていた。

静寂を破つたのは、甲高い金属音。

アクセルが開け放たれたままのドアを振り向くと、廊下にはスプレーが散らばっており、そしてその中心には、マチルダが立っていた。恐らくはふと目を覚まし、サイドチェストに放置されていた食器を、今夜のうちに片付けてしまおうとしたのだろう。

マチルダ

いつものように名を呼ぼうとしたアクセルの唇は、空しく上下しただけだった。

少女の顔が、見る見るうちに萎んでいく。震える両手で自らの顔を包み、やがて身体全体を震わせ始めたマチルダは、突然アクセルの元に飛び込んだ。

「つ！？」

腰に抱き付いてきた少女を何とか受け止めたが、その少女より小さな身体では、勢いを殺すことは出来ず、アクセルは背後の机に背を強かにぶつける。衝撃に顔を歪ませるが、呻き声も出ないまま、床に座り込んだ。

落ち着いて、改めて、抱き付いてきた少女を眺める。マチルダは

小刻みに震えながら、少年の腹に頭を押しつけていた。非力な腕が、精一杯にアクセルの腰を抱きしめている。

(……大丈夫)

言葉は出せない故に、身を以て示すしかない。

左手でそつと、彼女の震える身体を抱き返し、右手で頭を撫でた。いつも思うことだが、彼女の、自分のそれより少し濃い髪は、適度な反発によって指を絡める。それがまるで、愛撫のように心地よかつた。

マチルダはくしゃくしゃになつた顔を上げ、水没したような目でアクセルを見つめ、唇を震わせる。アクセルは寝間着の袖で、そつと顔を濡らす涙を拭つてやると、出来る限り柔らかい笑みを見せた。

(さて、時間は有限。いつまでもこいつしても……な)

やがてアクセルは、マチルダを抱き付かせたまま立ち上がる。そろそろ離してくれないか?と、視線で彼女に語りかけるが、少女は幼児のように首を振ると、今度は彼女より少し低い位置にある肩に抱き付いた。

アクセルはもう、それを振り解こうとはしない。白墨を手に取り、壁に掛けられた連絡用の黒板に、手早く文字を書き込んだ。

“これから地下に籠もる。四日で決着を付ければ、僕の勝ちだ”

その言葉を残すと、アクセルはマチルダを伴い、ドアから去つていった。

事務所は、相変わらず静寂に包まれていたが……既に全員、空白

のよつな呪縛から解放されていた。ナタンとバルシャは、ハシバミ草を口いっぱいに押し込められたような顔をして、フラヴィは自発的な行動が出来ず、ちらちらと他の三人を窺っている。スルトは唇を結び、黙り込んでいた。

「……一言くらいい……」

ナタンがようやく、口を開いた。

「一言くらいい、相談しろってんだよ……あのバカが！」

「……」

拳を震わせるナタンの言葉は、バルシャの代弁でもあり、バルシヤは目を瞑る。

「あいつは……一体何を……」

「決まつてんだろが！！」

フラヴィの言葉が引き金となり、激情が解放され、ナタンは硬く握った拳を机に振り下ろす。初めて聞く彼の怒鳴り声に、フラヴィが思わず首を縮めた。

「声の封印が解けないからってよお、テメエで試しやがった！
あいつは自分を実験台にしやがった！ 退路を断ちやがった！」

アクセルの行動は、確かにファミリーに損害を与えるものだが、ナタンの怒りはそのことではない。

「俺らは一体、何なんだよ！？ そこまで頼りねえのか！？ どうだけ信用ねえんだ！？ 何も言わねえまま、勝手に突っ走りやが

つて！」

「……もし……」

そこで初めて、スルトが口を開く。彼は見えない目で、じつとナタンの顔を見つめた。

相変わらず見る者を引きずり込むような、恐怖を感じさせる視線だが、威嚇するわけではなく、真剣な目なのだ。

「もし、アクセルが相談していたら……お前はどうした？」

「決まってんだろうが、止めたよ！ 取り上げたよー！」

あの三人の娘達の声の封印について、ナタンも、何も思つてないわけではない。

しかし、彼はメイジではない。マジックアイテムに関する問題など、相手にするのは問題外の門外漢なのだ。そしてアクセルも、マジックアイテムの専門家ではない。

「止めて、どうする？」

「どうするつて、そんなの……もつとじつくりと、焦らずに……

「そして解決するのは、何年後だ？」

「わかるか？、そんなもん！」

「そうだ……誰にも、わからない

普段のスルトでは無かつた。

彼にしては、あまりにも穏やかすぎる口ぶり。冷や水を注されたようにな、ナタンの熱も治まっていく。しかし、冷静になつていく頭でも、尚、アクセルの行動は納得できない。

ナタンだけではない。バルシャも、フラヴィも、そしてスルト自身も、己の中の感情の矛先に飢えていた。

「……声が出せなくなれば、詠唱が出来ない。つまり魔法が使えない。この四人の中で、それがどれほどの枷であるかを理解出来るのは、メイジである俺だけだろう。自分の声を封じるなど、伊達や酔狂で出来る事ではない」

「んな事あ、俺だつてわかつてる……。あいつがマジだつてのもな」

アクセルは、容赦しない。自分の敵に対して、自分の大切なものを奪おうとする敵に対し、まるで駆除するかのように、素直に人の命を奪ってしまう。

快樂殺人者ではない。ただ単に、それが彼の、自らの人生に横たわる障害を排除する方法なのだ。そこには歡喜も、血飛沫への渴望もなく、あるのはただ……己の敵を、報復することすら許さずに、永劫の彼方へと追放してしまいたいという臆病さ。

「けど……何で、“今”なんだ？」

ナタンはどさりと、自分の椅子に座り込む。両手を垂らし、天井を見上げ、呆然と呟いた。

スルトの加入によつて戦力が強化され、フラヴィイが降つたことで娼館の内部が改善され……組織の質が底上げされたという理屈は、ナタンにも分かる。しかしだからと言つて、アクセルが必要無いわけではないのだ。

この街を、表と裏の両面から支配する……彼はあの時、そう言つた。アクセルには、代官という顔がある。寧ろそれこそが、彼の真正面とも言つべき肩書きなのだ。喋れなくなつた代官……貴族など、貴族社会でどう見られるのか。……それは言つまでもなく、“無能”である。

その上アクセルは、未だ九歳。もし解呪の方法を見つけられなかつたのなら、残りの人生を、その枷に付き合わせなければならない。

臆病な者が冒険を行うには、未だ早すぎるのだ。
もつとマジックアイテムについての研究を重ね、理解を深め、メイジとしての力量を高め、そして日途が立つた上で、ようやく行うべき挑戦。

「……とある娘が、美しい宝石を求めた」

再び訪れた静寂を嫌うように、スルトが話し始めた。ナタンは曰だけ動かし、彼を見る。

「齡、未だ16。美しく、そして高価な宝石だつた。その娘は平民で、そんなものを買う金など無い。勿論、その娘の親にも無い。親は言づ、諦めろ、と」

「……何の話をして」

「いいから聞け、ナタン。もしお前がその娘の親ならば、何と言つ?」

ただの「太話に付き合つつもりにはなれない。しかしナタンは、スルトのあまりに静かな声色に、それを無視することが出来なかつた。

「……そりや、諦めろ、高嶺の花だ……とか。自分で金を貯めて買え、とか」

「その金が貯まるのは、いつだ? 何しろ平民だ、十年二十年では無理だ。食いたい物を食わず、着たい服も着ず、見たい歌劇も見ず……そしてようやく金が貯まつた、その時。その娘は、万感の思いを込めて宝石を購うのだるづ。しかしその時、美しかつた娘は既

に娘ではなく、年老い、病を患っているかも知れない。宝石を購うのに何十年もかけながら、結局は、手にしていられるのは数年だけかも知れない

「…………」

「娘は……借金をしてでも、宝石を購うべきなのだ。確かに金は少なく、生活は苦しくなるだろう。だがそこに、金を貯める事と、何の違いがある？ 娘は、少なくとも娘であるつむぎに宝石が得られ、そしてそれを何十年と手にしていられるのだ。……その時娘が購つたのは、宝石ではない。宝石のように輝かしい、人生の時間なのだ」

スルトは壁に手をつき、立ち上がった。

「今、アクセルは……己の残りの人生の声、全てを賭け、あの娘達の、残りの人生の声を手に入れようとしている。“今でなくてもいい”ではない、“今しかない”のだ」

彼は腰のメイスを握り、その感触を確かめる。そして、俯いていた顔を持ち上げると、ドアに向かつて歩き出した。

その背に、ナタンが声を掛ける。

「…………どこに行くんだ？」

「俺としたことが、熱に侵されたらしい。俺にも、“今しかない”のだ。俺に出来る事など、燃やすぐらい。燃やすことだけが、俺に出来ることだ。今、不穏な動きを見せている連中は、二つだつたな？ そいつらは俺に任せろ。三日でカタを付けてやる」

言い終わる前に、スルトは部屋を出でいた。

「…………今しかない、か」

ぱつりと、ナタンが漏らす。

「今しかない、ねえ……」

額に手を当て、肘を机に乗せ、一度瞼を閉じる。そして再び開いた時、ふつと、ナタンは笑った。
机に両手を置き、勢いを付けて立ち上がる。弾かれた椅子が、背後の壁に衝突した。

「バルシャヤ！」

「はいっ」

「あのマジックアイテム、もつと調達出来ねえか、クルコスの街に連絡だ！ 手に入れられるんなら、一つ残らず買い占めろ！ 流通経路についても、もう一度洗い直せ！」

「了解」

「フライ！ お前に、イシュタルの館の全権を任せん！ 文字通り、全部だ！ 役に立ちそうな客には、存分にサービスしてやれ！ 貴族だろうと商人だろうと、骨抜きにしてやるんだ！」

「あ、ああっ」

「俺は、今集められてる情報をもう一度整理、検討してみる！ いいか？ これから四田間は、俺うじとつても正念場だと思え！ いつもいつも、好き勝手に引っかき回してくれやがるあのガキに、俺らの本気を見せつけてやれ……」

平民には魔法は使えないが、平民でも使えるマジックアイテムは存在する。風石の力を使って飛ぶフネは、平民の技師によって操縦出来るし、声を封じるマジックアイテムも、メイジではない人間でも使用できるようになつていて。

マジックアイテム“夢の姑”

ラ・メイユール・ベルメール

電池、動力とでも言つべき精神力は、使用者から吸収するのではなく、初めからマジックアイテムの内側に蓄えてられている。引き金を引くことでその力が解放され、銃口へと向かい、ルーンを刻み込むらしい。使えるのは一度きりで、使い捨てだが、シャチハタ型とでも言つべきか。

「.....」

手の中の、拳銃型のそれに、精神力を込めてみる。アクセルは再び、その銃口を喉元へと押し当てた。

しかし、それをぐつと押し止めた手がある。

隣を見ると、蒼白な顔をしたマチルダ。

アクセルは安心させるように微笑み、ゆっくりとマチルダの指を解いていく。彼女はそれ以上、止めようとはしなかつたが、じつとアクセルを見つめていた。

再び、あの、薄氷が砕け散る甲高い音が響いたが……今度は、喉には何の変化も無かつた。

（再利用は出来ないか。まあ、当たり前だよな。それとも、重ね掛けが出来ないだけか……最初に込められていた精神力でしか発動

しないのか……一度使えば、壊れるように出来ているのか

また、隣を見てみる。安心した表情で、マチルダが止めていた息を吐き出していた。

先ほどから、ずっとこの状態なのだ。彼女はアクセルの一撃手一投足、果ては指の動きに至るまで、神経を尖らせるようにして注意深く見守っている。

少し考えた後、アクセルは地下倉庫の壁に立て掛けられている黒板に向かうと、そこに文字を書いていった。

“もう夜遅い。お休み、マチルダ”

アクセルがそれを書き終える前から、マチルダも白墨を握っている。

“ここにいる”

再び、アクセルは考える。慎重に、言葉を選んだ。

“テファが寂しがるよ”
“テファもここに連れてくる”

(……そうなると、ミシルも、それにアーネスもくつついで来る
そうだな)

この感覚は、前世でもあった。将棋のルールを覚えたばかりの頃、上手い友人と対戦した時、指す手指す手にカウンターを喰らわされ、じわじわとなぶり殺しにされた時のような……逃げ場が次々と失わ

れていく感覺。

“四日間だけ、ここに籠もる。だから外で待つてくれ”

“私も四日間だけ、ここで過ごす”

駄目だ、と、アクセルは焦った。どんどん袋小路に追い込まれていった。

“お願い。集中したいんだ”

“いるだけ。静かにおく”

“だめ。女の子はちゃんと寝なさい”

“子どもはちゃんと寝なさい”

幼い応酬が続き、ついにアクセルは、苦笑と共に諦めた。

こんな筆談による言い争いをしている暇など、自分には無いといつに。それくらいなら、一步でも解決へ向けて進むべきなのだ。

ルーン文字を使用していたことからしても、魔法に則った、メイジにとつては十分に理解可能なものなのだ。ならば、解明出来ない道理が無い。

既に用済みとなつたので、件のマジックアイテムを分解してみる。仕組みは至つてシンプル、それだけに難しい。もう一つ、未使用のものを分解出来ればいいのだが、無いものねだりはキリが無い。どうやらスペースの大部分は、精神力を保管しておく電池に取られているようだ、心臓部と呼ぶべき部分は銃口に集中していた。

十本の指の全てを活用し、マジックアイテムと自分の喉を、ディテクトマジックで調べていく。

(ギアス、では無さそうだ。水系統だけど、肉体の一部分に直接

作用するタイプか。それに風系統か……）

呼吸を繰り返してみる。呼吸音はあるが、寒い日に手を温めるようにはあーっ、と息を吐き出してみても、風が吐き出されるといった感じだった。囁き声も封じられている。水系統で肉体の動きを阻害し、風系統で補完しているらしい。

（よし……。先ずは、ローンを試すか）

（なあ、メンヌヴィル……助けてくれないか？）

傭兵にとつての戦闘は、仕事である。報酬を受け取ることを目的とした、労働である。

戦うことに意義を見出す、そんな者は少数派だ。戦闘行為が手段ではなく、目的になってしまっている。大部分は、確固たる信念や信条、正義を持たない、半分破落戸のような者たち。別に悪い事では無い。そんなものを持っているのは義勇兵と呼ばれるべきであり、そもそも傭兵とは別物なのだ。

金だけの繋がりがあるので、当然、不利になればさっさと報酬分働いて逃げる。賞金稼ぎなどと同じく、死ぬまで戦おうとするのは愚か者だ。

命乞いは正道。スルトも、数多くの命乞いを見てきたし、その大半は自分に向けられたものだつた。

現に、今も……。

「ブリミル様あつ！ どうかお助け」

「間違えるな。命乞いの相手を」

スルトは呆れたように、メイスを振り下ろす。彼に背を向け、天に向かって祈りを捧げていた男は、少なくとも痛みを感じる暇なく死ぬ事は出来た。ぱっくりと割けた頭部から、脳漿と血が零れている。

スルトはふと、あの少年の事を思い出していた。

（なあ、メンヌヴィル……助けてくれないか？）

少年はあの時、確かにそう言つていた。
そしてあの時から、彼の自問が始まつていた。

アクセルは言う、死ぬのが怖いと。恐ろしいと。
それは本心なのだろうが、それでもスルトは考える。ならばアクセルの本質とは、何なのか、と。

人は闇を恐れる。暗闇の中を、怖々と歩く。理由は当然、見えないから。

既に世界が闇に閉ざされたスルトだが、それでも、まだ光を失つていなかつた頃の事は覚えており……“自分は闇など恐れない”などとは思わない。ただ単に、闇から逃れることが出来なくなり、順応するしかなかつた、それだけだ。

死も同じだ。先が見えない。その中にはきっと、疑心暗鬼という名の鬼が棲む。

アクセルのあの時の行動を、やはり、命乞いだとは思えなかつた。何度も命乞いをその目で見て、見えなくなつてからはその温度を感じてきた。

「たつたつ、助けつ」

そう、これが命乞いだ。武器を持つべき手には何も持たず、両手を組み合わせ、身動きが取れないように膝を畳んで座り込み、ただ嘆願する。自分は無害な存在である、殺す必要など無いと、必死に体現する。

スルトがその男の隣を通りながら、無造作に炎で焼き殺したのは、考え方をしていたから……それだけの理由。

（命乞いではなく、救いの手を求められたから？）

肉が焼ける匂いが、体中を満たす。しかしスルトは、常のようにただそれを楽しんではいなかつた。

いくら自問しても、納得のいく答えは出ない。

「……ハハつ」

しかし、それを不快には思わなかつた。答えが出せない、という答えが出るたびに、スルトは人知れず笑つていた。得体の知れないもの……まるで、闇だ。

ああ、自分は闇を恐れていると同時に、それと同様にそれ以上に、

闇を愛している……それが自分の本質の一つだと、スルトは思っている。

そんな彼が、自問の果てにたつた一つだけ導き出せた、アクセルの本質。

「そうだ」

勇敢にも剣を振り上げて襲いかかってきた、一人の青年。彼の身体を、無造作にメイスで払いのけつつ、スルトは両手を大きく広げ、赤く染まる天に向かつて叫んだ。

「あいつは！ あいつはあの時！ 死を真正面から見据えていた！」

誰もが忌避し、目を背けようとする死を、他の何ものでもなく、ただ“死”としてそのままに見る。

少なくともスルトの、そしてメンヌヴィルだつた頃の記憶に、あんな温度は見当たらなかつた。

得体の知れない、初めての、記憶に無い、前代未聞の、史上初の、未曾有の……それらの言葉全てが、スルトの喜びを励起し、渴ききつた彼の心を潤していく。

「何と！ 何と素晴らしい事か！」

メイスを振るい、燃え盛る火炎の一点を指し示す。突風が起こり、炎を吹き潰し、逃げようとしていた数人の姿を露わにした。彼等は皆、スルトに向かつて怯えた表情を向ける。

「どうした？ 何をしている？」

笑顔のまま、スルトはその数人に向かつて歩き出した。

「分不相応な夢を見て、その幻に手下達を付き合わせた罪。哀れな手下達を見捨てて、自分たちだけ逃げる罪。今まで生きていた、罪」

「くつ、来るな化け物！」

彼等の中の、誰かが叫ぶ。命乞いが無駄だという事を知っているのは、この襲撃の一部始終を見ていたからか。

「俺は化け物ではない。足を引きずつてやつて来た、罰だ」

スルトはメイスを振り上げる。現れた炎球が、彼等の顔を真つ赤に染め上げた。

アクセルは、こいつ等とは違つ。こいつ等のように、代わりがない。

果たして彼は、あの呪縛を解放できるのか。声を取り戻し、宝石のような人生を与えるのか。もしも、それが出来たとすれば、何と素晴らしい少年なのだろう。

素晴らしい、だからこそ……スルトはやがてメンヌヴィルへと戻り、彼を灼くのだ。

「……『芝居は終わった。喝采せよ』」

灰となつた、最後の数人に背を向け、恭しくお辞儀をし……スルトはその場を去つた。

第十二話「宝光」（後書き）

以下閲覧注意

前話の感想のうち、頂いた二つともコルベール子に言及されておりました。
ので、思わず魔が差しました。

- ・胸が薄い
- ・幸も薄そう
- ・尼さんってかんじ

といつイメージらしいので・・・

トリステイン魔法学院女教師
ミス・コルベール（三十路越）

>↓20080-2695<

嫁き遅れの中年女性。

新任のミスター・ロングビルに一目惚れし、何とか食事に誘おうとする

るも、顔もまともに見られない。キモがられないかと、そればかり心配している。

コルベールに目を付けたアクセルは、前世の知識を総動員したり、ゼロ戦を持ち出したりして、彼女の興味を引くことに成功。良好な関係を構築しつつ、いつかゼロ戦だけではなく股間の操縦桿も握らせてやる、と密かな野望を抱いている。

しかし、そこに大いなる障害が。

「させるわけにはいかんない、先輩」「き、貴様は……ダブりまくのメンヌヴィル（40）……」

立ちはだかったのは、コルベールの同期、なのにまだ生徒やつてるメンヌヴィル。

そして恐れていた事態が……

♪ 20081-2695 ♪

「残念だつたな、先輩！ 昨夜田出度く貫通式だ！」

何と、三十年もの初物を美味しく頂かれてしまった。

怒り心頭のアクセル

> i 2 0 0 8 2 — 2 6 9 5 <

しかし、両者の対決は意外な形で幕を閉じる。

> i 2 0 0 8 3 — 2 6 9 5 <

> i 2 0 0 8 4 — 2 6 9 5 <

「……具体的には？」

「そうだな。コメントが nice boat の洪水となる……と言えばわかりやすいか？」

「あともう一つ。何故のハンサムだ？」

「……流石にオリキャラ絵はハードル高すぎだろ（意訳：誰か描いてくれねえかな）」

コルベールの眼鏡忘れ、メンヌヴィルが学ラン着ることなど、色々と申し訳ありませんでした。

そしてまた、相関図ジェネレータで遊んでみました。

原作女性陣の、アクセルの評判（未登場編）

♪.i20085—2695♪

いいまでぐるともつ、宇宙意志か何かが働いているとしか思えない。

「姉さん」

フラヴィイを呼ぶ時、娼婦達の中にはそつやつて親しみを込める者もいる。勿論、血は繋がつておらず、正式な契りを交わしたわけでもないが、それは彼女に対する、信頼と親愛の現れだった。

「……リリースかい」

呼び止められたフラヴィイは、長い付き合いになる妹分を振り向く。リリースはパタパタと、足の裏を廊下に滑らせるようにして、小走りで近づいてきた。土足厳禁の板敷きは、相変わらず入念に磨かれており、彼女は少しがり気味に停止する。リリースの表情は、この曇り空のようだった。

「あの……これ……」

「ん？」

フラヴィイは、差し出されたリリースの手に視線を落とす。小さな包みが乗っていた。

「お姫さんからの、頂き物。滋養強壮の、妙薬だつて……。その、あの人には……」

アリスという少女の正体も、その正体であるアクセルがどのよう

な状態にあるかも、フラヴィイはリリースに打ち明けていた。他言するような女じゃない、という信用もあったが、それよりも、フラヴィイにとつてはケジメの意味合いが強い。

真相を知らなかつたとはいえ、フラヴィイはリリースに、誘拐の実行を命じたのだ。リリースもまた、割り切れるような単純な心境ではない。フラヴィイと同じく、罪悪感を抱え……フラヴィイを諒めなかつた事を、自らの罪であると考えていた。

「自分で渡さないのかい？」

「邪魔になっちゃうかも知れないし……。私に出来るの、これくらいだから

「……そうかい」

包みを受け取り、きゅっと握る。中で丸薬が擦れた。

「わかつた、渡しておくよ。それと、あたしが言えた義理じゃな
いけど……あんまり、気にしない方がいいよ

罪悪感を持つな、というのも、無理な話だろ？

今、リリースに出来ることは、客を楽しませることであり……そ
してそれが最終的に、アクセルの力となる。その為にも、彼女は明
るさを取り戻す必要があった。

「うん……わかってる」

「それじゃ。お互い、頑張ろつじやないか」

リリースと別れ、フラヴィイは事務所の地下室へと向かう。

アクセルの行動は、結局、一夜明けて朝になれば、他の娘達の知
るところとなつた。

そもそも、隠し事など無理だったのだ。暇さえあれば可憐がり、暇さえあれば音楽を教え、暇さえあれば勉強を見て、暇さえあれば修行に付き合い、暇さえあれば遊んでやる。それが、ここでのアクセルの全てである。

そんな彼が突然、研究室としても使っている倉庫に閉じ籠もるなど、前代未聞の出来事だった。

地下に下り、倉庫まで来ると、扉の前に座り込む少女がいる。剣を抱き締め、膝を曲げ……かくんかくんと、頭を上下させている。

111

フライヴィが、わざと足音を立てて近づくと、アーニスはハツと目を開けて飛び上がった。握ろうとした剣は、跳ね起きた拍子に床に倒れ、がらんがらんと音を立てる。

「 」 ！ — —

剣に向かって、唇に人差し指を立てている所を見ると、寝惚けているらしい。しかしそれでも、すぐに覚醒すると、左右を見回して、ラヴィに気付いた。

「あ…… フラヴィイ姉か」「……ご苦労様」

少女の様子に、どこか微笑ましいものを感じ、フラヴィは柔らかい笑みを浮かべる。アーネスは「じ」と顔を擦り、両手で頬を数回叩くと、長く息を吐き出しながら剣を拾い上げた。

「何も、進展は無さそうだね」

「そうみたいなんだ……」

「差し入れがあるの。入るよ」

「ああ」

慎重な手つきで、ゆっくりと、倉庫の扉を開く。その中の隅の一角に、アクセルはいた。

床には書類やメモが散乱し、本が積み上げられている。粗末な木製のテーブルの上にも、走り書きの紙片や見慣れない器具、本から引きちぎられたページが、所狭しとひしめいていた。

壁に掛けられた黒板にも、隅から隅まで文字が並んでいる。アクセルはその前に立ち、黒板を睨みながら、顎に手を当てていた。パクパクと細かく口が動いているが、勿論咳きも漏れてはいない。

少年は布を取り、黒板の四分の一ほどを拭き取る。そして一言一言、改めて文字を並べると、背後のテーブルを振り返り、メモを漁り始めた。田当てのものが見つかったらしく、それを持ち上げた時にようやく、へってきたフライヴィに気付く。

「あー、と……」

じつと、不思議そうに見つめてくる彼に、慌てて持ってきた包みを見せた。

「リリースから。滋養強壮の妙薬だつてさ」

声を失ったアクセルだが、寧ろ呆れるほどに落ち着いていた。

通常、没落貴族がその地位を取り戻すことは無い。それはまさし

く、御伽噺なのだ。一度ドロップアウトした者を、貴族社会は受け入れない。

声を封じるというそのアイテムは、まさしく貴族という肩書きを剥奪するもの。いや、去勢と呼んでもいい。奈落の底へと突き落とし、一度と這い上がれなくなる為の、永劫の呪い。貴族という肩書きを奪つた上に、貴族であつたことを示す魔法さえ奪い去るのだ。マジックアイテムであるので、呪いを施すのは誰でも出来る。そして、使用する彼等に悪意は無い。悪意を持つのは、その奈落へと突き落とした者たち。

フラヴィイはふと、近くの樽に寄り掛かつて眠るマチルダを見た。その隣にはミシェルが肩を並べ、一人の間に挟まるるようにして、ティファニアが寝息を立てている。寝室から引っ張ってきたシーツにくるまり、静かに眠る三人の少女は、花弁のように儂げな存在に思えた。

この少女達は何故、それほど悪意に晒されたのか。そしてフラヴィ自身、かつてはその誰かと同じ、この無力な子どもに悪意を向けた存在であることに思い至り、悪寒に震える。

解呪など、出来る筈がない……。フラヴィイは密かに、そう考えている。

マジックアイテムについて詳しくない彼女でも、わかる道理なのだ。簡単に解かれてしまうでは、意味がない。悪意とは、そんな生易しいものではない。アクセルとて、そのくらい……いや、その道理がわからないような少年ではない筈だ。

テーブルを回り、フラヴィイの手にある包みを受け取つたアクセルは、ありがとう、と唇の動きで示した。

何故、わざわざ礼を表すような余裕があるのだろう。既に彼は、賽を投げてしまったというのに。失敗が許されない状況になってしまったところだ。

メイジとしての全てを、失つてしまつかも知れないところだ。

「……？」

早速包みを開き、丸薬の一つを摘み上げたアクセルは、不思議そうに首を傾げる。視線の先には、包みはもう無いというのに、未だ手を浮かべたままのフラヴィ。

取りあえず、ポケットを漁つてみると、銀貨が指先に触れた。一枚取り出し、所在なげな彼女の手に乗せる。

「……えつ、あつ、いやつ、ちよつとほりうつとしてただけで！
別に、そういうわけじや……」

ようやく意識を引き戻したフラヴィは、掌に置かれた銀貨を慌てて突き返そうとするが、既にアクセルは黒板に向き直っている。

「……」

邪魔をするのも憚られ、ひとまず銀貨はポケットに放り込んだ。何か、励ましの声でも掛けようかと思ったが、それも止めておく。最良の選択は、黙つて立ち去る事だ。

なるべく音を立てないよう、黒板に向かい、ゆっくりと扉を開けた。

（進めておこうかねえ？……ゲルマニアへの逃亡の準備でも。あつちは、金さえあればいいらしい）

ゲルマニアでは、平民でも金さえあれば、貴族になれるといったことがある。例え魔法が使えなくなろうが、アクセルならばゲルマニアで上手く渡つていくのではないだろうか……彼女の頭に、そんな予感が浮かんだ。

魔法は全能ではないが、万能はある。アクセルは黒板にローンを書き込みながら、改めて考える。人のイメージが無限大であるように、魔法もまた無限大なのだ。原子配列変換を軽く行つたり、念動力を簡単に使えたり、空を飛び火の玉を放つたり。

ハルケギニアで六千年の間、支配体制の変化が起こらなかつた理由の一つに、魔法があまりにも漠然とし過ぎていた、というのが挙げられるのではないかと思う。牛歩の如きそれではあるが、魔法も進歩してきたのだ。ただ、その道のりはあまりに、途方もなく長く、六千年の歳月を経ても終わりが見えない。本当に進歩しているのか、それすらも曖昧になつてしまいそうになる。

（まあ、はつきり言つてしまえば……「クリーリンのことか――！――が使える世界なんだよな」

魔力とは即ち精神力。巨大な精神のうねり……感情の爆発は、時としてメイジのクラスの壁すら越えてしまう。

（……世界中の幼女マニアよー オラに元気を分けてくれー！）

両手を上げ、口を閉じ……我ながらあまりの不毛さに、首を振つた。これではまるで、お手上げのポーズである。

魔法を使った呪いが、魔法で解けない道理は無い。方法は必ず存在し、それを探し当てるだけなのだ。例えそれが、干し草の山からたつた一本の針を探し出すようなものだとしても、諦めなければ徐々に、ゴールは近づいてくる。

（そうですね？ 名も無きアバッキオの先輩さん）

気を取り直し、テーブルを振り向く。散らばるメモを整理していくと、不思議と疲れが減つていてことに気付いた。気のせいかも知れないような、そんな些細な感覚だが。

（……これが）

先ほどフランヴィイが渡してくれた包みを開き、再び丸薬を取り出す。一見、難の変哲もない丸薬だが、ディテクトマジックを使用してみると、マジックアイテムの一種だと判明した。

十本の指を揃え、丸薬を挟み、更に詳しく解析する。薬草から抽出したエキスに、薄めた水の秘薬を混合させて練り上げたもので、確かに疲労回復の効果を持つ。

（成る程なあ。取りあえず、身体によさそうなモンを混ぜてみたつて感じか？ ……けどこれ、確かにマジックアイテムだけど、材料さえあれば、平民でも作れそうだな）

“マジックアイテムとは、必ずしもメイジが作ったものではない

”と、黒板に書き込んでみる。

「……」

少し考え、また文章を足す。

“風石はマジックアイテムであるが、風石を使って飛ぶフネはマジックアイテムか？”

アクセルは腕を組み、今度は長く考えた。口の問い合わせに答えるため、思考を巡らせる。

魔法を使う時、その力の源となるのは精神力であり、それは勿論平民にある。そして並のメイジよりも高い精神力を持つ平民は、別に珍しくはない。しかし、その精神力を魔法に変換する術を持たないが為に、平民は魔法が使えない。

やがてアクセルは、己の問い合わせに答える。

“フネもまた、マジックアイテムである”と。

風石を動力に変換する心臓部はともかく、それを包むフネという乗り物は、平民の手で作る事が出来る。

(……やつてみるか)

アクセルは、“夢の姑”の銃口部分に嵌め込まれていた、レンズのような結晶を摘み上げると、人差し指を乗せた。

イメージは、呪縛からの解放。そのイメージを保ったまま、何度も結晶体をさすり、染み込ませるようにして精神力を注いで

いく。暫くして、反応があつた。それが何を意味する反応なのか、全くわからないが……とにかく、無駄な行為では無さそうだ。

その結晶体を用いて、マジックアイテムを再び組み立てる。そう、重要なのは、この結晶体なのだ。それ以外の部品は、平民にも作成可能……な筈だ。これをマジックアイテムとして成立させている要因は、全てこの結晶体にあり、つまりはここだけがメイジの領域。

この動作も、既に三回目。やや手慣れた手つきで、銃口を喉に当て……。

(……ん)

また、あの薄氷が砕け散る音。テーブルの上の手鏡を持ち上げ、自らの喉を確認すると、新たにルーンが刻まれていた。それはまさしく、先ほど自分がイメージした、アンスールのルーンとマンのルーン。呪縛に用いられたルーンを、そのまま正位置へと直し、負の要素を正の要素へと変換させた。

口を開き、試しに声を出そうとして……異変に気付く。

喉元のルーンは未だ消えず、青白い光を放つたまま、ぐにゅりと、粘土細工か何かのようになびき始めた。

(これは……？ え、ちょっとやばい……のか！？ ルーンが暴走して……！？)

手鏡を放り捨て、アクセルは両腕を交差し、身体を跳躍させた。

「ゲルマニアあ？」

「ああ。……どう思ひつ？」

片手で書類を持ち上げ、もう片方の手で頬杖を付くナタンは、フラヴィの言葉に素つ頓狂に返す。

書類からフラヴィへと、ナタンは暫く視線を移していたが、やがて溜息をつきながら次の書類を手にした。

「あいつは、別に天涯孤獨つてワケじやねえんだ。両親共に元気なんだぜ？ それに……わざわざ九歳の子ども亡命に手を貸す貴族なんぞ、いると思うか？」

「……そうだった。あいつ、まだ九歳だったね。すっかり忘れてた」

「気にすんな、俺だつて信じちやいねえんだから」

声を失つても、相変わらず余裕があるアクセルだが、考えてみればそう不思議な事でもないと、フラヴィは思い直す。

あの少年は臆病なほどに心配性だが、貴族が命の危機に陥るなど、戦争でもない限りはそうそう無い。魔法で何とか死の淵から生還する……そんな貴族が、どれだけいるというのか。多くの護衛に守られ、恐れられる者は、本来もっと気楽に、怠惰に過ごしていくべきなのだ。

アクセルは長男であり、何れはラヴィス子爵として領地を継ぐ存在である。次男坊三男坊のように、無理をして職を得る必要も無いのだ。トリスター亞での出世にも興味がないし、名声も欲しがらな

い。高い能力を得ても、それを隠してしまつ。つまりは、一生領地で平穏に暮らすという未来があれば、それでいいのだ。そして、その願いはこの街の表裏を握ることによって、確固たるものとなる。

（別に……問題ない、か）

例え声を失い、メイジとしての能力を失う事になったとしても、まさかラヴィス子爵家から間引かれるという事は無いだろう。ゲルマニアへの亡命は、万が一、そんな事になつた場合の最終手段なのだ。

失敗しても、死ぬわけじゃない……あの夜、アクセルはそう言つていた。

廊下の方から、足音が近づいてくる。ナタンは書類を見つめたままだが、フランソワはふとそちらを見た。

書類の束を捲りながら、バルシャヤが入つてくる。目には隈を作り、髪は乱れていた。フランソワは確認するよつて、ナタンを振り返る。やはり彼の目の下にも、隈が出来ていた。

何故、彼等はろくに休もうともしないのだろうと、彼女は考える。アクセルですらそれなりの睡眠を取つてゐるのに、一人ともまるで横になるのを嫌うかのように、忙しなく動き回つていた。アクセルは、恐らくそのことに気付いていない。もしも気付いていれば、自分を手伝うよりも組織を固めろ、と、説教の一つでも行うだろう。

「……どうだつた、バルシャヤ」

相変わらず見向きもせずに、ナタンは尋ねた。

バルシャヤも、自分の机に腰掛けながら、目線は書類の上を走つてゐる。

「元々、ガリアのマジックアイテムですからね。なかなか扱りませんが、今、存在を確認させています。製作者ですが、新たに一人ほど候補が挙がりました」

「誰だ？」

「サンソン男爵に、フォントネル伯爵」

「……その情報は、どの程度信頼出来る？」

「申し訳ありませんが、何とも言えませんね。サンソン男爵の方は、ガリア国王に謁見した際、関与を否定した、とされていますが……秘密の多い家柄だけに、信用度は低いようです。フォントネル伯爵は、療養の為に自領に引きこもつていて、詳細は……」

ただ声を封じるマジックアイテム……しかし、メイジにとつては恐るべきもの。

自分が開発した、などと声高に喧伝する者はいないだろう。売名目的で口にする者は、ただの愚か者であり、そもそも製作する能力を持つとは思えない。

メイジの天敵を作り出してしまった製作者の情報は、勿論の事、そう簡単に得られるものでは無かつた。

本人が、必死に隠しているのか。それとも、既に王国と繋がっていて、飼い慣らされる者として生き永らえているのか。

「作ったヤツより、作ったモノを探すのが先だな」

「ええ。特に、今は」

一人がようやく、互いの顔を見合わせ、確認し合つた時だつた。

「……？」

フラヴィイは、最初は怪訝そうに、しかしあがて確信したよつて

を見開くと、突然床に這い蹲つた。まるで壁の向こうの音を拾おうとするかのように、床に耳を押し当てる。

「……どうした？」

妙な行動に出た彼女に、ナタンは身を乗り出す。這い蹲つたまま、フラヴィは口を開いた。

「地下で、何か……物音が……」

一瞬の後、ナタンとバルシャは飛び上がるよつとして机を超え、ドアに向かつて走り出した。ナタンに飛び越されたフラヴィは、思わず身体を縮めていたが、すぐに起き上がり、二人の後を追つ。廊下を走り、地下への階段を駆け下りていくと、アニエスの悲鳴が届いた。ある意味聞き慣れたものではあるのだが、今回に限つては、まるで絶望したかのようなそれだった。

「ちいっ！」

一番早く辿り着けたのは、ナタンだった。僅かに開いたままの倉庫の扉を、飛びかかるようにして蹴り開く。

「ベル！ 無事か！？」

答えが返つてくる事に、ほんの僅かの期待を込める。だが勿論、その期待は外れた。

「早くつ、早く来てえつ！ ベル君がつ……ベル君があつ……！」

完全に取り乱した、アニエスの声。この出所を探そうと周囲を見

回すが、そうするまでもなかつた。灯りが漏れる倉庫の片隅、半壊した木箱の陰から、涙で濡れたアーネストの歪んだ顔が覗いていた。ナタンに続き、他の一人もそちらへと駆け出す。

「…………！」

散乱する本や実験器具、木箱や樽の破片。マチルダ達に被害が及ばないよう、咄嗟に距離を取つた彼の身体は、碎けた木箱の上で、壊れた人形のように横たわつていた。

いや、横たわつていた……その表現は正しくない。アクセルは歯を剥き出しにして、両手で喉を押さえ、痙攣するように背を仰け反らせている。額には脂汗が浮かび、唇は震え、そして喉元からは大量の出血があつた。

ティファニアが、ボロボロと涙を溢れ零しながら、アクセルの腰にしがみついている。マチルダが服の袖で、止まらない血を拭っている。ミシェルは蒼白な顔で、自分を失つてしまつたかのように虚ろな目を、アクセルへと向けていた。

カツと、アクセルは目を見開く。目玉をひり出そうとするかのように、瞼を上下にこじ開け、そしてナタンに視線を向ける。右手で、震える人差し指で、テーブルの上を指した。抑える手が片方となつたことで、喉が露わになる。食い破られるようにして空いた大きな穴から、隙間風のような音と、血の泡が零れだしていた。

考えるよりも前に、ナタンの足が動く。指されたテーブルへと駆けつけ、一通り見回し、すぐに小綺麗な瓶だと判断した。見覚えのある、水の秘薬である。

栓を引き抜きながら、アクセルの元へ駆け寄ると、無我夢中で、中身を全て小さな喉へとぶちまけた。

アクセルはそれを逃さないよう、両手で書き集めるようにして、喉元を撫でる。そしてごろりと俯せになり、身体を縮めて震える。その様子が、まるで寒さに凍える小動物のようで、マチルダは覆い被さるように抱き締めた。

「…………」

呼吸音と言うよりは、ボロ小屋の中に吹き荒ぶ、冷たい隙間風。ひゅーひゅーと鳴るその音の間隔が、徐々に短くなっていく。そして、一定の間隔へと落ち着いた。

マチルダが、恐る恐る身体を離す。アクセルは再び寝返りを打ち、仰向けに、大の字に寝転がると、安堵したように目を閉じ、溜息をついた。既に喉の穴は塞がり、元通りとなっている。

そして、その喉元には……再び、ルーンが閃き、染み込んでいた。

喉の大部分が破壊されながらも、それでも尚、呪縛はアクセルの身体に居座っていた。

「…………」

むくりと、アクセルは背を起こす。飛び込んでくるティファニアを受け止め、隣のマチルダの頭を撫で、ようやく顔色を取り戻し、涙を流し始めたミシェルに、苦笑いのような笑顔を向けた。

水のメイジを連れてきたバルシャに、軽く手を挙げて無事であることを示す。

「おい……大丈夫なんだろ？」「

問い合わせるよ、……いや、文字通り、ナタンが詰め寄った。睨むように見つめる彼に、相変わらず曖昧な笑顔を返し、見せつけるように喉を示す。

アクセルは膝に手を当て、立ち上ると、覚醒させるよ、何度か首を振った。

そして彼が歩み寄ったのは、黒板だった。床に転がる白墨を拾い上げ、小気味良い音を響かせながら、文を記していく。

“『めん、ちょっと失敗”

「失敗つてレベルじゃねえぞ！」

ナタンの怒鳴り声は、本当に怒っているのか、それともいつもの突っ込みが、背を向けるアクセルには判断できない。

“悪いけど、出て行つてくれ。時間は限られている”

そう記すと、アクセルは皆の方へと向き直り、そのまま両膝を床に突き、倒れ伏した。

第十五話「半分」（前書き）

PV55万アクセス突破、ユニーク6万突破、
お気に入り1050突破、総合評価2600突破、
ありがとうございます！ 皆様のおかげです！

そして遅くなつて申し訳ありません。リアルが多忙になり、今までの更新速度は無理です。感想を下さつた方、ありがとうございます、返信が遅れていて申し訳ありません。なるべく早めにアップしようつと思想いますが、また遅れてしまいそうです。

今回、あまり進んでいなくてすみません。

幼い頃、母親に抱かれて昼寝をしていた記憶がある。屋敷の中庭で、白いオーク椅子に腰掛ける母親の胸で、暖かな日差しを浴びながら、子守歌に包まれて微睡んでいた。

（……俺、何でこんな事思い出してるんだ？）

そう考えた時、唐突に、自分が眠っていることに気付いた。感覚が戻り、暖かいものがくっついているのを感じる。

そつと、瞼を開いてみた。視界に、緑色のものが映り込んでいる。何とはなしに手を伸ばし、触れてみると、マチルダの髪であることを示す心地良さが伝わってきた。

「…………」

暫く、まつりとした頭で、その感触を楽しむ。いつもはアクセルを抱き締めるようになつてしているのだが、今回のマチルダは、アクセルの胸に抱き付くような形になつていた。

やがて、覚醒が進むと、気を失う前の記憶が蘇つてくる。

（ああ……失敗したのか）

からは、ルーンの暴走。単純に、逆位置のルーンを正位置のルーンで上書きすれば、と思つてしまつたのだが、改めて考えれば確かに浅慮すぎた。熱が下がらないからと書いて、氷水をぶつかけるよ

うなものだ。

（確かに……使い魔のルーンだつて、死ねば消えるようになつてたよな？）

そう……実は、解呪する方法は一つだけある。
死ねばいいのだ。

（仮死状態でも、ルーンの効力が消えたりするんだよな？ アニメでは、タバサが仮死の魔法を使ってたけど……）

人間を仮死状態にする魔法は、広く知られてはいないが一応存在する。

しかし、確実に蘇生するわけではないのだ。アクセルは使えないが、文献を漁つた限りでは、どうやら成功率は20%や30%といったところで、あまりにも危険すぎる。その事を知った時には、結構とんでもない賭けに出てたんだな、と、タバサを恐ろしく感じた。あの時は、止めを刺そうとするアニメスから重傷のコルベールを守るために、死んで元々、という判断もあつたのではないだろうか。そもそも仮死状態になつても、確実にルーンが消えるわけではない。あくまで、その可能性があるというだけだ。

当然の事、却下。例え使えたとしても、

髪を撫でられている感触に気付いたのか、マチルダの頭が動いた。寝惚け眼でアクセルの顔を確認し、おはよう、と言つ代わりに柔らかい笑みを浮かべてくる。

しかし、だんだんとその顔が歪む。目を潤ませ、そつと手を伸ばし、少女はアクセルの喉を撫でた。

ふと、アクセルは自分の状態を確認する。寝ているのはベッド、

マチルダと反対側にティファニアがあり、ミシェルは突つ伏して寝ている。着せられているのは寝間着で、血だらけになってしまった衣服は誰かが着替えさせてくれたらしい。アクセルも生娘というわけではないので、着替えさせたのが誰なのかは興味がない。

「…………」

そこで、彼はハツとして上体を起こした。壁際の時計を見て、時間を逆算する。

（俺、どれくらい寝てた！？　この時間だと……　7時間！？　1
9時間！？）

昼夜の分からぬ地下に籠もつていたせいで、いまいちはつきりとはしない。しかし、貴重な時間が失われてしまつたのは厳然たる事実だ。

少し考え、気絶したのが毎回だつた事を思い出し、窓を見る。日光が全く差し込んでこないならば、7時間だろう。勿論、31時間という可能性も否定し切れないが。

（その程度で皿を覚まして良かつた、とポジティブに考えるべきか？　まあいい、さつさと……）

ベッドから抜け出そうとした時、ぐいと手を引っ張られた。躊躇けながらも何とか体勢を立て直し、後ろを振り向く。マチルダが、両手でぎゅっと、アクセルの掌を握り締めていた。

アクセルはしゃがみ込み、少女の喉に触れる。少女は相変わらずの泣き顔で、アクセルの顔を見上げ、そしてブンブンと首を振つた。

（……お願い、マチルダ）

ああ、声が失われたという事は、何と不便で残酷なのだろう……
アクセルは唇を結ぶ。

怒りを抱いた時、怒鳴る事も出来ない。

悲しい時、号泣する事も出来ない。

楽しい時、笑い声も上げられない。

ありがとう、が言えない。

ごめんなさい、が言えない。

おはよう、が言えない。

苦しくて辛い時、心が碎かれそうになる時……助けて、といふその一言が言えない。

握られていた手を握り返し、アクセルはマチルダを引き寄せた。頭を交差させ、両腕を精一杯に伸ばし、その身体を強く抱き締める。

泣き言も言えず、助けも呼べず、彼女はティファニアを守りながらずっと耐えてきた。

彼女たちの中には、一体、どれ程の濶が沈殿しているのだろう。どれ程、溜め込んで来たのだろう。

苦しかった事、辛かった事、悲しかった事……全て、聞いてやりたい。吐き出させてやりたい。この小さな身体から、少しでも重りを削り取つてやりたい。

その願いを叶えるには、結局、やるしかないのだ。

アクセルはそっと、マチルダから離れる。今度は、彼女も引き留めず、ただ手を離してくれた。

ミシェルを抱え上げ、ベッドの上に寝かせ、ティファニアの毛布

を直す。

部屋を出ようとすると、マチルダもついてきたが、アクセルは敢えて留めようとはしなかった。

ドアノブに手を掛け、回し、押してみるが、ドアは動かない。

「……？」

ただの仮眠用の部屋で、特に鍵は取り付けていなかつた筈だ。引いて開ける扉、というわけでも無い。

数秒ほどドアノブを見つめるアクセルは、やがて腰を沈め、拳を構え、正拳突きを放つた。ドアを吹き飛ばす、などという豪快な相似は無理でも、この小さな拳はその硬さと相まって、石槍の如く板を貫通する。皮膚が破れ、血が滲むが、大した痛みには思えなかつた。

拳を引き抜き、しゃがみ込んで空いた穴から外を確認する。よく映画で見たように、椅子を斜めに倒し、ノブを固定しているらしい。アクセルは立ち上がると、今度はドアの前で、両掌を構えた。

ボオンッ

巨大な掌によって、ドアを押し開けるイメージ。掌の前で、爆発するように吹き荒れる風は、ドアの蝶番を跳ね飛ばして椅子ごと吹き飛ばす。壁に叩き付けられた椅子が、飴細工のように崩れた。

（行かせない……と、そういうことか？）

軽く手を叩きながら、ただの穴となつた出入り口を眺める。ミシエルとティファニアが、音で目を覚ましてしまつたようだが、アクセルはさつさと廊下に出た。

ふと、右側で何かが動く。

「また……行くつもりかい？」

声で分かつたが、そつと、首を回す。
アニエスが木剣を構え、今にも打ちかかって来そうな視線を向けていた。

アクセルの頭に浮かんだ感想は、この少女は一体何をしているのか……それだけだった。

ドアを塞いだのは、アニエスだろう。木剣を握っているのは、真剣だとアクセルに怪我をさせてしまうからか。そして彼女の目的は……目的は？

彼女と向き合つたまま、少し考えてみる。ドアを塞いだのはつまり、アクセルを外に出さない為。また、あのような事故が起きると考えているのかも知れない。しかし、続けない事には、アクセルは永遠に声を失つたままなのだ。だとすれば、このままタイムリミットまで監禁して、失敗させようという事か。

（……ダメなんだよ、アニエス）

アクセルは、今回のこれに対し、失敗は許されないと考えている。

このままでは、声を封じられたまま執政府のリーズの元へと戻ることになるのだが、そうなつた場合の言い訳を用意していないのだ。せいぜい、レオニー子爵領から戻る途中、狼藉者にマジックアイテムでやられた、程度のお粗末なもの。

ただ声を封じられる、その程度の事だが、それがメイジの、貴族の嫡男だとすれば……。

リーズ、ローラン……彼等が責任を負わされる恐れがある。一人とも、人を見る目が無い事を自負するアクセルが、原作知識無しに信頼する、数少ない人物。その彼等に、この敗北の責を背負わせるわけにはいかないのだ。

「言つておくが、ベル君！ 私は本気だ！」

足を震わせながら、アニエスが叫んだ。

しかし、やはり、アクセルは……何をしているんだ、と、その感想しか出せなかつた。

未来のメイジ殺しも、今はまだまだ無力な小娘。勿論、成長はしているのだが、あくまで常識の範囲内でしかない。

アクセルはそつと、か細い息を吐き出すと、両の拳を握り締め……構えた。

（アニエス）

声が出ないまま、彼女に告げる。

その目で、その構えで。

（僕が一体、何年前から……鍛錬を続けてきたと思つてる？）

死なないため、殺されないため。その一つは、アクセルにとつて同義では無い。

死なないため、表に出ることを避けた。注目されることを嫌つた。それは、死の回避。

殺されないため……強くなる目的は、それだ。自分を脅かす存在、自分と敵対する存在、そんなものが目の前に現れた時、それを討ち

滅ぼす為。

それは、障害を排除する力。

己が避けるか、相手を除くか……この場合は、後者である。

アクセルは一度目を閉じ、再び開くと……アニエスを睨み付け、飛び出した。限界まで引き絞られ、突如解放された矢が、一直線に襲いかかるように。

「つ……！」

アニエスは歯を噛み締め、木剣を振りかぶる。もつ以前のように、たかがそれだけの動作で躊躇けたりはしなかった。

しかし、残念なことにその動作は中身が無い。鷹が翼を広げるよう、肉食獣が鋭い歯を剥き出しにするような、威嚇としての動作。それが有効なのは、彼我の力関係に差がある時だ。自分より弱い者の恫喝に、膝を屈する者はいない。

振り下ろされた木剣が、攻撃せずにそのまま突っ込んで来たアクセルの額と衝突し、へし折れた。

「……！」

痛みと耳鳴りに歪むアクセルの顔に、血の筋が走る。

（……強くなつたなあ……）

考えてみれば、アニエスも成長していた。威嚇のための動作、そこから繰り出された殺氣の無い攻撃でも、こうやって木剣がへし折れる。出会つた頃と比べれば、別人のような進歩だ。

軽量とはいえ、新品の木剣を、たった一度でへし折るというその事実は、彼女の成長を表すものだつたが……今、アニエスはそこで思い至らない。割れたアクセルの額、その下の双眸を見つめ、ぶるぶると身体を震わせていた。

軽く額の血を拭いながら、アクセルは少女を残して進む。アニエスが自分を心配してくれている、というのは理解出来たが、それでも止まれなかつた。

更に一人、前方にいた。右の壁に、腕を組んで寄り掛かるナタン。左の壁に、衛士のように立つバルシャ。

「…………」

二人をそれぞれ一瞥し、アクセルは構わずに進む。一步一步、距離は狭まり、やがて一人と交差し、そのまま何事もなくアクセルは過ぎ去つた。

詠唱不能のアクセルならば、そして一人がかりなら、腕尽くで取り押さえる事も可能だつた。それでも、ナタンもバルシャも、手を出さなかつた。

「……何故だつ」

崩れるようにして両膝を突いたまま、振り向かず、アニエスは怒鳴る。その怒りの矛先の二人は、一人は天井に向けて溜息をつき、もう一人は静かに目を閉じた。

「止めようがねえよ。あんな目に遭つて、まだ行こうつてんだ。どうやつて止めろつてんだ？」

「我々は、メイジではありません。信じて待つ、それだけしか出来ません」

納得は無理でも、理解は出来た。ナタンもバルシャも、そしてアーニスも。

だからこそ、心がざわつく。背を支えることも、手を貸すことも出来ず、ただ待つしかない自分に。

彼が死を恐れるのなら、襲いかかってくる敵から守つてやる事も出来る。しかし、アクセルは喉を吹き飛ばされながら、また繰り返そうとしている。自ら進んで、危険へと飛び込んでいる。そんな人間を止める術など、誰も持ち合わせてはいなかつた。

確かに、声が出せないのは不便ではある。しかし、それが不治であつたとしても、命を脅かすようなものではないのだ。彼女たち三人は、十分にその一生を全うすることが出来る。アクセルの立場であれば、表から裏からサポートし、この領地に囲うことだって出来るのだ。

彼女たちが、表に出せないほどに重要な人物であるならば、尚更、声など出せない方がいいのに。

「……まだ、グチグチと悩んでいるのか？」

沈黙する三人、その誰でもない声が、彼等の頭上に降りかかる。いつの間にか、すぐ目の前にまで歩み寄っていたスルトに、アーニスは悲鳴を上げかけて後退つた。

「……悩んでちゃ悪いかよ」

「ああ。悪いな」

仏頂面のナタンの言葉を、間髪入れずスルトは両断する。

「過ぎた不变の事実を、いつまでも語るな」

一応、身体を清めてきたらしいが、アクセルが声を失つてから今まで、ずっと留守にしていたスルトである。何をしてきたか、とう事も知つてゐる三人には、彼が吐き出す言葉の一つ一つにすら、べつたりとした返り血が付着しているようで、奇妙で重厚な圧迫感に息苦しさを覚える。

「そもそも、だ。ヤツが今行つてゐる事は、奪われたものを取り返す事ではない」

スルトは更に続けた。

「奪われたのは時間であり、取り返しよのないものなのだ。ヤツは今、戦つてゐるのだ。何と？ 悪意と。何によつて？」

彼はそこで、三人に背を向け、大きく両手を広げる。見えるはずもない双月を見上げ、それらを受け止めよつとするかのよつに大きく息を吸い、そして笑みと共に吐き出した。

「愛によつて、だ」

三人ともが、面食らつた。

この目の前の大男の口から、そんな言葉が出た事に。この大男の頭の辞書の中に、そんな単語が用意されていた事に。

「信じる信じない、ではない。必然なのだ。例え一年かかろうが十年かかろうが、ヤツは必ず、この戦いに勝利する。何故ならば、ヤツはそれに値する者だからだ」

「……随分と、信じてるんだな。あいつの事」

ナタソの言葉には、若干の嫉妬が籠もつていた。そしてその感情

は、アーネスも同じである。

貴族としてではない、裏のアクセルと最も付き合いが長いのが、この二人だった。これまでの交流の中で、それなりの信頼関係を築けたという自負もある。

しかし、この昨日今日仲間になつたばかりの男が、まるで自分たち以上にアクセルについて理解しているようで、自覚出来るほどのものでは無いのだが、確かに嫉妬は生まれていた。

「もう一度言つ。信じる信じない、ではないのだ。既に半分終わつていてるのだ」

「何？」

「やり始めた者は、既に半分を終わらせていい。やり終える、という残り半分を、我々はただ待つていればいい」

本人達ですら自覚していない嫉妬に、スルトが気付けたのかどうか……彼はそれを表には出さない。

振り向いたスルトは、見えない目で、三人を見回した。

「俺は既にやり始め、そしてやり終えた。……お前達は、何をやり終える？ それとも、これからやり始めるのか？」

甘かった。

軽く考えていた。

ベッドの上に身体を横たえ、右腕で両目を覆い隠し、眠り込んだ
よつこに動かないフラヴィ。彼女の脳裏に蘇るのは、吹き飛ばされた
喉。

気分が悪くなつた、と、ナタンやバルシャに告げ、それからずつ
と自室で休んでいるが、相も変わらず鮮明にあの光景が浮かび上が
る。

アーネスの怒声と、何かが碎ける音。そして、その後の彼等の会
話からするに、アクセルは再び地下室へと戻つたらしい。

心のどこかで、考えていた。

貴族の坊ちゃんの気まぐれだと。魔が差しただけだと。

(……全然、本気じゃないか……)

矛盾している。水の秘薬を用意していたとはい、それであの大
怪我が治るかどうか、確証は無かつた筈だ。あの少年なら、こんな
手段に走る前に適当に山賊でも捕まえ、どの程度の怪我なら治るの
か調べ上げそうなものなのに。

死にたがりではないが、アクセルは命を賭けて、治療に臨んでい
た。

(……そんな必要が?)

声が出なかつたとしても、死ぬわけではないのに。声の出ない三
人を、生涯守り抜けるほどの力を彼自身が付ける方が、よほど堅実
だつただろうに。

しかし彼は、その道を選ばなかつた。誰から悪意で呪われたわけ
でもない、自分から、自分の手で、自分の声を奪つてしまつた。

（ただ、焦つただけ？）

以前から、声を取り戻す方法を模索していた事は聞いている。マジックアイテムを求めていたことも。

たまたま、今、我慢が出来なくなつたのか。スルトが言つていたように、『今しかない』のか。

（ああ……まだ……）

心の中に、黒くじんよりとしたものが広がつていくのを感じる。先ほどから何度も、別の考え方事に意識を集中させようとしても、この得体の知れない何かが、結局全て食らうことになってしまうのだ。

フライヴィはベッドの上で、胎児のように身を縮める。

何者も、己の身体を引きずり寄せる事が無いように、必死で身体を強張らせる。

あの時……初めて、アクセルと出会った時。

次々と破壊されていく傭兵達を、呆然と見ながら……それでも、心はどこか浮き足立つていた。まるで、長い間探し求めていたものを見つけた時のような、躍り出したくなるような気持ち。

その時は、気付かないふりをしてただひたすらに、常の自分であるとした。

しかし、今度はあの時、アクセルの吹き飛んだ喉、その傷口のピンク色の肉を見ている時、また、あの得体の知れないものが覆い被さつてきた。それはまるで、自分の穴という穴から侵入し、体内へと染み込んでいくようで。自分というものが、蹂躪されていくようで。

(やめひ……考ふるんぢやない、フラヴィイ)

躊躇されつゝある自分を、何とか守るつとする。しかし、それはまるで一個の人格のようなものを持ち、話しかけて来た。

何故、お前は人よりも耳がいい？

何故、遠く離れた場所の会話が聞こえる？

何故、お前は足が速い？

何故、他人よりも高く遠くへ跳ぶ事が出来る？

その疑問に、彼女は反論じよつとじつしまつた。違う、自分はどこもおかしくなど無いと。そしてその時、フラヴィイは自分の内側と向き合つて……漫食を許してしまつた。

ら、それで消えてしまつ可能性が高い。しかしそうならなかつたのは、何故か。

（やはり、イメージだな）

水の秘薬を使いながら、自分でも何とかヒーリングをかけた。しかしじどうやら、自分は既に、呪縛を受けた喉を通常状態として意識してしまつたらし。

（もう一度、喉を吹き飛ばして……喋れる状態の自分を強く意識すれば、呪縛は取り除けるか？）

水の秘薬は、あと二つある。一瞬浮かんだその考えを、アクセルは首を振つて頭の外へと追い出した。確かに、試してみる価値はあるだろうが、例え成功したとしても、それが他の三人にも適用できるかは分からぬ。

アクセルは、喋れる状態の彼女達を見たことが無い。よつて、イメージするのは難しい。彼女たち自身も、もづ、喋れない状態の自分たちを、イメージの基本に置いてしまつているのだろう。アクセルは、一晩でそうなつてしまつたのだから。

魔法びつひつとは、精神にかけられた呪いだった。

（考えよつによつては……魔法单体でも、声を奪う呪いはかけられるつて事だよな）

一度吹き飛んだルーンを、そのまま再生するだけとはいえ、今この呪縛は間違いなく、自分の精神が引き起こしたものだと言える。

アクセル自身、ここまで冷静である自分に密かに驚いていた。

あの時は、水の秘薬を誰かに取つて貰えればいいだけだったが、確かに死ぬほどの大怪我だった。

死んでしまう可能性も、決して低くは無かったのに、何故、自分はこうやって、未だ続けようとしているのか。

「…………！？」

そしてアクセルは、背後を振り向く。

漫画やアニメで、殺氣や気配を感じるという表現があるが、そんな事は実際には起こり得ないと思っていた。足音が聞こえたり、何かが動く風を感じただけだろうと。

しかし、違つた。一応、表向には風メイジであるアクセルは、空気の動きや振動に敏感だが、それでは無かった。背中に氷柱が滑り込んできたような、思わず身を縮めるような感覚。

振り向いても、そこには誰もいない。応急処置を施された地下倉庫の扉が、頼りなげに傾いているだけだ。

マチルダやティファニア達は、風呂に行かせた。あと二十分は戻らないだろう。ナタンかバルシャか、アニエスか、それとも帰還したスルトか。

誰かいるのか……そう、声に出して尋ねる代わりに、アクセルは静かに扉に歩み寄る。

しかしその時、無事だった方の扉がするりと開き、一人の女が姿を現した。

（……フライ？）

マチルダから、フラヴィイは気分が悪くなつて休んでいると聞いた。確かに、あんなスプラッタもどきを見せられたのでは無理も無い、そう思つていた。

彼女は白い寝間着を纏い、俯いて床を見ている。ふらふらと左右に揺れ動き、それは傍らの壊れた扉と同じく、ひどく頼りない存在に思えた。

(……一体、どうした？)

常とは違つ彼女の様子に、そつと歩き出す。すると、フラヴィイはそつと顔を上げ、無表情のまま、赤い瞳をアクセルに向けた。さながら宝石のような眼球を、アクセルも見つめ返す。見つめ合うのはこれが初めてというわけではないが、その赤には、やはり心惹かれるものを感じる。ひどく綺麗なのだ。

フラヴィイの身体が、前のめりに傾く。アクセルは驚き、慌てて彼女の身体を支えようと、受け止めようと、そして走り寄ろうとした。

しかし、倒れると思つたフラヴィイは、既にアクセルの目の前にまで来ている。

(……え？)

赤い瞳が、アクセルを捉えていた。

第十六話 ▶ 逸勝 ▶ (前書き)

今回短くて済みません。
あまりに遅れているので、出来たところまで。 続きはまた遅れそう
です。

（まるで、地獄の色だ……）

後から考えれば、それはほんの刹那の瞬間だったが、アクセルはその時、そんな感想を持った。地獄には未だ行った事がないし、出来れば永遠に御免被りたいが、きっと本物の地獄も、この瞳と同じほどに美しいのではないか……そんな思いが浮かぶ。

「……！」

アクセルは尻を落とし、尻餅をつくようにして座り込んだ。フライの右手が、頭上を凄まじい速度で通り抜ける。そう、そんな無様な回避行動しか、選択肢は残されていなかつた。

（……何が何だか、さっぱりわかんねえが……）

尻餅をついた勢いを利用し、素早く後転し、床をはね除けるようにして立ち上がる。

空振ったフライは、そのまま停止していたが、ゆっくりと、あの赤い瞳をアクセルへと向けた。同じ色ではあるが、普段の彼女のそれとは、あまりにも雰囲気が違ひ過ぎる。

（この厄介な時に、厄介が仲間を呼んで、おや、厄介たちの様子が……なんと、キング厄介が現れた、って事だけはわかる。……俺のバカ、落ち着け、少しほ

軽く息を吐き出し、床を踏みしめ、拳を構える。

一体、何がどうなつてフラヴィイがこうなつたのか、それはさっぱり分からぬが……とにかく、フラヴィイが明確な攻撃の意志を持っている事だけは確かだ。無造作に振られたあの右手だが、それはちようどアクセルの頭の位置を空振つており、回避しなければ無事では済まなかつただろう。流石に首が千切れ飛んだりはしないが、身体ごと吹つ飛ばされていたかも知れない。

油断無く構えるアクセルだが、フラヴィイはふと、踵を返した。

(そのまま帰る……つてのは無理だよな)

若干の期待を込めてそう願つたが、それこそ問題の後回しである。このまま事務所や娼館の人間に被害が出れば、田も当てられない。それならば、ここで自分が、何とかするしかない。

(……出来んのか?)

詠唱できないメイジという、導火線のない爆弾のような自分が、果たしてどこまで出来るのか。確かに普段のフラヴィイなら、素手で勝てる相手だろうが、今のフラヴィイの戦闘能力は未知数なのだ。

「……死に木よ」

背を向けたフラヴィイは、ぽつりと呟く。

「やひわざわと這い寄りて、疎ましき壁となれ」

変化があったのは、木製の扉だった。重厚な扉を構成する板が、意志を持つたかのように伸び、軋みながら結合して壁に潜り込み……それはもう扉という出入り口ではなく、ただの板の壁となっていた。

アクセルの体中から、どっと汗が噴き出す。からからに乾いた唇を、舌を這わせて潤すと、フラヴィに向かって走り出した。

(今のつて……先住魔法じゃねえかっ！？)

彼女は確かに、精靈を操り、扉を変形させた。杖を持たずに、口語の詠唱のみで。

もたもたしていれば、一いちらがやられると、彼はそう判断した。

(くそつ、何でこつた！ エルフ……じゃないよな、流石に。じやあ何だ？ 翼が生えてないから翼人じやないつ、なら、獣人？ 吸血鬼？ それとも娼婦らしく、サキュバスか？)

アクセルが思いつけるのは、それが全てだった。

アクセルは先住魔法を使えないし、それどころか実際に使われるのを目にしたこともない。周囲の精靈の力を利用し、メイジが使うそれよりも強力なものを使用できるというが、なるほど確かに、あんな魔法は自分には出来ないだろう。

あのような魔法を使うのは、つまり、外から邪魔されない為であり、内から逃がさない為。一対一でフラヴィと戦い、圧倒しなければならない。

(……惜しい)

ぎこつ、と、歯を噛み鳴らす。それはまるで、ようやく見つけた泥中の宝玉に、見逃せない瑕疵があつた時のような、そんな悔しさ。フライの有用性は、既に熟知している。ファミリーのため、更には娼館のためには、失いたくない人材だ。しかし、今、彼女の命を損なわずに事態を解決出来る可能性は低く、それどころかアクセルが殺される可能性が高い。

（……厄介なもん抱えやがつて。先に言つといてくれよ、そういう事は……）

フライを射程範囲内に捉えたアクセルは、迷わず拳を突き出す。が、そこにフライはいない。しかし、先ほどとは違つて覚悟していた為か、その動きは田で追えないものでは無かつた。真上にジャンプしている。

（そんな、大袈裟な避け方するもんでも無いだろうに。いや、持て余しているのか？ 力を……）

先住魔法を使う相手となれば、距離を取る事は出来ない。詠唱させる隙は与えられない。

斜め上、フライに風の爆弾を放とうとしたアクセルだが、どこまで威力を込めればいいのか、その判断が出来なかつた。

（余裕ぶつてる場合か？ いくら惜しいとはいえ……）

迷いは隙こそ生まなかつたが、代わりにチャンスを逃した。

飛び降りてきたフライは、振り上げた右手をアクセルに叩き付ける。咄嗟に、彼女の左側へと逃げる少年の太腿を、爪が掠つた。

「……っ！」

顔が歪んだのは、痛みによってではない。ズボンの布を軽々と引き裂き、更にその下の肉体を傷つけた、彼女の爪の強靭さに驚いた。左手を伸ばし、フラヴィイの左袖を掴む。それを引き寄せるようにして、更に彼女の左側へと周り、右拳を脇腹の後ろあたりへ叩き付けた。

（確かに、この辺りだつたよな？ 肝臓は……）

危険すぎて反則技とされる、肝臓打ち。

「がつ

フラヴィイは短い呻き声を上げ、その身体を崩す。通常の身体であれば大ダメージだが、一秒とせずに手を伸ばしてきた彼女は、既に通常の身体ではない。

（全力でなかつたとはいえ……結構ショックだ）

びりびりと布が裂け、アクセルの手に袖が残される。

自由になつたフラヴィイは、今度は両手を使い、頭上からアクセルを捉えようとした。

（バカの一つ覚えに、やられてたまるかっ）

少々の無茶を行つても問題ないと判断し、アクセルは更にフラヴィイに接近し、彼女の両腕の内側へと潜り込む。

そこはフラヴィイではなく、アクセルの間合い。だが、両手両足全ての攻撃が出来ないその距離で、彼女はぐつと、顔を異常な速度で

近付けてくる。

(…? 間に合わ……)

風の爆弾を放つよりも一瞬早く、フラヴィの開いた口が、アクセルの首を銜えた。それと同時に、鋭い痛みが走り、放とうとしていた風の精霊が霧散する。

(吸血鬼……か……!)

彼女の正体を確信したところで、床に押し倒された。馬乗りされ、両手同士を封じられ、のしかかる体勢のまま、血を吸われる。

(……何……だ……これ……)

体中から、体温が失われていく感覚。前世で献血をした時と似たような感覚であり、別段不思議な事でもないが、それよりも、脱力感に衝撃を受けた。

(……そつか……噛まれたら終わりなのか……)

“彼岸島”の吸血鬼のように、吸血鬼の牙には、筋弛緩作用があるらしい。一度噛まれたら最後、そのまま抵抗も出来ずに血を吸われてしまう。

当たり前と言えば、当たり前の事かも知れない。吸血鬼は確かに、ハルケギニアで最も危険とされる種族であるが、力自慢なら対抗できる程度の筋力しか持たない。にも関わらず恐れられるのは、魔法でも人間との違いを探知出来ないという、その極めて高い埋没性によつて、である。

この世界の吸血鬼は、“彼岸島”的に人間を家畜化などせず、

一気に吸い殺してしまう。屍人鬼として操る場合は別だが、基本的に一度噛みついたら、その人間の全ての血液を吸収する。ひょつとしたら原作に出てこないだけで、密かに人間牧場でも作っているかも知れないが、隠れ住む存在である彼等だからこそ、少数から限界まで搾り取るという食事法なのだろう。

一人の人間が持つ血液は、体重の12か13分の一くらい。出血死するのは、その三分の一が失われた時。アクセルのような子どもならともかく、大の大人なら5?程の血液を有し、出血死させるどころか、出血多量の状態にするにも時間がかかる。その間抵抗されない為にも、筋弛緩作用は必要な能力なのだろう。

（……つて……俺は……何を暢気に……）

子どもの自分なら、その速度は更に速まる。吸血鬼に噛まれたら終わり、という教訓は、死を代償として得なければならないものなのか。

（吸血鬼の……弱点は……？ 太陽の光、流れる水、大蒜、十字架、銀……。けど、どうもこの吸血鬼は……太陽の光に弱い、くらいしかないな。……待てよ……）

アクセルは、体中の力を一点に集中して絞り出すように、指先に力を込めた。

（イメージだ……イメージなんだ……。大蒜は駄目、流れる水は無い、十字架も駄目……なら……退魔の力を持つと……言われる……）

血を吸うフランヴィは、気付かない。少年の力無い指先が、自分の身体の上をなぞっているが、それはただの力無い抵抗だと考えた。

落下していく巨大な岩に向けて、思わず両手を突き出してしまつようだ。

（頼む……あつてくれ……）

フラヴィイがあの薬を持ってきた時、自分が渡した銀貨を、彼女はどこに仕舞つたのか。受け取つた右手には持つてなかつた。一番考えられるのは、彼女の右のポケット。

「……」

指先に、硬い何かが触れた。それ以上の確認の時間が惜しく、無我夢中でイメージを込め、自分の精靈に追従させる。

“退け”と。

次の瞬間、彼女の身体は浮き上がつた。刺していた牙が無理矢理引き抜かれたことで、皮膚と肉が若干食い千切られたが、痛みはなく耳障りな音が聞こえただけだった。

アクセルの上から吹き飛ばされ、一メイルほど後方に落下したフラヴィイは、むくりと上体を起こす。

赤い瞳が、じつと、未だ満足に動けないアクセルを見つめている。静寂の中、地下倉庫に忘れられた柱時計の振り子が、その音を大きくしていった。

「ひつ……」

その音を、また取るに足らない雑音へと押し戻したのは、フラヴィイの悲鳴のような呻き声だった。

何かに取り憑かれたようだつたその瞳が、歪み、人の脆弱さを取り戻す。首筋に牙の傷跡を残し、ぼんやりとした顔で天井を見上げるアクセルが、その赤の中に映し出されていた。

「あた……し……あたし……」

フラヴィイは両手を自分の顔に這わせ、震え出す。それはまるで、触れているそれが人間の顔かどうかを確かめるような仕草だつた。歪み、揺れる瞳は、目を背けたいという感情と、自分の行動を見据えたいという感情の狭間で混乱している。

アクセルはようやく動くようになつた右手を、自らの首へと移動させ、掌で傷跡を押さえ込んだ。

(……寒い)

かなりの量の血液を奪われたようで、その代わりに氷水でも注入されたような気分だ。

妙な気分だつた。体中を脱力感が襲い、意識が朦朧としているのに、頭脳は冷や水を浴びせられたように落ち着いている。杖となつた指で、自分の喉を調べていくうちに、その冷静な頭脳は静かに回り始めた。

フラヴィイには、常に意識があつた。こいつやってアクセルを押し倒し、その首に噛みついて血を吸つたのも、自分がそれを望んだから。そうせすにはいられない、という、強い欲求故だつた。

しかし、その欲求が満たされてしまえば、また普段の彼女へと戻つた。戻つてしまつた。

首筋に噛みつき、その血を啜るなどという、およそ人間では考えられない行動を、人間という視点から見てしまつた。

ふと、漸く上体を起こしたアクセルと視線が重なる。暫く無表情を崩さなかつた彼は、やがて唇の端を吊り上げると、笑みに顔を歪めた。そして、喉に手を当てたままゆっくりと口を動かす。

「……賢者タイムの……ところ……悪いけど……」

「え?」

すぐに、フラヴィはその異常に気付いた。正常であるところ異常に。

掠れ、使い古しの手拭いのように擦り切れてはいるが、この少年の口から確かに、失われている筈の声が出た。

「……ちょっと……付き合え……フラヴィ……」

倉庫の扉が消えてから三時間ほどして、フラヴィが出て來た。

「……まだ貧血か?」

「いや……寧ろ……足りすぎ……」

「……?」

言葉短く、途切れ途切れにナタンに返し、彼女はよひよひと、壁に手をつきながら自室へ戻った。

地下倉庫の扉がどうして“こう”なったのかはわからないが、恐らくアクセルが何かやらかしたのだろうと、皆がそう思っている。スルトが鍊金を行い、壁に穴を開けて、今ではそこが出入り口となっていた。

「いい顔になってきたな

「……あれがか！？」

盲目のスルトが顔という言葉を使って評価を下す時、それはどの目開きよりも信用できる。が、今回ばかりは、ナタンも同意できなかつた。

物が散乱していた地下倉庫は、更に足の踏み場が無くなり、壁には黒板からはみ出した文字が、所狭しと並んでいる。ローン文字、ナタンでも読める文字、そして見たこともない文字の群。中には、血で描かれているようなものもあった。

それらの中心に胡座をかいて陣取るアクセルは、血走った目で書物のページを捲り、空いた手で口にハムを運んでいる。

（あの娘達を上がらせ、たつた一人になつたという事は……勝算が出たか）

あの少女達は確かにアクセルに依存しているが、アクセルも彼女たちに依存していた。それが必要なくなつたということは、突破口を開いたのだろう。確かに、この姿は幼気な少女達には見せるべきではない。

「つまり、どういうことだ？」

「女の前では、男は誰だつて頑張るだらう

「ああ。なるほど」

とりあえず納得したナタンだが、やはりアクセルが気になつた。時折顔を歪め、頭を搔きむしりながら本を漁る姿は、鬼気迫るものがある。そのまま本当に人間を辞めてしまつのではないけど、そんな馬鹿馬鹿しい杞憂すら頭を過ぎつた。

(マジで……テファア達に見せない方がいいな、これは)

元々、どこか振り切れている……いや、人間として何かが欠落している感があるアクセルなので、例え人間以外になろうがナタンは気に留めない。しかし、今のアクセルを見ていると、自分たちを置き去りにしてどこか遠くへ行こうとしているかのようだ、そんな不吉な予感を覚えてしまった。まるで、どこか異世界へと足を踏み入れていいかのようだ。

(この文字が……原因か?)

ナタンは傍らの文字に目を向け、そつと指を這わせてみる。ルーン文字や口語文字ではない、成り立ちからして異質な文字。適当に作ったものではないだろう。規則性があるようで、無いような……

そう、異世界から引きずつってきたような文字。

そしてそれを扱うアクセルの顔は、これ以上ない程に子どもらしかつた。

「……楽しそう……見えるな

「ああ、いい顔だ」

スルトは再びそう言った。

考えてみれば、自然の道理だった。十年近く親しんだ文字が利用できるのなら、二十年近く親しんだ文字が利用できない道理は無い。最も重要なのはイメージを具現化することであり、漢字を使うのはアクセルにとつて実にしつくりくる手段だった。

（……すごいな。間に合った）

屍人鬼化すれば、喉の呪縛を打ち破つて喋ることを発見し、かなり気持ちに余裕が出来た。しかし、その方法は出来れば使いたくなかったのだ。確かに喋ることは喋れるが、呪縛に呪縛を無理矢理ぶつけているせいか、喉の痛みが激しい。イガグリでうがいをしているように、ズキズキと痛みが走る。よつて、あの三人に使うのも却下。そもそも屍人鬼に出来るのは、吸血鬼一体につき一人だけだし、それ以前に屍人鬼にして問題解決という話も無い。

（フライヴィに感謝だな）

彼女が今まであの本性を隠せたのは、客の体液を吸収していた為だろうか。確かに、それではその場しのぎにしかならなかつた筈であり、何故今まで潜伏していたのかという疑問はある。事情を知つてそうなのはローランだが、彼は現在レオニー子爵領にいる。しかし、そんな重大な話を隠していたとは考えにくく、ひょっとしたら成果は上がらないかも知れない。

身体を屈め、倉庫の穴から外に出ると、スルトが座り込んでいた。娼館ですら灯りを消すこの時間に、まさか誰かいるとは思わず、アクセルは驚いて立ち止まる。

「……出来たのか

「……ああ

疑問ではなく、確認するような彼の口調に、アクセルは軽く笑みを浮かべて返す。少年の声を聞き、スルトはゆっくりと、大きく頷いた。

「そうか。では先ず一つ、おめでとう、と言つておいで

「ああ、ありが

「さて」

「ゾゾゾゾ」と硬いブーツの音が、地下の廊下に響き渡る。立ち上がり、歩み寄ってきたスルトは、アクセルの前に立つた。

「そのマジックアイテムか?」

「……ああ

「それを使わない、という選択肢もあるぞ」

スルトのその提案は、アクセルにとって予想だにしなかったものではない。アクセルは右手に持つ、拳銃型のマジックアイテムを改めて眺めつつ、何故彼はこんなにも的確に、自分の迷いを衝くのだろう、と考えた。

「……誰よりも早く、それを言つたために……わざわざ待つっていたのか?」

からかうように言うアクセルの言葉に、スルトは若干表情を和らげる。

「少年はついに試練を克服し、乙女達は声を取り戻した、めでたしめでたし。ところが、残念ながら世界は残酷だ。トウ・エ・ビヤン・パツセなどというのは、所詮は御伽噺の中でしか通用しない」

「ああ、そうだ。わかつてゐる。でも……」

「いや、気にするな。一度、聞いてみただけだ。成したいようにすればいい」

「……ああ」

彼女たちは、その存在を公にすることが出来ない。

現在スルトが確認した限りでは、こちらに敵対する人間はいても、こちらを監視する人間はいなかつた。

声を失った経緯は未だ分からぬが、彼女たちは悪意に晒されたのだ。その悪意の主がもし、彼女たちが生きていることを知り、更に声が戻つたことを知れば、再びその切つ先を向けてくることになる。

アクセルもスルトも、彼女たちの声が戻つた場合のデメリットを考えていた。

特に、マチルダとティファニアが、アルビオンにとつて消してしまいたい存在である、そのことを知るアクセルは、頭を悩ませた。もしも、誰にも気付かれないような高度な諜報手段、またはこちらの予想を遙かに超えるほどの諜報員がいて、アルビオン側に一人が生きていることを知られていれば。そして彼等が、二人が声を取り戻したことを見れば。

声を失つた事で、暗殺の必要もないと見逃してくれていた、あち

らの微妙なバランスを、自分は悪い方向に突き崩してしまつ」となるのではないか、という懸念もあつた。

想像に過ぎない。しかし、あり得ない話ではない。

もしかしたら、初めから声を取り戻す方法を探るなど、余計なお節介以外の何者でもなかつたのかも知れない。

「それでも求める、か」

アクセルの足音が聞こえなくなつてから、スルトはふと呟いた。彼も、あの少女達には何か秘密があるのだろうと、薄々とは感じている。だからこそその提案だつた。

「……守つてやろう。俺が、『スルト』であるつむけ」

“その時”がやつて来るのは、そう遠くはないかも知れない。“その時”を他の何よりも待ち望んでいながら、彼は何故か、今だけかも知れないが、笑顔を作ることが出来なかつた。

ルーン文字、ハルケギニアの文字、漢字……自分が文字と認識していく、その意味を強く意識できるもの。指先に精靈を集め、それで文字を描く。何度も何度も、沈着させるように繰り返し、文字をなぞる。それはつまり、文字に自分の精神力を注入していくこと。“文呪法”と名付けたこの方法は、アクセルに可能性を与えた。

（考えてみれば……横島忠夫の文珠を手に入れたも同然じゃね？）

勿論、大きな働きをさせようとすれば多大な精神力を必要とするし、色々と制限もある。しかし、これから精神力を更に強大にしていけば、理論上は全て実現可能なのだ。

「ククク……フフフ……フハハハハハッ！」

一人きりなら、そんな笑い声も上げたくなる。宇宙のように無限大に広がった可能性は、彼の脳にアドレナリンの洪水を引き起こした。

（手始めに……何をする？ 何を試す？ マジックアイテム、巨大ロボット、秘密基地……くそつ、片つ端から全部やりたい）

しかし、一番最初に作る物は既に決まっている。今後、絶対に必要な物が。

形状に随分と迷つたが、耳飾りは年齢的に未だ早い気がして、却

下。首飾りも目を付けられる可能性があり、結局はチヨーカーに落ち着いた。

ゴムを通して、レースをあしらつ。文呪法の媒介とする為に、木製の花びらの形をしたボタンも取り付けた。

“隠” “縮”

主に風属性の精神力を込めて描くのは、二つの漢字。直接的なものはそれで、あとはその漢字の持つ意味を限定する為に、保護を表すエオローのルーン、それに贈り物を表すギヨーフのルーンをめる。更に、それを支える為に、口語で文字を込めていく。

完成したチヨーカーを持ち、一階へと上がる。事務室の扉が僅かに開いており、中をそっと覗き込んでみた。

「ほんっとーに、大丈夫なんだよなー!?」

「大丈夫大丈夫、一口だけ。……うつかり全部吸つたらごめん

「いやつ、それごめんで済まねえよー！」

椅子に腰掛けて首を傾け、若干身体を震わせながら叫んでいるのはナタン。そんな彼の背後から、首筋に向かつて噛みつこうとしているのはフラヴィ。

宣言した通り、彼女は一口だけナタンの血を吸い取ると、牙を離した。ナタンは大きく溜息をつきながら、首筋をさすっている。

「……やっぱ、もう一口いいかい？」

「これまさか無限ループじゃねえよなー!?」

振り向こうとしたナタンは、ドアを開けたアクセルに気付く。彼が現れた事に、心底ほっとした表情になると、フラヴィを振り返り

つつアクセルを指で示す。

「あー、そのー……ちょっと……」

少し躊躇いを見せる彼女に、アクセルはいいよと言いながら、襟を掴んで首筋を晒す。フラヴィは愛想笑いを浮かべると、少年の首筋に噛みついた。

筋弛緩の毒はコントロール出来るようになつたらしいが、代わりにチクリと小さな痛みが走る。どうやらアクセルの血は、フラヴィの身体に合つようで、比較的少量で彼女は満足する。

やはり、ローランから有益な情報は得られなかつた。フラヴィが吸血鬼であると知つて目を丸くしていたが、彼がより古くから知つていたのはフラヴィの父親であり、母親とはそれほど親しくはなかつた。いくら埋没性の高い吸血鬼とはいえ、父親がそうであるとはどうしても考えられず、ならば母親が吸血鬼だつたのではないかとローランは言う。アクセルも、フラヴィに今まで全く吸血の必要性が無かつたことからして、人間と吸血鬼とのハーフなのではないかと考えた。それが何かの拍子に、吸血鬼としての血が目覚め、血を欲するようになつたらしい。

ともかく、もう、彼女は人間よりも吸血鬼に近い存在になつていた。

既にハーフエルフがいる以上、仲間の一人が吸血鬼だつたと判明しても、ああだから朝に弱かつたのか、と、ナタン達からもその程度の反応しか出なかつた。

アクセルは密かに先住魔法に期待していたが、どうやらあれは暴走状態だつたからこそその奇跡であり、フラヴィ自身、やり方は本能的に何となく理解していくても、未だ形にして使いこなせるようにな

はなつていな。

「……ふう」

牙を離し、フラヴィは軽く息を吐き出す。

「何でだらうね？ やつぱ、アンタのが一番身体に合ひゆ

「それは良かつた。……まあ、暴走とかされない限りは、血くらいいつでも分けてあげるよ」

「……未だ根に持つてんのかい」

「当たり前。あのままだと、絶対干物にされてたし」

最終的に、あの出来事が大きく役に立つたとはいえ、今考えてみれば、一歩間違えれば死んでも可笑しくはなかつたのだ。しかし、アクセルとしても、フラヴィが必要な人材であると考えている以上、その皮肉に陰湿なものは込めない。

「そうだ、テファ知らないか？」

本来の目的を思い出し、アクセルは襟を正しながら一人に尋ねた。

「テファなら、裏庭でマチルダと遊んでる筈だぜ」

「わかつた。ありがと」

マチルダ、ティファニア、ミシェル。三人とも、流石にすぐには無理だつたが、解呪用のマジックアイテムを使用してから二日ほどで、喋れるようになつた。アクセルは実家に帰つており、その瞬間に立ち会えなかつた事が心残りだつたが、戻つた時に出迎えてくれた少女達の、三人揃つた“ありがとう”の声に、不覚にも涙を滲ませた。あらゆる全てが、報われた気がした。

(そうだ……。今ままじゃ駄目だ……)

マチルダ、ティファニアの生存を、アルビオンが嗅ぎつけたとしても。手出しえきないような、絶対的な力が必要だった。

(いや……。寧ろ、公にするか?)

そもそも隠すからこそ、秘密になつてしまつ。愛する女のため、アルビオン王国を敵に回したモード大公の愛の深さを贅美する形で、ティファニアの存在を喧伝すれば、少なくとも密かに狙われる危険性は無くなる。その存在を、国中の誰もが知るような有名なものにしてしまえば、密かに連れ去る事も、密かに殺す事も出来なくなる。しかし、一瞬頭に浮かんだその考えは、即座に却下した。

事が全て原作通りに運んでいるのなら、原作知識を利用して、そんな絵図も引けたかも知れない。だが、モード大公の一件が十年ほど早まつてしまっている以上、原作に無い何かが起こつたと考える他無いのだ。

(大体……愛を贅美して横車を通すなんて、情熱の国のゲルマニアならいざ知らず、古くさいトリステイン王国では絶対無理だろう。善悪がどうあれ、モード大公は王国に楯突いた反逆者であることに変わりは無い。……やっぱ無理か、トリステインでは)

安穏の為に、色々と方策を考えてみる。

まず知りたいのは、アルビオン王国の動き。流石にこれは表の仕事ではなく、探るのは難しいが、あちらがどこまで情報を握っているのか、それは是非とも知つておきたい。原作開始時点では、既にアルビオン王室はレコン・キスタに追いつめられており、通常状態のアルビオンについての原作知識が少ないというのも痛い。未だ王

国が健全に機能している現在、ひょっとしたら想定外の隠密部隊、諜報部隊が存在しているかも知れないのだ。その場合、最悪のケースは、アルビオン王国はマチルダ・オブ・サウスゴータとティファニアの生存を把握している、そして現在の居場所がラヴィス子爵領だということも知っている、更に未だ二人を危険視していて、暗殺対象のカテゴリーに入れている、というものだろう。

（……協力者が必要だな）

ハーフとはい、エルフであると分かっていて尚、味方となってくれるような人間。可能なら、出来るだけ国の中核に近い、強大な権力を持つ貴族がいい。

（トリステイン第一等の貴族……と言えば……）

アクセルの頭に浮かぶのは、主人公ルイズの実家、ラ・ヴァリエル公爵家。自分のラヴィス子爵家とも、満更知らない間柄でも無いらしいが、そのことは未だ父親に尋ねていない。敵対してはいい、と、それくらいはわかるが、九歳児がする質問でも無いだろう。ヴァリエル公爵は、国家よりも娘達を優先する子煩惱。次女カトレアは原因不明の病に冒されており、もしも彼女の病気を完治させる事が出来れば、公爵に大きな貸しを作る事が出来る。

（……けどなあ）

それも、保留するしかない。治癒を司る水属性が苦手なわけではないが、大勢のスクウェアクラスの水メイジ達が匙を投げたものを、自分ならどうにか出来るという勝算が無い。文呪法を発展させていけば可能性はあるかも知れないが、ともかく今は無理だった。

それに、心優しいカトレアなら味方になってくれそうだが、エル

フを受け入れてくれるという保証は無い。

（そうだ。権力とかそういうのよりも、もっと重要なのは、口が堅くエルフを受け入れてくれるかどうか、だろうな）

首尾良くカトレアの病気を治し、恩を売り、ヴァリエール公爵を味方に引き入れたとしても、そのヴァリエール公爵がどこまで付き合つてくれるかは未知数。

（治療をわざと長引かせ、俺をなるべく長く必要とせせるのがいいか……まあ、外道な策だけど）

裏庭から、楽しげな笑い声が聞こえてくる。マチルダと、ティファニアのものだった。

（ああっ。くそっ）

崩れるように蕩ける自分の顔を掴み、戻そうとする。

未だ、彼女たちの声に慣れない。彼女たちの声が聞けるという、その喜びが醒めない。こうやって楽しげな声を聞くたびに、だらしなく眉を下げてしまう。

「ティファニア。マチルダ」

「あつ、お兄ちゃんっ」

「あ……ベル君」

ティファニアの、弾んだ声。マチルダの、柔らかい声。

フラヴィイのような姫さん口調ではなく、年相応の少女の喋り方をするマチルダは、アクセルにとつて新鮮なものだった。

「お仕事終わったの？」

「……いや……お仕事って言つか……」

腕を掴んでくるティファニアの何気ない言葉に、思わず苦笑が漏れる。代官としての仕事をそつちのけで、趣味のよつたな工作に走っている自分には、少々耳が痛い言葉だった。

「はいこれ、プレゼント」

しゃがみ込み、ティファニアの首にチョーカーを巻き付け、首の後ろで結ぶ。

「あつ……」

驚いたように小さく叫んだのは、それを見守るマチルダだった。ティファニアの髪を突き割るようにして飛び出していた耳が、徐々に縮んでいく。すぐに両耳の全てが髪の内側へと隠れ、見えなくなつた。髪をかき分けて耳を見ると、若干尖つてはいるものの、普通の人間と何ら変わりない耳に形を変えていた。

「風のスクウェアスペル、フェイスチェンジの劣化版だよ。これでもう、堂々と街を歩けるよ」

実際の所、作ったアクセル自身にも、はつきりと仕組みは把握できていない。そういうようにした、よつてそつなつた、という、極めて曖昧な説明しか出来ないものだ。フェイスチェンジの劣化と言つたが、実際の仕組みはフェイスチェンジとは全くの別物かも知れない。

ともかく今重要なのは、エルフであることを示す長い尖つた耳が、

完全に擬態していくといふこと。

それさえ隠してしまえば、エルフの存在など吸血鬼以上に発見されにくい。

（一番いいのは、こんなマジックアイテムに頼らなくとも、堂々と歩けるようになる事なんだよなあ）

エルフを忌避しない、そんな社会。しかしそれを実現させるためには、大規模な運動と革命のような一手が必要だ。何十年かかるか分からぬ。果たしてこれから、その切つ掛けとなるような出来事があるのかも。

（まあ、焦つてそんな事考へても、ろくな事が無いか。マチルダも、まだ信じてくれてないし）

アクセルは、マチルダに何も尋ねなかつた。彼女が自分から、全ての経緯を打ち明けてくれるその時、彼女の本当の信頼を勝ち取ることが出来ると言えている。例えその時が永久に来なかつたとしても、泥棒などになる必要も無いような、平穏な生活を歩ませてやったかった。

もう自由に出歩けると言われたティファニアが、それぞれの手でマチルダとアクセルを引っ張り、買い物に行こうと言い出した。

アクセルの頭に一瞬過ぎるのは、アルビオン王国の田。このトリステイン王国と、比較的友好な関係を構築している国ではあるが、モード大公とエルフとの間の遺児について情報を提供するとは思えない。例えどんなに親しい関係であろうが、国と国である以上、そんな危険な醜聞はひた隠しにするだろう。よつて、トリステイン王国が動くことはあり得ないが、もしもアルビオンの諜報機関が真つ

当な優秀さを持っていたのなら、国外への逃亡も視野に入れている筈だ。既に秘密裏に、彼等の活動が進行している可能性もある。

確かに、ティファニアの耳の問題は片づき、もう帽子で隠す必要も無くなつた。が、あくまでマジックアイテムである以上、ディテクトマジックに反応するものだ。フェイス Chernジという魔法の存在も常識である故に、怪しまれてティテクトマジックを使われれば、それでアウト。

（先住魔法は確かに、ディテクトマジックでも探知出来ないんだよな？）

先住魔法にも、姿を消すものがあつた筈だ。ティファニアにそれを覚えさせれば、と一瞬考えたが、彼女の魔法は虚無系統である可能性が高い。恐らく普通のエルフと違い、先住魔法は使えないだろう。

（その意味でも、フランヴィイが吸血鬼だつたことは不幸中の幸いだけ……。やつぱり、必要なのはもつと魔法を知ることだ）

何故、先住魔法はディテクトマジックに反応しないのか。結局、先住魔法と系統魔法との違いは何なのか。

文呪法を得ても、それでもまだ不十分なのだ。もつともつと、魔法というものを研究し、どっぷりと頭の天辺まで浸かり、あらゆる理を手に入れる必要がある。

とはいって、差し当たつて警戒する理由は無い。アクセルの考えは、常に最悪へと突き進んでいる場合のものであるし、鼻が効くスルトも、そんな気配は無いと言つ。

三人の真ん中で、童歌を歌うティファニアに引かれ、アクセル達

は露店が並ぶ通りを歩く。折しも虚無の曜日で、大勢の人々で賑わっていた。はぐれてしまわないよう、アクセルもマチルダも、小さな手をしっかりと捕まる。

東地区の隆盛は、最早疑うべくも無かつた。

少し前まではこの街のゴミ箱だったそこは、ゼルナの街で最も華やかな場所となり、外からも大勢の人々が訪れる。清掃活動も完全に終了した上、全てのゴミを収集、運搬し、街の外の処理場へと移すというシステムも新しく整備され、アクセルにとって、なかなか満足のいく状態になつていて。

しかし勿論、光に羽虫が群がるように、質の悪い破落戸の流入といふ弊害も起きていた。もともと平穏な街で守備隊も多くは無く、自警団も主に娼館の周囲の東地区で活動している。娼館や賭場の利権を狙う輩ならともかく、人が増えて景気が良くなりつつある他の地区の商店などが狙われた場合、対応しきれない面があつた。

(ん……?)

今夜はオムレツがいいと言つティファニアの為に、切れていたタマネギを買つてゐる時。釣りを待つ間、何気なく空を見上げようとしたアクセルの目に、一つの光景が止まつた。

(あれは……)

通りの向こう側にある、名の知れたレストランの、二階席。晴れた日にはテラスにまで客席が用意され、そこで食事を楽しむことが出来る。祭りの日には、仮装行列やパレードを楽しめる特等席となるが、いつもは金を持った人間だけ通される。そこに、リーズがいた。

(遅めの昼食か……?)

勿論、一人きりで座るわけが無い。他に一人、男と同席していた。一人はゼルナの街の守備隊隊長で、名前は確かイジドール。壯年の騎士。執政庁であまり顔を合わせることもなく、どのような性格なのかも噂でしか知らない。一人きりなら、思わずニヤつくようなオフィスラブの一幕にも見えるが、あと一人、中年の小太りの男がいた。

(あの衣服は、ブリミル教の司祭か?)

ゼルナの街にも、ブリミル教の教会はある。いや、正しくはあった。しかし、もう随分前に寂れ、朽ち果て、無人となつた。西地区にあるそれは、取り壊されてこそいないが、既に教会としての面影など無い。

あの司祭は、どこか他の場所からやつて来たのだろう。音に敏感な風のメイジとはい、いくら何でも距離が遠すぎる。周囲の喧噪と相俟つて、何を話しているのかは全く聞こえなかつた。三人は暫く会話していたが、やがてリーズが席を外す。残された守備隊隊長のイジドール、そして司祭は、顔を近付けて一人きりで話し始めた。

(……悪い顔してるなあ)

リーズには聞かせたくない内容なのだろう。下品な男と生臭坊主の下世話な話なら問題ないが、一人の笑顔には何が、もつと黒いものを感じた。

「ベル君」

マチルダに呼ばれ、彼女を振り向く。既にお釣りを受け取ったマチルダが、不思議そぞろちらを見ていた。

「はい、お釣り」

「ん、ああ。ありがと」

「どうかしたの？」

「いや、良い天氣だから、ちょっとぼーっとしちゃって」

適当に誤魔化しつつ、再び一階席を盗み見る。ちょうどリーズが戻つたところで、二人の男は既に顔を離していた。

(「これは……調べる必要があるか）

堂々と街の一角を占拠しているような娼館に、リーズは当然いい顔をしない。アクセルもイシュタルの館で、客として来ている執政庁の職員を何人か見ており、そのことは更に彼女を不快にさせるだらう。

ハルケギニア唯一の宗教、ブリミル教。アクセルが前世で知る多くの宗教がそうであるように、この宗教もまた、禁欲を賞賛する傾向にあつた。それがいつか娼館を批判する可能性があるのは道理であるし、女の子のいる部屋に男が遊びに行くだけ、という、意地でも娼館として認めない理屈は用意してある。バルシャなどは、全く新しい形の娼館、と評すが、アクセルにしてみれば、言い逃れの材料を作つていたらそうなつただけだつた。

リーズがブリミル教を使って攻撃を仕掛けてくるのは、想定の範囲内。しかし、先ほどのイジドールと司祭とのやり取りを見ると、どうも想定の範囲外が出てきたらしい。

(まさか……だよな?)

未だ見ぬアルビオン王国にばかり氣を取られていたが、考えてみればトリステイン、ゲルマニア、ガリア、ロマリア全てで、エルフは禁忌の存在なのだ。ハルケギニア中に信者を持ち、敬虔な信者が諜報員に早変わりしても不思議はないブリミル教にこそ、最も注意を払わなければならないのではないか。流石にティファニアだと特定されている筈が無いが、耳の長い少女を見た、という情報を得たブリミル教が動き出したなら、不思議は無い。考え過ぎかも知れないが、もしもイシュタルの館に踏み込まれれば、露見する可能性もある。

「じひつ

ぐいっと、右手を引かれ、右肩が落ちる。

「駄目でしょ、ベル君。ほおつとしてひき

マチルダではなく、ティファニアだった。大人ぶった幼い叱責に、思わず苦笑いする。

「ごめんね。……そうだ、帰つたらケーキ作るうか

「え、ケーキ!?

「うん。ほら、さつきのお店、季節外れの苺が安かつたし

「やつたあ

アクセルの右手に掴まつたまま、ティファニアはぐるぐると回り出した。身体一杯に喜ぶ少女に、アクセルの尻尾が下がる。

マチルダの視線には、アクセルはついに気付かない。喜びで踊る

ティファニアではなく、だらしない笑顔を浮かべるアクセルを、彼女はじつと見つめていた。

「ほら、お姉ちゃんも早く、早く
「……うそ。そうね

ティファニアに促され、マチルダは少し長く目を開じる。そして開くと、ちょうどアクセルが彼女に田線を向ける所だった。

「マチルダ、何がいい?
「……え

質問の意味が分からず、マチルダは驚いたような咳きを漏らす。それに答えるよに、ティファニアが飛び跳ねた。

「お姉ちゃんは、ケーキに何乗せる? お兄ちゃんは桃林檎だつて
「私は……。私も、それでいい
「そう?」
「うん……」

マチルダはそっと微笑む。その笑みにどこか、翳りのよつなものを感じ取るアクセルだったが、それは彼にとつて、気のせいだと捨て置ける程度のものだった。

部屋に、ノックの音が響く。机に向かうアクセルは、振り返らな
いまま入室を許可した。

「入るね。兄さん」

夜食と紅茶を持って、静かに入ってきたのは、ミシェルだった。
何故年下の自分を兄さんと呼ぶのか、アクセルには不思議だった
が、未だ年齢に疑いを持つナタン達は、別に不思議だとは思わない
と言っていた。

声を奪われてから、肉体的な意味で一番酷い目に遭ったのは、彼
女だろう。マチルダとティファニアのように、縋れる誰かもおらず、
家が没落してからずっと一人だった。そんな彼女にとつて、直接的
に自分を救い出してくれたアクセルは、最も信頼できる人間なのだ
らう。

そもそも呼び方など些細な事であるので、それを改めさせる必要
も理由も無かつた。

ミシェルもマチルダと同じく、自分の事情を話そうとはせず、彼
女の父親の冤罪について調べようとしても、トリスター・アは遠い。

「お疲れ様」

「ああ、ありがと」

サイドテーブルに夜食を置くミシェルに、アクセルもペンを置く。
凝り固まつた首や肩を捻るが、両肩が優しい手に捕まえられた。

「肩揉みしてあげよっか?」

「じゃあ……お願い」

アクセルは目を閉じ、安堵するような溜息をつく。その小さな肩を揉みほぐしながら、ミシェルは机の上を覗き込んだ。彼女にとつて見覚えのない文字が並び、その横に彼女でも読める説明文が横たわっている。

「何をしていたの？」

「ん？ ああ、これ……東方のルーン文字、と思つてくれればいいよ」

ルーン文字と同じく、漢字の意味も多岐に渡る。文字に力を持たせるという点では違いは無く、比較的単純なものが、問題なのはそれをどう制御、コントロールするかだつた。そうしなければ、込められた文字は一人歩きして対象を拡大し、それを実現しようとしても力が足りず、結局何も機能しなくなる。

（文呪法、なんて、テンション上がりつて名付けちゃつたけど……。漢字を使う以外は、普通のマジックアイテムの製造法なんじやないの？ これ……）

冷静になれば少し落ち込んだりもするが、使える文字の幅が広がるのは、かなりの利点であることは間違いない。

アクセルは暫く身体の力を抜いていたが、ふと、時計が目に入つた。

「ミシェル、もう寝た方がいいよ。こんな時間だし

「兄さんは……」

「僕ももう……。あ、そうだ」

漢字表を仕舞い、アクセルは思い出したように一冊の本を広げる。アクセル・ベルトラン・ド・ラヴィスは、公式にはローランと遊んでいることになっているが、流石にそなへりではまずいと判断したのだろう。家庭教師でもあるリーズから宿題として、初歩の魔術書を完読しておくようにと言っていた。勿論、既にアクセルにとつて飽きるほど染み込んだ知識だが、リーズは必ず質問してくる。問題なのは、今のアクセルが知つていてはおかしい知識まで、べらべらと漏らしてしまう事だ。どこまでなのか、ということを確認しておかなければ、彼女に怪しまれる事になる。知らない事を聞かれのもの困るが、知り過ぎている事を知られるのも困るのだ。そこ辺りが、アクセルにとつて実に危険な問題である。

（一応、項目を大まかに書き出しておかないと……）

別の紙を広げ、再びメモの用意をする。未だ肩に手を置いていたミシェルが、欠伸をかみ殺した。

「……ここで寝ていい？ 邪魔しないから」

「うん、いいよ」

ミシェルは皿を擦りながら、アクセルのベッドに潜り込んだ。枕に頭を横たえ、じつと、灯に照らされる少年の横顔を見つめる。

「……お休み。早く休んでね？」

「これが終わったらね。お休み」

三十分後。彼女が寝入つてから十分ほど経つた時。魔されるような声に気付き、アクセルは隣のベッドを見た。

ミシェルの顔が歪み、シーツの下の身体をもぞもぞと動かしている。いい夢では無いのだろう。その悪夢がどれ程のものが、アクセ

ルには分からぬ。

彼はそっと手を伸ばし、水の精靈を集めた指先を、汗を滲ませる額に触れさせた。描く文字は、“安”。何度も何度も、同じ文字を繰り返す。

やがて静かな寝息が戻り、歪んでいた顔が元に戻った。満足したアクセルは、再び読書に戻る。本に向かうその顔では、まるで固定化でもかけられたかのように、満足の微笑みが崩れる事は無かつた。

第十八話「貝殻」（前書き）

ユニーク10万突破、お気に入り登録1500突破しました！
皆様のおかげです、ありがとうございます！

ゼルナの街の守備隊隊長であるイジドールは、土のドットメイジだった。特に武芸などに秀でているわけではなく、彼が隊長を勤めているのは、メイジだからである。

（……ふむ）

無骨な手摺りに肘を乗せ、頬杖をつき、アクセルは眼下の広場を眺める。今はアクセル・ベルトランとしての立場なので、マントを羽織り、腰には杖を下げていた。

見下ろす執政庁裏の訓練場では、守備隊の日課とも呼べる調練が行われている。執政庁を背にして立つイジドールの怒鳴り声を合図に、兵達は様々に動き回っていた。槍術の訓練、剣術の訓練……恐らくは、どこの訓練場でも見られるであろう、至極普通のもの。まだまだゼルナの街は活氣づくだろうし、アクセルとしても彼等に、これから今まで以上に頑張つて貰いたいのだが、どうも士気が高いとは言えない。

その理由は、少々予想外のものだった。

（まさか……バルシャとリリーヌがなあ……）

少し調べた結果、アクセルが出した結論は、その結論を出した時の彼の呟きを借りれば、バルシャさんマジパネエ、リリーヌさんカツケーである。

元々は東地区のトラブルに対応するために結成した自警団だったのだが、彼等ははつきり言つてはりきり過ぎなのだ。その中でも一

番活躍しているのは、バルシャ。東地区だけではなく、他の地区の見回りまで行い、事件に遭遇すれば俊敏に対応する。

自警団の制服には、羽織を採用している。イシュタルの館に、ベニティ工の泉を作ったアクセルは、その制服に貝殻をあしらつた紋章を付けた。そして今、彼等……貝殻たち、それにイシュタルの女たちは、ゼルナの街の人々に受け入れられつつある。

こんな話がある。

守備兵達に追いつめられた強盗が、食堂に逃げ込んで給仕の少女を人質に立て籠もつた。既に逃げ切れない事を自覚していた犯人は、自棄になり、店中に油をまいて少女もろとも焼身自殺を図ろうとした。

その時、ちょうど付き添いの少女達を連れて通り掛かつた、一人の美しい娼婦。どうやら、それはリリースだつたらしい。大勢の野次馬達をかき分けるようにして、店の正面に立つた彼女は、付き添いの少女達に楽器で演奏を行わせ、静かに踊り出し、衣服を次々と脱ぐと、一糸纏わぬ姿となつて尚も踊り続けた。

守備兵や野次馬だけでなく、強盗も、全ての視線が彼女に集中した時。気付かれぬよう、細心の注意を払い、わざわざ生ゴミを流す水路を逆に辿つて店内へと侵入したバルシャが、背後から強盗を取り押さえ、捕縛した。

店から少女が飛び出し、続いて溝ネズミのように汚れたバルシャが、捕縛した強盗を引きずつて表に出る。すると、どこからともなく貝殻紋の羽織を纏つた男達が現れ、羽織で壁を作り、肌をさらけ出すリリースを隠した。彼女は慌てることなく、一枚一枚丁寧に衣服を身につける。そして再び少女達を引き連れ、何事もなかつたかのようにその場を去り、強盗を守備兵達の目前に放り捨てたバルシャも、男達を引き連れて無言でその場から消えた。

そしてそれは一例に過ぎず、貝殻紋の男達は恐るべき連携によって、遭遇した事件を解決してしまつ。

(……守備隊の士気が下がるのも、無理もないよな)

貝殻紋の男達は、常に影のように道の端を歩き、強請もたかりも行わない。寧ろ、相手から食事や金品を差し出されても、容易には受け取らない。そのくせ、トラブルが起きれば全力で事に当たる。

文字通りビーブ川に潜るような覚悟、そしてそれによる活躍を見せつけられ、また、人々の間でも守備隊より自警団に人気が出るようになり、守備隊の兵士達は自らの存在意義を見出せなくなつているのだ。

(全く……贅沢な悩みだよ)

アクセルはその場にしゃがみ込むと、両手で目を覆い隠し、ふうと溜息をついた。守備隊が劣るというよりは、バルシヤ達の能力が高すぎるのだ。彼等が想像以上に働いてくれるのは助かるが……。

(その弊害が……なあ)

バルシヤ達を事実上の守備隊にする、もしくは加えるといつのも一つの方法だが、あのような対価を求めるヒーロー的な存在は、官ではなく民の立場であつてこそだらう。官の存在となつてしまえば、余計な義務や責任までついてくる。

それに、所詮はヤクザ者なのだ。たまたま近くにいた力持ち、くらいの認識をされていれば良く、だからこそより深く街に受け入れられる。

調練の終了を告げる合図の笛が、訓練場に鳴り響いた。

座り込んでいたアクセルは、その音にそっと腰を上げ、再び訓練場を見下ろす。武器や訓練道具を片付ける兵士達と、部下と何やら話し込んでいるイジドールが見えた。

（先日の一件、イジドールが何を企んでいるのか……同祭と何を話していたのかは、未だわからぬけど。やはり、守備隊の地位低下に関することなのか？）

まさか、会つて直接、何企んでるんですか？と聞くわけにもいかない。

季節は既に夏。前世、日本でのそれと比べればカラッとした暑さで、確かに不快感は少ないが、湿気が少ないので唇が乾く。燐々と光を降りまく太陽を、顔を顰めつつ見上げると、アクセルは唇を舐め、屋内へと戻った。文官達は遅めの昼休みを取つており、事務室には誰もいない。そこを通り抜け、奥にある自分の机に腰掛けると、水差しを傾けて冷水をコップに注いだ。

机に積み上げられた書類を捲り、軽く確認を行う。

（……やっぱ、事件が増えたな）

今年は、例年より若干気温が高い。その為か、喧嘩や傷害など、短気な事件が頻発していた。報告書の所々には、貝殻紋の男達、イシュタルの館などの単語が並んでいる。幾つかの事件は、どうやら彼等の、ナタンの名の下の仲裁で解決していたらしい。

（まあ、やっぱこののは来月だらうな）

来月は、二イドの月。⁸ 二イドには、忍耐という意味が込められている。そのような名前が付けられる月ということは、それだけ忍耐が必要になってくる時だということだが、その月はまた、三ヶ月に渡る、トリステイン魔法学院の夏休みの最後の月もある。それぞれの領地、実家に帰っていた貴族の子ども達が、再び魔法学院へと戻つてくるのだ。

当然、夏休み最終日に戻る者は滅多にいない。新学期の準備があるので、少し早めに出発する貴族が大半だろうが、そうして暇になつた彼等が、このゼルナの街にやつて来る可能性もあるのだ。更に言えば、それなりに有名になりつつある、ゼルナのイシュタルの館に。

（流石に、そいつら……いや、“先輩”と呼ぶべきか？ そいつらだつて、親や実家には内緒で来る筈だけど）

王都トリスター＝アでは人目が気になるが、この片田舎なら大丈夫と考える者もいるだらう。流石に親や実家に秘密にしたい以上、家名を出す事は無いだらうが、世間知らずの坊っちゃん方が横車を押し通そうとするのは目に見えている。そして彼等は、言うまでもなくメイジで貴族。娼婦が平民である以上、どう扱おうが大した問題は無いと考える。

（さて……。じつするか）

吸血鬼もいればエルフもいるイシュタルの館は、それだけで一つの弱点。露見すれば、国家の一つや二つ敵に回る。

それなりに分別のある貴族なら、ゼルナの街がラヴィス子爵領であることを弁え、無用の争いは回避するだらう。しかし、その分別すらないドラ息子、特に伯爵や侯爵の者は厄介だ。例え最終的にこ

ちらが勝つとしても、女の子の一人でも傷つけをせるわけにはいかない。

（……なら、どうするか。親や実家に告げ口するのは、イシュタルの館の信用問題だ。精々、噂を流すくらいだな。しかしそんなの、所詮は報復の手段でしかない。何とか、予防する事は出来ないか？）

再び水差しを傾け、コップを満たす。

（こんな事なら、夏休みが始まる前に、魔法学院から何か一言言つておいて貰うべきだつたな。少しでもマシだつたろう。……来年からはそうするか？）

何か天啓のようなアイディアでも降臨すれば別だが、今となつては、対応策を考えるしかない。

勿論今でも、客には入り口で履き物や武器、メイジなら杖を預けて貰つているが、その段階で暴れ出されでは、そして相手がそれなりの力量を持つていれば、取り押さえられるのはスルトだけだろう。流石に彼が敵わない相手など考えたくないが、彼が不在で対応できない場合の事を考えねばならない。

（……つづーかそもそも、高校生程度の年齢の分際で、娼館に行こうつてのが気に食わん）

この世界では、別に不思議な事では無かつた。十三歳でメイドに手を出し、孕ませた貴族もいたといつ。

（……駄目だこりや。個人的な怨みにすり替わつてゐる）

アクセルは思わず苦笑いを浮かべると、書類の束を整えた。

事務室のドアが開き、誰かが入つてくる。昼休みを終えた文官かとも思ったが、力チャカチャと金具の音が聞こえた。

「ん？　おお、若様。こちらにいらっしゃいましたか。失礼を」

イジドールだった。鎧の大部分を外している彼は、笑顔で挨拶してくれる。

その笑みは、アクセルを完全に震ろにしたものだった。自覚が無いままにそんな顔をしているのなら、別に構わない。自覚があつてわざとそんな顔をしているとしても、別に構わない。どちらにしろ、ただの貴族のバカ息子と見られているということなので、アクセルにとつては都合が良い。

「訓練、ご苦労だつたね。どうかした？」

「ええ、少々お願いが。これから季節、犯罪が色々と増加する傾向にあるのですが、何故かご存知ですか？」

「……いや、わからないよ」

コップの水を飲み干すと、アクセルはイジドールの言葉を待つ。彼は胸を張つて、一つ咳払いをした。

「暑くなつてると、人々の心からは余裕が失われ、実に怒りっぽくなるものでしてな。頭に血が上りやすくなるのです。更に人々は怠惰となり、戸締まりは疎かとなり、盗人にとって実に都合の良い環境が生まれます。よつて、街中の警備を強化する為、守備隊の増強を提案致します。特に最近では、近隣での“悪逆”的”のサンデイを田撃したとの情報もあり……」

イジドールは間を置かず、言葉を連ねた。

どう返そうか、それを考えようとしたアクセルだったが、すぐに

止めた。うーん、と困ったように唸り、頭をかく。

「……リーズがいって言ひそなら、良いよ」

アクセルは、その返答がベストだと判断した。

「了解しました。では、彼女と相談して参ります」

果たしてイジドールは、その返答を予想していた。いや、そう返されると確信していたらしい。悔りの笑みは喜びの笑みとなり、回れ右をすると、さっさと事務室から出て行つた。

アクセルはまた、コップに水を注いだ。

（あの様子だと、リーズを頷かせる準備は出来てるな。守備隊の増強は道理だけど、あの笑みは気に入らない。小僧と小娘如き、所詮は自分の掌の上……と、そんな風に思つてそうな顔だ。守備隊の増強を承認させ、それから何をしようとしているのか。問題はそれだな。……ああ、全く、次から次へと問題が……）

一つ溜息をつき、アクセルは立ち上がる。少年は癒しを欲していた。

「……何やつてんだお前

今日は執政庁にいる筈のアクセルが、いつの間にかイシュタルの館にいることも驚いたが、寧ろナタンは呆れていた。アクセルはベッドの傍で膝を立て、昼寝中のティファニアの顔をだらしない目で見つめている。

「何って、回復中。心の力を」

「あー、そうか」

「あ、涎が垂れてる。……いいかな？ 拭っちゃっていいかな？」

「……好きにすりやいいんじゃねえの？」

「本当にー？ そんなことしちゃっていいのかなー？ この天使の魂に、僕みたいな下賤の者が触れても許されるのかなー？」

「ちょっと待て、お前マジで大丈夫かー？」

ティファニアが寝返りを打ち、慌ててアクセルは口を閉じた。

「……で、どうした。何があったのか？」

「あ、うん」

ナタンに促され、アクセルは立ち上がり、寝室から出た。そつと扉を閉め、一人並んで廊下を歩き出す。

アクセルの話を聞いていた内に、ナタンも渋い顔になつた。

「貴族のガキか。……そういうのは、今まで無かつたな」

「まあ、この子爵領では僕だけだからね、そういうのは。今までの貴族の客は、隣のラファランもそうだつたけど、だいたい二十歳を過ぎた人ばかりだから。何て言うか魔法学院の生徒達は……」

「常識が無い、つつうか……」

「そう。平民相手なら無茶が許される、そんな事しか頭にないガキだと、少々困つたことになりそうなんだ」

「……九歳児にガキって言われる奴らか」

口角を吊り上げて一度笑うと、ナタンは前方から歩いてくるバルシャに気付き、声を掛ける。書類を捲りながら歩いていた彼は、二人に気付くと立ち止まつた。

「ちょうど良かつた。少々、お願いがあるのですが……。二週間ほど之間、イシユタルの館、並びに東地区の警戒を強化したいのです」

「おつと、バルシャもか」

「え？」

ちょうど、ナタンにも話そうと思っていた所だ。怪訝そうに聞き返すバルシャ、それにナタンの二人を前に、アクセルは執政庁での事を話す。

ナタンはただ頷いていたが、バルシャは険しい顔をした。彼が気になつたのは、アクセルが口にしたとある名前。

「“悪逆”のサンディ……ですか」

アクセルもナタンも知らなかつたが、バルシャによれば、裏社会では有名だという。

「何した人？」

「……昔、王城に忍び込んだそうです」

「え？」

思わず聞き返す。バルシャは険しい顔のまま、更に話を続けた。

“悪逆”という、実にわかりやすい、そしてシンプルな二つ名で

呼ばれるその男は、隠れた伝説である。トリステイン王国は、そんな男は存在しない、ただの根も葉もない噂話だと否定したのだが、わざわざ正式に否定したというその事実が、かえって実在の信憑性を持たせる事となつた。

あれは十年前、いや二十年前だと、裏社会の人々は様々に言つ。一体いつの話なのか、それどころかいつ頃から噂が始まつたのかも分からず、全ては曖昧。だが、彼が何をしたのか、そう問われば、ほぼ全ての人間が口を揃えた。

曰く、トリスターニアの王城に忍び込み、国王の愛妾を寝取つたと。

その愛妾の名もバラバラで、いや王妃を寝取つたのだなどといふ者もいる。しかしどもかく、国王の女を奪つたというその男の噂は、人々の間で実に痛快な傑作として語り継がれ、実在したかが曖昧な事も相俟つて、裏の伝説として定着していつた。

「……すげえな」

ナタンは顔を引きつらせて、ぽつりと漏らす。が、アクセルは首を傾げた。

「まあ、王城に忍び込んで無事に逃げ延びたつてのは、とんでもないヤツだなあ……と思うけど。事実だつたとしても、結局はただの、間男だろ？ そいつが何でそんな……」

「“悪逆”のサンディが実在したかどうかなど、大した問題ではありません。問題は、“悪逆”的サンディを名乗る者が現れた、ということなのです。“悪逆のサンディ”という名はもはや、一種の称号のようになつており、様々な悪党が好き勝手に名乗つています」

そこで一旦、バルシャは言葉を切る。そして俯き、少し考え込ん

だ。

「もしかしたら、『悪逆のサンディ』とは、『悪党』そのものな
のかも知れませんね。様々な悪党達がその名を名乗り、彼等の重ね
た罪が、『悪逆のサンディ』の罪科に加えられていつた……。『悪
逆のサンディ』が犯したと言われる罪は、星の数ほど挙げられます
が、本当のサンディ自身の罪は、一体そのうちの幾つなのや。…
…ともかく」

バルシャは溜息をつくと、軽く頭を振った。

「その名が出てくる以上、警戒はしておるべきです。悪党の名で
あることに変わりはないのですから」

聞き流していた名が意外に重要であることに、アクセルは頭を抱
える。表と裏、両方から厄介事が押し寄せている感じだ。

「……しかし」

そのアクセルの苦悩を察したのか、バルシャは微笑むと、書類の
束を手の甲で叩いた。

「イシュタルの館、並びに東地区の警備はお任せを。スルトもい
ますし、対応しきれないという事も無いでしょ」

「夏休み終わりで、羽目を外したがる貴族の坊ちゃん達も来るよ

「失礼ですが、あなたは少々心配し過ぎです。物分かりの悪い貴
族を相手にするのは、私も初めてではありません。乗り切つて見せ
ます」

力強いバルシャの言葉に、アクセルは彼を信頼することにした。

ただ、あまりに仕事に励み過ぎる彼に、違和感を覚える。出会った当初は、もっと冷静というか、冷徹というか、激することなく淡淡的と仕事を行うタイプだった筈だ。どうやらバルシャの中で、何かが変わりつつあるらしい。その変化が正か負かは不明だが、明るくなつたとも言えるので、アクセルは善しとすることにした。

「そうか……。じゃあ、警備関係はバルシャ、それにスルトに一任するとして。僕は、執政庁の問題に集中するとしようが。リーズの攻撃は大したことないだろうけど、イジドールと司祭の関係が気になる。ブリミル教を無視するわけにもいかないしね」「んじゃ、俺はどうするか……」

ナタンはそう言つと、一人の顔を見た。問い合わせるような彼の言葉に答えようとするアクセルだったが、バルシャは待っていたとばかりに笑みを浮かべる。手に持っていた書類の束、その三分の一ほどを割り、ナタンの胸に軽く当てた。

「では、まずはこちらをお願いします」

「……何これ」

「この辺り一帯の治安の悪化の原因に、クルコスの街の傭兵ギルド崩壊が挙げられます。元傭兵の中から何人がが流れ着いていて、雇つて欲しいと。その彼等のリストです。目を通して、優先雇用順位順に整理しておいて下さい」

「これ全員を？」

「はい」

ナタンは斜め下のアクセルを振り向こうとしたが、既に少年は消えていた。傭兵ギルド崩壊に責任はなくとも、原因の一端を担うアクセルは、途中で耳を塞いで退散していた。

(そうだとすっかり忘れてた)

ナタンとバルシャの元から逃げ出し、事務所一階のテラスの椅子にだらしなく寄り掛かっていたアクセルは、ふと思い出す。ティファニアの寝顔によつて、すっかり脳内の辺境へと追いやられていたが、こうやつてイシュタルの館に戻つてきたのは、バルシャに何か、普段の働きに報いるようなプレゼントをしようと思ったからだ。

以前の彼なら、頑なに辞退していただろう。だが、今の彼ならばどうか。欲しい物、望んでいる事、そのヒントくらいは漏らしていくのではないか。

(……何か、マジックアイテムでも作るか？ 平民でも使えるのがいいな。いや、それよりも休暇を取らせて、旅行をプレゼントするか。普通は行けないような場所がいいな。……サハラとか？ いや駄目だ、絶対に嫌がらせだと思われる。……あれ、そう言えばバルシャの趣味つて何だ？ 酒もあんまり飲まないし、博打も女遊びもやらないし。そんな事も知らない俺も俺だよ、全く）

昔からバルシャを知る人間に聞くべきか。そう思つてはいるが、ふらりとテラスにやつて来た女性がいる。どこか疲れたような顔をしたフラヴィは、先客のアクセルに気付くと、挨拶も億劫なのか軽く手を挙げた。

「そうだ、フラヴィ。ちょっと聞きたいんだけど」「ん？ 何？」

尻を放り落とすようにして空いた椅子に陣取ったフラヴィは、軽く首を回しながら両手を左右に伸ばす。

「バルシャの趣味とか、知ってる？ 好きな物とか」「……弓術」「それ、趣味かなあ？ 噂でもいいから、何か無い？」「噂つて言つてもねえ」

思い出そうとした様子も、考え込んだ様子もなく、彼女は笑い声を漏らした。そして顔をつるりと撫でながら、溜息をつく。

「そう言えば、知つてたかい？ 男前だし、優しいし、強いし。結構人気なんだよ、あいつ。ナタンもそうだけど」「ああ、やつぱりか。納得」

「何人か、バルシャを口説き落とそうとした娘もいるんだけどさあ……駄目。全滅。自覚無し、つてわけじゃなさそうだけど、何て言つうか……節制つて言つの？ 自分でブレークかける所があるんだろうね」

「……ふーん」

職場内恋愛について、アクセルはとやかく言つつもりは無かつた。彼女たちが恋心を抱くことが、イシュタルの館の業務に差し支える恐れがあるのは事実だが、本気で愛する男が出来たのなら、それはそれで仕方ないことだと思っている。

「……じゃあ、誰かバルシャの想い人がいるつてこと？」

アクセルは、自分がバルシャの立場だつたらと考へる。きっと自分なら、誘われるままホイホイついて行きそうだ。そうしないと言う事は、誰かに操を立てているのだろう。

「そりや分からないさ。けど、そうだね。自分はあくまで女を守る立場の人間で、女に手を出してはならない……と、そう考へてるんじゃないかい？」

「ああ、有り得るな、それ。奴隸市場でも、商品に手を出してはならない……って、厳しく教育されてたそうだし。そうだ、ひょつとして」

「ん？」

「リリース？」

少年の口から、ふと一人の女の名が漏れる。そしてその呴きの意味を、フラヴィは即座に理解した。

「フラヴィも聞いただろ？ 食堂での立て籠もり。通りかかったリリースがバルシャに協力したそうだけど、それって、バルシャだつたから協力したんじや……？」

「そうかねえ？ いや、それよりも」

リリースの名で思い出したのだろう。適当な返事をしたフラヴィは、そのような恋愛事情などより重要な、リリースについての別の話題へと移った。

「西地区の、ラーマ商会の旦那。それに、北地区の“木陰の小鳥亭”の若旦那が、リリースを身請けしたいとさ。全く、二人とも全然諦めないから、対応が大変でさあ」

イシュタルの館の一番人気がリリースだということは、彼女の部

屋が館の四階にあることで、アクセルも朧氣ながら知つてゐる。そして、先日の立て籠もり事件以降、その人気は更に上がつてると、フラヴィはどこか嬉しそうに言つた。収入や利益がどうこうではなく、大事にしている妹分の人気の高さに、鼻高々なのだろう。

白昼堂々、大衆の面前で一糸纏わぬ姿になる、という行動は、慎み深いとされるトリステイン王国の気風にも関わらず、好意的に評価されていた。やはり、人質の命を救つたという事実が大きいのだろう。批判する輩も、恥知らずの娼婦の中でも更に恥知らずな売女、としか言う事が出来ず、声を大にして言おうものなら周囲の失笑を買う。片田舎の街なので、身請けを申し出たのは一人だけだが、ここがゲルマニアで、更に首都のウインドボナだつたら、國中から何十人と押し寄せていたのではないか、と、アクセルはぼんやりと想像した。

「……ん？ ちょっと待つて」

先ほどのフラヴィの言葉が引っかかり、アクセルはすっかり妹馬鹿と化した彼女を現実に引き戻す。

「二人とも全然諦めない……と言つことは、リリー・ヌが断り続けてるつてこと？」

「ああ。まあ商会の旦那は、ガマガエルみたいな面してゐるし、わかるんだけど。小鳥亭の若旦那の方は、精力溢れる男前つて感じなんだよねえ。まだまだあの食堂も大きくなりそうだし、悪い話じやないと思うんだけど。まあ結局は、あの娘が選ぶことだしね。外野が口を出してもしょうがない」

「ふーん……」

その時、フラヴィはハツとしたように目を見開いた。アクセルに

向き直ると、咎めるように彼に人差し指を突き刺す。

「つていうか、そうだよ。あんた、代官でもあるんだろ?」

「まあ……そうだね。いや、それが本来の姿なんだけど」

いくら殆ど働かないとはいえ、この街の、ひいてはこの子爵領の責任者であることに間違いはない。

「バルシャもそうだけど、リリースも民衆の命を救つたんだよ。そんなら、リリースに何か」褒美があつてもいいんじゃないかい?」

「勿論、それも考えてるさ。バルシャと恋仲なら、一人きりで旅行させるとか、そういうの考えるんだけど……。はつきりしない今じゃ、まだ保留」

「バツカじやないの?」

フラヴィイは立ち上がると、人差し指で何度もアクセルの胸を突いた。されるがままのアクセルの身体が、椅子ごとぐらぐらと揺れる。

「ちよつ、痛いつ、痛いつて」

吸血鬼の血が混じつている彼女の力は常人以上で、何気ないスキンシップが立派な攻撃にもなる。心配りを忘れたその指の攻撃に、アクセルは降参するように両手を突き出した。

「『』褒美なんて、いくつ上げたつていいじゃないか。マジックアイテム作れるようになつたんだろ? 代官なんだろ? とにかく、全力でリリースを喜ばせな。それが報いるつてことじゃないか」

どうもリリースの事になると、フラヴィイはアクセルへの恐れが薄れる傾向にあるらしい。ふと、未来の……原作のマチルダとティフ

アーニアを思い出すアクセルは、抵抗せずに頭をかいた。

「……うん、 そうだね。 よしわかった。 わかったよ。 ……それじゃ、 フラヴィ。 リリーヌの好きな物を教えて。 もしくは趣味とか」

「い、 や、 だ」

「ええー……」

少々理不尽な対応をされたようにも思え、 アクセルの片目が歪む。

「フラヴィ、 矛盾しない?」

「してない。 あんたが苦労してそれを探ることも、 報いるつてことの内だよ。 ほらつ、 さつさと行くつ。 結果的にリリーヌが喜ばなかつたら、 アンタを屍人ゲール鬼化させてとんでもない汚名を着せてやるからね!」

「ちよつ、 言つていい冗談と悪い冗談があるぞ!」

「何言つてんだい、 本気だよ!」

「……うわ本当だ、 本気の目してるよ……」

這々の体で、 アクセルはテラスから逃げ出した。

バルシャは無言でフラヴィを見返す。その目に感情の動きは全く見られず、怯んだフラヴィは思わず半歩ほど後退つた。暫く瞬きを繰り返していたバルシャは、彼女の質問が自分にとつて大した意味を持たない、その事に思い至つたかのように、また書類へと視線を戻す。

「違つ」

口からは短く、否定の言葉を漏らした。

「え…… そうなのかい？」

そう言つフランヴィも、その答えを心のどこかで予想していた。ああ、やつぱりそうかと、別段不思議に思つこともない。

書類に一言一言書き込みながら、壁に広げられたゼルナの街の地図にピンを差し込んでいくバルシャは、否定の言葉を重ねずに仕事を続ける。

「……んで？ 何でそんな的外れな事、わざわざ聞いてきやがつた」

バルシャも、決して育ちが良いとは言えない。アクセルとナタンに対しては別だが、その他の人間に対してはだいたいこんな口調だった。

「いや、ベルのヤツがさあ、あんたに何かプレゼントしたいって」

口に出してから、言わない方が良かったかと思つたフラヴィイだが、既に後の祭りである。ちらりとバルシャに目を向けると、彼は目を丸くして、書類ではなくフラヴィイの顔を見ていた。

「プレゼント……？」

「そうだよ。この間の立て籠もり事件の時とかもそうだし、色々と頑張つてくれてるからって。まあ、」
「褒美つてヤツかねえ？」代官としての立場もあるし

「……」

バルシャは再び書類に顔を戻す。

（喜んでる……のかな？）

フラヴィイにはそう見えた。一瞬だが、彼の表情が和らいだようにも見えたのだ。それが見間違いか幻覚であつた可能性も否定できないが、どことなく、その雰囲気に優しげなものを感じた。

「……えつと、まあそんな訳で、アンタとリリースが恋仲なら、一人きりで旅行とかプレゼントしようかと思つたらしくて」

「その必要はねえ。仕事だからな」

「それ……ベルの前でも、同じ事言えるのかい？」

バルシャは答えない。その価値が無い質問だと判断したのか、それともフラヴィイの言うように、アクセルに面と向かつてそれを言う自分を想像したのか。

「……あの一件に関しては、俺も正直驚いた」

「え？」

バルシャは書類の束を整えると、机に置く。そして壁際の水差しを手にすると、近くのコップに中身を注ぎ入れた。

「立て籠もりの一件は、俺も焦ったんだ。犯人はすっかり頭に血が上つてたし、容易には手が出せない。落ち着くまで時間をかけるか迷つたが、冷静になる前に最悪の事態になる可能性も高かつた。……そこへ、通りかかったリリースが、自分が困になると申し出たんだ」

「あの娘の方から……？」

「そうだ」

冷水を一気に飲み干すと、彼は椅子に腰掛ける。壁に背を預けたいたフラヴィも、近くの自分の椅子に落ち着いた。

「確かに、有効な手だ。女が衣服を脱ぎ始めたら、男なら誰でも気になる。どこまで脱ぐのか、どこまで見えるのか、ってな。特に最後の一枚を脱ぐ時なんざ、固唾を飲んで見守るさ。しかも、あいつは若くて美しい」

バルシャが女に对してそんな感想を持ち、しかもそれを口に出してしまったことに、フラヴィは密かに驚いた。彼はコップを机の端に置き、思い出そうとするかのよつに腕を組んだ。

「最後の一枚を残す、なんて事を考えて脱いでたら、犯人の注意は引けなかつた。初めから素つ裸になる覚悟だつたんだ。いや……覚悟、ではないな」

ついに、バルシャは目を閉じる。唇を結び、鼻の奥から軽い呻きを漏らすと、瞼を開くより先に口を動かした。

「……覚悟じゃねえんだ。そんな鈍重なもんじゃない。良心、つてヤツか？ 一番優先すべきものが何か、わかつてると言つたか……心強い柱が通つていると言つた……」

暫く一人で抱え込んでいたが、バルシャは突然頭を搔く。

「とにかく、だ。あいつは……そこらの女なんかより、よっぽどいい女だ」

バルシャ自身、自分がそんな事を言つことになろうとは思つていなかつた。

フラヴィ達が以前に起こした騒動に対し、ナタンは既に水に流している。アクセルは時々皮肉を言うが、それとて軽口のようなのだ。

しかしバルシャは違う。未だ、フラヴィのことを、そして更にはスルトのことを信用していない。スルトについては、メンヌヴィルとして傭兵をしていた頃の情報を集め、契約違反を行う人物では無さそうであること、次に高い能力を有していることで、信用はしなくとも簡単に裏切りはしないと判断している。彼が警戒しているのは、やはりフラヴィだった。

女の摩訶不思議さを知り、理解できない存在だと理解しているからもあるが、明確な悪意を組織に向けた相手を、バルシャは容易には許せない。吸血鬼としてフラヴィが暴走したあの時、もしも彼がその場にいれば、アクセルの首筋に噛みつこうとする彼女の頭を射抜いていただろう。

あり得ない事だろうが、今、ナタンかアクセルに命じられれば、

バルシャは躊躇いなくフラヴィを殺す。

(……あの時)

バルシャが思い起こすのは、アクセルがいなかつた、イシュタルの館の宴会での事。一人会場を抜け出し、フラヴィに命じられるままミシェルを攫おうとしたリリースを取り押さえたのは、他でもない彼だった。

(どういう事だろうな)

あの頃はまだ、リリースはどこにでもいるただの女だった。確かに美人だったが、騒ぐほどのものでもなく、器量や度胸も感じられない。ただ、その場その場で自分以外のものによつて流されていく、一人では何も出来ないか弱い女だった。

そのリリースが、いつの間にか変わっていた。彼女が犯人の注意を引く役を買って出た時は、双子の姉妹でも現れたのかと疑つてしまつた。

白昼堂々、公衆の面前で裸になるなど、誰だつて躊躇する。彼女に露出癖があるとも思えない。にも関わらずそれが出来たのは、先ほど彼自身が口にした通り、少女の……いや、少女だけではなく、犯人の命すらも優先したから。

(常に人命を優先する……つてことか)

その優しさは、リリースの元々の気質だろう。しかし以前の彼女なら、果たして、心では思つても実行に移せたかどうか。ともかく、彼女のお陰で誰も死なずに解決したのだ。それについては、バルシャは素直に感謝している。

「……まあ、リリースも凄いけどさあ

独り思考の海に沈んでいたバルシャに痺れを切らしたのか、フランヴィは曖昧な笑みを作ると、彼に声を掛けた。

「アンタも凄いって言つか、何て言つか……わざわざ溝を逆行するなんて、それこそ覚悟が無いこと出来ない事だと想つよ

それが自分への褒め言葉である」とを認識するのに、バルシャの脳は十数秒もかかる。

「……。あんなもん、臭いを我慢すりやいいだけだ

素っ気なく返す彼は、その機会に思考を打ち切った。

イシュタルの館最上階である四階、イキシアの間。そこがリリースの領域であり、この館で最上の一室であり、現在アクセルがその前をうろついている場所であった。

(……じりじよつ)

来訪の言訳である。そろそろ客が来る時間帯であるし、そんな

に時間は無い。自然な理由を思いつけず、いつそ別の日に後回しにしてしまおうかとも考えた。

（クソッ、こんなんだから童貞のまま死んだんだよ、俺は）

扉をノックして、やあと挨拶して、欲しい物や好きな物が無いか聞き出す。すべき行動は、たったのそれだけ。スムーズに行けば、一分どころか三十秒ほどで済んでしまう。

（そもそも、普段そんなに話したりもしないしなあ）

以前に貰った、滋養強壯の妙薬のお礼を改めて言つ、というのも考えたが、それなら手土産の一つでも持つてくるべきではなかつたかと、一の足を踏んでしまつた。

「……どうかしたの？ ベル君」

「ここまで近づかれたのに気付けなかつたというのは、それだけ集中していたからだろう。突然背後からかけられた声に、思わず前へと跳躍し、目の前の壁に手をついて姿勢を保つ。

「あ、部屋にいなかつたんだ？」

急いで振り向きつつ、アクセルはぎこちない笑顔を作つた。リリースは少年の様子に軽く首を傾けたが、すぐに柔軟な微笑みを返すと、そつと手を伸ばして扉を開く。彼女に誘われアクセルも、相変わらず壊れかけの人形のようにぎこちない動きで、部屋の中へと立ち入つた。

第一級の部屋ともなると、家具や内装も立派である。ベッドは天

蓋付きだし、絨毯は上質。さながらホテルのよつて、一通りのものは揃つていた。

「ジュースでいい?」

「あ、いえ、その、おかまいなく」

備え付けの食器の用意を始めるリリースの仕草は、実に自然体である。ここが彼女の領域である以上、それは当然な事であるのだが、ペースを崩されたままのアクセルは一層身体を硬くしている。

「ふふつ」

リリースが笑つた。

「何だか、借りてきた猫みたい」

アクセルは反論できない。苦笑いのよつた愛想笑いを返し、彼女から「ツップを受け取つた。注がれたレモネードは、アクセルのレシピの一つである。

絨毯の上に胡座をかくアクセルの横で、リリースも膝を折つた。互いにレモネードを一口飲んだところで、少年は話題を思いつく。

「フライから聞いたんだけどあ

「姉さんから?」

「うん。……身請けの話、二つとも断つたんだって?」

リリースはこくりと頷いた。彼女は相変わらず、自然な動作のままであり、特に心を動かした様子は見られない。

身請け、と言つても、リリースの場合は完全に彼女の自由意志と

なる。元々リリースはこの街の娼婦で、奴隸市で買われた女ではない。つまり、金銭的な義理は殆ど無いに等しく、例えば彼女がイシタルの館を出ると言わせば、阻める道理など無いのだ。せいぜい、この部屋の改修費用くらいだが、それも今までのリリースの貢献で何とかなるレベルであり、結局身請けするのにいくら必要かは、勝手に吹っかける事が出来てしまつ。そして身請けの金を、こつそりリリースが懐に収める事も可能なのだ。

何故、と、断つた理由を聞きかけて、アクセルは止め、レモネードを飲み干した。それはつまり、彼女が未だイシタルの館に留まっている理由を聞くのと同じである。流石にそれを聞いてしまえば、自分がリリースを追い出したがっているように取られるのではないからと、そんな危惧を抱いてしまつた。

そしてそのように考えてしまつたが故に、次のリリースの言葉に慌てる。

「断らない方が良かつたの？」

「そ、そんな事は言つてない。リリースの好きにすればいいし。

……まあ、断つた理由を知りたいと言えば、知りたいけど

「色々よ」

戯けて見せたのか、リリースは胸を張つた。が、すぐに背を正すと、彼女もレモネードを飲み干し、コップを傍らの椅子の上に置く。

「……私もね、聞きたい事があるの」

「僕に？」

「うん」

リリースは絨毯の上に両手を置くと、足を揃えて正座した。ちょうどいよいよ、右手でアクセルを招く。内密な話でもするのかと、彼

は立ち上がらずに近づいた。

「わっ……」

両肩を掴まれ、引き倒され、思わず声を上げる。ぽふんと、彼女の太腿の間に顔を埋めた。驚くアクセルだったが、すぐに意図を察して寝返りを打つと、天井を……リリーヌの顔を見上げる形で寝そべる。しかし彼女の顔は、眼前の豊満な双丘が障害となつて見えず、アクセルはそれ以上意識しないように目を閉じた。

「……それで、何を聞きたいの？」

両頬がそつと、掌によつて包まれる。片目を開けると、リリーヌは背を丸めてアクセルの顔を覗き込んでいた。頭に当たる柔らかい膨らみに気付き、アクセルはふて腐れるように再び目を閉じる。

「ベル君は……何で、イシュタルの館を作ったの？」

予想していなかつた質問に、彼はそつと両目を開けた。一一度三度、瞬きを繰り返し、リリーヌの瞳を見つめ返す。

ふと、彼女は視線を逸らした。

「街の裏も支配するために、ナタンさんをボスにして組織を作つたんでしょ？ でもそれなら、賭場でも良かつたし、そつちの方が稼げたんじゃないかなあつて……。賭場を作つて、それから娼館を作るなら分かるの。でも、先に娼館を作つて、それをメインにしたのは、何でだろうつて思つて」

「……たかが九歳児のガキが、そこまで細かく考へると思つ？」

リリーヌはそつと、アクセルの鼻梁に指を這わせる。暫く黙り込

んでいたアクセルは、自嘲するような笑顔を仕舞うと、一つ溜息をついてから口を開いた。

「人間の三大欲求は、食欲、性欲、睡眠欲。その中で一番商売になりそうで、裏社会で扱うのに相応しいと思ったのが、性欲。実際、この街には娼婦はいても、賭場は無かった。必要だったのは、娼婦なんだ。だから全ての娼婦を集めて、彼女たちを抑えれば、それが一番早く街の裏を抑える道になる……と、思った」

リリースは黙つて聞いている。

「……と、ナタンやローランには言つたんだけどねえ」「けど……？」

聞き返す彼女に、アクセルは呻いた。顔を顰めるように皺を増やしていたが、すぐに力を抜いてまた溜息を吐き出すると、表情を崩す。それが笑顔と呼んでいいものなのかどうかは、リリースには判断出来なかつた。

「初めは、何も考えてなかつた。ただ、ナタンと出会つて、あいつをボスにしようと思つてから、何日かは暴れ回つてた。あの時はただ、ゴロツキを片つ端から殴り飛ばしてただけだったんだけどね……そいつらが、揃いも揃つて娼婦達を支配していることに気付いたんだ」

ラヴィス子爵領、ゼルナの街は、周辺から浮浪者が流入してくる、掃き溜めのような場所である。

碌な教育も受けておらず、何か特技があるわけでもない彼等が働き口を探そとすれば、男はヤクザ、女は売春婦と相場が決まっている。賭博に熱中できるほど余裕がある者もおらず、いたとしても

そういう人間は、隣のクルコスの街へ行ってしまう。また、売春婦の成り手には事欠かない為に、賭博ではなく売春が広がったのだろう。

娼婦の勝手な商売は許さず、縄張りを作り、上納金を納めさせる。売春婦には事欠かない為、使い捨てが出来る。そして一定の縄張りさえあれば、十分に金は集まり、無理に他の組織を食らう必要もない。

アクセルとナタンは、ある種の馴れ合いを演じていたそれらの組織を次々と壊滅させ、一手に纏めたことになる。

「……僕がこんな事言つても、説得力無いだろうけど……貴族も平民も、職人も商人も傭兵もヤクザも、御婦人も娼婦も、結局は同じ人間なんだ。何の因果か生まれや育ちが違つて、今の形になつてしまつただけだ。なのに組織が金を吸い上げて、身体を張つて稼いだ娼婦が苦しむつて法も無いだろう」

アクセルは寝転んだまま、両腕を広げた。

「人間なんて……一人の人間なんて、ちっぽけさ。こうやつて両手を広げても、たつたこれだけしか抱え込めない。でもさ、だつたら、僕が抱え込めるだけの世界では、僕が満足出来るようにしたいんだ。そして、せめて僕の両手が届く範囲の女の子には、明日を失つて欲しく無い」

自分自身で確かめるようにしながら、尚も言葉を続ける。

「まあ、僕らも娼婦の稼いだ金をピンハネする以上、前の組織の連中と、特に変わり無いんだけど……せめてさ、安心して仕事を出来る場所くらい、あつてもいいんじゃないかな。明日の事、明後日の事、ずっと先の未来の事。そういう、夢を見られるくらいの安心

を

使い捨てにされる娼婦達は、明日を見ていなかつた。これから先、自分がどうなるかくらいは、容易に想像できた筈だ。何しろ周囲には、未来の彼女たちの見本がゴロゴロといた。見えなかつたわけではない、見なかつた。見ようとなかつた。目を背けていた。そして例え見たとしても、その結末を受け入れてしまつていた。

「……だからつ、要するに」

いくら何でも、喋りすぎた。今更ながらそのことに気が付いたアクセルは、照れ隠しに憮然とした表情になると、歯軋りするかのように顎を閉じる。

「今までの売春が気に入らなかつたから、自分で気に入るようこしようと思つただけ。それだけ」

結局は、それだけなのだ。使い捨てにされる娼婦達が可哀想だと感じた、それだけの事。

改めてリリースの顔を窺うが、彼女は二コリと微笑んで見せた。何となく、年の離れた姉に秘密の相談をしている弟のような、そんな気分になつてくる。アクセルは壁の時計を確認すると、身体を起こした。

「時間……」

「うん。 それからだね」

リリースに見送られ、部屋の扉を開く。未だ四階へと上がつてくる客はいなが、階下は俄に騒がしくなつてきていた。

彼女がここに留まる理由、その一片だけでも聞いてみたかったが、客が来る前に下がつた方が良い。

「あ、そうだ。僕からも質問なんだけど」

「ん？」

扉に手を当てるリリーヌは、小首を傾げた。小細工を用いるのも馬鹿らしくなり、アクセルは单刀直入に尋ねることにする。

「何か、プレゼントしたいんだけど……。何がいい？」

「プレゼント？」

「そう。何か欲しい物とか、して欲しい事とか……」

「じゃあ……」

殆ど考へることもなく、彼女は口を開いた。

「それは、来るだろ？」「やつぱりか」

リリーヌとの会話中、ふと思い至ったアクセルは、スルトに相談に来ていた。何と言つても最年長であり、世の裏を渡ってきた彼からは、重要な意見を聞けることが多い。

「お前も考えている通り、この街の裏を統一しようなんて組織が現れなかつたのは、せいぜいシノギになりそなのが売春程度で、それが過剰供給状態だつたからだ。無理に痛い思いをして縄張りを広げても、結局は得られる利益が少ない。だから、組織は互いに協定を結び、仲良しこよしでやつて來た。それを、お前が全て平らげ、ナタンの元に統一してしまつたわけだ」

「うん」

「この組織が苦労も痛みも全て引つ被り、丸ごと街の裏の顔となつた。娼売を一手に握り、今まで出来なかつた賭場も運営できるようになつた。宣伝も行い、領主に黙認させるための伝手も……いやまあ、これはお前がいるから、大した問題では無かつただろつが。ともかく、だ」

スルトは頬杖をつき、椅子の背もたれに深々と身体を預けた。

「ナタンだ。あいつは、一つの象徴となつた。裏の象徴にな。そして、ファミリーだつたか？ この組織を倒し、取つて代わりさえすれば、この街の裏の利権は全て手に入る。既に一元化されているから、実にスマーズだ。面倒ごとを片付けた以上、お前達が苦労して開墾した土地を狙う輩も次々と出てきた。そして、次第にこの組織の戦闘力が知れ渡り、簡単には太刀打ちできないと知つて、ゴロツキ共も二の足を踏んでいる……というのが、現在の状況だらうな」

さながらブームが過ぎ去つたかのように、今では組織に喧嘩を売る者は極僅か。

頬杖をつくスルトの、その太い腕を見ながら、アクセルは無理もないと考える。目の前にいる彼一人を取つても、こんな片田舎には場違いな戦闘能力を有している。メイジであることはそれだけで恐怖の対象であるのに、そのメイジの中でも上から数えた方が早いであろう実力者なのだ。

「しかしなあ、まだ来るぞ」

スルトの言葉に頭痛を覚えながらも、アクセルは頷いた。

「そして、次の相手は」

「ああ……。この街の守備隊でもおかしくは無い」

それはあくまで可能性の話であり、勿論そうであつて欲しくは無い。

しかし、未だ戦つていない相手で、目に付くのはそこだった。今までとは違う、正規の教育を受けた戦闘集団。イジドールが何を企んでいるかにもよるが、或いは、守備隊を丸ごと敵に回さなければならぬという未来も有り得る。

そうなつた場合、勝つのはファミリーの方なのが、それが問題である。こちらが非合法である以上、守備隊が敗北するのは世間的にも許されず、もしも最悪の方向へと進めば、監督不行届によるラヴィス家取り潰しへと繋がりかねない。

（流石にそれは、最悪に最悪が続けばの話だけど……。もしも守備隊が敵に回るんなら、何とか穩便に片付けないとな）

現在、ラヴィス子爵領の支配体制は、なかなか歪なものになつてゐる。

前任の代官から引き継がれて後、守備隊や文官たちを束ねるのは、アクセルやリーズ。しかし二人とも、未だ子ども。相変わらずラヴィス子爵が出張中である以上、軽く見られても仕方がない。その為か、守備隊の素行の悪さが問題となり、自警団の方に人気が集まる事にもなつた。

守備隊の質が悪くなり、自警団の方が頼りにされて士気が下がり、

それによつて質が悪くなり……と、悪循環に陥つてゐる。つまり、更なる悪行へと走る可能性もある。

「守備隊が、『ゴロッキ』になつてしまつかもな

アクセルは相変わらず渋い顔をしていた。

スルトは拳を顎から離し、さながら教師か上司のよひに立つ。

「ゴロッキが求めるものは、何だ？」

「……金。女」

「そうだ。そしてここには、そのどちらもある

「……スルト、何かない？ 守備隊更正の妙案とか」

「逆なら出来るがな。そういう地道な正しい行いは、俺の範疇外だ」

ただ……と、スルトは続ける。何か方法を思いついたのかと、アクセルは期待の面持ちで口を閉じた。

「魔法だ」

「魔法……？」

「そうだ。お前がガキだろうが、メイジはメイジ。お前の魔法が更に強力になれば、お前は表の世界でもっと好き勝手が出来る。要するに、守備隊を恐怖で支配しろ。そのイジドールというメイジは、ドットクラスなのだろう？ お前はラインクラス、既に一段上の存在だ。トライアングルにでも成長すれば、お前に逆らうヤツなんて消えるだろう」

「……」

「それに、これは貴族共全員に言えることだが……もつと、魔法を使う鍛錬を行つべきだ」

正論である。それ故に、アクセルは少し驚いた。

「大人になれば、どうしても、いざという時の問題が出る。いざという時、魔法が必要になった時の事を考え、常に一定の精神力を残すようにする。魔法なんぞ、使えば使う程強力に成長するんだ。だから、ガキのうちに、それこそ精神力を使い果たすまで鍛錬を積むべきなんだが……どいつもこいつも、面倒くさがるからな。才能があつても、それを開花させられないヤツらばかりだ。まあ、お前には必要ない説教だろうが」

「……いや、そんな事ないよ」

バツが悪そうに、少年は俯く。最近は文呪法や座学、それに格闘術の開発に囚われてばかりで、正道の魔法の訓練をお座なりにしていた。切り札や奥の手も重要だが、貴族社会で生きる以上、通常の……普通の魔法も、疎かには出来ないのだ。何しろ表に出せるのは、それだけなのだから。

「……なあ、スルト」

「鍛錬には付き合わんぞ」

ぴしゃりと窓口を閉じられ、アクセルは文字通り閉口する。

今までにも何度も頼んでみたことがあるのだが、いつも彼は、何のかんのと理由をつけて拒否していた。

「むう。アニエスには稽古付けてやつてるんだろ?」

「あれば、あいつの恐怖症を治すために、俺の鍛錬がてら付き合つてやつてるだけだ。貴族であるお前が、不良メイジを先生にしてどうする」

自らを不良メイジと表す彼は、やはりアクセルの考察通り、なか

なかにまともである。田を付けられさえしなければ、付き合つて何ら問題無い男だ。

「……ところで、話を戻すけど

どうあってもスルトの了解を得られそうには無く、アクセルは椅子に座り直すと、膝の上で両手を組み合わせる。廊下の外では、従業員達の忙しない足音が響いていた。

「守備隊を相手にする可能性、どのくらいだと思う?」

「何とも言えんな。未だ、特に動きは見られないそうだ。それに何より、『悪逆のサンディ』についても気になる。……いつそ、俺がクルコスの街に行くか

「え? けどお前、レオニー子爵領ではお尋ね者だろ」

「はつきり名指しで手配されているわけでも無し。向こうつとて、本気で探しているわけではないのだろう? 閻夜に紛れて動けば、例え発見されたとしても、俺なら逃げ切れる

「それにしても、危険過ぎるぞ」

「いや、二日か三日ほどだ。それで何も見つからなければ、大人しく戻る」

確かに、昼も夜も関係なく動けるスルトならば、捕まる可能性は低い。それに彼ほどの能力があれば、もしかしたら、何らかの手掛かりを入手してくれるかも知れない。

「……二日か三日でいいの?」

「ああ。イジドールが守備隊増強の案を出したそうだが、それが布石としても、すぐに動き出す事は無いだろう。ゴロツキの侵攻も一段落した事だし、そのくらいなら俺がいなくても問題無い」

「案内は?」

「いらん。前はあそこが拠点だつたしな。信用できそうな人間も何人か知つている」

「そうか……。それじゃ、よろしく頼むよ」

「ああ」

アクセルはふと、窓の外を見る。

闇夜に映えるイシュタルの館は、確かに、誘蛾灯の如き不可思議な魅力を放つていた。

第一十話「家族」（前書き）

ついに100万PVを突破しました、ありがとうございます！
相変わらずの遅筆ですみません。PVの記念とは言えませんが、今
回、また後書きに落書きがありますので、挿絵表示OFFとバック
の「」用意をお願い致します。

「……やられました」

生のハシバミ草を鼻の穴に突っ込まれたような顔で、バルシャは報告した。

報告書を纏めていたナタンは書類から顔を上げ、ソファに寝転んで読書していたアクセルも、ページを開いたままの本を胸に置く。

「やられたって……何が？」

「食い逃げです」

「そ。飯と酒、それに女をね」

事務室に入ってきたフラヴィは、バルシャの背後を擦り抜けると、頭をかきながら自分の椅子に座った。バルシャは両の拳を握り締め、肩を微かに震わせている。

ナタンとアクセルも、ようやく何が起きたのかを理解した。ナタンは机に書類を置む。

「初めてだな……そんなの」

イシュタルの館に来た客は、皆、玄関で履き物を脱ぐ。開放感があるとの評判だが、同時に容易には逃げられない。金を払わずに逃げ出そうとしても、履き物が保管されている為だ。

そもそも客は金持ちばかりであるし、持ち合わせのない場合の後

払いといふのはあつても、踏み倒して逃げられるといふのは初めてだつた。

「そいつ、どんなヤツだ？」

怒りよりも寧ろ興味が湧き、ナタンは笑みを作りそうな自分の顔を戒める。バルシャの答えは、実に漠然としたものだつた。

「白髪の老人らしい……です」

「らしい？」

「接待した女は一人なんですが、一人とも、話したがらず……」

ナタンに続き、傍らで聞いていたアクセルも首を捻る。

「どうやら、よっぽどいい爺さんだつたらしいよ」

補足する形で、フラヴィイが割り込んできた。

金を払わず逃げられ、そして“タダ乗り”をされていれば、最も怒りを抱きそうなのは彼女なのだが、その顔には怒りではなく困惑のよつた呆れが浮かんでいる。

「いい爺さん……つて、何が？」

「ナニが、だよ」

理解していないナタンにも呆れたのか、フラヴィイは軽く溜息をついた。

「相手したのは一人なんだけども、一人揃つて、その爺さんの代金を肩代わりするつて言つて。よっぽどの女たらしなんじやないの？」

「……ふうん

アクセルは相変わらず寝転んだまま、鼻の頭をかく。新米の娼婦なら、そうやって男に騙される事も不思議では無いだろ？。しかし、娼婦が保証人になつてツケるというのはわかるが、肩代わりとなると話は違う。もう金輪際、顔を見せるか分からない男の為に、金を払つてやるということだ。

しおりを挟み、本を隣のテーブルに置くと、アクセルはソファの上で背を起こした。

「女の子にそこまで想われるなんて、すごい爺さんだね。会つてみたいな」

「言つてゐ場合ですかつ……」

アクセルに同意しようとしたナタンだが、バルシャの激昂に思わず姿勢を正す。今まで彼に怒鳴られた覚えなど無いアクセルも、驚いて瞼を打ち鳴らした。

「そのジジイは、イシュタルの館の……ひいては組織の顔に泥を塗つたことになります。早速に追つ手を放ち、捕えましょう。例え老人といえど、例外を認めるわけにはいきません」

メンツの話が出た事に、いよいよヤクザになつてきたなと、アクセルはぼんやりと思う。

確かに、非合法な組織であろうと……いや、非合法な組織だからこそ、信用というものは大切なのだ。それしか依る辺は無いのだから。

「……そうだね。それじゃ、僕がその一人に聞き込みしてみようか

「聞き込み？」

「もしかしたら、子供も相手なら口うるさいてくれるかも知られないし。ダメで元々、やつてみる価値はあると思つよ」

ベルだらうとアリスだらうと、管理側の子どもとして娼婦達に知られていることに変わりは無いが、それでもバルシャ達よりは警戒が薄れるだらう。

だが、それでも矢張り可能性は低いのだ。

直接の被害者である筈の娼婦が納得している以上、彼女たちに老人の情報提供を強要することは出来ない。しかし、彼女たちも集団に属している以上、自分たちが了解しても、それで丸く収まる筈が無いことくらい理解しているだらう。にも関わらず、バルシャが手を出せない程に頑なに黙つているのなら、それなりの覚悟を決めている筈なのだ。

（つまり、一筋縄ではいかない、と。女にそこまでさせる爺さんってのも気になるけど……やつぱ、聞き出すのは無理かなあ）

一応試してはみるが、アクセル自身、あまり期待はしていない。

「それで、フラヴィ。その二人ってのは、誰なの？」

「ギャエルとマノン。元々は街の娼婦で、あたしもよく知ってるよ

問われることを予想していたらしく、フラヴィは淀みなく答えた。だが、口調とは裏腹に、その顔はどこか釈然としていない風で、人差し指でくるくると自分の髪を弄んでいる。彼女の表情が気になり、アクセルは、何か気になる事でもあるのかと尋ねてみた。

「いやあ、それがさあ……。あの一人、犬猿の仲だつた筈なんだ

けど。その爺さんが帰つてからは、何でか仲良しになつてゐるんだよねえ。二人で一緒に接客することになつた時は、文句ばっかり言ってたのに

「ふうん……」

アクセルの脳裏に、ふと二人の娼婦が浮かんだ。直接話したこともなく、遠目に見るくらいだったが、確かに、明らかに仲の悪そうな二人がいた。性格も正反対で、水と油といった様子だった覚えがある。

「んじゃ、フラヴィ。案内して」

「え、アタシ?」

「そう。ちょうどひわつき、クッキー焼いたから……一緒にお茶しようとか、そういう風に誘つて

ギャエルとマノンは、一人とも、親がこの街に流れ着いたという女で、ゼルナの生まれだつた。他の娼婦達と同様、教育などというものは受けられず、出来る仕事は非常に限られていた。

現在、イシュタルの女達の中での第一位はリリースであり、それは彼女たちも認めている。ギャエルとマノンは、言つてみれば二位を争う一人なのだ。街で立つていた頃から仲が悪かつたが、イシュタルの館に入つて野垂れ死にの恐れが無くなつた事により、却つて喧嘩に精を出すようになり、その仲は益々悪くなつていた。ただのライバルならば問題無いのだが、あまりの仲の悪さに周囲にまで悪影響を及ぼすようになつていて、フラヴィとしても悩みの種として頭を痛めていた。

そしてその二人が、今では仲良く一つのテーブルに座り、噂話で談笑している。

(バルシャに怒られるけど……その爺さんのお陰なら、礼の一つも言いたくなるな)

休憩所としても使われている広間には、一人しかいない。人の目がない所でも仲良くしているなら、その老人のお陰で、本当に仲が改善されたのだろう。

「あ。 フラヴィイに、ベルか」

ガタンと椅子を揺らし、こちらに顔を向けてきたのは、ギャエル。背を反らしても、彼女の胸にははつきりとした膨らみがある。細かい事を気にしない大雑把な性格で、それは、なるべく手入れを少なくするために、短めに切られた緑髪からも見て取れた。

「ああ、ちょっとね。クッキー焼けたんで、一人にも食べて貰おうと思って」

フラヴィイの後ろから、アクセルはそう言って包みを持ち上げる。さつと立ち上がり、フラヴィイとアクセルの分のカツプを用意しに向かったのは、マノン。よく気が回り、ほつれた客の衣服を繕つてやつたりもする。しかし気が回ると言うよりは、きちんととしていい物を放つておけない性格と言つべきで、その為に、大雑把なギャエルには嫌悪感とも呼べるもの抱いていた。

アクセルが空いた椅子に腰掛け、クッキーの包みを広げる頃には、カツプと皿を用意したマノンが戻ってくる。手を拭くための濡れタオルも持参するあたり、用意が良い女だった。

ギャエルもマノンも、アクセルとフラヴィイが、例の老人のことを聞きに来たのであらうことは察していた。しかし何事も無いように、

今度はフラヴィも交えて噂話を再開する。唯一聞き役に徹するアクセルは、クッキーをゆっくりと囁きながら、彼女たちの話に耳を傾ける。

ナタンやバルシャにああは言つたが、はつきり言つて、上手く聞き出す自信など無かつた。前世で女つ気が皆無であった自分が、こうやつて美しい女性に囲まれているのに、泰然と落ち着いていられることがからしておかしい。

（まあ、俺にそんな能があるわけないし。……子どもは子どもよりしく、単刀直入でいってみるか）

話題は、最近の客のことへと変わっていた。カップの紅茶が無くなっている。立ち上がるうとしたマノンを制し、アクセルはポットを持ち上げ、彼女たちのカップへと静かにお代わりを注いでいく。そして全員のカップが満たされた時を見計らつて、椅子に座り直しながら、彼は思い出したよつて口を開いた。

「そういえば、バルシャの兄ちゃんが怒つてたよ。食い逃げされたって」

「食い逃げ、ねえ。確かに」

少年が知る筈の無い意味合いを想像してか、ギャエルが頬杖を付いてニヤニヤと唇を歪める。行儀が悪いと、まるで母親のように注意するマノンは、音もなくカップをテーブルに置いた。

「確かに、バルシャさんの怒りもつともだけど」

「やつぱりさあ、別にいいと思うんだけどなあ。私達が払つ、つて言つてゐるのに」

メンシの話など、ギャエルにとっては腹の足しにもならない細事

なのだれつ。少し考えたアクセルは、彼女に同調することにした。

「僕も、わかんないんだよねえ。結局は、損なんかして無いんでしょう？ だったら、そのお客様さん、見逃してあげてもいいんじゃないの？」

「だらお？」

アクセルの頭を撫でながら、ギャエルは口を尖らせる。リリーヌの時もそうだったのだが、普段あまり子ども扱いをされないせいでのよろくな善意の接し方をされると、どうしても照れが出てしまつ。

「ちよ、やめてよ」

若干顔を赤くしながら、彼女の手を振り払おうとする。それは演技半分、素直半分の行動だった。

「えー、別にいいじゃん、ちょっとくらー

最近気付いたことだが、娼婦達はどうも、幼い少年といつものに触れる機会が少ない。黒幕とも言えるアクセルも、裏事情を知らない彼女たちから見れば、ただの無垢な男の子にしか映らないらしく、可愛がられることが多い。元々アクセルが、女相手に強く出られない性格であることも相俟つて、その評価も完全に間違っているとは言い難かつた。彼の容赦のない暴力を知っているフラヴィイも、初めのうちは内心ハラハラしていたが、今では落ち着いて放置することが出来る。

今の子どもっぽい拒否の行動も、ただの照れであると思われているらしく、そしてそれを否定しきれない以上、結局は諦めるしか無い。若干憮然とするアクセル、彼の頭を抱きかかえるギャエルの二人に、マノンは呆れたように反論した。

「そういうわけにもいかないでしょ。私達のやつたことは、例えば、レストランで食い逃げした客の代金を、ウェイトレスが支払うようなものよ」

「……けど、それって問題かな？ だって、結局店側は損して無いだろ？ 当の私達が納得してるわけだし、問題無いと思つんだけど」

「それは……」

マノンも、自分の正論を一から説明できるほどに、学がある訳ではない。自分たちが本来してはいけない事をしたのだと、感覚的には理解しているらしいが、それをギャエルに納得させる術は持ち合わせていなかつた。

ギャエルに味方したのは間違いだつたかと、アクセルは少し反省し、寝返ることにした。

「ベルも、そう思うよねー？」

ギャエルはアクセルの顔を覗き込みながら、小首を傾げて笑って見せる。彼女の胸に埋まりながら、アクセルは首を振つた。

「え？ 何、裏切るの？」

「いや、マノンの姉ちゃんの例え話を聞いて、やっぱいけない事だなあと思った」

咎めるようなギャエルの腕から解放され、アクセルは椅子に座り直すと、一人を見回す。

「いくら、ウェイトレスが納得しててもさあ。やっぱり、店側の人はいやだと思う

「ん？ 何で？」

「だって、同じ場所で一緒に働く、大切な仲間でしょ？ そんなことさせたくは無いし」

ああ、つまりはそういう事なんだ……と、アクセル自身も納得できた。その満足感が薄れないうちに、フラヴィの方を向く。

「フラヴィだって、イヤなんじょ？ 仲間がそんなことさせられるの。僕はイヤだけど」

「確かに、ね」

世の中の裏ばかりを見てきた、見せられてきた彼女たちには、予想出来なかつたのかも知れない。男が、自分たちを管理する存在である者が、そんな甘く優しい心を持つていた事など。

娼婦達を使い捨ての道具としてしか見なさなかつたのが、今までの組織であり、そしてそれが当たり前だつたのだ。ギヤエルも、自分がまさか仲間として扱われているなど思いもしなかつたし、マンもただメンツや道理の話をしていただけで、そんな事は露ほども考えてはいなかつた。

勿論、メンツの問題もあるだろう。しかし、もっと大きいのは、仲間を思いやる気持ちでは無いのか。そしてその気持ちが最も大きいのはバルシヤであり、先ほどの彼の激昂は、その現れでは無かつたのか。アクセルは、自分のその考えが間違つているとは思わない。

（間違つたのは……やっぱ、ナタンと俺か）

薄々、バルシヤの怒りは正しいと思いながらも、結局自分は、それをただのメンツの問題としか捉えていなかつた。

ナタンも、今頃は沸々と怒りを滾らせているかも知れない。自分の仲間が騙されたかも知れないという、家族愛とも呼べる怒りを。

絶句しているギャエルとマロンを前に、フラヴィイは溜息をついた。

「やつぱ……甘いんだよねえ、ウチの男どもは」

ナタンも甘い。バルシャも、やはり甘い。

一人はフラヴィイの言葉に、それぞれ黙つたまま頷いた。

「……そんなんじや、娼婦に……私達に舐められるんじやないの？」

呆れたように笑うギャエルの顔に、つっすらと涙が光る。

「ちよつと、何泣いてんの？」

「う、うつせい。言つた、見逃してよ。泣きたくなるから」

空中でひらひらと、マロンを押しのけたよつた仕草で右手を動かしながら、俯いたギャエルは左手で顔を擦る。

「いや……ハハ、何だか、何だろ……嬉しい……のかな？」

彼女は未だ、顔を上げようとはしなかつた。

「バルシャに、怒られたんだけども……初めてだよ、怒られて嬉しいなんて」

アクセルも沈黙していた。頭では理解していても、やはり、ナタントやバルシャのよう激しい怒りを抱けない自分への失望。そして、怒られて嬉しいという、彼女の言葉に。

「でも……やつぱつ、甘いこと囁つ。ギャエルの手つとおつ、私達にまで舐められたら……」

「それこそ、あたし達の心の問題だろ?」

フライヴィは深々と、椅子に座り直す。無理な体重のかけ方をされ、ギシリと木材が軋む音がした。

「娼婦がそんな事を心配出来るんなら、ここのは……イシコタルは安泰さ。甘ちゃんの男どもを、あたし等が支えてやればいいじゃないか」

「……そうだね、それでいいじゃん」

漸く涙が途切れたのか、ギャエルは顔を上げると共に立ち上がりた。赤くなつた顔を袖で拭い、一度大きく息を吐き出す。

「どこ行くの?」

「んー、バルシャの所

アクセルの問いに彼女がそう答えると、マーティンもやつと立ち上がつた。

「……そのお爺さんの事、話すの?」

「ううん、その必要は無いわ。今夜も遊びに来るつて言つてたから

「そ。待つてれば、あつちから来てくれるよ。勿論、あの人には払わせるつもりは無いけど……売り言葉に買って言葉とはいえ、バルシャに色々とひどい事言つちやつたんだよねえ」

「主にギャエルがね」

「マノンだつて、相当だつたじやん。……と言つわけで、これから謝りに行くの」

マノンが手を伸ばし、アクセルの頭を撫でる。その上からギャエルが手を重ね、彼女と同じ色をした少年の髪の毛をぐしゃぐしゃにかき回した。頭部を振り鐘のように揺らされたアクセルは、二人の手が離れた後、そつと彼女たちを見上げる。

「自分が悪いと思つた時には、素直に謝らなくちゃ。ベルもそうしなよ?」

「…………」

力無く頷き、アクセルは誰にも聞こえないような溜息をついた。

がたんっ、と、椅子が倒れる。

「…………?」

一人のどちらかが、椅子に足でも引っかけたのかと、アクセルは見当を付けて振り向く。しかし、椅子と共に、ギャエルが床に倒れていた。

「え…………」

椅子を跳ね飛ばして立ち上がったアクセルに、フラヴィも異変に気付く。倒れたギャエルに手を伸ばそうとしたマノンが、視界の中で、同じように床に倒れた。

「ああ…………あつ…………あつ」

ギャエルは顔を歪め、悲鳴とも呻きともつかない、声にならない声を上げ、自らの胸を押さえている。マノンは歯をガチガチと打ち

鳴らしながら、何かに耐えよつとするかのよつに、身体を丸めて震えていた。

「どうしたつ、何があった！？」

アクセルはテープルの上を踏み越えると、一人の元に着地する。フラヴィもすぐに駆け寄ってきた。

「フラヴィつ、持病か何かか！？」

「いや……この一人にそんのは無い」

手を伸ばし、ギャエルにディテクトマジックをかけようとする。が、彼女の悶絶は益々激しさを増し、その手は弾かれた。

「フラヴィつ、抑えろ！」

「あ、ああつ」

自分より膂力のあるフラヴィに怒鳴り、ギャエルの身体を無理矢理に抑え付けさせる。馬乗りになり、ディテクトマジックを行うアクセルの両腕は、ふらふらと泥酔者のよつに彷徨つた。

「何つ……だ、こりや……

アクセルの口から、啞然とした咳きが漏れる。

この方法で人間を診察した経験は少ないが、そのアクセルの感覚から言つても、それは異質だつた。体中の水分の流れが混乱しており、それが漠然とした苦痛を引き起こしている。身体全体を苛むその症状は、原因となる場所の特定を困難にしていた。

「くそつ、一体何だこれは

水メイジの医者も一人ほど雇っているが、専門家であるその一人ですら、どうにも出来ないのではないか……そんな思いが浮かぶ。

「ベルつ、何とかならないのかいつー？」

憔悴しきつた顔のフラヴィイが尋ねてくるが、アクセルには答えられなかつた。耐えようとしていたらしくマノンも、すぐにギャエルと同様に苦しみ出し、アクセルは彼女の上へと飛び移る。

「……！ 誰かつ、誰かいないかつ！」

暴れ出でやうとする彼女の背中に回り、羽交い締めにする。ドアへ向けた叫びから十数秒ほどして、パタパタと足音が聞こえてきた。

「兄さんつー？」

駆けつけたのがミシェルであつたことに、アクセルは安堵する。いくら何でも、ティファニアなどに見せられるものでは無い。

「ミシェルつ、ナタンとバルシャを呼んでくれー！ 大至急だつ」「わ、わかつた！」

問答の時間が無いと判断したらじく、ミシェルはすぐに行動に移つた。

「た……助かるんだろー？ そつだろー？」

泣きそうな顔で、フラヴィイが尋ねてくる。

彼女とて、病氣で苦しむ仲間を看病した経験はあつた。しかし、

あまりにも異質なのだ。何の前触れもなく、突如として倒れ、気絶するのではなく苦しみ出した二人の様子は。

答えを持たないアクセルはただ、唇を噛み、マノンを抑え付けるしかなかつた。

ギャエルとマノンの二人の症状については、医者もお手上げだった。

あまりの苦しみに、スリープクラウドで眠らせようとしたのだが、体内の水の流れの乱れのせいか、受け付けなかつた。水の秘薬を試しても、同様に効果が薄い。

水の秘薬を全て使い切る形で、ギャエルは何とか安静状態に持ち込めたが、問題はマノンの方だ。

アクセルが考え出せたのは、フラヴィに噛みつかせ、屍人鬼にして強制的に意識を奪う方法だけだつた。

（……何て愚策だ）

改めてそう思い、アクセルは舌打ちする。吸血鬼ハーフの能力が、真正の吸血鬼とどう違うのかも未だわかつておらず、屍人鬼化を解呪する方法も確実ではない。自分にそれが出来たからとはいえ、彼女に応用できるかはわからないのだ。勿論、何としても成功させ

るが、もしも失敗すれば、自分はフラヴィに仲間を破壊させたことになる。

「くそ……」

医務室に寝かされた二人を前にして、アクセルは噛み合わせた歯を動かさずに漏らした。両手の指を組み合わせ、そこに額を乗せる。意図したわけでもなく、祈りの姿勢となつた。

今まで自分が漁つた書物の中にも、該当しそうなものは無い。

（……何か……盛られたのか……？）

持病もない、健康体の彼女たちが、一人揃つて突然苦しみ始めた。原因として考えられるのは、二人一緒に時に、何かをされたから。念のため、クッキーや紅茶も調べてみたが、特に異常は無かつた。二人が一緒に過ごした状態を考えてみれば、昨夜、例の老人を客として迎え入れた時。

「…………。ごめんなあ。ギャエル、マノン」

答えが返つてくる筈も無いが、アクセルはぼつりと呟くと、変わらず頭を下げたまま両手を持ち上げ、二つの拳を固く握りしめる。

「一人にとつて、その爺さんは大切な男なんだろうけど……やっぱり……僕たちは、それじゃ収まらないんだ」

本当に彼女たちの気持ちを汲むのなら、この行動は間違いなのかも知れない。

しかし、自分を含め、そこまで物分かりの良い仲間はいなかつた。

「絶対……何とかして見せるから」

口にした彼以外に聞く者もない言葉。それは、アクセル自身への言葉だった。

第一十話「家族」（後書き）

妄想乱文注意

「拙作での原作キャラ・アニエスについて」

本来、彼女の役所はオリキャラの傭兵少女が担当する筈でしたが、書き進めていく内に魔が差し、大幅な性格改変をしてしまいました。概ね受け入れて頂いたようで安心しました。最大の問題はメンヌヴィルとの関係ですが、これは後々書いていきたいと思います。

既に私の中では、アニエスというキャラ自体が大幅な魔改造をされています。

オリ主、アクセル・ベルトラン・ド・ラヴィスの驚愕

> i 2 4 2 9 4 — 2 6 9 5 <

転生者言語で「少し黙つてくれないか」

アニメスに悪気や乱痴気があるわけではなく、ただ新しく覚えた言葉を使ってみたい年頃なだけです。アクセルは自分のせいでは無いかと危惧しますが、こればかりは原作介入などによるものではなく、言い訳のしようも無い程に作者の悪気です。

エンゲル係数の牽引役

> 124295 — 2695 <

「どんだけ食うの。ギャル曽根かお前は」

「(ギャルソン? ギャルソンとは給仕 そして男の子の意味もある) 誰が少年メイドだ!?」

「全然違う。全部違う」

本編の中で、アニメスは好き嫌い無く何でもお代わりをする、と勝手に書きましたが、それがうちのアニメスの最萌ポイントだと勝手に思っています。

自分の作ったものを美味しそうに大量に食べててくれるアニメスに、オリ主も時折「悔しい、でも(「」) とビクンビクンしてしまいます。

今この後書きを書いている時に、唐突に思い至りましたが、うちのアニメスには微量のファーザー成分(神聖モテモテ王国)が含まれている可能性が大です。街角でアニメスファンに見つかれば、新鮮卵星を当てられる可能性も大です。

展開が原作前だからと好き勝手していますが、原作後の成長したアーニスも好き勝手したものとなる予定です。そこまでにどれだけかかるんだと呆然としますが。

最近アーニスの出番があまりにも少なすぎるので、何か外伝的なものでも書こうかと思っていますが、その時間があるなら本編を進めるべきではないかと迷っています。何かネタを思いつけば、衝動的に書いてしまうかも知れません。

最後に、こんな妄文にお付き合いで下さりありがとうございました。
以前の後書きで「誰か描いてくんねえかな」と思っていましたが、未だ思っています。奇特な方お待ちしております。
これからもどうぞよろしくお願い致します。

第一十一話「邂逅5」（前書き）

また遅れまくつてすみません。待つて頂いた事、申し訳ないです。

レオニー子爵領、クルコスの街。傭兵、ギルド消滅の影響は、未だ治まっていない。新たな傭兵、ギルドの利権に絡む抗争は、さながら混戦状態といったところであり、それに一般市民が巻き込まれる事件が後を絶たない。領主であるレオニー子爵も、事態の沈静化を図つてはいるが、大した結果も出でていなかつた。

その事態は、寧ろスルトにとつては好都合だつた。暗がりよりも尚深い闇に入り込める彼は、その巨体を誰の目にも触れさせる事なく、易々と進むことが出来る。

治安が悪くなつてゐるのはゼルナの街も同様だが、いくらイシュタルの館が有名になつてきているとはいえ、クルコスの街の繁栄はそれ以上であり、こちらが主戦場といったところらしい。

ゼルナの街の裏を仕切るのは、ナタンの組織一つだけ。それに対し、クルコスの裏を仕切るのは、三つ。

奴隸市場はその一つだが、これは既にナタンの組織の傘下となつてゐる。次に、ギルドの大部分を仕切る商人の連合体。

そして最後の一つが、占い師の老婆を頂点とする『コヌ・バーンク・テコ・ヴィッシュ漠忘の岸辺』

であり、三つの中でも最も権力を持つてゐる。

その占い師の老婆は、ノーリと呼ばれていた。

「……おお、メンヌヴィルかい？ よお来た、よお来た」

まるで孫でも訪ねてきたかのよう、ノーリは顔の皺を一層深くして微笑む。

「久々だな、いじけた者。^{ノーリ}土産の酒だ。皆で分けてくれ」

部屋が薄暗いのは、ノーリもスルトも、光が無くとも不自由しないからである。

「ありがたいねえ」

テーブルの上に置かれた酒瓶を撫でながら、ノーリはそれを傍らの老人に渡す。老人はニヤリと笑い、それを持って奥の部屋へと引つ込んだ。

「……ああ、そうだ、今はスルトだ。そう呼んでくれ」

「へえ。あんた、まだあそこに？」

ノーリは少し驚いたように、窪んだ眼を開く。外套を脱ぎ去り、スルトは老婆の向かいの椅子に斜めに腰掛けると、足を組んでテーブルに肘をついた。

「てっきり、もう“焼いた”から、ここに来たんだと思つてたよ

「……そうだな。そろそろ、“焼き頃”かもな」

呟くように口にしたスルトは、回想するかのように顎を上げた。ほんの数秒ほどで、彼の顔は再びノーリへと向けられる。

「ノーリ、“悪逆のサンディ”についてだが……」

「ん？ それは、アンタの方がよく知ってるだろ？」

“悪逆のサンディ”について、スルトは全てを知っている。何しろ、このノーリとスルトを引き合わせたのは、サンディなのだ。

「……いや、何でも無い」

スルトがここに来たのは、確認のためだ。“悪逆のサンディ”的情報が、ゼルナの守備隊長イジドールのデータラメであることを。そしてその目的は、既に達成された。

「まあ、ゆっくりして行きな

「いや、悪いがそもそもいかん。なるべく早めに帰つてやらねばな

その言葉に、ノーリはより一層驚いたような顔をする。そして、自らが持つ彼自身の情報と照らし合わせ、一体どのような天変地異かと考えた。

「……ついに、見つけたのかい？」

「何をだ？」

“天使” セル

まるで石化の呪いをかけられたかのように、スルトの身体がほんの少しだけ固まつた。聞き返した口をぼおっと開いていたが、それが閉じられ、唇をへの字に結ぶ。彼はテーブルの下で拳を握り締めた。

「……予言か？」

「そりや、これでも占い師だからねえ。でもこれは、カンニングさ。何しろあたしは、あなたの過去を知ってる。……あんたをその地獄から救い出せるのは、天使だけさ」

「地獄？ ハツ」

スルトは鼻で嗤つた。

「地獄だと？ そんなわけ無いだろ？。俺は楽しみにしてるぞ。あいつに火炎の外套を着せ、その真っ黒な薫香で満たされる至福の時を……」

「違うね……」

老婆は首を振った。

彼等『漠忘の岸辺』の恐るべき点は、死など度外視している所だ。だからこそ、スルトに對して物怖じせずに接する事が出来る。スルトの頭髪が逆立つた。

「何が違う

「あんたがやつてるのは、砂漠を作つてそれに平穩と名付けるようなもんさ。そのまま殺されるまで止まらない。いや、寧ろ殺されたがつてる。……地獄さ」

脅そですが、口を閉じるような老婆では無い。文字通り息の根を止めねば、氣の済むまで喋り続ける。

「……地獄さ」

再びノーリは呟いた。

「……」

スルトは無言で立ち上がる。そして出口へ向かおつとする彼の背に、老婆はぼつりと声を掛けた。

「最後に、メンヌヴィル。いや、今はスルト。占いの結果を聞いていくかい？」

テーブルを、カードが擦る音がする。スルトは振り返らなかつたが、無視して出て行くこともしなかつた。

「……喜びな。“ユル”のルーンが出たよ

「死のルーン、か」

「再生のルーンもあるさ。……とりあえず、退屈はしないだろ

うさ」

老婆の言葉に、スルトは天を仰いで大笑いした。

宙に舞う、色取り取りの花弁。花の嵐。その美しさに、思わずナタンは心を動かされ、惚けた。さながら目の前に、大輪の花が咲いたと言うべきだろうか。

その花は、娼婦達の部屋に飾られるもの。しかし、その希有なる開花を目撃できたのは、たつた一人、彼だけだった。

いや、もう一人。その花を咲かせた男がいる。

そしてその花は、咲かせた男によつて散らされた。

「！」

花弁を搔き乱すようにして、その男の足は空中を走る。弧を描く爪先を、ナタンは冷静に目視することが出来た。

咄嗟に左腕を上げ、蹴りを防ぐ。男の爪先がナタンの肘下に衝突した時、乾いた音が耳に入ってきた。

「がああつ……」

ツルハシのような蹴りだった。ヒビが入ったのではなく、折れたのだということは、今までの経験上一瞬で理解出来た。

後ろ飛びに距離を取り、ナタンは右手で護身用のナイフを抜く。男は蹴り足を戻すと、頭に被っていた手拭いを取り去つた。後頭部で無造作に束ねられた、四足獣の体毛のような白髪が現れる。

「折れたな」

「ああ……折りやがったな、ジジイ」

威嚇するような笑みを作るナタンに、老人は肩を竦めた。

「ひょつとして、痛みには慣れっこか？ ん？」

「……恐ろしいガキがいてな。そいつのせいだろ。いや、そいつのお陰か……」

所詮は子どもの筋力とはいえ、アクセルの硬い拳をまともに受ければ、骨を折られることもある。今ではその痛みにさえ慣れつつあり、ナタンは自分自身に溜息をついた。

腰を落とし、老人に向かつてナイフを突き出す。

「まさか、そっちから来るとはな。てっきり逃げたもんだと思つてたぜ」

今夜も来る筈……ギャエルとマノンはそう言つていたが、バルシヤも信用はしていなかつた。あのような事態を引き起こしておきな

がら、ノコノコと顔を出せる筈が無い。その事態によつて何らかの利益を得ようとしているのだとすれば、それほど遠くにいつとも思えない。恐らくはこの街の、東地区以外のどこかに身を潜めているのだろうと、バルシャはそう当たりをつけ、自警団の人員を可能な限り動員し、老人の行方を追つていた。

「……よく見破つたな、自信はあつたんじゃが」

「見慣れない花屋だつたんでな。試しに、肩でも打つつもりで殴りかかつたんだが、まさか腕を折られるとは」

「ほ……。何じゃ、嵌められたのはワシの方か」

感心したように目を見開く老人だが、ナタンはそれを素直には受け取れない。バルシャや自警団の殆どが不在で、自分が老人の変装を見破つたのも偶然だ。周囲に頼れる人間がいない以上、ナタン一人で対処しなければならないが、この老人は明らかにナタンより強者だった。しかも、既に左腕を壊されている。武器は小さなナイフだけ。

「……何が狙いだ

ナタンは、自分がアクセルとは違うことを自覚している。このような状況、アクセルならば何とか仲間を呼ぶか、この場を穩便に納めるなどを考へるだろうが、ナタンは違う。

仲間を傷つけた者を目の前にして、そこまで冷静にはなれないのだ。事実今も、怒りの火炎によつて痛みなど押しのけられており、この老人の喉に食らい付きたいという欲求が暴れ回つている。

老人に向けて突き出されたナイフは、その欲求を抑えるための小道具だった。

「狙い、か……」

しかし、ナタンのその自制を試そうとするかのように、老人はスタッフと歩き出す。眼前の刃など目に入らないかのような、あまりにも自然な足取り。ナタンの噛み合わされた奥歯が、小さく軋んだ。

「ワシも知りたい。……女に阿片なんぞ使いよつた理由を」
(……あへん?)

老人の口から出た、耳慣れない言葉。それを聞き返そうと口を開けば、自分は本当に老人に噛みついてしまうのではないかと、ナタンは真剣に考えた。

「まあ、あれだ。ちいとばかし、虐められとけ」

老人はいつの間にか、突き出したナイフよりも内側に入り込んでいる。股間へと繰り出された膝蹴りを、ナタンは自分の膝で無理矢理に弾いた。

(二)のつ……ジジイ)

ナイフを引き戻そうとするが、老人は左腕でナタンの右腕を抱え込む。左腕が折れている以上、ナタンの両腕は封じられた。頭突きを浴びせようとするが、老人は背を丸めて更にナタンの懷に入り込み、彼の右腕を抱ぎ上げる。

「……」

気付けば、景色が回転していた。天井が見えたかと思うと、刹那

に背中から床に叩きつけられる。さながら建物に殴られたような衝撃が体中で暴発し、ナタンは悶絶して咳き込んだ。ナイフは既に、老人の手に渡っている。

(何……だ……今の……)

こんな小柄な老人が、男一人の身体を軽々と振り回し、床に叩きつけた。アクセルもそんな攻撃はしてこなかつたし、他の人間にされたこともない。梯子から足を踏み外して転落し、テーブルの上に叩き付けられた、数年前の記憶が蘇る。

(くそつ……)

必死で起き上がろうとするが、まるで背骨をバラバラにされたようく自由が利かない。そのナタンの腹の上で、老人はどっかりと腰を下ろし、胡座をかいた。ナイフを軽く煌めかせ、切つ先をナタンの首筋に当てる。

「こここの娼婦は、他とは違うな

「……?」

「田が死んどらん。世で最底辺とも言える生業でありながら、己に絶望しとらん。……お前がボスか。ふむ……」

独り言のように話す老人は、ナイフを引くと、それを振り上げて天井に突き立てた。短く震えたナイフが静止するころ、僅かに生えている白髪を撫でながら、老人はナタンの顔を覗き込む。

「……話せんじゃろ? だつたら、首で答える。阿片、つづーもんを知つとるか?」

少し老人を睨んだ後、ナタンは軽く首を振った。

「ふうーむ……」

品定めをするような老人の顔を睨んだまま、身体の状態を確かめる。だんだんと衝撃が薄れ、身体の機能が戻ってきた。動かせる右の指を密かに曲げ伸ばしさせ、完全に回復するのを待つ。

「どうやら、お前じゃない、と……。そんなら……」

ナタンの右手が伸びた。思わず拳を作り、老人の左頬を殴りつけてから、失敗だつたことに気付く。こんな寝転んだ状態で、大したパンチが放てるわけがない。何とか届きはしたが、老人の頭は軽くぐらついただけで、その身体はビクリとも動かなかつた。

殴るのではなく、掴むべきだったのだ。

伸ばした右手が、老人に掴まれる。ナタンは逆襲を覚悟し、次の一手を考え出そうとした。

「……」

しかし、老人はそのまま立ち上がると、ナタンを引き起こす。唇の端から垂れた血を指先で払い落とし、そつと両手を上げた。

「降参じや」

「……は？」

警戒するナタンに、老人はニヤリと笑みを浮かべる。

「奇襲を仕掛けたワシを、お前が捕まえた。……そういうことにして、主立つた人間を集めてくれんか」

要請と言つよりは、命令に近かつた。

怪訝な瞳で睨み付けるナタンの前で、老人は相変わらず、人懐っこくも見える笑みを揺らしていた。

地下に新しく設置された、牢獄。鉄格子で囲まれたそこは、随分と物騒な雰囲気になつてしまつたが、守備隊などに引き渡せないよう、内々に処理するべき相手のためにも、前々から必要とされたものだつた。

そこ初めての主となつた老人は、後ろ手に縛られ、座らされている。

「…………」

ナタンが捕縛したという老人を、アクセルはじつと見つめた。老人はふて腐れたように唇を曲げ、そっぽを向いている。

「それで……」

アクセルはそつと瞳を動かし、隣のナタンを見た。折れた左腕には先ほどヒーリングを使つたが、完全に治癒させるために、新しく開発したギプスを着用させていた。残つた右手で頬をかいていたナタンは、その瞳に思わず後退りかけた。

「何か吐いた？」この爺さん

「いや、未だ何も……」

「そう」

再び老人へと目を向ける。少年の頭は次に、効率のいい拷問の方法を考えるために回り出した。

「爺さん、名前は？」

アクセルは少し膝を曲げ、老人と同じ高さに目線を合わせる。鉄格子の向こうの老人は、首を回してアクセルを見つめた。そして数秒ほどして、徐に口を開く。

「お前だけに話したいことがあるんじゃがのあ……」

「ん？」

「ちょっと、そこの兄さんは出て行つてもらえんか？」

老人とアクセルの視線を受けたナタンは、尋ねるようにアクセルに目を向けた。アクセルは首を振る。

「何故僕だけなんだ？ 爺さんとは初対面の筈だけど」

「……ちょっとなあ……」

老人は片眉を上げた。後ろ手に縛られていながら、その態度には余裕が感じられる。既に一通りの拷問方法を思い浮かべていたアクセルは、老人の態度に違和感を覚えた。この状態から逃げられる筈も無いのに、妙に落ち着いているのだ。

「ええんか？ ここで言つて

「別にいいよ。言つてみる」

本当に自分を慌てさせる事が出来るのか、それともただのハッタリか。

後者であることを確信していたからこそ、その動搖は大きく現れた。

「阿片じやろ？ 使いよつたのは……」

横のナタンにも、アクセルの動搖ははつきりと見て取れた。そしてその動搖を見取つた刹那、老人は縛られていた筈の両手を広げる。右手には、杖が握られていた。先端が牢獄の鍵に向けられる。

「『アンロック』！」

更に、座り込んだまま足を伸ばし、鉄格子を蹴り飛ばす。苦もなく開いた扉を、アクセルは後方に跳躍して避けた。啞然としたナタンの視線の先には、老人ではなくアクセルがいる。

「ナタンつ！」

何も、一人で相手をする必要は無い。加勢を促すために短く叫び、アクセルは自らも、牢獄から一步踏み出した老人に向かつた。老人はこちらに杖を向け、細かく唇を震わせて詠唱しているが、アクセルはそれを完全に無視する。

「……つちいつ！」

杖を向けられても怯まず突進してくるアクセルに、老人は舌打ち

した。老人も応じるように右足を踏み出し、杖を指揮棒のように軽く振つて打ちかかる。魔法よりは威力が弱まるとはいえ、杖 자체にも、人を打擲する程度の威力に耐えられる強度はあった。

「『密葉』^{ミツバ}」

アクセルがそう呟き、彼の手刀が振り上げられる直前、老人は杖を手放して無理矢理に身体を捻つた。身体を支えきれず、床を転がつて避けた老人は、たんつと快い音を響かせて跳ね起きる。壁に後ろを預け、背を丸めて油断無く構える老人の肌は、冷や汗によって潤つていた。

頬を縦に割り、白眉の端にまで届いている傷から、じわりと血が滲む。真つ二つに切断された杖が、細かく床を叩いて止まった。

「.....」

下段から天井の方向へ、伸びる竹のように真っ直ぐに振り上げられたアクセルの手刀。その掌は、半透明のエメラルドグリーンの刃で包まれていた。

ナタンですら初めて見るそれは、指.....と言つよつ腕の骨によつて作り出された、マジックブレイド。杖が骨であること以外は、通常の『ブレイド』の魔法と特に違いは無いが、相手にそれとは全くの別物だと思わせる為、アクセルは違う名前を付けた。

「.....こりや、とんでもないガキじゃのぉ」

軽く指先で血を払う老人は、唇を歪ませて感心したように呟つ。アクセルは無言のまま、右手のブレイドを下ろした。

「.....ふんつ」

鼻で嗤い、ブレイドを消す。そして少年は腕を組み、老人に背を向けると、ナタンに真正面から向き合つた。

「で、どういう事だ？ ナタン」

口調は穏やかだが、ここで軽い冗談など許される筈も無い事を、ナタンはイヤと言う程理解している。そっぽを向かれた老人は、苦笑いしつつ頭をかいだ。

老人がメイジでは無い事は、アクセルは一目見た瞬間に気付いていた。『アンロック』も、ただ唱えて見せただけだ。つまり老人は最初から縛られてはおらず、そして牢獄の鍵も初めから開いたままだつたことになる。

冷えた頭でアクセルが出した結論は、自分は何らかの茶番に付き合わされた、ということだった。

「まあともかく、だ」

言い淀むナタンに助け船を出すように、老人は両手を上げてひらひらと揺らす。

「どうやらお前も、この一件の犯人じゃねえな」

「……そして爺さん。アンタが犯人じやないつて保証は何処にも無いぞ」

アクセルに釘を刺され、老人は一瞬没い顔をしたが、またすぐに首を振つた。

「ワシの名は、クーザ。関わっちまつたもんは、キリまで面倒見

クーヤと名乗る老人は、ギャエルが寝ているベッドに身を乗り出すと、彼女の口元で鼻を動かす。そして得心がいったように頷くと、傍らのアクセルに促した。

ナタンがこの老人を信用すると決めた以上、アクセルはそれを信
用する。裏切れば即刻殺すつもりだが、今は未だ、クーヤに妙な動
きは見られない。

同じくギャエルの口臭を嗅いだアクセルは、クーヤを振り向いた。

「……何だか……甘つたるいな」

「阿片、つつーもんがある。知つるんじやねえのか?」

アクセルは頷く。

クーヤはやはり、マノンの口臭を確認しながら、傍らのナタンに
目を向けた。

「昨夜、この一人を抱いた時にな、覚えのある臭いがしたんじや。阿片つつーのは、痛み止めの妙薬もあるが、酒と同じく、それ無
しではいられなくなる。使い方によつちや、一国の民衆を骨抜きに
することも出来る」

「聞いたことねえなあ、そんな薬……」

ナタンは頭に手を回した。入手した全ての情報を把握しているわけではないが、そんな薬の情報が入れば、まず印象に残る筈だ。

「ワシも、噂程度に聞いただけじゃが。まあ話を聞く限りでは、どつかのメイジがそれに更に手を加えたようじゃ。煙管も見当たらず、香も焚いとらんかつたんなら、残るは経口か女陰じゃが……娼婦じやからな、女陰ならお手上げじゃ。口から入つたんなら、そこまで悲惨な事にはならんが……」

クーヤは唇をひん曲げて、顎を撫でる。

「ワシはメイジでは無いんでな。さつきも言つたように、メイジが手を加えるんなら、あんまり役に立つ情報はやれねえ。……よつて、罷を張る」

「罷?」
「二人が苦しんだんなら、阿片の禁断症状が出たつてことになる。それで終わりつてわけでも無いじゃろ。阿片がありや楽になれるが、その阿片を持って来るのが犯人じや。……それとなく、噂を流すんじや。一人の娼婦が、原因不明の病で苦しんでるつてな」

「……すまねえ」
「え?」

俯いて、ただ一言、そう呟いたナタンを、アクセルは怪訝そうに振り返る。

「……一人に薬を盛ったのが、メイジだつて聞いて……それで、お前の地下牢での反応を見て……一瞬、お前を疑つた」

「……」

アクセルは何も言わず、棚から書類を取り出す。

（何と言つか……別にいいのに……）

細かい、とは言わないが、ナタンは気にしそぎなのだと思った。確かに仲間同士、信頼することも大切ではあるが、それに徹してさえいれば上手いく程、現実は甘く無いとアクセルは考えている。今回は別としても、これから組織を広げるにつれて、裏切るような人間も出てくるだろう。そうなった時、ただ信じ続けてそれによつて組織が崩壊すれば、非常に困った事になるのだ。

「……人間関係に、絶対なんてもんは無いんだ。間違つてたら、悪かつた、その一言でいいんじゃないか？」

アクセル自身、自らを、絶対的な信頼を勝ち取れるような人間でないと評している。そんな人間だったら、こんなにネガティブでは無かつただろうとも。

「いや。お前だつて、あれだけ怒つてたじやねえか。なのに、そのお前を疑つた……」

頑固だと、アクセルはそう思つ。自分には理解できないと。そしてだからこそ、ナタンは必要な人間なのだと改めて認識する。

熱血で、曲がった事が嫌いで……太陽のような明るさを持つ男。

「ねえ、ナタン」

「え？」

「あの爺さん、信用出来そう？」

アクセルはそう言いながら、ナタンを振り向いた。自分では無理なのだ。自分などでは。だからこそ、ナタンを失いたくは無いし、これからも頼れる男でいて欲しい。

「……俺は……信用出来ると思つ」

遠慮がちなその言葉は、しかし、確固たる自信を感じさせた。アクセルには、それで十分だった。

「そう」

安心させるかのように、そつと笑顔を作る。

「来よつた、来よつた」

いつの間にかやつて来ていたクーヤは、部屋に首を突っ込むようにして、アクセルとナタンに呼びかけた。

「救世主ジラしょつて、やつて來たぞ。ブリミル教の司祭がな」

半ば予想はしていた人物ではあるが、アクセルは天井を仰いで軽く溜息をつく。

覚悟を決めねばならない。

ナタնも、イシュタルの館も、失うわけにはいかない。

「ナタնは、ここで待つててくれ。軽々しくボスが顔を出すもんじゃない」

表と裏、合わせて何人殺すことになるのだろうか。
アクセルは早速、一人目の死人になるであろう人間の元へ向かつた。

第一十一話「危愧」（前書き）

挿絵表示〇FFF推奨

「肩なんですよ……娼婦も、娼婦を買ひつ男も……」

イジドールは言つ。

「俺の家が没落したのは、全部女絡みなんです。祖父は友人の貴族の妻を寝取りましたし、父は田を付けた女を片つ端から罠に嵌めて、その快楽を満喫しました。まあ、そんな男の血を引くのが俺なわけで、つまり言つまでもなく、この俺も肩でして」

彼は既に、自らの命を捨てていた。到底、この場を生き残ることが出来ないと。

「……許せなかつたんです。この肩の俺に抱かれたことがある分際で、この肩の俺の金を受け取つたことがある分際で、リリースは……。ええ、あつちは俺を覚えてませんがね、まだイシュタルの館が出来る前、三度ほど抱きました。……そんな汚らわしい女のクセに、あんなに美しくなるなんて。立て籠もり事件のあの時、俺も現場にいたんですよ。リリースだと氣付くのに、大分かかりました。その時のあいつは、美しかつた……天使か妖精のようでした。……けどね、俺を覚えてなかつたんです。目を合わせたのに、会釈しただけで。……許せませんよねえ、肩女の分際で……一人だけ一段上に上がるなんて」

腹を斬られ、先ほどまで呻いていた部下が、いつの間にか動かなくな

くなっていた。

「女に不自由してた司祭が、いい薬があると持ちかけてきました。薬の効果が切れれば、地獄の苦しみを味わうというものでして。女を縛るものですよ。女の方から来てくれるんなら、面倒」とも減りますしね。……あの司祭はそう考えたようですがね、俺は、それでは意味が無いと思つたんです。だつてそんなの、薬田の関係じやないですか? 司祭は一般には出回つていなつて言つてましたが、それがどこまで信用できるかわかつたもんじゃありません。他に薬を持つヤツがいれば、そいつに靡くでしようから。……薬の呪縛は、三田ほどで切れるそうです。勿論その間、苦しみは続くわけですが。……だつたら、その苦しみから救い出してやればいい。女を縛るのではなく、救つてやれば、女の心は完全に自分のものになるでしょう。そして……あの美しいリリースの心を奪うことが出来れば……あの美しい女の愛を一身に浴びることが出来れば……俺はもつと、高尚な存在になれるんじやないか。我が家の肩みたいな血統から逃れられるんじやないか……そう思つたんです」

イジドールが一步踏み出すると、ぬるい水音が響いた。石造りの床は血を吸收せず、彼方此方に血溜まりを作つている。

切断された消化器官から這い出る、排泄物の臭い。濃厚なべつたりとした血の香り。毒霧のような悪臭の中、イジドールは自分が既に死んで、地獄に降り立つてはいるのではないかとすら考えていた。

「……結局、いつなつたわけですが……」

曖昧な笑いに顔を歪ませ、イジドールは自分の周囲に転がる、部下達だつたものに両手を広げる。

部下達は全滅したが、自分は未だ死んでいない。辛うじてそう判

断できる理由は、田の前に静かに佇む、一人の少年だった。

「……何でだつ」

広げていた両手で自分の頭を抱え、イジドールは叫ぶ。

「アクセル様よおつ、何でアンタがつ……！」

尋ねるべきは、現在代官を務める子爵の息子が、ここにいる理由か。それとも、部下達をこんなにも……人をこんなにも簡単に殺してしまえる理由か。はたまた、阿片を使う陰謀を知っている理由か。

「……」

血で塗れたアクセルは、同じく血で染まつた包みを放り投げる。小さな壺ほどの大きさのその包みは、イジドールの足下に転がつてくるまでには、中身を露わにしていた。

苦痛と絶望に歪む、司祭の首だった。

「……それは、死んだ時の表情だ。そのまま残つてゐる」

その言葉に、イジドールの疑問の半分は霧散した。
そして残る半分の疑問も、静かに照らし出されていく。

「なあ……何でだ？ 誰も殺してないし、誰も死んでないんだろ？ なのに、何でだ？ 何で……こんなにも簡単に……殺してしまえるんだ？」

「イジドール。僕は、臆病なんだ」

アクセルは歩き出した。

足にかかる血も、靴に絡みつく臓物も、一向に気にしていない。
せいぜい、浅瀬を徒步で渡るかのような歩みだった。

「うまく代官を務め上げることが出来るかどうか、怖かった。だから、イシュタルの館と、それを管理する非法な組織を作り上げた。市民も犯罪者も、どちらをも管理するために。そうすれば、早く間違いも起きないだろ？」

アクセルの杖が、また、エメラルドグリーンの光に包まれ、それは剣の形に収束した。

「……お前は、イシュタルの館に悪意を向けた。悪意を向けたのなら、やがて杖と剣も向けてくるだろ？……そうなるくらいなら、そうなる前に死んで欲しい。だからだ。司祭を殺し、お前らが潜り込ませた料理人を殺し、守備隊の女狂いどもを殺し……そして残るは、お前一人を殺せば終わりだ」

「…………ふ……ふざけんじやねえぞっ、小僧おおつ……」

イジドールは杖を振る。

彼を守るようにして、剣を持つ一体のゴーレムが姿を現した。そして彼自身は、空いた手でレイピアを握る。

一人と一体によるこの体勢は、強力な一人に対するための、イジドールの必殺の構えだった。

「小僧の分際でつ、この俺を殺せるとでも思つてゐるのか！」

横に並ぶ、一体のゴーレム。その後ろに隠れるイジドール。そしてそのフォーメーションを保つたまま、アクセルへと突つ込む。

一体のゴーレムが、揃つて剣を振り上げた。アクセルはマジックブレイドを頭上で横たえ、それを防ぐ。

イジドールの攻撃は、その時だつた。杖が防御に用いられた、狙い通りの状況。ゴーレムの間から、腕とレイピアを槍のように見立て、一直線にアクセルの喉を突く。

「『密葉』」^{ミツバ}

が、必殺の突きは難なく弾かれる。

(……え?)

弾かれたと言つよりは、逸らされた。

アクセルの左手が、マジックブレイドの光に包まれている。杖は、ゴーレムの剣を受け止めたままだ。少年の左手の刃がレイピアを擦り、滑り、イジドールへと近づいてくる。全身全力の突きであるが故に、ブレーキを掛けられないまま、寧ろイジドール自身もその刃へと向かっていった。

「が……」

肩から腰へと、斜めに切り裂かれる。吹き出した血が、ボトボトと床の血溜まりに合流した。

力を失ったゴーレムを左右に蹴り倒し、アクセルは膝をつくイジドールの前に立つ。イジドールは首を傾げるようになに顔を上げ、上目でアクセルを見た。

「……むかつくなあ……余裕……」さやがつて……

敢えて、イジドールの得意技を潰しての決着。アクセル自身にそのつもりは無かつたが、イジドールは頬を痙攣させて吐き捨てた。どうしてマジックブレイドが一本もあるのか……その疑問は、も

はや何の意味も持たない。

「しかも……敢えてマジックブレイドかよ……格好つけやがって……」

イジドールの手が伸び、アクセルの上着を掻もぐとする。既に杖もレイピアも持つておらず、生卵を碎く力すら残っていない。しかし、アクセルは無言でマジックブレイドを振り、その手を切り飛ばした。

「つ……！」

短くなつた腕を抱え込むよつこにして、イジドールは血溜まりの中に転がる。

「……よ……容赦ねえ……な……」

「言つただろう、臆病者つて」

「……へ……ナイフでも……隠してると……思つた……か……？」

イジドールは血溜まりに浸る顔を、ぶるぶると持ち上げた。己と部下のそれが混じつた血で、真つ赤に塗れている。

その唇が、噛つた。

「……やまあ……見ろ……臆病者め。死んでやる、やまあ見ろ……」

「……」

正式に任じられた、守備隊長の死。それは確かに、大きな問題となる。

その後始末がどれ程厄介かも、アクセルは理解していた。

確かに、やまあ見る、なのだ。

「……一つ、教えて……やる」

堪えきれなくなつたように、イジドールは笑い声を上げた。しか
しそれも、顔を持ち上げる力も無くなつたのか、すぐにガラガラと
泡音に変わる。血溜まりでうがいをしながら、イジドールは血で穢
れた喉で、呪いのような最後の一太刀をアクセルに浴びせようとし
ていた。

「女に関しては……俺たちの独断だが……娼館を潰すのは……命
令だった……からだ……」

それは、身体を擦り抜けて心に届く、言葉による暗い一太刀。

「その……命令は……命令を……出したのは……お前の……親父
の……ラヴィス……子しや……」

遂に、イジドールは息絶えた。

足が重い。亡者が膠にでも化けてへばり付いたかのよう。
心が重い。地獄の底から伸びる暗い手が、命を求めてしがみつい
ているかのよう。

肩が重い。ただ一人生きたままその場を去ることを、死者達が許さないらしい。

「……ん？」

敗残兵か何かのように歩くアクセルの前に、見覚えのある人間が現れた。深夜、顔はよく見えないが、あのシリエットの大きさは覚えがある。

「……スルト。お帰り」

それは確かに微笑みではあったが、あまりにも弱すぎた。憐すぎた。それを感じ取ったスルトですら、思わず両手を伸ばして支えそうになってしまった程に。

「ん？」

アクセルはふと、スルトの陰に立つ人物に気付いた。

「爺さん……何で？」

クーヤは年長者らしい笑顔のまま、ドアをノックするかのよう、スルトの胸板を叩く。

「クルコスの知り合いでな。しつかし、驚いたわい。まさかコイツと仲良く出来るヤツがいるとは……」

「へえ、そうなんだ。だったら、少しほ信じてやってもいいかな、爺さんのこと」

「おい、まだ疑つとつたんか？」

「完全に信用するほど、勇気も度胸も無いんでね」

そう言つて笑い……アクセルはその場に崩れ落ちた。今度こそスルトが腕を伸ばし、その小さな身体を支える。

「『」め……後は……お願い」

吐息のような声でそう囁き、アクセルは目を閉じた。

「……」

「眠つとむ。随分と信用されとるなあ、メンヌヴィルよ」

先ほどアクセルが出てきた建物を覗き込むクーヤは、中の様子をちらりと一瞥し、顔を顰めた。

「同じ穴の貉つてヤツかのう？」

「うるさいぞ、ジジイ。せつと足跡を消せ」

「ほいほい」

アクセルの感触に、スルトは違和感を覚える。これだけ血にまみれていれば、当然血の足跡も残るだろう。この少年がその事に思い至らないとは考え難く、出せた結論は、それ程に消耗しているという事だった。

しかし、たかが土のドットメイジを相手に、ここまで消耗するものなのか。

「おい、終わつたぞ」

足跡を消し終えたクーヤが、急かすようにスルトに囁く。スルトは建物の中にフレイムボールを投げ込むと、アクセルを背負い、クーヤと共に執政庁の堀を越えた。

「……なあ、メンヌヴィルよ」

一人並び、闇を走る。スルトは返事をしなかつたが、クーヤは構わず言葉を続けた。

「やっぱ、そいつも燃やすことになるんか?」

スルトはふと、背中のアクセルに意識を向ける。完全に眠つてゐるようだが、例え起きていたとしても、構わないのではないか……そんな考えが浮かんだ。

「わて、な。……そうなつた時、止めるのか、ジジイ?」

「止めんよ。止められるモンでも無じ。ワシはワシの事だけ考えたいんでな」

既に遠くなつていた執政庁の方角から、轟音が届く。予定通り、アクセルが運び込んでいた火薬に引火したことを確認し、二人は騒がしくなる場所とは反対の方向へ走つていった。

睡眠状態にあることに気が付き、そつと戸口を開けてみる。アクセルは記憶を辿り、意識を失う前の事を思い出すやつと試みるが、その前に状況を把握してみた。

「……」

身体に不快感は無い。上体を起こし、身体を見回してみるが、既に血塗れの衣服は取り去られ、寝間着に着替えさせられていた。どうやら、自室のベッドらしい。ちょうど明け方で、開け放たれた窓から、美しい朝焼けが見えた。

（……そうか。あの後、スルトがいて、それで寝落ちして……）

執政庁の守備隊宿舎で爆発が起き、守備隊隊長と隊員たちが死亡するといつ、緊急事態。有耶無耶にする為の爆破だったが、どうやらリーズは予想通り、代官を起こさないという選択をした。確かにリーズがちゃんと働いている限り、アクセルの必要性など疑わしいのだが、それでも朝一番に連絡は来るだらう。今のうちに、ローランのホテルに移動しておくのが望ましい。

そしてもう一つ、爆破という行動を起こした理由がある。アクセルにとつては、既にそちらの目的が重要だった。

「あ……おはよう、ベル君」

部屋に入ってきたリリースは、既に着替えを始めたアクセルを見ると、優しく微笑みを見せてくれる。女の笑顔一つで心を躍らせる自分に呆れもするが、前世を考え合わせると、生意気な感想だと笑い出したくなる。

「これから、ホテルに行くの？」

「うん。そのつもりだけど……」

そう言いつつ、アクセルはリリースが持つ木製の盆に視線を落と

す。パンとサラダ、スープ、それにティーセットが乗っていた。作りたてらしく、仄かに湯気が立ち上っている。

「……ひょっとして、僕に？」

「あ、食べる時間が無いなら、別に……」

「いや、頂きます」

軽く、腹に何か入れておきたい気分だった。それもあるが、折角自分のために作ってくれたものを、無駄にしたくないという気持ちの方が大きいかも知れない。

リリーヌが小さなテーブルの上に盆を置き、アクセルは飾り気のない椅子に腰掛けた。驚いた事に、パンも焼き立てだった。

「その……無理しなくていいかい……」

「え？」

立つたまま、胸の前で手を組み合わせ、焦つたように囁き彼女に、その言葉の意図が分からぬアクセルは首を傾げた。まだ熱いパンを千切り、右手のそれを口の中に放り込む。

「……肉料理は、やめておいたんだけど……でも、もし無理なら

……」

咀嚼し、胃の中に納める。そして再びパンを引き裂いていたところで、ようやくアクセルは理解した。

「リリーヌ。もしかして、リリーヌが着替えをしてくれたの？」

「……うん」

深夜であった故に、娘達ではないことは確かだった。リリーヌの

言葉が気遣いであつたことに思い至り、あの血だらけの衣服を取り替えてくれたのが、彼女であることに気付いた。

「そつか……ありがとう」

人を殺し、その返り血を浴び、そのことが食欲に影響する事は、あの“童貞”を捨てた時から一度たりとも無かつた。確かに山賊討伐の時、嘔吐はしたが、村へ戻る頃には既に胃は食物を要求していたのだ。ナタンと共に暴れ回っていた頃も、当然相手を死に至らしめる事もあつたが……血溜まりの中で空腹を覚え、彼等のアジトにあつたハムにかぶりついた時には、ナタンも明らかに顔を引きつらせていた。

（そうだな……考えてみれば、異常つて言つか……サイコ？）

出合つた頃はナタンを值踏みもしたが、今考えてみれば、彼の方こそよく自分の元から逃げ出さなかつたものだ。

昨夜の殺し合いがアクセルの初体験でないことは、リリースは前々から知つていただろう。朝食を見れば、確かに、肉や血を連想させるような色は見当たらない。これは、彼女の優しさが詰まった食事なのだ。

「うん、美味しい」

一応は貴族であるので、ガツガツと少年らしく、ところは無理が出てしまう。それでも、精一杯の感謝を示そつと、笑顔のままアクセルは胃に収めていく。

その様子に安心したのか、アクセルが盆の上を全て平らげる頃には、リリースは紅茶を注いでくれていた。

「……でも、リリースこそ疲れてるんじゃないの？ 昨夜もお客様
さんいたんでしょ？」

「私は大丈夫。夜更かしには慣れてるから」

「そり」

アクセルは紅茶のカップを口元に持ち上げたまま、そっと、窓の外に視線を移した。

外の様子が気になつたわけではなく、単純に、テーブルの向かいに座るリリースの視線に耐えられなくなつたからだ。両肘をテーブルの上に立て、両手で自らの顔を支え、微笑みのままアクセルを眺める彼女の視線に、何となく恥ずかしさを覚え、あまり長い間見つめ返すことは出来なかつた。

田を見て話せない者は卑怯者だ……その格言は、前世で見た映画か何かだつたか、それともこちらの世界の書物からか。どちらにしろ、間違つた格言ではないと、アクセルは静かに自嘲した。

「あ……ごめんなさい、お行儀悪かつたね」

ふと気付いたように、リリースは背筋を伸ばし、手を太腿の上に置いた。

「別にいいよ。一番人気のレディ・イキシアに朝食のお世話をし
て貰えるなんて、男としては無上の喜びだね」

アクセルは空になつたカップを、盆の上に戻す。お代わりを勧めるリリースに、首を振つて断り、椅子から立ち上がつた。

「うあうあうあま。ありがとう、嬉しかつたよ。片づけは誰かに任

せて、リリースも早く休んでね

「……あの、ベル君」

そろそろ時間だと、部屋から出ようとしたアクセルを、リリースは呼び止める。振り向くと、じゅりじゅりに向かって遠慮がちに伸びた、白い手があった。

「どうかしたの？」

その手の向こうの、心配そうな顔に尋ねる。

「……未だ……終わらないの？」

「うん……」

アクセルはただ一言、そう返した。

ギャエルとマノンの異変に始まる一連の事件は、未だ終わっていない。未だラスボスとも呼べる存在が、一人残っている。

それは、この子爵領の本当の支配者。

「ごめんね、リリース。あの約束は、まだ先になりそうなんだ」「それはいいの、私のわがままだし。……でも、その……ベル君

「ん？」

「疲れてない？」

アクセルは右腕を回す。続いて左腕を回す。

「……いや、そんなことないけど？」

昨晩は別としても、ちゃんと睡眠は取っている。食欲もある。元

「氣はつらつとはいかないが、身体もいつも通りだ。

精神的には確かに悩みばかりで、頭痛すら覚えるが、こんな深刻
そうな表情で心配される程でもない。

「……………そう」

「ん、まあ、心配してくれた事はありがとう。そうだね、寝られ
る時はしっかり寝るよにするよ」

「氣を付けてね？ もしもの時は、逃げていいんだから」

「ああ、それは得意だな」

ひらひらと手を振り、努めて軽々しく言いながら、アクセルはホ
テルに戻った。

(……参ったな)

結局毎近くになつても、執政庁からは何の連絡も無かつた。流石
にいくら何でも、これ以上知らんふりを決め込んで動かなければ、
かえつて不自然であると思い、自分の足で戻る。そして戻つてみれ
ば、机で文字通り頭を抱えるリーズがいた。

「……………あ、若様…………」

ひょっとして、普段のあまりの存在感の無さに、ただ存在そのも

のを忘れられていただけかとも考えたが、どうやら違ひじこ。

「お聞きになりましたか」

「うん。誰か怪我人が?」

「……守備隊の隊長、イジドールを含め、守備隊の半数近くが死亡しました」

そう言つてから、あまりにも単刀直入過ぎると思い直したのか、リーズは首を振りながら続けた。

「全ては、若様の留守をお預かりする私の責任です。罰を受ける覚悟は出来ています」

要するに、アクセルには何の罪も無い、といふことを言いたいらしかつた。

(責任どころか、俺が実行犯なんだけ……参つた)

相変わらず真面目すぎるのだ、とも思った。二人でどうするか一緒に考えよう、といつ展開に持つていいくのが理想だったのだが、彼女のあまりにも健気な覚悟に、アクセルはより一層の罪悪感を覚える。

「ねえ、リーズ。何で爆発したの?」

「原因は不明です。火の不始末だと言う者もありますが、この季節に暖炉に火を入れる筈もありませんし、それに何より、火薬を宿舎に保管する筈もありません」

「じゃあ、誰か犯人がいるの?」

「その可能性が高いようです」

「だったら、そいつの責任じゃないの?」

守備隊の隊長以下、多数の兵士を失った以上、そう簡単に動けないことは、アクセルも理解していた。執政庁の中の施設に侵入し、鍛え上げられた守備兵たちに気付かれずに爆破などしかせる相手……弱体化した守備隊でどうにかなる筈も無い。

動機も、目的も予想は出来ないだろう。金も何も盗まず、ただ守備兵を殺しただけ。まるで子どもの氣紛れな悪戯のようだ。

「ねえ、犯人に心当たりは無いの？」

重ねて、アクセルは問い合わせる。ここで“悪逆のサンディ”だと言い出すのも驚きを誘うが、もしも……。

「……“イシュタルの館”かも知れません」

え……、と、アクセルは絶句する演技をした。

公的にはイシュタルの館……そして東地区の改善を成し遂げたのは、商人バルビエということになつていて。確かにバルビエの遺した財産が活用されたので、あながち的外れというわけでも無い。実行したのはバルビエの腹心、ナタン。様々な援助をしたのが、ゼルナの街一番の名士、ローラン。それが、リーズだけではなく執政庁全体の見解だろう。

「でも、あそこ、ローランも賛成してたんだろ？」

「アクセル様」

“若様”ではなく、“アクセル様”。リーズがその呼び方になる時だけは、アクセルもふざける事は出来ない。

「しばらく、ホテル“初月の館”への出入りはお控え下さい」

「まさか、ローランを疑つてるの？」

「ローラン殿が無実でも、ローラン殿が利用されていないとは言
い切れません。今回の一件の犯人、私は、“イシュタルの館”が行
つた“警告”ではないかと考えています」

アクセルにとつては、さながら心臓を射抜かれたかのよつた衝撃
だつた。思わず変化した彼の表情は、幸いにも、単なる驚きと受け
取られた。

解答に至るまでの道筋は間違つっていても、リーズは正解を出して
しまつたのだ。ついさつきまでのアクセルの余裕は、嘘のよつに崩
壊した。

「……警告……？」

震えそうになる唇を何とか止め、聞き返す。リーズは真剣な表情
のまま頷いた。

「実は、旦那様より密命がござります。“イシュタルの館を潰せ
”と

「……何で……？」

“娼婦を公に認めるることは出来ない。領地の風俗を乱す輩の跋
扈は許さない”と。また、“必ずや成し遂げるようだ”とも……。
私と守備隊隊長イジドール殿、そしてブランツォーリ司祭様にもご
協力をお願いしました。現在ブランツォーリ様がご無事か確認中で
す。……考えたくはありませんが、この執政府の内部に裏切り者が
いて、それによつて旦那様からの密命を知つた奴らが、警告のため
にイジドール殿を殺害したのではないかと。……私の判断ミスです。
まさか、相手があそこまでの力を持つていたなど」

そこで、リーズはアクセルの震えに気付いた。自分が口に出してしまったことと、それを聞いていたのが九歳の子どもであることを思い出し、彼女は慚愧に顔を歪める。

「大丈夫です」

リーズの優しい手が、アクセルの頬を包む。そして彼女は、そつと互いの額を触れ合わせると、目を閉じて口元に笑みを浮かべた。

「安心下さい、若様。何があろうと、私がお守り致します」

アクセルの脳裏に蘇るのは、幼い頃、激しい雷雨の夜、同じようにしてベッドの中で包み込んでくれた、リーズの掌の温もり。。

「……何も恐れることなど無いのです。正義は、私達なのです。この私が……ラヴィス家に、栄光と勝利を捧げます」

そう、あの頃もそうだった。あの激しい雷雨の夜、闇の中、ベッドの内側で、リーズもこうやって、身体を震わせていた。自らの震えを隠すために、ひたすら抱き締めていた。本当に震えていたのは、彼女の方だった。

続いて、アニエスの顔が浮かんだ。精一杯背伸びをして、アクセルを励ます彼女の表情。回想の中のリーズの姿が歪み、雷鳴に怯えるアニエスへと変わる。

マチルダが時折見せる、寂しげな表情が浮かんだ。その顔はいつも、アクセルの心を鎖のように歪に締め付ける。声を取り戻してからも、いや、取り戻してからより一層、そのような顔をするようになり、それが少年の心に影を落とす。

何の疑いも持たない、信頼しきつてくれているミシルの無邪気な顔が浮かんだ。まるで光に照らされた溝ネズミのよう、アクセルは、その顔に怯んでしまうことがある。

勇気と活力をくれる、ティファニアの無垢な笑顔。時折、あの小さな身体に触れる事が、恐怖という感情によつて出来なくなつてしまう。それは果たして、自分に許される行為なのだと。

自分を見捨てなかつた、男前なナタンの様々な表情。決して激さず、誰が相手だろつと穏やかに諭すローランの器量。九歳児の自分に敬意を払つてくれる、バルシャの仁義。朝はいつも眠そうに起き出してくれる、フラヴィのだらしない顔。本当の弟のように可愛がつてくれる、リリーヌの優しさ。前世では想像も出来なかつた、スルトの頼もしさ。

恐怖、焦燥、後悔、慚愧、絶望……あらゆる負の感情が、身体に激流を巻き起こす。アクセルはリーズを突き飛ばし、近くの窓から身を乗り出すと、地面に向けて、朝食を全て吐き出した。

第一十一話「危愧」（後書き）

「」から先、特に意味はありません

第二十一話のまとめ
タイトル変更フラグ

> . 1 2 5 4 6 9 — 2 6 9 5 <

リーズ「問題無いついで何よつです」

Q 何がオリ主をそなせるのか

A 作者

相変わらずの遅筆で申し訳ありません。

女の叫び声は、いつ聞いても心地よいものでは無い。錯乱して暴れ回る姿など、目を背けたくなる。

「つしゃあつ、来いやあつ！」

挑発するように掌を曲げるクーヤの、はだけられた上半身は、引つ搔き傷とアザで古い木像か何かのようになっていた。老人とは思えない身体を包んでいたシャツは、既にボロ雑巾のようになつて、檻の隅にへたつている。

ギヤエルは金切り声を上げながら、クーヤの頬を殴り飛ばした。一瞬ぐらついた老人の身体は、すぐに体勢を立て直し、仕返しのようにギヤエルの頬を叩く。ダメージではなく、衝撃を与えるような平手。崩れ落ちるようにしゃがみ込んだギヤエルだったが、数秒ほどして再び立ち上がり、またクーヤに襲いかかる。檻にもたれ掛かるマノンは、力尽きたかのように目を閉じていた。

壮絶……いや、凄惨としか言いようが無かつた。

一人の老人と、二人の女による乱戦。いや、獣同士の殺し合いと言えるかも知れない。

ナタンは檻の外で目を怒らせ、固く拳を握り締めていた。

クーヤは一人の女の半狂乱な攻撃を、或いは受け止め、或いは受け流し、ずっと相手をしている。

「……代わるか、爺さん？」

「へつ、ワシの女じや。横取りすんな」

ナタンを振り向き、歯をむき出しにしてクーヤは笑う。胸にギャエルの拳を受け、その顔がぐらついた。

「……別に、キツかねえ。本当に苦しんだるのは、この一人じや」

また、ギャエルが拳を振り上げる。その手を掴み取り、クーヤは彼女の身体を回転させた。背中から叩き付けられ、悶絶する彼女を前に、老人は大きく息を吐き出す。

「何人も女を抱いてきたが、ワシはその半分も幸せには出来とらん。別に、罪滅ぼしでもないがなあ……目の前の女にや、命くらい賭けるわい」

例え痛みで誤魔化しても、苦しみは消えない。それでも、これしか方法は無い。

三人が牢獄の住人となつてから、既に一日が経つていた。

リーズ・エルネスティーヌ・フランセット・ド・ブロー。ブロー伯爵家の長女として生まれた少女は、今はただのリーズとして、ラ

ヴィス子爵家のメイドとなつていた。既にブロー伯爵家は無く、その血を引く人間も、彼女ただ一人。

自分にメイドが出来るなどとは、勿論リーズも思つてはいなかつた。いや、それどころか、平民の仕事など出来る筈は無いと思つていた。

貴族として生まれ、貴族として生きていた少女は、突如として貴族であることを剥奪された時、生きることすら億劫になつた。しかし、ブロー伯爵家の血を守るべきではないかという考え方もあり、結局は自ら命を絶つ決断も出来ず、流されるまま、父の友人であつたラヴィス子爵家に身を寄せることになる。

自分が孤立しているということを、リーズ自身はつきりと自覚していた。メイドの仕事を身につける気は無く、食客のような位置に自分を置いていた。貴族としての地位を失つたとしても、自分は平民ではなく、メイジなのだと。

メイジである自分にしか出来ない事こそ、自分がやるべきだリーズは考えていた。掃除や炊事、洗濯など、どれも平民でも出来る事ばかりであり、メイジとしての能力を持つ自分が、わざわざそれらを身につける必要は無い。いつかメイジとしての働きを行う為、今はただ、魔法の訓練を積むべきだと。

使用者達は誰一人として、面と向かつてリーズに文句を言うことは無かつたが、それはメイジの魔法を恐れたからに他ならず、自分がいない所でどんな風に語られているか、リーズには聞くまでもなくわかつていた。

その孤独は、アクセルによつて終わつた。

リーズは初めのうち、アクセルの行動を苦々しく思つていた。勉学に秀で、どこか大人びた風ではあつたが、苦々しく思つたのは、

平民に対する接し方である。執事であろうとメイドであろうと、何の障壁も無く彼の態度は、リーズにとってあまりにも軽率なものに見えた。恐怖を以つて、とまでは言わないが、ある程度の貴族としての自覚は必要不可欠なものであり、威厳を以つて接するべきだと。アクセルはまた、リーズに対しても自然体で接してきた。平民に対するそれと、全く同じように。自分が平民ではなくメイジであること、それを否定されているような気分にもなり、リーズもそれを不快に思つていた。

しかし、いつしか自分が孤独では無くなつた事に気付いた。確かに、平民と変わらない接し方をされるのは不快だが、気軽に話しかけられる存在が出来た。自分を拒否しない存在が出来た。

（……失うわけにはいかない）

リーズにとって、アクセルは最優先の存在となつた。何よりも優先して守るべき者であり、失うことは許されない者である。

しかし、彼女は未だ、その思いの根元にある打算に気付いていない。いや、無意識のうちに、必死で目を背けている。

このままアクセルが優秀なメイジとして育てば、その師であるリーズは名声を得ることが出来る。例えそんならなくとも、もしアクセルと結ばれることになれば、ブローカーの血を継続させることができることになる。

その打算に気付くには、あまりにもリーズは幼く、潔癖だった。今は未だ、彼女は己の使命感に眩んでいた。

「……若様は？」

リーズは近くのメイドに尋ねる。メイドは悲しそうな顔で、静か

に首を横に振った。その手に乗せられた盆は、持つて行った時と変化は無い。

(無理も無い)

アクセルの衰弱に、リーズはそう感じた。今まで執政庁にはほとんどおらず、外で自由に遊んでいた少年が、突然軟禁されるような事態に陥つたのだ。食物にもほとんど手を付けず、ずっとベッドの上で過ごしている姿は、最早病人と変わり無かつた。

ラヴィス子爵が帰つてくるまで、あと一週間といったところだろうか。子爵本人の手紙には、そう書いてあつた。特にリーズが責められることは無かつたが、例の密命については、子爵が戻るまで停止といつことだった。

「……若様」

リーズはアクセルの寝室の前に立つと、躊躇いながらも、ドアを叩く。中から、弱々しい返事が聞こえてきた。

「失礼します」

中に入ったリーズは、アクセルの様子に胸を痛める。ベッドの上で枕に支えられ、ようやつと上体を起こしている彼の頭の下には、インクで描いたかのようなクマが出来ていた。リーズも安眠を得ているとは言い難いが、アクセルはそれよりも酷い。

「……お父上は、一週間ほどでお戻りになるそうです」
「本当に、帰つてくるかなあ？」
「……」

アクセルのその言葉は、彼にしてみれば他愛もない疑問だったのだが、リーズは違う受け取り方をした。

以前、アクセルがレオニー子爵領で火災に巻き込まれ、怪我を負った時も、ラヴィス子爵は戻らなかつた。リーズはアクセルから問題ないという旨の手紙を受け取り、迎えに行くことは無かつたが、少年の背に残つた火傷を見た時、密かに心を痛めた。

息子が怪我を負つた時も帰らなかつた子爵が、領地の危機には帰る……。それは領主として正しい行いであり、父親として間違つた事なのではないか。リーズにその判断は出来ないが、それが当の息子を悲しませる事実であることは、朧気ながら理解できた。

そして理解はしても、アクセルにかける優しい言葉は見つからなかつた。

「一週間……今までの辛抱です、若様。お父上がお戻りになれば、またいつもの日常が戻ります」

「うん、ありがと」

リーズの気遣いと居たまなさを察し、アクセルは力のない笑みを浮かべる。それに安心したわけではないが、これ以上かける言葉も無く、リーズはそつと部屋を出た。

彼女が去つて後、アクセルは溜息をつくと、光を遮断しようとするかのように、自分の両目を掌で覆つた。

今までは、はつきりしていた。

片方が好きなものであり、もう片方が嫌いなものだった。だからこそ、躊躇無く嫌いな方を殺すことが出来た。例え困難であらうと、進むべき道は、選ぶべき未来ははつきりと見えていたのだ。

(それもこれまで……か?)

ラヴィス子爵家を取るか、イシュタルの館を取るか。本当に、そのどちらかを選ばなければならないのだろうか。

選べる筈も無いのに。

(……まずは、原因を考えてみるか。リーズによれば、あの密命が出されたのは、要するに娼館を存在させておきたくないから、といふことになるな)

この苦惱の原因は、ラヴィス子爵の密命である。ならば何故、その密命は下されたのか。

娼館が公に存在していることに対する、不快感……成る程確かに、リーズが好みそうな理由だが、アクセルはそれを信じてはいなかつた。

東地区の発展は、表向きには、イシュタルの館を管理する組織の功績ということになつていて。浮浪者や難民に真っ当な生活の場を与えることで、市民として扱われる人間は増え、街の人口は増加し、税収も上がつた。散在していた娼婦をまとめ、闇夜の娼婦とその客を狙つた強盗もいなくなつた。ゼルナの街を訪れる人間も増え、東地区だけではなく、街全体に多くの金を落とすようになつた。更に言えば、バルシャとリリースによる立て籠もり事件の解決を初めとした治安維持活動により、イシュタルの館は市民の間でも受け入れられている。

否定的な意見を取れば、利権を狙う「ロツキの襲撃だが、最近では組織の戦闘能力が知れ渡り、すっかり形を潜めていた。

(……やはり、益の方が遙かに大きい気がするが……)

治安の悪化も、驚くほど士気の高い自警団により、懸念していた程では無い。

賭場からは執政庁側に相当の裏金を流してあり、それによつて文官たちも黙らせている。

（単純に、組織の戦闘能力を恐れた……？）

メイジとして強大な力を持つスルト、弓の名手のバルシャ、双剣の扱いがなかなかサマになつてきたナタン。主要な戦力を挙げれば彼等三人だが、考えてみれば全員メイジ殺しだ。本当にメイジを殺したとは知られていなくても、それに値する力を持つと見られていておかしくは無い。そんなものが、息子が代官を務める街に存在することを危険視しているのか。

（……それも無い気がするが）

ラヴィス子爵は放任主義ではないかと、アクセルはそう思つている。以前、レオニー子爵領で火災に巻き込まれた時も、軽い手紙のやり取りだけで済ませていた。

そもそも考えてみれば、アクセルを代官に任命してから、未だ一度も帰つてはいない。帰るまでに馬車で一週間かかると言つが、それだけあれば、トリステイン王国を横断することすら出来る筈だ。

（何というか……領地経営に全く興味を持つていらないというか）

九歳の息子に代官を任せることからも、それは明らかだつた。そして事実、アクセルが何もしなくても全ては順調だつた。

（だめだ、わからん）

さながら大岩に突き当たつたかの如く、アクセルはそこで思考を停止せざるを得なかつた。全ては憶測であり、的外れであつてもおかしくは無い。本当に、ただ、ラヴィス子爵が存外潔癖で、娼館という物体そのものを嫌悪している可能性もあるのだ。

そして、もう一つ問題がある。

阿片を用いた、ブランツォーリ司祭についてだ。

（やっぱ、俺、考え無しな所があるんだよな……）

一応ブランツォーリ司祭は、イシュタルの館を出て、わざわざ教会に戻つた後に拉致したのだが、司祭が行方不明は大きな事件である。てっきり司祭については、イジドールの私的な繫がりだけだと思つたのだが、リーズが相談だけではなく、具体的な協力を請うていたのは予想外だった。結果的にブランツォーリ司祭殺害容疑まで、組織にかけてしまう事になつたのだ。そしてそれは冤罪ではなく、事実である。

（個人的にむかついたから殺した、つてのが大きいからなあ。他にいい方法も思いつかなかつたんだけど、面倒だつたつて理由が主だし）

流石に守備隊が壊滅状態にある今、リーズも具体的な行動は起こさず、大人しくラヴィス子爵の帰りを待つだろう。

（言い換えれば、猶予は一週間つてとこか）

前世では七日だが、この世界の一週間は八日であり、一日多い。

そしてそんな、既に分かり切っていることで自分を慰めるしかなかつた。

（……選べつてか？）

ラヴィス子爵家と、イシュタルの館。一番平和的に思えるのは、イシュタルの館を潰し、皆をどこかに逃がすことだが、それも下策だ。既に守備隊隊長や司祭の殺害容疑がかかっている以上、逃げても追いかける可能性が高い。

そして、あの四人の娘達を匿つてくれるような、信頼できる場所が見当たらない。ミシェルは素性が明らかになつてもそこまで問題は無いが、残る三人は厄介だ。ダンブルテールの虐殺から十年を経ており、魔法実験小隊も既に存在していない以上、生き証人であるアニエスに限つては、そこまで苛烈な追求が及ぶ可能性は低い。が、マチルダとティファニアはそうもいかない。アルビオン側に露見すれば二人とも消されるだろうし、特にティファニアは全てに対して警戒が必要だ。

（クルコスの街は……駄目だな。奴隸市場がイシュタルの館と繋がっていることは、少し調べれば分かる。くそつ）

イシュタルの館を潰したくないのも、また素直な気持ちだつた。そして、今までに集まつた仲間を、誰一人として失いたくないのも。

（……大罪を犯すか……）

ラヴィス子爵の暗殺……この世界での、実の父親の殺害すら、易々と視野に入れてしまえることに対して、アクセルは既に失望とう概念を通り過ぎていた。

ラヴィス子爵が不幸な事故で亡くなれば、その後はどうなるか。

(……それも危険すぎる)

ラヴィス子爵は風のラインメイジであり、今のアクセルでも方法によつては十分に暗殺が可能である。そう、それ自体は可能なのだ。だが、守備隊壊滅直後の死は、あまりにも臭い。下手をすれば、王都から苛烈な査察の手が伸びるだろつ。そうなつた場合、自分がラヴィス子爵家を受け継げる可能性も低くなり、新しい領主によつてイシュタルの館が蹂躪される未来も有り得る。

(まさか……手詰まりか……?)

正体不明の、悪逆のサンディの仕業にしてしまつ手もあるが、それはあまりにも強引すぎる。そしてその名前を出せば、それこそ魔法実験小隊のような、裏の力が伸びてくる危険もある。

アクセルは顔から手を離すと、その手を左右に広げ、ベッドの上に叩き付けた。

「……畜生めが」

どうにもならないと分かつていながら、吐き捨てる。

メンヌヴィルに襲われた時とは違う、それよりもっと重厚で鈍勢な危機。一週間というはつきりとしたタイムリミットは、じわじわと這い寄る毒沼のよつこ、奮い立つが絶望じよつが変わることなく近づいてくる。

ノックの音が響いた。

「……? ビツカ

食事の時間は、たつた今過ぎたばかりだ。かける言葉を見つけたリーズが戻ってきたとしても、それはあまりに気まずい。

ドアを開けたリーズは、静かに、アクセルの枕元まで歩み寄ってきた。

「どうかしたの、リーズ？」

「レオニー子爵様がいらっしゃいました」

「え？ レオニー子爵が？」

予想もしなかつた訪問者に、アクセルは鸚鵡返しに聞き返す。

「若様にお会いになりたいのですが、如何致しましょう？」

「……。うん、会いたい。あの人が良かつたら、ここまでご案内してくれる？」

「畏まりました」

守備隊壊滅の報は、レオニー子爵も得ているだろうが、それで何故自分に会いに来るのか、アクセルには見当が付かなかつた。いくら代官とはいえ、アクセルがお飾りであることくらい、彼も十分に理解している筈である。実質的な代官であるリーズとの会話ついでに、アクセルの見舞いに来るというのならわかるが、どうも初めから、アクセルと会うこと目的とした来訪のように思えた。

「やあ、久しぶりだな。アクセル君」

小柄な身体には似合わない大きな掌を上げながら、レオニー子爵は寝室へと足を踏み入れた。アクセルも挨拶を返す。

「すまないな、病気だったとは知らなかつたのだ」

「いえ、ちよつとその、ショックを受けただけで……。少し休めば、よくなりますよ」

「そうか、それならいいんだが……」

ベッド脇の椅子に腰掛け、レオニー子爵はマントを外した。どうやらただの見舞いではなく、本当にアクセルに用があるようだが、彼は他愛もない世間話を始める。

（……確かに、傭兵、ギルドの壊滅の後始末に苦労してゐて聞いたけど……）

領内の元傭兵のため、ゼルナの壊滅した守備隊の補充員を集めさせて欲しい、というのなら、それこそリーズに話すだらう。

「……と、病人相手に長話もあれだつたな」

世間話を打ち切り、レオニー子爵は頬をかいだ。本題は既に決まつてゐるらしいが、それを言いにくそうにしている。

「実は……君に、謝りに来たんだ」

「え？」

ラファランの一件について、というわけでも無い筈だ。全く見当が付かないアクセルは、首を傾げて続きを促す。

「以前、君が見せてくれた模型だよ。トロッコを参考にしたとい

う

「ああ……」

線路の上を走る、鉄道もどき。あれから特に改良を加えることも

なく、模型もどこかに仕舞い込んでしまっているが、それで何故自分が謝られる必要があるのか、アクセルには一向にわからない。

「少し前、王都に行つた時、マザリー二枢機卿という人と話してな。酒が入つていたせいもあり……いや、それは言い訳だな。ともかくあのアイディアを、得意になつて話してしまったんだ」

マザリー二枢機卿、という名に、アクセルは小さな衝撃を受けた。

「それが、採用される可能性が出てきたんだ。しかも、私の名前で。君のアイディアと訂正してもいいんだが、そうするには遅すぎた。既にマザリー二枢機卿は、発案書を粗方作り終えていてな。……大変申し訳ないんだが、あのアイディア、私の発案ということにしてはくれないか？ 勿論、私に出来る償いはしよう

ああ、そんなことか……それが、アクセルの感想だつた。要するに、アクセルのアイディアをレオニー子爵がパクつた、ということになるが、そもそもアクセルのアイディアも、前世のパクリである。言つてしまえばどうでもいいことであり、そしてそんなどうでもいい事に対して、小柄な身体を縮めて謝るレオニー子爵に、却つて申し訳ない気分になつた。

(……律儀な人だな)

黙つて進めていれば、後でアクセルが何を言つたとしても痛くもかゆくもなかつただろうし、そもそも例え無断でパクられても、アクセルに何か言おうという気は無い。それどころか、未だ九歳のラヴィス子爵の息子が発明した、などと公にされる方がよっぽど不愉快だ。そんな特異性が露わになつて、下手に目立ちたくなど無い。しかし、こうやって素直に謝るこのレオニー子爵という人物は、

好感が持てる男だった。

「いえ、いいんですよ。あんなもの、ただの思いつきで、僕には実現出来ませんし」

「いや、しかしだな……」

渋い顔を上げたレオニー子爵は、少年の表情の変化に気付いた。どこか虚空を見つめる彼の視線は、固定化がかけられたかのように動かない。

「……」

どうかしたのか……そう尋ねようとして、しかしそれは出来なかつた。弱々しかつた少年の瞳に、まるで炭火のような、静かな熱を感じ取つた。

「あ……あのつ」

アクセルは夢から覚めたかのように、突然レオニー子爵に向き直る。

「一つ、お願いがあるんですが、いいですか？」

「む……ああ、出来る事なら何なりと」

上手いくつかは分からない。無駄骨を折ることになるかも知れない。あまりにも不確実な策。

しかし、その未来に手を伸ばすしかなかつた。手が届かず、足下が崩れ去るかも知れないとわかつていても。

「僕、トリスター・アに行きたいんです」

全ては執政庁に戻ったアクセルが、現状を詳しく把握してから…
…ということになっていた。

だが、そのアクセルが戻らない。どうやら半ば軟禁状態となつて
いるらしく、見舞いに行つたローランですら、丁重に面会を拒否さ
れた。手紙すら預かつては貰えない。

本当に面会謝絶の可能性もあるが、ナタンとバルシャは、東地区
に関係するあらゆるもののが拒否されているのだ、と判断した。それ
はつまり、アクセルを守るため。そしてそのことは同時に、執政庁
が完全に、イシュタルの館と敵対したことを示している。

あのアクセルなら、例え軟禁状態に置かれていてもどうにか連絡
を取りそなうものだが、それが行われないということは、彼の身に
何かがあつたと判断できる。結局、スルトが忍び込み、アクセルと
接触するという方法が取られた。

事態が予想以上に悪化していることは、誰しもが感じていた。そ
れこそ子爵の息子であろうと、どうにもならないくらいに。

最悪の場合は逃亡する、といつのがナタンの判断だった。幸いと
言つべきか、殆どのは家族がない。ラヴィス子爵がイシュタル
の館を潰そうとしても、まさか娼婦達にまで手を出したりはしない

だろう。そう、最悪の場合は、イシュタルの館を置んでどこかへ逃げればいいのだ。

しかし、それがあくまで最悪の場合であることは、ナタンも重々に承知している。アクセルがそれを望まないことも。

「どうしましょか……」

バルシャは唇を噛む。現在の敵は、戦うことを選べない相手であり、それが歯痒いのだ。しかもその敵は、金でも女でもなく、こちらの消滅、ただそれだけを目的としている。

ナタンは、それに答えることが出来なかつた。

そしてそんな時、生傷の手当を終えたクーヤは、

「んじゃ、そろそろワシはおれひばじや」

と、一人イシュタルの館を後にしようとしていた。確かに、ただの客人である彼に、この館の問題に付き合つ、義理は無い。それどころか、ギヤエルとマノンの阿片を抜いた恩があるのだが、クーヤが礼として求めたのは、アクセルが作った酒を一瓶だけだつた。

「おい、いいのか？ スルトに挨拶しなくて。もうすぐ戻つてくると思うんだが……」

「いらんいらん。生きてりやまた会つわい」

この老人は、万事ずっとこの調子だつた。飄々と、さながら雲か何かのように変幻自在で、つかみ所が無い。

スルトも別れくらい言いたいんじゃないか、と、迷つたような顔をするナタンに、クーヤは履き物の紐を結びながら言つた。

「「」も何やう、キナ臭くなつてきたしな。ワシはわいと逃げ
ることにするが……お前らはどうするんじや？」

「どうするつて？」

「「」のまま「」いれば、死ぬかも知れんぞ」

ナタンも、そして彼の後ろに立つバルシャも、わかつていた。その可能性が、決して低くは無いことを。抵抗しても、それが成功しても良い結果が出さうになり以上、出来るのは防御と逃亡だけ。

「心配してくれんのか、爺さん？」

「……余計なお節介じやつたな。まあ、領主も、娼婦にまで手は出せんじやろ」

一人の顔を振り向いたクーヤは、文字通り、余計なお節介を焼いたことに気付いた。

「んじや、お前ら、出来れば生きてろよ。やうやりやまた会えるかもな」

場に湿気が生まれることを嫌い、クーヤは立ち上がり、手ではなく酒瓶をふるふると振った。軽く爪先を地面で叩き、ガラガラと裏口の引き戸を開ける。

「ん？」

そこに、スルトが立っていた。

「おう、帰ったか。また今度、茶あでも飲もつや」

そう別れの挨拶をするクーヤだが、スルトは無言のままだった。

「何じゃ？ どけや」

そつと、スルトは道を空ける。だが、更に立ち塞がる少年が現れた。

「出発は待つてくれないか、爺さん」

「ベル！？ え……何で……」

やつれた顔のアクセルを見て、ナタンが声を上げる。

「お、おいスルト。手紙じゃなくて、本人を持つて帰つてどうすんだよ」

「どうしても、連れ出せってな」

ナタンに返事をしながら、スルトは肩をすくめて見せた。そのまま引き戸に背を預け、腕を組む。

「ナタン」

クーヤを通り越す形で、アクセルはナタンに声を掛けた。

「もう気付いてるかも知れないが、まずい状況だ。イシュタルの館始まって以来の危機だよ。敵は僕の父、ラヴィス子爵。本当の理由はわからないが、ここを潰したいのは確からしい」

既に察していたので、ナタンもバルシャも、大して驚きもせずに頷いた。

「色々考えた……。そして、賭けに出ることにした」

「賭け？」

「外部からの協力者を得る為に、僕は王都トリスターニアに向かう
「あてがあるんですか？」

「都合良く、さつき出来たのさ。……父が戻るまで一週間、それ
までに何とか出来るかは分からぬ。だから、もしも一週間で僕が
間に合わなかつた場合、内部から持ちこたえて欲しいんだ」

今までのアクセルの世界は、ラヴィス子爵領が全てだつた。殆ど
全てのことが、片田舎の子爵領で完結してきた。

今、その子爵領の支配者が、敵としてやつて来ようとしている。
それに対抗するには、アクセルの世界を広げる必要があつた。

勿論、この状況で外の世界に出るのは、大きな賭けである。この
ままここに残り、ラヴィス子爵と顔を合わせ、息子として説得すべ
きかも知れない。

「どのくらい持ちこたえればいいか……悪いけど、それは明言出
来ない。全て、ナタンの判断に任せせる」

「……了解だ」

ナタンは笑顔を見せた。アクセルも笑顔を返すと、少しでも体力
の消耗を減らそうとするかのように目を閉じ、口だけ動かす。

「そして、スルト」

「何だ？」

「もしも、ナタン達が逃げることになつた時は、やつぱりクルコ
スが一番確実なんだ。そうなつた時、案内を頼みたい」

「危険だな」

「ああ、下策さ。最悪より、少しマシな程度だろ？ それでも…」

「わかつた、力を尽くそ！」

「ありがとう」

「もうええかのお？」

すっかり蚊帳の外にされていたクーヤが、蚊の泣くような声を上げた。こんなにやつれた顔の少年を押しのけるのも忍びなかつたのか、ガリガリと頭をかいている。

アクセルは目を開けると、クーヤの目を見つめた。

「爺さんには、ナタンを助けてもらいたい」

「……はあつ？」

「ここに残り、手を貸して欲しいんだ」

「お断りじや」

予想しなかつた言葉に目を丸くしたクーヤは、しかしすぐに表情を戻すと、あり得ないとでも言つようになに首を振つた。アクセルはじつと老人と視線を合わせるが、彼はそれでも動じない。

「沈む船からは、ネズミだつて逃げ出すぞ。ワシはネズミほど利口でも無いが、人間ほど馬鹿でも無いんでな」

「それ相応の礼はするよ」

「舐めんなよ、クソガキが。欲しいもんは、テメエで手に入れるわい」

取り合おうとしないクーヤだが、アクセルは突然微笑むと、小首を傾げた。

「爺さん。米の飯には、もう未練は無いのか？」

「いいからさつたどどけ。…………おい、今何て言つた？」

アクセルの他に老人の表情の豹変に気付けたのは、皮肉なこと、スルト一人だつた。

「…………」

固唾をのむクーヤの田の前で、アクセルは膝を曲げ、中腰になると、右手を下げる。そして腹から絞り出すようにして、声を上げた。

「お控えなすつてえ！」

ナタンもバルシャも、スルトでさえも、何事かと身体を浮つかせる。

「早速お控え頂き、ありがとうござりやす。斯様粗忽な身形でのご挨拶、失礼さんでござんすが御免なさんせ。手前粗忽者故、前後間違いましたる節は、まつぱら容赦願います。向かいましたる上さんとは今回初めてのお目通り、ではございやせんが、改めましてご挨拶させて頂きやす。手前生國、水の国はトリステイン、聖湖ラグドリアンからギヨル川を下り、産声上げたはラヴィスの地でございやす。姓はラヴィス、名はアクセル・ベルトランと申しやす。ご賢察の通りの若輩者でござりやす。後日にお見知りおかれ、行く末万端御懇意に願いやす」

さながら、演劇か何かのようだつた。朗々と、淀みなくアクセルの口から出た口上は、よく聞けば長い自己紹介である。相當に勿体ぶつてはいるが、結局の所、名前を名乗つたに過ぎない。

アクセルはふうと息をつき、田を閉じる。

「爺さん。僕は出来れば、アンタとは後でゆつくりと、色々な事を話したい。……爺さんはどうだ?」

クーヤもじつと、瞼を下ろしていた。まるで広大な荒野で、同じ種の生物とばつたり顔を合わせたかのように、微動だにしなかった。理解できる者はいない。

そんな中、クーヤはカツと田を見開くと、アクセルと同じく中腰になり、右手を下げた。

「お言葉!」
寧に「ざとす」

アクセルのそれとは違い、静かだが、さながら盤石を思わせるような声色。

「申し遅れて高つは『』ぞんすが、御免をこうむりやす。弘法さんが仰るに一生は、生まれて、生きて、そして死ぬ。生まれもしたし、生きもした。なれど最後の一つが出来ぬまま、甲乙を繰り返すこと三度に『』ぞとす」

節を付けて、さながら歌うかのように、クーヤは続ける。

「そもそも生國は、大日本帝国は甲斐の国に『』ぞんす。日本橋から朝日を背負い、お天道様に追い抜かされて、白虎の街道を四十里。芙蓉峰の残雪に照らされ、浅間の水を産湯に使い、守ってくれたは笹と竹。竹は武にて、剛と猛。風林火山の虎に背りまして、姓は佐々木、名は武雄と印しやす。何の因果か流れ流れて、着いた果ては酒のタルブ」

アクセルは人知れず、生睡を飲み込んだ。

「転じて次の名は一闡提^{いつせんたい}。四重禁に五逆罪、俗欲の限りを及べし、閻魔の元へ赴かんとするも、奪衣婆懸衣翁^{だいふばけんえおう}にも避けられて、極楽地獄に居場所無く」

アクセルのよつに、ただ名乗るだけではない。

ただアクセルの為にのみ語られたそれは、この老人の歴史だった。

「ただただ笑いて、カラカラと。空っぽ空虚、空の如く。更に転じて、今はただただ空也て、名乗ればクーヤと発しやす。お見知りおかれやして、今日向万端よろしくお頬ん申し上げやす」

そこまで告げると、クーヤは背を伸ばし、踵を返してその場の全員に背を向けた。

「……ヤクザの仁義なんぞよつ知らんから、適当にさせと貰つたぞ」

「…………うん」

わざわざ前に回り、老人の表情を確認しようとする者はいない。事情を知るアクセルでなくとも、体温が見えるスルトでなくとも、触れること憚るものを感じ取った。

「おいつ、クソガキい！」

無理矢理絞り出すよつにして、クーヤは怒鳴る。アクセルは瞬きをすると、腰に手を当てる。

「ベル。そう呼んでくれ、クーヤ」

「……ベル。女と酒と、それと米。これは譲らんぞ」

「ああ。好きにしてくれ

「それと……ちちんと、帰つてへるといひやうなへ

「ああ

「よひしもあつー

掌で軽く肩を打ち、クーヤは振り向いた。その顔は、全てを塗り潰すかのような強烈な笑みを作っている。

「まだ当分厄介になるが……」これで満足かつ?

「ああ、文句無しだ。……といひで、クーヤ。——つ——?」

「何じゅい

「今……何歳?」

「知るかつ

第一十四話「邂逅」（前書き）

今回も話が進んでません。遅筆に加えて申し訳ありません。

ラヴィス子爵領から、馬車で一日。レオニー子爵に同行する形となつたアクセルは、無事に王都トリスター・アに到着した。

「どうだね？」

「……凄いですね」

その答えに満足したのか、レオニー子爵はにっこりと笑顔のまま頷いた。

別に演技ではなく、正直な感想であった。

ラヴィス子爵領のゼルナや、レオニー子爵領のクルコスが片田舎であることは知っていたが、やはり自分の中で、街とはあの規模のものだったのだ。

アクセルは自分の世界が広がっていくのを、背筋の震えで感じていた。未知の場所に踏み出す、少年らしい冒険心が、体中に広がつていく。

王都トリスター・アは、あの二つの街などとは比べ物にならないほどだ。アルビオンのことを白の国とも呼ぶそうだが、このトリスター・アにこそ相応しいのではないか……そう思える。真っ白な石造りの建物が建ち並び、それらが太陽の光に照らされて、白磁の器のような光沢を放つていた。

弱小国家のトリステインの首都ですらこれ程ならば、ガリアやゲルマニアといった大国はどれ程なのか……と、未だ見ぬ都市に心を躍らせるが、しかしそれらも、ほんの一瞬のことだった。今のアク

セルに、童心に醉つような余裕など無かつた。

帰りの時間も考え合わせれば、残り五日。それまでに、何とかしなければならない。

しかし、その“何とか”の内容すら、未だはつきりとは定まっていなかつた。

(……欲を出しすぎた……かな)

もう何度、そんなことを考えてしまつたのだろうか。

誰一人として殺さず、八方丸く收まるハッピーハンド……そんな夢物語のような未来は、か細い亀裂の奥にちらつく、幻のようなものだつたのかも知れない。しかし、例えそうだとしても、手を伸ばさずにはいられなかつた。

アクセルの表情の曇りは、レオニー子爵の目には、身体的な顔色の悪さにしか映らない。

「まあ、思い切り楽しめばいい」

そう言いつつ、少年の肩を叩く。

今回のアクセルの王都訪問は、治療という名目もあつた。軟禁状態で、食事すら受け付けなくなつたアクセルには気分転換が必要だと、レオニー子爵直々にリーズを説得したのだ。リーズも、今後争いが起きそうなゼルナに置いておくよりは、王都にいて貰つた方が良いのではないかと考え、決断した。

門を抜け、街の中へと入つたところで、馬宿に馬車を預ける。アクセルとレオニー子爵が並び、その後を、荷物を持った従者が続いた。

「……どんな方なんですか？」

アクセルは緑髪を揺らしながら、軽く顎を上げ、隣のレオニー子爵を見上げる。

「ん、マザリー＝枢機卿殿か？ まあ、そつだな……」

ふむ……と上下の唇をずらし、どこか虚空に視線を彷徨わせた彼は、やがてぽつりと漏らした。

「枢機卿らしからぬ……と言えぱいいかな。いや、別に、悪い意味では無いんだ」

マザリー＝枢機卿、……その名は、アクセルにとつて信頼できる人物のそれだった。

勿論、実際に顔を合わせたこともないし、原作当時のよつに今は未だ、それほど有名でも無い。

信頼できると判断した理由は、ただ、原作の物語を知っているから……それだけだ。

我ながら何と脆い理由かと、アクセルは自嘲したくなる。既に物語は、大きく書き換えられているかも知れないというのに。

しかし、流石に彼の政治能力まで失われている筈は無いだろう。現在のトリステイン国王崩御から、アンリエッタ覚醒イベントまで の数年間、国の政治を一手に取り仕切っていた凄腕が、マザリー＝枢機卿だ。

今抱えている問題が、アクセルにはどうにもならない事態である以上、アクセルより優れた人物に手を借りるしか無い。

(問題は、どうやって渡りをつけるか……だけど)

理想は、マザリーニが現在頭を悩ませている問題を、メイジである自分が解決してやり、それによつて恩を売る、といつものだが、そつそつ都合良くなきかないだろ？

(……今、俺が出来ることを最大限に引き出すしかないな)

アクセルはそう思いながら、ふと開いた掌に精神を集中させ、魔力の渦を作り出してみた。

「……しかし、政治の才能は私などよりも上だな」

「どうやらレオニー子爵の話を、多少聞き逃してしまつていたらしい。慌てて自らを戒め、アクセルは相づちを打つた。

「元々、ロマリアからやつてくる枢機卿などは、始祖ブリミルの教えを伝えるための、ただのお飾りなのだ。せいぜいが、式典を監督したり、ブリミルの教えに反した行為が無いかを見張る役。あまり政治に関わらせたくは無いが、異端と見なされるのも厄介なので、どの国も、贋れ物扱いさ。しかしそんな中、マザリーニ枢機卿殿は抜群の才能をお持ちだ。惜しむらくは、未だその才能を周囲が認めていかない点なのだが……」

まあ数年後には、イヤでもその才能を引っ張り出され、鳥の骨とあだ名されるほどにやせ細る羽田になるのだが……本人にとつてどちらが幸せなのだろうかと、ふとアクセルは考えた。

昼も大分回つていたので、昼食を取ることになった。

向かつたのはチクトンネ街にある居酒屋、『天使の箱舟』亭。店名の意味は、従業員の女の子達だろう。確かに、見目麗しき乙女達が、甲斐甲斐しく客の相手をしている。少々店内の老朽化が激しい

感もあつたが、それを気にするような客は来ないらしい。調度品はなかなか立派なものが揃つており、それなりのステータスのある人物達がやって来るのだろう。

(……ん?)

ふと、アクセルは気付いた。

元々この世界の食堂など、酒を備えていない方が珍しいので、食堂より寧ろ居酒屋という呼称が似つかわしく、そこへ子どもを連れて行くのは問題ではない。

気付いたのは、席の半分ほどを埋める客が男ばかりで、そのうちの何人かが、女の子と共に一階へと上がっていくことだった。

(……ひょっとして、ここ、売春宿か?)

それこそ問題ではないか、と内心思いながら、しかしながら顔には出せず、アクセルは平然としていた。

「いい店だらう?」

どこか下品な笑みを浮かべ、隣のレオニー子爵が囁いてくる。うぶな少年の顔を赤面させたいらしいが、それも自分を元気づけようとしてのことだらうと、アクセルは好意的に受け取った。

「そうですね、皆さん美しい方ばかりで……」

「私の行きつけでな、ここは。トリスター・アに来ることがあれば、必ず立ち寄るよようにしているのだ」

「へえ」

気のない返事をしつつ、アクセルは考える。

何故、このトリスター・アの売春宿が認められて、ラヴィス子爵領のイシュタルの館が認められないのだろう、と。チクトンネ街は確かに下世話な店が多い地区だが、そんなもの、人が集まる場所であれば自然と出来てしまう筈だ。だからこそ見逃される。しかし、それ以上考へると、また出口のない迷路へと我が身を投げ込んでしまいそうで、自重する。

アクセルが顎を染める場面でも期待していたのか、レオニー子爵は「やはりまだ早かつたか」と、残念そうな顔をする。

「あらあら、お久しぶりですね。フィルマン様」

年を食つた老婆が、レオニー子爵の名を呼びながら近づいてくる。

「ああ、久しぶりだな、女将。景気はどうだ?」

「さてそれが、なかなか思うよつて、ねえ。最近は、妙な連中が現れるようになりましたし」

「……妙な連中?」

女将に案内され、レオニー子爵とアクセルは、席の一つを囲む。それほど忙しいわけでもないのか、女将はレオニー子爵の隣に腰掛けた。

「そりなんですよ。店を守つてやるから、金を渡せつて……」

「ただの「口口ツキではないか。『初物食い』として貴族の間に名を馳せた“箱船亭”にしては、随分と弱氣だな」

そこまでようやく女将は、アクセルへと目を向ける。レオニー子爵の子どもとでも思つていたらしいが、それにしては顔が似ていないことによつと気付いた様子だった。

「ところで、フィルマン様。」「おはよう？」
「初めまして。アクセル・ベルトラン・ド・ラヴィスです」

アクセルは形ばかりの挨拶をする。暫く目を瞬かせていた老婆は、挨拶を返すことすら忘れたように、レオニー子爵を見上げて首を傾げた。

「まさか……この子の初物を？」

「バカ言つちゃいかんよ、女将。ただ昼食を摂りに来ただけだ」

何で九歳児をそんな目で見るんだ、と辟易するアクセルだが、勿論顔には出さない。あくまでも、無知で無垢な子として振る舞おうと思つていた。

昼食は、すぐに運ばれてきた。アクセルの食欲も大分回復しているので、久しぶりに肉を堪能する。さっさと皿の上のものを平らげていく少年に、レオニー子爵はひとまず安心した。

「さて、私はこの後、マザリー二枢機卿殿にお会いするのだが……本当に君も来るのかね？　ここには、遊ぶ場所もたくさんあるぞ」

「ありがとうございます。でも、ゼルナではリーズが頑張つてゐるというのに、僕だけ遊ぶのはどうかと……。だからせめて、少しでも勉強しておきたいんです」

アクセル自身、歯の浮くような台詞だつたが、殊勝な少年だとレオニー子爵は感じ入つたらしい。そうか、と、まるで我が子が言ったかのように嬉しげに、アクセルに向かつて微笑んだ。

昼食を終え、店の外に出たアクセルは、軽く伸びをする。元々狭

い通りが入り組んでいる中、ここは更に裏街であるチクトンネ街。頭上を見上げると、建物に押しやられた窮屈そうな青空があり、彼自身も息苦しさを覚えた。

「……？ 坊ちゃん、あれ、何でしょ？？」

そう尋ねてきたのは、傍らの従者だった。両手を上に上げたまま、示された方向へと視線を移す。酒場の隣の、大人が両手を広げれば通せんぼできるような、非常に狭い路地。その物陰で、影が動いた。

「ん、何だろ？」

「あっ、坊ちゃん！」

従者が止める間もなく、アクセルは単純な好奇心に引っ張られ、路地へと踏み入る。薄汚れた石畳を踏みしめながら、ゴミ箱の奥に座り込む、一人の人間を発見した。

身体に纏う精霊により、メイジであることに気付く。貴族の格好こそしていながら、路地裏には似合わぬ清潔感ある服装で、まさしく掃き溜めの鶴、といった感じだった。

年齢は、若くは無い。四十ほどの女性だった。黒髪に、銀縁の眼鏡。その奥の、閉じられていた双眸がすうと開き、アクセルと同じ青い瞳が、アクセルのそれを射抜くように見つめた。

「大丈夫ですか？」

アクセルがそう尋ねたのは、その女性の左肩が血で染まっていたからだ。女性はそつと、放つておけとでも言つよう、首を横に振つた。

「……どうなされた？」

会計を済ませたレオニー子爵に、従者が知らせたのだろう。アクセルの背後から様子を覗き込んできた彼は、同じく女性の怪我を見ると、痛々しそうに顔を顰めた。

「とりあえず、手当を……」

「『親切、痛み入ります。ですが、どうぞ……私のことは構わずに』」

そこでよつやく、彼女は口を開いた。話すことすら億劫らしい。やはり、相當に消耗しているようだ。アクセルは構わず杖を抜き、治癒の魔法でその傷を癒した。治癒が得意ではないレオニー子爵は、素直に感心し、力無い手で杖を払いのけようとした彼女も、子どもとは思えない魔法の練度に、驚いたように目を見開く。

「……放つておいてくださいと、申しましたのに」

呆れるように、女性は溜息をつく。

「そんな大変そうな状況で、他人を気遣えるなんて……あなた、いい人ですね」

そう言つて、笑つて見せるアクセルの胸には、打算があつた。

三つの可能性がある。この女性がマザリー二の味方である可能性、逆に敵である可能性、どちらでもなく無関係である可能性。それら全てを考え合わせた上で、彼女を助けることにしたのだ。

味方なら、恩を売ることが出来る。敵なら、差し出すことが出来る。最後の、そして一番可能性の高い、無関係の女性であったとしても、この女性個人に恩を売ることは、無意味な行動では無いだろ

う。

ふと、アクセルは上を見上げる。狭い空を、人影が横切った。

「……申し訳ありません、既に巻き込んでしまったようですね」

座り込んでいた女性も、同じく、上を見ていた。

「追われている、と？」

レオニー子爵の問いに、彼女は力無く首肯する。アクセルは目を閉じ、周囲に意識を巡らせた。果たして、緊張状態のメイジの反応が、広く薄く伸ばした魔力から伝わってくる。一つや一つではなく、十を超えていた。

(……包围されている)

既に、アクセルもレオニー子爵も、この女性の味方と見なされているらしい。アクセルは跪き、彼女と視線を合わせた。

「あの、どこか安全な場所はあります？」

「……」

暫く無言だったが、全てが手遅れだと悟つたらしい。彼女は一つ溜息をつくと、ぐいと額の汗を拭つた。

「王城の中……あそこまで行けば、彼等も手出しは出来ないでしょう。私が囮になつて差し上げたいところですが、既に精神力が枯渇しています。夜に紛れて、と言いたくても、その時間は無さそうですね」

どうするか、と、アクセルは考える。

チクトンネ街の路地裏という、不慮の事故があつても不思議ではない場所。相手は、こちらを殺すつもりでかかってくるだろう。相手の数も実力もはつきりせず、通常の魔法だけでは相手が出来そうにない以上、逃げの一手しかないのだが、どうやって王城まで逃れるべきか。

王城の中、と彼女が指定したということは、この女性はやはり、それなりの地位を持つ重要人物。助けられた後に得られる利益を考えれば、益々死なせるわけにはいかないのだ。

（素早くは動けない。土地勘も無いから、敵を撒くのは不可能。一旦どこかに逃げ込んで……つていうのも、他人の迷惑を顧みないガキつて感じで、印象悪いな）

アクセルはふと顔を上げると、レオニー子爵を振り向く。

「この状況、逃げた方がいいですよね？」

九歳児にじうじうして事態を説明しようか悩む彼に、先手を打つ形で尋ねた。子爵は安心したように頷く。

「で、アクセル君。何か名案でも浮かんだのか？」

「公示人に化けるのはどうでしょう。ちょうど、荷物の中に僕のヴァイオリンがあります」

「……名案だな。おいつ、女将に化粧道具を借りて来い。それと、最新の布告だ。新しいものだぞ」

レオニー子爵が背後の従者に命じ、アクセルはマントと上半身の衣服を脱ぎ去ると、荷物の中のヴァイオリンと入れ替えた。

ほどなく、従者が化粧道具の詰まつた箱を抱えて戻つてくる。それを開き、アクセルが顔と上半身に白粉を塗りたくつていると、従者から王城よりの布告を受け取つたレオニー子爵が、うつと呻いた。

「どうかしましたか？」

「……何ということだ。来月から、酒の値段を上げるやうだ」

「余裕ですね」

呆れ返るアクセルに向かつて、レオニー子爵はふつと笑みを見せる。

「何だか、面白くなつてきてな。……しかし、アクセル君。随分と化粧道具の扱いに慣れているようだが、……」

「…………氣のせいでしょう」

「」の女性が何者で、どんな理由で追われているのか、それは未だわからない。レオニー子爵は尋ねようとはせず、アクセルも同じく。悠長に名乗りあつてている余裕が無いのも確かだが、それもまた、アクセルの打算だった。助けるのは家名によつてではなく、傷つき困つている女性だからだと、彼女に印象づけるために。

「おい、アクセル君。どうじよつ」

「え？」

「私は楽器は出来ないし、そもそも持つてない。しかも口下手だぞ」

「ああ、大丈夫だと思います。その布告を、繰り返し読んでおいて貰えば」

あまり識字率の高くないハルケギニアにおいて、公示人は必要不可欠な存在だつた。彼等はチンドン屋と同じく仮装し、楽器を打ち

鳴らし、字が読めない人々に向けて宣伝を行つ。その顧客は、場末の酒場から王室にまで及んでいた。

体中にペイントを施したアクセルは、ヴァイオリンで賑やかな曲を奏でながら、踊るように先頭を切る。その後ろから、従者の着替えを羽織り、のつたりと布告文を朗読するレオニー子爵が続き、従者と眼鏡の女性は、その隣を歩いた。

(……つまいま)

レオニー子爵は素直に感心する。この田の前の少年の母親が、音楽に秀でていることは知つており、アクセルが楽器を演奏出来るのは不思議なことでは無いのだが、それでも彼の腕前には驚いた。布告文を読む声を邪魔する程ではなく、しかし賑やかさを感じさせる、適度な音量。

忽ちにして、通りに鳴り響く音楽を聞きつけた人々が顔を出し、子ども達が群がる。公示人の音楽は、言つてみれば無料で聞ける演奏であり、たちどころに見物客が壁を作つた。

演奏しながら、アクセルは相変わらず周囲に意識を巡らせている。

(どうか、諦めてくれよ)

見物客である老若男女は、壁であり、田撃者でもある。決して大通り以外を歩くつもりは無いし、群がる子ども達は王城の門までついて来るだろう。こんな目立つ状態で攻撃を仕掛けては来ない筈だが、それも絶対では無いのだ。

(……退いたか)

密かにこちらを追いかけているメイジたちの緊張状態は、緩和されていた。魔法を使う様子が無いところを見ると、どうやら諦めてくれたらしい。

もうすぐ、チクトンネ街を出る。そうすれば、更に観客は増えるだろう。

その時だつた。アクセルは、メイジたちの緊張が、再び高まつていくのを感じ取つた。

アクセルの警戒は、そのメイジが持つ精神力の流れを読み取るというもの。勿論、大まかにしかわからないが、魔法を使おうとしているのかどうかは判断できる。

（馬鹿な、無関係な人間が多いここで？）

アクセルは、自身の認識の甘さを悟つた。もしも彼女が敵にとつて、想像以上に邪魔な存在であれば、強襲も考えられる。

「うつ

彼女の呻き声が聞こえた。続いて、倒れ伏す時のぐぐもつたような音。

アクセルが演奏を止め、振り返ると、観客の一人が悲鳴を上げるのは同時だつた。

（……バカか俺はつ）

俯せに倒れる彼女の背には、矢が突き立つてゐる。メイジの攻撃は魔法だけという固定観念に囚われていた己に毒づき、振り向きざまに走り出した。

狭い通りは忽ちにして、阿鼻叫喚の渦に覆い尽くされたが、人々の逃げる方向は決まっている。倒れた彼女から……つまりアクセルたちから離れる方向。人垣はあつという間に無くなり、公示人に扮した一行は格好の的となつた。レオニー子爵が連れてきた従者も、彼女と荷物を放り出して既にどこかへ消えている。

感じる精神力の高まりは、弓を引き絞る集中。それが解放される時、矢が飛んで来る。

(……！)

アクセルは女性の傍に立つと、ヴァイオリンを振り回した。振り切つた時には、ヴァイオリンは矢に貫かれている。

「アクセル君つ、こつちだ！」

レオニー子爵は彼女を引きずり、傍らの酒場の軒下に逃げ込んだ。ヴァイオリンをその場に放り捨て、石畳を蹴り、アクセルは転がつてその場を脱出する。

(ハイリスクハイリターン……か)

そんな単語が浮かんだ。次の……三本目の矢は飛んで来ない。

アクセルは腰を屈めたまま、彼女の傍に駆け寄つた。背中に刺さつた矢は、そこまで深くは無いようだ。が、このままにしておくわけにもいかない。

ポケットに入っていたハンカチを取り出すと、それを団子にし、か細い息を吐き出す彼女の口元に示した。

「矢を抜きます。いいですか？」

「…………」

彼女はさながらヤジロベエか何かのように、微かに、何度か首肯を繰り返すと、丸めたハンカチを銜える。アクセルはその彼女の背に足を乗せると、両手で矢の鏃近くを掴み、根菜のように一息に引き抜いた。一度、大きく身体を反らした彼女は、すぐに力を抜くと、鼻で荒い呼吸を繰り返す。その傷跡に、また治癒を施し、アクセルは溜息をついて彼女の傍らに尻餅をついた。

「…………どうしましょう」

何とはなしに、反対側のレオニー子爵に尋ねてみる。しかしそこでアクセルは、この小柄な男が、荒事を苦手とすることに気付いた。焦点の定まらない目……その視線は虚空を泳ぎ、小柄な身体を微かに震わせている。どうやら、こちらの声にも気付いていないようだ。

レオニー子爵にかかっていた、自己陶酔の魔法は切れている。彼は今、至つて正常な、彼本来の頭脳を取り戻していた。

アクセルは、己の感覚が麻痺していたことを悟った。この状況、冷静でいられる方がおかしいのだ。見ず知らずの女性を助けようとしたことで、同じメイジに命を狙われるなどという展開、一体何人の貴族が経験したというのか。

それに比べ、この状況でも取り乱さないこの女性は、一体何者なのだろう。烈風カリンの他に女性軍人がいる可能性も低く、となれば裏の仕事に手を染める没落メイジか。しかしそれにしては、彼女が纏う雰囲気は由緒正しい貴族のそれである。王城に逃げ込める身分であるならば、尚更だ。

アクセルは、先ほど頭に浮かんだ“見捨てる”という選択肢を、静かに片隅へ押しやった。益々、死なせたくは無かった。

（追撃は未だ無し……か。いくら何でもこいつやつて騒ぎになつた以上、敵は早くに片付けようとするだろ。守備隊が来るまでどのくらいだ？ それまで守備に回るのは……無理だな。三人の中で、まともに戦えるのは多分俺一人。レオニー子爵は……）

ちらりと、彼に目を向ける。

「に、に、逃げなれば……」

ちょうど、独り言のように呟くレオニー子爵と田中が合つた。流石に、九歳児ですら落ち着いていることに気付いたのか、彼は震えを止める。いや、無理矢理に押し込もうとしているようだつた。

アクセルは再び、周囲に意識を巡らせる。風のメイジの才能によつて、感じることが出来た。徐々にこぢりへと近づいてくる敵たちを。

「……下水道……」

その呟きが、彼女の湿つた喉の奥から聞こえてきた。アクセルは急いで這いつくばり、耳をその口元に寄せた。

「何です？」

「下水道……。そこに……逃げれば……」

「……」

その考えが、アクセルに無かつたわけではない。一度は思いついておきながらそれを却下した理由は、初めて入る場所であることに、彼女の消耗にあつた。いくら傷を塞いであるとはいえ、怪我人をそんな不衛生な場所に連れ込むわけにはいかない。

そして、その判断を察したかのように、彼女は力無い笑みを浮かべて見せる。

「あなた方、一人なら……逃げられます。ここまで、ありがとうございます」

「立てもしないクセに、何を言つてるんですか。大丈夫です、すぐ」

「守備隊が来ます」

「……来ません」

「そんなわけないでしょう。白昼堂々、あれだけの日撃者の中、人が襲われてるんです。なのに……」

「正確には……通常より遅れます……。守備隊に命令を出す筈の人間は……ここでこうして、身動きが取れないんですから……」

「！？ ジャア……貴女は……」

「こんな有様ですが……チクトンネ街区の護民官です」

アクセルは覚悟を決めた。杖を握り直し、静かに精神力を高める。

その時、通りを風が通り抜けた。

「……！？」

風属性の精神力の純度が高ければ高いほど、扱いが難しくなり、威力が跳ね上るのは、アクセル自身が実験済みである。

そしてその風の純度は、アクセルが扱えば間違いなく自爆するであろう程のものだった。

（……敵が……）

次々と、敵の立ち去る気配が届いた。彼等は目的が果たせぬことを知り、退却を選んでいた。

その判断をさせた人間が、通りの向こうから歩いてくる。

服装は、貴族のもの。マントを羽織り、顔には鋼鉄の仮面。長い桃色の髪を自らの風で靡かせながら、あらゆる障害が排除されたそこを、何の気負いもなく進む。

（まさか……）

そう思いつつも、アクセルは杖を構えた。しかし、背後に守る彼女は、アクセルの裾をくいと引っ張ると、静かに首を横に振った。

「……」無事ですか？ ヴィーヴィー殿

鉄仮面の下から凜と響いたのは、女性の声。

「ええ……。ありがとうございます、カリん」

ヴィーヴィーと呼ばれた彼女はそう呟くと、安堵したかのような微笑みを浮かべる。

アクセルの全身から吹き出す冷や汗が、剥がれた白粉と共に、白濁した霧となつて身体の上を滑り落ちた。

マザリー二枢機卿の邸宅は、トリスター・アの高級住宅街、モンシヤラン街にある、その地区の中では比較的小さな家だつた。繁華街であるチクトンネとは、中級住宅街であるフォッソワイヤール街を挟んでいる。

王城での事務を終えて帰宅したマザリー二は、客の数が倍に増えたことをメイドから聞かされた。

レオニー子爵がラ・ヴィス子爵の息子と共に来訪するのは、既に手紙で知つてゐる。着替えもせずに応接間に向かつたマザリー二が目にしたのは、ソファに腰掛けるレオニー子爵に、本棚の前をうろついている少年。そして予定外の来客、テーブルを囲んでいる一人の女性は、一人ともマザリー二にとつて旧知の人間だつた。

一人は、ラ・ヴァリエル公爵夫人のカリーヌ・デジレ。もう一人は、かつて魔法衛士隊の隊長代理を務めたこともある、現チクトンネ街区護民官の、ヴィヴィアン・ド・ジェーヴル。

「……お待たせして、申し訳ない」

マザリー二のその声で、本棚を眺めていたアクセルは振り返つた。

年齢は、三十を少し過ぎた頃か。想像していたよりも、がつしりとした体付きのよう見える。壯年、という言葉を体現したかのような雰囲気を持ち合わせており、必要以上の虚栄も卑下も無い。アクセルは、怜俐な戦国武将、という印象を持つた。

「おお、お邪魔しております。マザリー＝枢機卿殿

ソファから立ち上がりたレオニー子爵は、大袈裟な身振りで挨拶すると、がつしつと握手を交わす。小柄な彼と並べば、より一層、マザリー＝の長身が際立つた。

「ようこそいらっしゃいました、レオニー子爵。それで、そちらが？」

マザリー＝は微笑を浮かべ、アクセルに目を向ける。その視線には何の敵意も感じられず、ただ幼い子どもに対する慈愛だけがあり、多少後ろめたさのようなものを覚えながらも、アクセルは礼儀正しくお辞儀をした。

「初めまして、マザリー＝枢機卿殿。ラヴィス子爵が第一子、アクセル・ベルトラン・ド・ラヴィスと申します」

「これは」「丁寧に。疲れているでしょう。狭い我が家ではあります、どうぞ、ご実家のようにおへつらわせください」

「はい、ありがとうございます」

「いや、しかし驚きましたぞ」

そう言いながら溜息をつくレオニー子爵、彼の視線の先には、優雅に紅茶のカップを持ち上げるカリーヌ・デジレがいた。カップの取っ手に絡みつく、白くほつそりとした指には、妖艶なそれとはまた違った種の色氣がある。

「武名の誉れ高き烈風力リン殿が実は女性で、しかも今では、ラ・ヴァリエール公爵夫人であらせられたとは……」

「レオニー子爵殿」

カリーヌは顔を動かさず、横目でレオニー子爵を捕らえた。その視線はさながらマジックアローのように、彼の心臓を射抜く。レオニー子爵の背中に、冷や汗が滲み出た。

「それを明かしたのは、ヴィヴィアン殿の命を救つて頂いたことへの礼儀です。サイレントすら使わずにそのようなことを仰るのは、些か軽率に過ぎるのではないか」

語調こそ静かではあつたが、短刀の刃を首筋に這わせているかのような、静かな迫力があった。いや、殺氣とすら言える。軽率である、というのは、烈風カリンの正体が知られるということに対してもなく、それを知つたレオニー子爵に、命の危険があるということを示しての言葉だつた。

トリステインの伝説を前にして、先ほど襲撃された時以上の恐怖を感じるレオニー子爵を救つたのは、呆れたようなマザリーの手拍子だった。カリーヌの視線が、今度はマザリーに移る。

「ラ・ヴァリエール公爵夫人。我が家での荒事は勘弁願えませんか」

「……わかっています」

カリーヌは目を閉じ、持ち上げたままだつたカップに唇を触れさせた。彼女とて本気ではなく、脅しとこりよりも注意のようなものだ。もつとも、彼女にとつてはそれでも、された方はたまつたものではない。

「……失礼致します。少々、疲れまして……」

安堵の吐息を漏らすと、レオニー子爵はこれ以上の墓穴を掘らなによつ、そそくさと応接間を後にした。

「マザリー二は続いて、アクセルに目を向ける。すると、それまで黙っていたヴィヴィアンが口を開いた。

「マザリー二枢機卿。私は、その子とレオニー子爵に命を救われました」

「ほう、左様ですか」

「賊に受けた傷を一度も癒してくれて、更には自らの命を賭して守つてくれたのです」

「それはそれは……」

マザリー二は片膝を付き、アクセルの肩に手を置いた。

「ヴィヴィアン殿を救つて下さり、このマザリー二、感謝のしありませんぞ」

力強い手だった。

「いえ、そんな……。それにあの矢傷は、僕の失敗でしたし……」

「そんなことはありません。未だお若いのに、その覚悟、知恵、魔法。どれを取つても、正しく一級品。私も見習つべきですね」

お世辞も入つてはいるのだろうが、傍らから褒めちぎつてくれるヴィヴィアンに、アクセルは頭をかく。公示人に化けるというアイディアも失敗し、結局は通りがかりの烈風力リンに助けられたのだが、考えてみれば、最後まで逃げなかつたことは賞賛できた。しかし、もしもヴィヴィアンがマザリー二の敵だつた場合、彼女を裏切つてマザリー二に引き渡そうとも考えてはいたので、やはり後ろめたい。

「では、今夜はこの小さな英雄のために、ささやかながら歓迎の晩餐といきましょう。アクセル殿、お疲れでしょう。どうぞ、それ

まで」やつべつと。メイドに案内をせます

マザリーーは小さな銀製のベルを鳴らし、メイドを呼びつける。どうやら、自分がここにいると都合が悪いようだと敏感に察したアクセルは、素直にそれに従い、応接間を後にした。

少年が退室した直後、カリーヌは杖を抜くと、サイレントの魔法を使った。その時ヴィヴィアンは、ちらりとマザリーーの方に視線を向けたが、彼は首を左右に振つて否定する。ヴィヴィアンが襲われた理由について、カリーヌにも黙つていた方がいいと、マザリーーはそう判断した。

「さて。これで一安心」

一人の視線での会話に気付かないカリーヌは、杖を太腿の上に置く。

「聞かせて頂きましょうか。ヴィー、ヴィー殿が何故、命を狙われたのか」

マザリーーとヴィヴィアンの予想通り、カリーヌは関わる気満々だ。それでこそカリーヌなのだが、今、彼女に関わらせるのは色々と都合が悪かつた。

「……。聞いてどうなさるおつもりだ？　また烈風カリンとして、杖を振るわれるおつもりですか？」

「場合によつては

「お止め下さい」

マザリーーは溜息混じりに首を振る。その仕草が癪に障つたのか、カリーヌの視線が鋭さを増した。それに気付くマザリーーだったが、

反対に、穏やかな口調で語る。

「たかが蠅燭の火を消すのに、烈風は必要ありません。かえって燭台を倒し、無闇に火を広げてしまう恐れもあります。どうか、ご安心を。幸いなことに、烈風を求める程の大火灾は起きていませんので」

「蠅燭だと侮っている内に、身動きが取れない程囮まれることもあるでしょう。今回またま私が通りかかったから良かつたもの、そうでなければ、ヴィーヴィー殿とこうして紅茶を飲むこともありませんでした」

そう、今回ヴィヴィアンが命を拾つたのは、偶然の重なりである。もしもあのまま誰にも気付かれずに路地裏にいれば、いずれ発見されて止めを刺されてしまうし、アクセル達が時間を稼いだからこそ、カリーヌの偶然に間に合つた。

(さて……。どう言つて丸め込もうか)

マザリーニが口を開こうとした時、かちやりと、音が鳴つた。叩き付けるのではなく、その場の注意を自らに向けさせる為の音。カリーヌもマザリーニも、揃つてヴィヴィアンの方を向いた。

「カリン」

若干、トゲを含ませた声だった。

「つまりお前はこう言いたいのだろう。私程度の力では、みすみす殺されるのがオチだと」

その声に、カリーヌはイヤでも昔を思い出さざるを得ない。かつ

て、彼女の指揮の下で戦っていた自分を。

「それはつまり……」のヴィヴィアン・ド・ジョーヴルを、己の身すら守れない、か弱い女として見ていると……そういうことだな

「いえ……それは……」

道理がどうこうではない。絶対服従の対象である上官が一つだと言えば、ハルケギニアの用ですら一つとなる。

伝説の軍人、烈風カリン。彼女は規律を重んじるが故に、自らもその規律に従うしかない。それが長所であり、短所であった。

「……ふざけるなあつ……」

鉄槌の如く振り下ろされたヴィヴィアンの拳が、カップと皿を粉々に碎いた。カリーヌがそれにビクリと身体を震わせたのは、相手がヴィヴィアンだからである。

応接間に、沈黙が横たわる。鉄槌を振り下ろしたまま、そして一言叫んだままだつたヴィヴィアンは、やがて荒々しく立ち上がり、ズカズカと窓の前まで移動する。そのまま腕を組み、カリーヌ達に背を向けた。

ヴィヴィアンは、拗ねていた。幼子のように。童子のように。それもまた、道理などではなく、純粹な感情からくる行動。ヒステリ一などと同じく、思わず取つてしまふ行動。そしてそんな純粹な行動だからこそ、説得する言葉などなく、時間経過しか解決策は残つていないので。

どうしようかと迷つてゐるカリーヌの耳元で、マザリーがそつと囁く。

「あの、カリーヌ殿。どうか、この話はまた改めて、といふこと

に。私も今回の一件で、敵の本質を大分見ることが出来ました。もう、ヴィヴィアン殿の命を危険にさらすような真似は致しません。ですので、その、どうか……今日のところは……

相手が格下であれば、カリーヌも構いなしに、無理矢理にでも追求するだろ？しかし、彼女は自分自身よりも、ヴィヴィアンを一段高い場所に据えている。強引に出られる筈もなく、彼女はそつと立ち上ると、ヴィヴィアンの背に別れを告げた。

「…………カリン」

ヴィヴィアンは背を向けたまま、退室しようとするカリーヌの背に声を掛ける。

「トリスターには、どのくらい滞在する予定？」

「一週間ほど、でしょうか……」

「そう」

それきり、彼女は再び無言。もしもの時には、ちゃんと自分を頼ってくれるのではと、カリーヌはそう解釈することにした。

カリーヌが退室し、応接間にはマザリーニとヴィヴィアンの二人が残される。マザリーニが溜息をつきながらソファに腰を下ろすと、ヴィヴィアンも振り返り、彼の傍に近づいた。

「…………ありがとうございます。彼女を説得するのは、些か骨が折れますので」

「いいえ」

ヴィヴィアンは軽く微笑みを浮かべながら、マザリーニの隣に腰掛ける。マザリーニは背を曲げ、足の上で頬杖を付いた。更に組ん

だ両手を、口元を隠すよつにくつつける。
ヴィヴィアンは軽く眼鏡を押し上げた。

「少々、カリーヌ……彼女に悪い気もしますが」

「仕方ないでしょう。彼女は公爵とは違い、政争などには向きませんから。……しかし、まさかボーフォール伯爵が……ここまでくるとは。申し訳ありません、ヴィヴィアン殿。完全に私の読み違いです」

「仰らないで下さい」

深々と頭を下げるマザリーに、ヴィヴィアンは急いで首を振る。

「原因は、私の油断ですから。……しかし、ボーフォール伯爵は既に老齢。巷では清貧の名が高く、高潔な人物とされているのに、何故……？」

「老齢だから、といふことも考えられます。老いた者がかかる病、とでも言いましょうか。彼には跡継ぎとなる子どもはなく、妻もない。何も無いのです。そして、何もないことに気付いてしまった。残された時間は残り僅か。生きた証を、何とかこの世に残したい……」

「その為に、私を？」

「ええ。今、チクトンネの護民官である貴女が亡くなれば、恐らく前任のボーフォール伯が就くことになるでしょう」

「……。例えば……」

ヴィヴィアンは再び眼鏡を押し上げた。こちらを向いたマザリーに、その青い瞳の視線を重ね、軽く首を傾げる。

「私が怖じ氣づいた振りをして、護民官の職を辞任すれば……」

「ボーフォール伯爵の目的は果たされ、もう貴女を害などと

はしなくなるでしょ「うな」

マザリー二も、ヴィヴィアンが己の保身の為だけにその案を出したわけではないことは、十二分に理解している。ボーフォール伯爵は老齢であり、下手に争うよりは一時の権力を与えてやる方が……という考えは、ある意味人道的な情けであるとも言えた。

それが手つ取り早い解決策であるとは認めて、マザリー二はその提案を却下した。

「それも、成功しないでしょ「うな」

「何故です？ 私の名誉の為とでも？」

「いいえ。この問題の厄介な所は、ボーフォール伯爵に確たる目的が無いところなのです。ただ漠然と、何かを成したいと思つてゐるだけで。チクトンネ護民官が一番手に入りやすそうだ、という理由だけで、貴女を狙つたのです。確かに貴女が辞職すれば、ボーフォール伯爵の目的は果たされたことになります。しかしながら、すぐに次の行動に移るでしょ「う。 ただ、漠然とした欲望を満たそうとして」

「……」

「失礼である事は承知の上で言います。貴女には、囮餌であつて欲しい。貴女を護民官の座から引きずり下ろす、という目標に集中している内は、ボーフォール伯は他の事には目を向けないでしょ

から

「……酷い男」

先ほどのカリーヌに対する演技とは違い、ヴィヴィアンは本氣で拗ねた。ほんの一瞬、二十歳前的小娘の声であつたような気がして、マザリー二は思わず目を丸くすると、隣の彼女を見る。言葉とは裏腹に、ヴィヴィアンはどこか楽しげに笑っていた。

マザリー二は一つ咳払いをすると、再び思索の姿勢に戻る。

「……ですが、それもあまり長く続けば、諦めて他の行動に出るでしょう。時間が無いということは、伯爵自身が一番理解している筈ですから」

今、マザリー二が恐れているのは、ボーフォール伯爵が狂人の如き破れかぶれの暴挙に出ることである。それは大乱の元となるやも知れず、また他国につけ込む隙を与えることにもなりかねない。トリスター二アが抱える爆弾の一つをどう処理するのか、それがマザリー二の急務である。

彼は溜息をつくと、ピンと人差し指を立てた。

「……早々に、退場願いたいものだ……」

トリスター二アの表舞台から、そしてこの世から、である。

「私が選びましょうか？」

朽ちた要人を排除する裏方には、ヴィヴィアンも若干心当たりがある。しかし、マザリー二は静かに首を振った。

「今、ボーフォール伯爵は“疾風怒濤”を抱えています。生半可な者では、逆に貴女が危ない。……さて、どうするか」

そう呟いたきり、マザリー二は目を閉じる。本格的に思索に入る構えだ。

しかし数秒後、彼は

「ひえやつ！？」

といつ奇妙な声と共に、バネ仕掛けの人形のように立ち上がった。両手を背中に回し、ぴょんぴょんと飛び跳ねながら、衣服を乱す。背中から追い出された数個の氷が、音もなく絨毯の上に転がった。

「な……何を……！？」

犯人は言つまでもなく、片手で杖を弄びながら、クスクスと笑つてゐるヴィヴィアン。初対面の頃は、マザリー一も彼女を真面目な女性と思っていたのだが、意外に悪戯好きなのだ。今のようになると、思案中に背中に氷を突つ込まれる事も、過去何度かあった。

「ゲストをほつたらかしにするホストがどこに？　ああ、ここにいましたね」

「……」

マザリー一は恨めしそうな顔でヴィヴィアンを睨むが、勿論、彼女は動じない。彼は衣服を整えると、改めて、ソファの上に座り直した。警戒しているらしく、腰を捩つてヴィヴィアンを真正面から見る。

「それにしても、彼の治癒は見事でした。トライアングルにも引けを取りませんよ。あのような将来有望な水メイジがいるとは、我が國もまだまだ安泰でしょうね」

「ああ、アクセル殿か。彼は風のラインですよ」

「え？」

聞き間違いであると半ば断じて、ヴィヴィアンは聞き返した。しかしすぐに、その考えを否定する。

「マザリー一枢機卿。確か貴方は、あの子とは初対面では……」

「ええ、初対面です。ですが、ラヴィス子爵の息子となれば、その程度の情報は集めてあります。何ヶ月か前、ラヴィス子爵から領地の代官に任命された、九歳のラインメイジ。……それほどまでに貴女が賞賛するのならば、風と水の両方に、高い相性を持つメイジなのでしょう」

いつしかマザリーの視線は、虚無となっていた。どこを見ているわけでもなく、ただ、眼球が開かれているだけ。その眼球から送られてくる情報は、脳内で至極どうでもいい情報として仕分けされ、うちやられた。彼は今、自らの思考の内側に入り込んでいた。

九歳でラインクラスというのは、確かに才能の発露と言える。しかし、ラヴィス子爵は息子のその才能を素直に喜ぶだろうか。マザリーは、子爵は喜ばないだろうという結論に達した。現在のラヴィス子爵に、そんな才能は寧ろ不都合な場合が多いのだ。

確かに、子どもの成長を喜ばない親などいない。ラヴィス子爵も、自らの一人息子であるアクセルに、魔法の力を磨くななどとは言えないだろつ。

(……だから、か?)

勉強のため、領地持ちの貴族がその子弟を代官に任ずるのは、それほど珍しいことでは無かつた。もっとも大抵の貴族はラヴィス子爵と違い、代官に任せきりなどせず、自身が後ろから監督する。

ラヴィス子爵は、息子に代官として失敗して貰いたがつている……あまりにも穿ちすぎた予想だが、マザリーはそれを笑い飛ばせなかつた。

「……もう一度、いつときまじょうか
「のあつひやあつ！？」

いつの間にか背後に回っていたヴィヴィアンにより、マザリーニはまた飛び跳ねる羽目になつた。

応接間を後にしたカリーヌは、ふうと溜息をつくと、そのままマザリーニ邸の玄関へと向かつた。ヴィヴィアンを狙う者については、放つておくことも出来ないが、とにかく今は大人しく引き下がる方がいい。ヴィヴィアンは決して無茶をするような性格では無く、またマザリーニも、責任感の強い男だ。あの二人がはつきりと警戒する以上、そそう不幸な未来も起こり得ないだろう。

考えてみれば、ヴィヴィアンの怒りも尤もなのだと、カリーヌはそう省みた。かつてはどうであれ、今のカリーヌはラ・ヴァリエール公爵夫人。余計な首を突っ込む筋合いは無い。

しかし、もしもヴィヴィアンが殺されるような事があれば、その時は思うままに烈風で難ぎ倒す……と、既に結論は出ていた。

勝手知った邸宅の中、案内も無用とばかりに颯爽と扉を開けた時、一陣の風が吹いた。カリーヌの桃色の髪が、風に梳かれてふわりと広がる。軽く髪を整えようとした彼女は、風が運ぶ、小鳥の轉りを聞いた。

「…………？」

そしてすぐに、それが轉りではなく、笛の音色であることに気付く。

扉を閉めたカリーヌは、そつと石畳を下り、音色の源である裏庭に向かつた。普通なら、無視する。それをしなかつたのは、普通では無かつたから。

花々が作る道を超えて、裏庭に回つてみると、その正体が明らかとなる。小さな人工池の傍の岩に腰掛け、白銅のフルートを奏でる一人の少年がいた。その正面の岩には、先ほどその少年の案内を仰せつかつたメイドが腰掛け、目を閉じたまま音色に聞き入つていた。カリーヌは傍らの、幻獣を模した石灯籠に寄り添うように立ち、その光景を眺める。

やがて演奏が終わり、アクセルはフルートから唇を離した。

「素晴らしい音色ですね」

カリーヌが進み出たのは、その時だつた。慌てて立ち上がるメイドに釣られ、アクセルもフルートを手に腰を浮かせる。

アクセルはそつと、心の中で苦笑いをした。

先ほど彼女の、高純度の魔法を見せられたせいか、どうも恐怖を拭いきれない。風の精神力が爆薬であるとすれば、それを薄める無属性の精神力は、導火線や制御装置の役割を果たす。勿論、純度が高ければ高いほど、単純に威力は上がるのだが、コントロールする余地が無くなる。通常の魔法の行使が補助輪付きだとすれば、このカリーヌは手放し運転が可能なのだ。

そして、アクセルのようにそれを視認によつてではなく、茫漠たる感覚として会得している彼女は、やはり並外れた才能の持ち主と言えた。

「いえ……母に言わせれば、まだまだだそうで」

アクセルは愛想笑いでカリーヌを迎える。その彼女が、仕事をサボっているメイドに尋問、又は精神的な拷問紛いの詰問を行う前に、少年は急いで口を開いた。

「ありがとう、長々と聞いてもらひつて。どうだつた？」

カリーヌの静かな気迫に怯えていたメイドは、助け船を得たとばかりに、アクセルに向き直る。

「あ、あの、その……とても、気持ちのいい音色でした」

「そう。良かつた」

アクセルは目を閉じ、笑つた。

「ごめんね、引き留めて。戻つていいよ」
「は、はい。失礼します」

アクセルと、そしてカリーヌに直角のお辞儀を行い、メイドは早足で逃げ去つた。

カリーヌは、先ほどメイドが腰掛けていた岩に座る。アクセルはヒヤリとしたが、平静を装つてフルートを撫でる。

「……美しく、そして不思議な音色でしたね」

「音楽療法です」

「…………？」

「あのメイドは、どうやら疲労が溜まつていたようで。ほんの気休め程度ですが、音楽には、人を癒す効果がありますから」

音色に自らの精神力を込め、風に乗せ、対象の体調に作用させる。娼婦達の生理痛を少しでも軽減させるために、アクセルが確立しよ

うとしている発展途上の技術。出来れば、一つの学問の体系として作り上げたいと考えていた。

しかし、それもまた、結局は自分一人でしか使えないものなのかも知れない。効果が出るのは、自分が大切だと思っているもの、好意的に見ているものに対してだけという、ある意味現金な技術だった。

だが、音楽が人に及ぼす影響は古来から言われており、誰かを想つて調べを紡ぐのは……俗に言う、心を込めての演奏は、決して無意味なものではないだろう。精神力操るメイジであれば、尚更に。

カリーヌは再び、口を開いた。

「治癒が、お得意で？」

「あはは……。実はよく怪我をするので、その度に自分で治していたら、自然と……」

「怪我ではなく、病気を治療したことは？」

その質問に、アクセルは驚く。

今、カリーヌの脳裏に浮かんでいるのは、次女カトレアの顔なのだろう。

(まさか……そこまで切羽詰まつていてる?)

初対面の九歳児にすら……ほんの僅かであるとはいえ、望みを繋いでしまうのかと、アクセルは愕然とする。

そもそも病気の治療は、怪我の治療よりも難しい。アクセルも、イシュタルの館直属の水メイジから少々話を聞いただけで、その勉強は始めていない。カトレアを治療することは、確かに大きな利益をもたらすことにはなるが、未だその時期では無いのだ。

咄嗟にアクセルの口から出た言葉は、否定だった。

「病気……ですか。それはまだ無いですね。そもそも、僕の属性は風ですし……水メイジのようにはいきませんよ」

考えてみれば、ラ・ヴァリエール公爵は水のスクウェアクラス。医者ではなく軍人としても、治癒に深い関わりを持つ水属性を極めた存在。その彼がどうにも出来なかつた病気に……更に言えば、原作でも治つていなかつたあれに、一体誰が手を出せるというのか。

「そうですか……」

カリーヌの顔色が、僅かに曇つた。やはり、カトレアの治療は難航しているらしい。彼女の表情に、些か罪悪感のようなものを感じながらも、アクセルは無言だつた。声を掛けるべきか決めかねている間に、カリーヌはそつと立ち上がる。

「それでは、失礼します。またお会いしましよう、アクセルさん」「あ……は、はい、わかりました。お気を付けて、ラ・ヴァリエール夫人」

出来ることなら、あまり会いたくないのが本音だった。そう考えると、王都に来て早々、自分は失敗してしまつたのかも知れないと、アクセルは俯く。

見ず知らずの女性を、命を賭して助ける勇気、……それをカリーヌが評価し、アクセルを勇者と見なし、記憶に留めれば……。

（巻き込まれるかも……）

カリーヌの末の娘にして、原作主人公のルイズのピンチがあれば、

アクセルも引っ張り出されることになるかも知れない。

（参ったなあ……）

銀色に輝くフルートを肩に乗せ、大きく、深々と溜息をついた。

しかし……と思い直す。それは所詮は、未来のこと。まだまだ先のこと。

今、足を踏み外してしまえば、その未来すら無くなる。未来を恐れることから出来なくなる。

（結局、今の一歩が大事ってことか）

岩から腰を上げ、背を反らして大きく伸びをする。黄昏色の夕日に顔を顰め、軽く息を吐き出すと、無理矢理に気持ちを入れ替えた。

（隙を見て……応接間に仕掛けた“アレ”、回収しないとな）

アクセルの表情が、黄昏の中に沈んだ。

応接間の本棚に並ぶ、数々の本。子ども向けの童話から、教養本、歴史書、辞典まで、様々な種類のそれらが、規則正しい姿で眠りについていた。応接間であることを考え併せると、客人用のものであるのかも知れない。

書物だけでは無い。魔法の蓄音機もあった。きちんと本棚の中に寸法を採られ、ぴったりと納まっている。

その傍らに、貝殻が置かれていた。大人の掌に収まるほどの、巻き貝の殻。飾られている食器や小物類に紛れて、ひつそりと、目立たぬよう。持ち上げると、ちゃぽんと内部の水が揺れる音がする。

「…………」

アクセルはそっと、その腔の出口に、波の声を聞くかのように耳を押し当てた。すると貝殻の表面をさすり、やがて微かに聞こえてきた話し声に集中する。

内部の水は周囲の音を記録し、保存する。魔法の蓄音機に使用されている技術の応用だが、勿論それほど性能が高いわけではなく、壊れかけのラジオのようにポツポツと雑音が軋む。

「……ボーフォール伯爵か」

アクセルは貝殻を離すと、それをポケットに仕舞い、ぽつりと呟いた。その名を忘れぬよう、心に留める。

背後で、ドアが開く音がした。

「あ……」じちらでしたか、アクセル様。失礼致しました」

昼間、部屋を案内してくれたメイドだった。深々と頭を下げる彼女の動きは、あの時よりも元気そうに見える。

「お食事の用意が出来ました。ダイニングルームまで」案内致します」

「うん、ありがとうございます」

まるでそれまでの表情を塗り潰すかのように、アクセルはこり笑つて見せた。

足跡のない雪原のように新品の、真っ白なテーブルクロスが広げられ、料理を乗せた銀食器が並んでいた。マザリニー、ヴィヴィアン、レオニー子爵、そしてアクセルの四人がダイニングに揃うと、晚餐が始まる。枢機卿の食卓だからだろうか、常の貴族の晚餐よりも肉は少なく、代わりに穀物や野菜が多い。

マザリニーが始祖ブリミルへの感謝の祈りを捧げ、晚餐が始まつた。

「……れすかられえ」

そして三十分後には、レオニー子爵の舌が回らなくなる。

昼間、命を拾った感動がまだ続いているのか、がばがばとワインを呷り、たちまちにして顔を赤くした。レオニー子爵と晚餐と共にした経験のあるアクセルだが、その時は恐らく、子どもの前なので酒を控えていたのだろう。どうやら元々酒に強くは無いらしく、ワインを一杯飲み干す前に酔っ払ってしまったことにも驚いたが、そこからが長かった。据わった田で、給仕にワインを注がせる。

既に酔ったレオニー子爵を何度も見ているマザリーは、平然と彼の相手をしていた。

「あれはれえ、この子らんれふよお……」

先ほどからずっと、蓄音機のように延々と同じことを喋つており、そして繰り返すたびに言語が理解不能なものへと変貌している。

しかし、話題は全く変わらず。鉄道のアイディアは、本当はアクセルのものだった、ということである。

(いつもなら、止めてくれって叫びたくなるけど……)

この時ばかりはアクセルは、自分を宣伝する存在に感謝していた。まず、マザリーに興味を持つて貰わなければ、何も始まらない。彼の中での自分を、もっともっと、興味深い存在へと押し上げねばならない。

しかし、面映ゆかつた。普段、貴族としては決して全力など出さず、お飾りとして見られることに努め、コケかシダのようひつそりとしていたのに、突然スポットライトが浴びせられたような気分だ。

更には、マザリーも、ヴィヴィアンも、ちゃんとアクセルを褒めるのである。

(褒められるつて、こんなむず痒いものだつたつけ)

体中を搔きむしりたくなるような、しかし不愉快ではない気分。頬が紅潮するのを感じるアクセルだったが、その顔色はマザリーニとヴィヴィアンの目には、幼子の微笑ましい光景として映っていた。

そしてついにレオニー子爵が酔い潰れ、使用人達の手を借りて寝室に向かつた。

(……まだか……)

アクセルが望むのは、マザリーニとの一対一の密談。この場には給仕もあり、未だ腹を割つた話など出来ないのは勿論なのだが、それ以上に気がかりなのは、ヴィヴィアンの存在だった。彼女が果たして信用できる人物なのか、その判断が出来ない以上、密事を漏らすわけにはいかない。

もたついている内に、晩餐は終わってしまった。

そしてその頃には、焦りを覚えていたアクセルは、ある決断を下していた。

その一人には、足音が無かつた。衣擦れの音も無かつた。
いや、無いというよりは、その音を周囲の人間が知覚することは無かつた。

勿論、物音は隠せても、その姿形を隠すことは出来ず、彼等一人の方向へと目を向ければ、皆がその姿を認める。

しかし、既に日も暮れ暗闇が蔓延る中、月明かりに照らされるその姿は、ひどく曖昧なものだつた。

一人は、忙しくそこかしこの通りを駆け回る衛士達にも、こそと裏通りを渡る間男にも悟られることは無く、進んでいく。

「あ？」

二人の内、背の高い男は首を右に捻りながら、声を漏らした。サイレントの魔法によつて、その声は周囲に漏れることは無いが、前を歩く男の耳には届く。灰色の髪の男は、不可解な声を漏らした連れを振り向こうとしたが、やはり止めたらしい、その代わりに口を開いた。

「どうした」

「いや、今、そこを何か……子ども？」

「こんな夜更けにか？」

「ああ、うん。やつぱり見間違いかも。大きい猫か何かかな」

「猫……ねえ……」

灰色髪の男は、わざと聞こえるような大きさで、鼻で嗤つた。背後の 大男は、少しムツとしたよう で、ぼつりとした唇をへの字に固める。その表情を知つてか知らずか、灰色髪の男は更に重ねた。

「怖じ氣づいたんなら、帰つて寝てろ」

「……いや……けどな、ハンスの兄貴。もし、『烈風カリン』を相手にすることになつたら……」

「それは無いだろ。烈風カリンに直接会つたことは無いが、集めた情報によれば、こんな政争には向かない人間だ。マザリーニもヴィヴィアン・ド・ジョーヴルも、好んであんな爆弾を使おうとは思つまい」

「でもよお、万が一つのこと……」

「俺はそれでも構わん」

前を歩くハンスの言葉に、後ろを歩くマルセルは、ああ、ついにこの兄貴は自信過剰が過ぎて、取り返しの付かない脳味噌になってしまったのだと絶望する。

「俺は疾風、ヤツは烈風。どちらが勝とうが、風の勝利は搖るがない」

ハンスは得意げにそう言つた。マルセルも、どちらにしろ風の負け、などと反論してしまつ程、命を軽んじてもいなければ空気が読めないわけでもないので、結局はそれきり口を閉ざす。

「おお、今度は本当に猫だな」

ハンスがそう言つた通り、黒猫が目の前を横切つた。

二人はやがて、モンシャラン街のマザリー邸へと至る。

ブリミル教の枢機卿に、正面切つて喧嘩を売るよつた愚か者はおらず、警備もひどく脆弱だつた。ハンスとマルセルは軽く壁を越え、庭を突つ切り、アンロックで扉を開け、さながら帰宅のよう

な穏便さで侵入を終える。

マルセルは一階へと向かい、ハンスはそのまま一階を進んだ。

途中で遭遇した使用人が、一人。
しかしその二人とも、自分が何と出会ったのか、何をされたのか
という疑問すら持つ間も無く、静かにその場に倒れ伏し、寝息を立
てる。

最後に、一人、メイドがいた。赤子を抱くようにワインを抱え、
廊下を歩いていく。その背中を見守るハンスに、彼女は気付かない。
客人の為、応接間までワインを運ぶように命じられたメイドだつ
た。

「ご主人様、ワインをお持ち致しました」

「ああ、入りなさい」

ドアの外で許可を貰い、彼女は華奢な指先をノブに這わせ、慎重
に回す。客人の前で、ワインをうつかり落としでもしてしまつこと
が、どれ程の失態なのかよく理解していた。

しかし、ドアを開け、応接間の光が漏れ出したところで、彼女が
あれほど大事に抱えていたワインは、するりと抜け出す。自分の手
から、何者かによつてワインが抜き取られた事を悟ると同時に、メ
イドは強烈な睡魔に抗えず、その場に膝をついた。

「やあ……こんばんは」

ワインの瓶を片手で回し、それを肩に預けながら、ハンスはメイ
ドの務めを引き継ぐかのように、応接間の中へと滑り込む。

中には、ソファに腰を下ろしてこむマザリー二枚機卿と、

その傍らに立つヴィヴィアンの一人。

闖入者による彼等の動搖は、ともすれば見逃してしまいそうな程に微かだったが、ハンスの手には十分なそれだった。

「抜いてもいいぞ。無駄だがな」

真っ先に動いたのは、ヴィヴィアンだった。腰から愛用の杖を引き抜き、ハンスへと向ける。しかし、突如として風が暴れ、彼女の右肘を強かに打った。

「ツ……！？」

腕があらぬ方向へと向き、無理な動きを強制された関節が声のない悲鳴を上げる。その痛みを堪え、再びハンスへと杖を向けようとする彼女の動きは、マザリーニの主觀でもあまりに隙だらけだった。“疾風”的名は、彼の風の魔法を表すものもあるが、本来は、相手より初動が遅れながら、それでも行動を追い抜くことが出来る迅業を指していた。

ヴィヴィアンの右腕を封じたハンスは、間髪入れず、二発目のウイングブレイクを放つ。

「うう」

ぐぐもつた呻き声と共に、ヴィヴィアンの足は床から離れ、その身体は背後の白柱に叩き付けられた。

「やめて、じんばんは」

ヴィヴィアンが失神してしまえば、マザリーニがこの場で出来ることがない。

ハンスは軽く手を振り、マザリーにソファに腰掛けるよう促すと、自らも向かいのソファの手摺りに尻を乗せ、左手のワインをテーブルの上に置いた。

「初めてして、だ。マザリー枢機卿殿」

「……“疾風怒濤”か」

「その通り。俺たちを用心棒だと勘違いしている奴らも多いようだが、生憎と、守るのは苦手でな。こうやつて攻めるしか能が無い」

烈風カリンが出現したという情報は、十二分に相手への牽制になると、そう判断していたマザリーにとつて、全く予想外の事態だつた。一度は失敗したその日の夜に、再び、しかも枢機卿の邸宅に攻め込むなど、まともな考え方をする者であればあり得ない。

（いや……しかし……どういうことだ？）

失敗したという事実は、既に過去のものである。マザリーは、勝手にワインの中身を呷り始めたハンスから目を離さないまま、その思考を巡らせた。

そもそもが、おかしい。

ボーフォール伯爵の狙いが護民官の地位ならば、例えばヴィヴィアンが不慮の事故で亡くなるか、職務を続けられる状態に無くなれば、自然とその後釜として転がり込んでくるだろう。その為に伯爵の手下は、昼間、ヴィヴィアンの暗殺を謀ったのだ。しかし、ヴィヴィアンがこうして失神している今、何故ハンスは彼女を殺そうがないのか。マザリーが見ているからだというのならば、それこそ本末転倒、初めからこの屋敷に攻め込んだりしない。

「兄貴、こつちは終わつたぜ」

開け放たれたままの扉から、長身の男が入ってきた。それほど筋肉質でも無いが、服の上からでも分かる、適度に引き締まつた身体は、荒削りの木像を連想させる。

「ああ、『苦労』

ハンスは振り向かずに言つと、そのまま後ろ手に、ワインの瓶を差し出した。マルセルは右手で受け取り、二口ほど中身を飲み込むと、それを傍らのブリミル像の足元に置く。

「使用人の他には、おっさん一人。レオニー子爵だな」「待て」

報告を受けたハンスは、ぐいと腰を捻り、背後を振り向いた。それが隙ではないことは、マザリーも理解している。

「もう一人、ガキがいただろつ」「いや？一通り探したけど、他には猫の子一匹いなかつたぜ。多分、帰つたんじゃねえの？」「そうは思えん。……客室の準備は？ 食事の形跡は？」
「おお、成る程」「それすら確認していなかつたぜ」「けど、たかがガキ一匹だぜ？」「お前よりは利口だ」

ハンスは身体を戻し、再びマザリーと向き合つた。その直後、マザリーは口を開く。

「ボーフォール伯爵の狙いは何だ？」

具体的な名を出しての、問い合わせ。

「ん、そうか。聞きたいなら、教えてやつてもいいぞ」

ハンスのその言葉によつて、マザリニーは覚悟を決めた。顔も隠さず、ボーフォール伯爵との繫がりも否定しない。それにつまり、マザリニーもヴィヴィアンも、二人とも殺される予定であることを示す。それが分かれば、次の、何故今は生かされているのか、という疑問に移れる。

ハンスはソファにきちんと腰を下ろし、頬杖を突くと、右手の杖をくるくると弄び始めた。マザリニーは腰を曲げ、身を乗り出すようにして話を聞く姿勢を取る。マルセルは一人、気絶したままのヴィヴィアンを後ろ手に、腰に束ねていた縄で巻く。

「清貧伯……俗界の聖者……そう呼ばれた者が、得難いその名を捨てる時は、実を取る時だ。伯爵が求める実とは、チクトンネ街、フォツソワイヤール街、モンシャラン街……王都トリスターニアの下流、中流、上流を代表する三区画。その全ての護民官となること」

「まるで、フロワサール伯だな」

「その通り。三つの区画の護民官を兼任するなんて離れ業をやつてのけたのは、伝説の貴族、フロワサールハ臂伯ただ一人。下らねえだろ？ 僕だってそう思う。けどな、あの伯爵は、本氣で、ハ臂伯の再来になりたいと思つてやがる」

「出来る筈も無いだろ？ あの当時は、有能な人間は粗方戦争にかり出されていて、極端に人材が枯渇していた。だからこそ、フロワサール伯は三十代の若さで、三席の護民官を兼ねることが出来たのだ。有能な人材がきら星の如く、とまではいかずとも、現在の王都は、そこまで人材が不足してはいない」

「マザリーーは真っ向から否定した。命が惜しくないわけでも無く、生き延びることを諦めたわけでも無いが、今はただ、好奇心が勝つていた。

「まあ、そりやそうだな。お役に就けずに歸いでいる貧乏貴族も、山ほどいることだし」

ハンスは両肘を広げ、背中を一層クッショングに沈めると、見下ろすような視線をマザリーーに向ける。

「……けどな、さつきも言つたが、うちの伯爵は本氣だ。本氣つてのは、命を賭けてるつてことだ。命を賭けてるつてことはつまり、自分の全てをフルに活用して、持つてるもの洗いざらい、一点にB E Tするつてことだ。知つてるか？ 酒の不作を理由に、酒の値段が上がり始めてる。ああ、勿論、未だ上がっちゃいねえ。しかし、布告は出された。ボーフォール伯爵は、人脈を総動員するぞ。酒の値段は、これから絶対に上がる。それも、前代未聞の勢いでな。数少ない楽しみを奪われた民衆の不満は、一気に高まる。そうすると、どうなるよ。反乱が起きるか？ 泣き寝入りか？ それとも」

「闇の市場が立つな」

「その通り。酒だけじゃねえ、ボーフォール伯爵の力の及ぶ、あらゆるもの値が上がる。一度闇の市場が成立すれば、あとはもう、広く深く進化していく」

「そして経済が混乱し、状況が悪化すれば、護民官になりたがる人間もいなくなる。槍玉に上げられ、生け贋にされるのは目に見えているからな。そこで、ボーフォール伯爵が一気に全てを仕切り、事態を鎮圧し、名声を得る……と」

「当たりだ」

「出来ると思つてゐるのか、そんなことが。都合良く」

「わかつてねえなあ」

マザリニーの強い、叱責のよつたな視線をせせら笑つかのよつて、ハンスは軽く口角を吊り上げ、灰色髪を根本から小指で梳いた。

「賭けなんだよ、結局は。孤独なじいさまの、人生最後の大勝負だ。俺だって、失敗するだろとは思う。が、成功する可能性だって低くはねえ。何しろ老先短いんだ、よつて怖いモノ無しだ」

綿密に計算された、勝率九割超えの完全な謀略ではなく、失敗する可能性も十分に孕んだ陰謀。しかしそれだけに、マザリニーはその厄介なギャンブルに臍をかむ思いだつた。何しろボーフォール伯爵は、安全策を取つていない。負ければそれまでと、了解してしまつてはいる。そんな相手に、しかもこの状況に至つてしまつた今、どう対応すればいいのか。

清貧の名は、既にボーフォール伯爵の中で、何の意味も持たないただの言葉と化しているらしかつた。

「あ、そうだ、兄貴」

「ん？」

マルセルが思い出したように声を上げ、ハンスは首を伸ばすよくな形で、マザリニーの向こうの弟分を見た。

「結局、あのガキは放つといつていいの？」

「ああ、いいんだいいんだ。マザリニーさん、アンタも教えてくれなくていいぞ」

「……まあ、兄貴がそう言つたならいいけど。無害なんだろ？」

「とんでもない」

「え？」

「どう考へても聞き間違いだと、マルセルは口にそう言い聞かせる。しかし、ハンスの表情を見て、ああまただと、ある種の諦念のようなものをどこかで抱えながら、顔を引きつらせた。

「あのガキは、猛毒だ。人間に突き立つた矢を躊躇いなく引っ抜くなんて、恐ろしい度胸してやがる。昼間の襲撃の時、例えヒロイックな自己陶酔にどっぷり漬かつてたことを差し引いても、あの冷静さは賞賛に値するぞ」

「じゃ、じゃあ追いかけないと」

「わざわざ追いかけなくても、潜んでるんじゃないか？　この屋敷のどこかに……」

ハンスは顔を動かさないまま、ちらりと視線を天井に向け、そこから左右にメトロノームが何かのように動かした。

怪談話を聞かされた後のようなマルセルは、急いで背後を振り向いたり、天井を見上げたりと、拳動不審のままオロオロと揺れてい。その様子が滑稽だったのか、ハンスは一度下を向き、轉りのような笑い声を漏らした。

「暗殺くらい、軽くやつてのけそなガキだつたなあ。枢機卿と護民官を抑えたくらいで安心してたら、後ろからグッサリやられるかもな」

「……俺もう、帰りてえんだけど。帰つて寝たいんだけど」

「いいじゃねえか。あのガキは風のメイジ。対する俺も風のメイジ。つまりはどっちが勝とうが、風の勝ちだ」

「……この仕事が無事に終わつたら、もうコンビ解消しようぜ、

兄貴」

虎は死して皮を残し、人は死して名を残す

有名な言葉である。そしてそれは、ボーフォール伯爵家の家訓の一つでもあった。

ボーフォール伯爵は、今年、ちょうど六十を迎えた老人だった。ガリア貴族だった曾祖父がトリスティンに移つてから、長い年月が流れ、今ではトリスティンでも屈指の貴族として知られ、護民官の他、財務官を務めたこともある。かつては妻も息子もいたが、二人とも相次いで病で亡くなり、それからは再婚することも無く、ずっと一人だった。縁談は勿論多く、ガリア王国からも申し出があつたが、亡き妻を偲び、結婚指輪を一人分嵌めていた。

(……バカらしい)

ボーフォール伯爵は、テーブルの上の肉を素手で掴む。こんがりと焼かれた鶏の足は、勿論油でベタベタだが、構わず口に寄せ、かぶりつく。白くなつた髪が油にまみれ、蠅燭の灯りでテラテラと光っている。そのままガツガツと、山賊や荒くれがするように食いちぎり、肉が無くなれば、骨を啜つた。

妻が亡くなつてから喪に服し、後妻を受け入れなかつたのは、思えば偲んでいたからでは無い。それが正しいと思っていたからだ。一人が寂しくなつても、その頃にはもう皆遠慮して、縁談を持ち込む者はいなかつた。それからの三十年、性欲を持て余しても、世間

体を気にして娼館へ行く度胸も無く、ずっと一人で処理してきた。娼婦を呼ぶことも出来たが、その娼婦の口からあらぬ事を漏らされてはと、そればかり恐れていた。

(バカらしい)

しゃぶり終えたチキンの骨を、からんと、皿の上に投げ捨てる。パリパリに焼けていたあの香ばしい皮を嚙かしむように、伯爵は掌を広げ、べつと塗られた油を舐め取った。

今までの自分では想像することすら罪悪に感じていた、下賤の民の食べ方。しかしそれが、今までの人生の中で間違いなく、最も美味な食事だった。手が汚れるのが、何だというのか。髪が汚れるのが、一体何だというのだ。手を汚さずにする食事に、一体、どれだけの価値があるというのだろう。

性欲を隠した。食欲を律した。その一つの代替として、名誉を欲した。

孤児院への寄付、貧民への炊き出し……身分を隠して街へと出、ボーフォール伯爵への賞賛、感謝を盗み聞き、密かに微笑んだ。貴族に対しても、金に困つていれば二つ返事で貸してやつた。金を貸した者と借りた者、その立場の違いを肌で感じ、そして自分がその上位に立つのだと実感した時、大声で快哉を叫びたくなる衝動に襲われた。

(それで、何を得た？)

隠居し、年金暮らしになつた時、不幸な事にふと、ボーフォール伯爵は振り返つてしまつた。家督を継いでから今までの、自らの足

跡を。

人は死して名を残す……。このまま死ねば、どんな名が残るか。弱き民を救けた聖人？ 財に固執せず、バラ撒くように貸し与えた清貧？ 一人目の妻が死んで以来、一度も女と交わらなかつた聖者？

「ふざけるな、ふざけるな、ボーフォールよ」

既にその家名で呼べるのは、己一人。ついに、自分の血を残すことは無かつた。養子を迎えるつもりは無い。

このまま死ねば、財産は全て国庫へと吸収される。子がないのだから当たり前だが、隠居する前に、既にその為の手続きは終えていた。そしてその事実が、より一層、ボーフォールの名を高めることになった。

「そんな名に、何の価値がある」

ボーフォール伯爵は、ぐつと、拳に力を込めた。健康のためには粗食が最上であるとの教え通り、もう何十年もそれを旨としてきたが、それを止めてから驚くべき事に、五体には沸々とした血潮が通い、若々しいとすら言えるような活力が漲つた。

（今まで、人生の、何と多くを無駄にしてきた事か）

それに気付いた瞬間を、伯爵自身は覚醒と直感した。自分は決して、他人の評判を気にするような、敬虔なブリミルの信徒などではない。もっと荒くれた、奔放な者なのだと。

思い浮かぶのは、曾祖父の時代、あの動乱の時代より伝えられる、国を内側から守護した伝説の護民官、フロワサール伯爵。戦火に動搖する貧しき者、働く者、富める者、全ての民を鎮撫し、また王城

にて前線の諸将たちを支えるという、四面八臂の活躍をした男。

幼い頃から憧れていた彼こそが、彼の名声こそが、結局自らが最も欲するものだつたと、そう気付いてしまった。

彼の名声を得る為には、まずやはり、三つの護民官を兼任しなければならない。フォッシワイヤール街区は既に陥落し、残るはモンシャラン街区、チクトン街区の一ツ。

（虎は死して皮を残し、人は死して名を残し……そして私は死して、フロワサークル伯爵と並び称される、英雄となる）

狂氣じみでいることは、伯爵自身、自覚していた。以前の彼なら懺悔し、自室に引きこもり、始祖ブリミルに必死に許しを請つていただろうが、今の伯爵にはただ、熱病のような情熱があつた。

（モンシャラン街も、そろそろ陥落するだろ？……。あとは、“疾風怒濤”が邪魔者を消し、そしてその“疾風怒濤”すら処理すれば……）

食事を終えたボーフォール伯爵は、上着を脱いだ。瘦せていた身体には肉が付き、酒によつてほんのり赤く染まつてゐる。自らの手が、何よりも逞しく、いかなる障害をもはね除けるような、頼もしいものに思えた。

その手が、寝室のドアを開く。

「……」

天蓋付きのベッドには、一人の少女がいた。服装から、平民であることが分かる。膝を抱え、大きなベッドの上で、その小さな身体

を震わせていた。

「……恐れることは無い。少々、痛いだけだ」

部下が調達してきた、どこの平民の娘。捜索願が出されれば、ボーフォール伯爵の耳にも届くだろう。その母親は、一体、どんな顔をするだろうか。必死に縋り付いてくるか、ただ泣き叫ぶか。

タガさえ外してしまえば、あとは簡単だった。支援していた孤児院に行くたびに、笑顔で出迎えてくれたとある少女の面影が、伯爵の脳裏にちらつく。その顔が、どうしても、想像の中でも歪まない。一体どうすれば歪むのか、知りたかった。それは至極簡単であり、絶望させればよく……。

（何故、あの時……私は、実行しなかつたのだろうな）

ずっと、思っていた。欲していた。考えてみれば簡単なのだ、楽しみだ後、口を封じればいい。そうすれば、惨めに一人で自慰に耽ることも無かつただろうに。

床から足を離し、ベッドに上った伯爵は、両手両足を支柱にして、少女の上に覆い被さる。既にその少女は観念したのか、それとも予め聞かされていたのか、ぎゅっと目を閉じ、声も出さずに震えていた。

「『めん』

口づけようとした伯爵の耳に届いた、一言。

思わず聞き返そうと口を開いた瞬間、何かが口の中に飛び込んできた。それがその少女の拳であることを知り、深い皺が刻まれた伯

爵の顔が、より一層歪む。

少女は空いていた方の手で、伯爵の首筋に、針のようなものを突き刺した。

食べたばかりのチキンが逆流し、伯爵の一いつの鼻孔から、そして拳で塞がれた口の隙間から、餓えた臭いと共に零れ出す。しかしそれでも怯まず、少女は拳をねじ込んでいた。焦つて引き離そうとする伯爵の両手を、或いは蹴り飛ばし、或いは殴りつけ、掴み……やがて老人は、無言の肉の塊となつた。

「……チツ、そつちかよ」

ハンスのその咳きは、恵々しさと、どこか賞賛にも似た驚嘆を含んでいた。

再び、新しくスリーブクラウドをヴィヴィアンにかけたマルセルは、暫し呆然と立ち尽くしていたが、やがて支えを失つたかのように、背後の白柱に寄り掛かつた。

マザリーニはすぐに驚きを納めると、怜俐な瞳で客人を見つめる。

開け放たれた応接間の扉の前で、アクセルはただ、静かに立つていた。

「……つふうーつ……」

ハンスは溜息をつきながら、立ち上がる。灰色髪をガシガシと乱暴に搔きむしりながら、アクセルの前まで歩むと、軽く右手を出した。アクセルも逆らわず、その右手に、二つの指輪を乗せる。乗せられた指輪を、それぞれ左右の手で摘み上げ、ハンスは踏み出すかのように、隅々まで見つめた。

「確かに。ボーフォール伯爵の結婚指輪……のセットだな。噂じや、センズリの時にも外さなかつたらしいが、これが外れてるってことは……」

「……殺した」

言い終えずにこちらに田を向けるハンスの後を引き継ぎ、アクセルは静かに唇を開く。

「ふつ、ふざけんなつ」

それまで柱にもたれていたマルセルは、さながら精神の平衡を保とうとするかのように、辛うじて、かすれた叫び声を上げた。

「屋敷に、どれだけ傭兵が残つてると思つてんだ！　ててつ、テメエみてえなガキなんざ、一秒で塵だぞ、塵！」

「……残つて無かつただろ？」

「えつ！？」

ハンスはアクセルに問い合わせ、アクセルは頷き、マルセルが顔を引きつらせる。

「あの爺さんの家に残つてたのは、せいぜい、三人か四人つてとこか」

「な……何でだよ、兄貴！？」

「そりや勿論、ここでマザリー＝枢機卿とヴィヴィアン・ド・ジエーヴルを殺した俺たちを、屋敷の外で待ち伏せて殺すためだろ」

「はあっ！？」

「何だ、おい。枢機卿を殺しておいて、生きてるつもりだったのか、お前は」

ハンスが心底呆れたといった様子で弟分を眺めるが、マルセルは歯をガチガチと鳴らした。寒気でも恐怖でも無く、あまりの状況に脳が追いつかず、言うべき言葉が見つからない。

しかしどうやら口を開くと、大股でハンスへと歩み寄った。

「じゃ……じゃあ俺ら、殺されるつてのかー？」

「心配するな。伯爵が死んで、今頃は慌てて逃げ帰つてるだろ。例え束になつてかかつてきても、“疾風怒濤”の敵じゃねえ。どちらにしろあんな小物どもじゃ、何も出来んよ。精々、金田のものを手にして逃げるくらいだ」

「……けど、本当」……伯爵は……

「マルセル、お前はチエスを知らんのか？ ナイトの高飛び、ローンの餌食と言つて……いや、何か違うか？ まあ、ともかくだ。キングがローンに殺られてしまつのは、自然の道理。雇い主が死んだのなら、もう俺たちは用無しだ。お望み通り、解消するか？ “疾風怒濤”を」

「一ヤ一ヤと意地の悪い笑みを浮かべるハンスに、マルセルは先ほど自分の言葉を思い出す。そして顔を真つ赤にすると、ちらりとマザリー＝を盗み見ながら、ぶるぶると首を振つた。

「ふつふふふざけんなっ！ 兄貴、一人で逃げるつもりか！」

「いやあ、残念だ。まあ確かに、俺は悪い兄貴分だもんなあ。お前に色々と、酷い事も言つてしまつたし。安心しろ、お前が望むな

ら、俺はもう金輪際関わることは無いぞ

ハンスと、そしてマルセルのやり取りから感じられる余裕は、彼等のメイジとしての実力に裏打ちされたものだった。

ついに音を上げて、ハンスのズボンに縋り付くマルセルと、相変わらずのらりくらりとかわし続けるハンス。黙っていたアクセルは、己の存在を認識させる為に、だんつと靴を鳴らした。一人ともほぼ同時に、緑髪の少年に目を向ける。

「二人は“疾風怒濤”なのか？」

「違うさ。元・“疾風怒濤”だ。俺は“疾風”的ハンス、こっちの可哀想な元弟分が、“怒濤”的マルセルだ」

「兄貴、頼むよ！ 許してってば！」

「……知り合いの元傭兵に、聞いたことがある」

「何をだ？」

アクセルは一度瞬きをすると、ハンスを見上げた。

「最強の傭兵の条件を攻撃力だとするなら、最強は“疾風怒濤”だろう……そう言つていた」

「ほあ……。それだけか？」

ハンスは腕を組むと、生え始めていた顎鬚を撫でる。アクセルは言葉を重ねた。

「最も恐るべきは前者、“疾風”的抜き撃ちだとも言つていた。蛇が草を払うよりも早く杖を抜き、抜けば既に勝負は決している。もしも“疾風”を倒したければ、この世から風属性そのものを無くすしかない、と。または、失われた“虚無”的属性を復活させるし

かないと……」「

「そいつは素晴らしい傭兵だな。ただ残念ながら一つ、間違っている。最後だ。例え虚無が来ようが、俺の風は、それを哀れな伝説へと追い戻してしまうだろ?」「

(“疾風怒濤”の舵取りは“疾風”、そして“疾風”の舵取りは“ゴマスリ……。スルトが言つてた通りだな、こりゃ)

喜んだふり、ではない。ハンスは本氣で、心から気分を良くしている様子で、わしわしとアクセルの頭を撫でた。

「まあ、お前も風属性だろう? 心配するな、俺のようこ……とまではいかなくとも、なかなか優秀に育つだろ?」

「10000ヒキュー出す

「……は?」

頭を撫でられてる子どもの言葉には聞こえず、ハンスも流石に、首を傾げて聞き返す。

「次の雇い先は決まってるのか? いや、決まつていてもいい。僕に雇ってくれ」

「……子爵の息子が出せる額かあ?」

「二階の、僕の客室にある荷物。その中の、ヴァイオリンケースの内側を切り裂けば、首飾りが入っている。骨董品としての価値も高い。人によつては、もつ200ヒキューほど上乗せする筈だ」

ハンスの目も、マルセルの目も、シビアな傭兵のそれに変わっていた。ハンスに促され、マルセルは駆け足で二階へと向かう。詳しく聞こうとしたハンスだったが、アクセルは彼に背を向け、未だ無言の男の元へと向かった。

、ヴィヴィアンの縄を解き、彼女の身体をソファに横たえたマザリーの耳にも、一部始終は届いているだろつ。どうやら、アクセルを待つていてくれたようだ。

「マザリー二枢機卿……」

「わて。今日は忙しくなる。ボーフォール伯爵の後始末もしなくてはならない。しかし……その前に」

マザリーは振り向くと、不意に柔らかい表情を作り、頭を下げる。

「ありがとうございます。どうやら君は、私たちの命の恩人だ」

まずは、感謝。命を救われたのは事実だ。しかしだからと言つて、一切を不問にすることなど不可能だった。今のアクセルには、夕食の席で見せたあの可愛げなど見当たらず、静かな決意がある。冷静に、人を一人、はつきりとした意志で暗殺してしまえる程の。

ラヴィス子爵の、いや、ラヴィス子爵家の特性を知つているマザリーニだったが、アクセルにはそれとはまた別種の、ながら鈍い光沢のような、冷たい特異性を感じられた。

しかし、再び怜悧な表情に戻り、頭を上げたマザリーは、思わず目を見開く。

アクセルは両膝を昂き、手を揃え、そして額を床に押し当てていた。

「マザリー二枢機卿……。どうか、助けて頂きたいのです」

少年は土下座したまま、絞り出すような、重々しい慟哭に似た声で訴えた。

「……なあ、兄貴」

「何だ？」

「本当によかつたのかね？ あんなガキに雇われて」

「……首飾りに狂喜乱舞してた野郎が、よく言つ」

がたんっと馬車が揺れ、マルセルの尻が浮く。隣のハンスは、その尻を軽く小突いた。こちらに田を向けたマルセルの前で、彼は深く溜息をつく。

「後始末は、枢機卿が引き受けてくれるってんだ。俺たちがいたら、かえつて邪魔なんだよ」

「ふーん……」

納得したのかしていないのか、マルセルは閉じた口の奥から返事をする。そしてふと思い出したように、後ろを振り向いた。

急いで調達した馬車は、客馬車では無い。荷物を運ぶための、質素な造りのものに、急拵えの幌をテントのように張つただけだ。

そして、その客室……いや、荷台には、少々の荷物とアクセルがいた。胡座をかき、虚ろな目をしたまま膝に手の甲を乗せる少年に、王都を出発してから寸分も動いていないのではないかと、マルセル

は不気味に思う。

それ以上見てはいけないのではないかと、根拠のない自制を覚え、御者台の彼は再び前を向く。

「マルセル」

「ひやいつ！？ あ……いや、何だ？」

まるで萎縮してしまっている様子のマルセルに、ハンスは密かに笑いをかみ殺した。アクセルは相変わらず虚ろな目のまま、唇のみを動かす。

「ぐどいけど、全速力だ。全速力で、ラヴィス子爵領、ゼルナの街へ向かってくれ」

「あ、ああ……」

パシイッヒ、馬の背に鞭が弾ける音が響いた。甲高い嘶きと共に、馬車は速度を増す。

「……」

アクセルはそっと、瞼を閉じる。

(ゼルナの街は栄えてはいけない……か)

脳裏に蘇る、マザリー二枢機卿の言葉。

時間が惜しい。風竜を借りることが出来なかつたのも痛い。

(……大丈夫だ。ろくな準備も無かつたのに、ボーフォール伯爵の暗殺に成功。ほぼ理想通りに、マザリー二枢機卿に恩も売れた。今、俺は幸運だ。行動は全て、プラスの方向へと続いている)

アクセルは目を閉じたまま、天を仰ぎ、神やそれに近い、あらゆるものに祈つた。

（だから……俺の幸運よ。せめて、次の行動だけでいい。どうかそれまで、保つてくれ）

かつて、一人の司祭が言っていた。

年老いれば年老いるほど、人は欲望を捨てていく。愚かしく、下劣な心を少しずつ少しずつ削り取り、欲望に凝り固まつた衣を脱ぎ去つていく。そしていよいよ死が訪れる時、今までの中の人生できちんと、欲望からの決別を果たした人間は、あらゆるものから祝福を受け、永遠の安らぎに包まれながら、静かに眠りにつくことが出来る。生きるということは老いるということであり、そして老いるということは、欲望という苦しみとの決別の禊ぎなのだ。

「……つづ一のを、数年前、村に来た司祭が言つてたわけだ。その時は、よく意味がわからなかつたが、子供心に感心したぜ。あの、ブランツォーリ……だっけか。何で同じ司祭で、こんな差があるんだろうな？」

「ほお、いい話じゃねえか」

目を閉じ、うんうんと、クーヤはしきりに頷く。感心していると、いうよりは、面倒な話をされて適当に受け流していると言つべきだ。ナタンは、まるで自分が口喧しい母親にでもなつたような気がして、絨毯の上に座り込んだまま、少し俯いて溜息をついた。

ナタンに比べれば低背のクーヤだが、彼の顔は、座り込んだナタンより更に低い位置にあつた。そして、床と直角の方向を向いている。ナタンと同じく、絨毯の上に平べったく座るマノンの太腿に頭を乗せ、彼女が口元へ運んでくれるブドウの玉を悠々と待ちながら、

クーヤは実に不遜な態度を崩さなかつた。

「そして爺さん。もう十分生きただろうに、あんたは何で、そんな欲まみれなんだ?」

「……ンフフフフ

「あ、こら、もう。ボスもいるのに

「聞けよ

マノンの部屋だつた。ギャエルは現在、密の相手をしている。クーヤは顔の皺を一層深くして、好色な笑みを浮かべつつ、マノンのスリットから掌を差し込み、スカートの中に侵入させ、直接に太腿を撫でた。一応は拒むマノンだったが、その反応は茶番そのものだ。

あくまで仮の決定だが、クーヤは相談役という肩書きを得ていた。とはいへ、特に何かをするでもなく、主にギャエルとマノンの二人とイチャつづか、酒を飲んでいるくらい。

ナタンはちらりと、マノンを盗み見た。ギャエルもマノンも、一人とも仕事で手は抜いていないそうだ。寧ろ、客からの評判は前以上。一人でクーヤを取り合つなどといふことも無い。

(取りあえず、得体の知れない爺さんではあるな)

何の答えにもなつてはいけないが、ナタンはそう結論付けた。そのよつにして疑問を打ち切ると、ある意味で、最も好奇心を促される疑問が再浮上する。何となく、それを聞くのは早すぎる気がした。しかしナタンは、ぎこちない動作を滑らかにしようとするかのように、軽くワインで口を濡らせると、ちろりと舌先で唇を濡らし、珍りのよつつな声を漏らした。

「爺さん。あんたとベルは、初対面だよな？」

「うん？ おお、そうじゃが」

「ベルは何で……」

そう言いかけて、どのように尋ねるのか、それが全く意識の外であつたことに気付く。ナタンは再び唸つた。

クーヤは「さう」と寝返りを打ち、マノンの柔らかな太腿から頭を離すと、胡座をかけて座り込んだ。マノンがそつと、彼の慎ましくも頼もしい肩に両手を乗せ、もたれるように頭を預ける。クーヤが唇を開いた。

「ワシは、ずっと遠いところで生まれた。風竜ですら辿り着けないよつな、遠い遠い場所……そこが、故郷だった。辿り着けるはずも無いこの地に辿り着き、これも運命かと、この地で生きる決心をした」

まるで赤の他人の経験でも説明するかのように、老人は淡々と言ふ。聞かれたから、そして黙つてている理由も無いので答えている、ただそれだけのようだったが、ナタンの脳裏に、あの時の老人の姿がちらつく。平然とした語り口調は、裏を返せばこの話題が、この得体の知れない老人にとつて、心を揺り動かさずにはいられない類のものであるからだと、そう考えてみれば、ずっと喉の通りが良かつた。

「生きよう、生きようと頑張った。とにかく頑張ったさ、なあ。受け入れて欲しい、信じて貰いたい、見捨てないで欲しい……。言つてしまえば、無理をしどつた。周りに気に入られたくて、いい子であろうとしていた。しかし、無理は無理。いつまでも、重ねられるもんじゃないわい。……孫がワシに言つた最後の言葉、教えてやる。『おっ、おじいさん！ 何を考へてるんですか！ そんな、孫

みたいな年の娘を相手に！』

裏声を使って、戯けたように言つクーヤだったが、ナタンは顔を引きつらせて思わず顎を引く。反対に、マノンは動じることもなく、クーヤの背中にしなだれかかったまま目を閉じ、呼吸の動きだけを見ていた。

「まあそれが、ワシの本性つてヤツじやうな。何年か前に、村でワシの葬式が行われてからは、自由気ままの渡り鳥よ」

「……そうか」

ナタンはただ一言、クーヤにそれだけ言つと、マノンに別れを告げて立ち上がる。

満足したわけではないし、納得のいく答えを得られたわけでもない。ただ、クーヤという人物の本質に、ほんの少しだけ、指先程度は触れることができた気がした。そして、それ以上の追求は無理であることも悟つた。

マノンの部屋を出る。姿が映るほどピカピカに磨き上げられた木造の床を、斜めに渡り、窓から中庭を覗き込んだ。灯りによつて微かに照らし出された、木陰の岩が見える。いつも、女装したアクセルがヴァイオリンを奏でている場所だ。勿論、日が暮れてからここで演奏することは無いし、そして現在、アクセルはここにはない。しかしそれでも、ナタンはある筈の無いその姿を探そうとした。

「……」

ナタンは踵を返し、一階へと下りる。事務棟へ続く渡り廊下を歩いた時、びゅうっと、驚くほど涼しい風に包まれた。夏だというのに、鳥肌が立つ。感じたのは、悪寒とも呼べるようなものだった。

「……っ」

そして誰もいない筈の中庭から、その風に驚く、小さな声が聞こえる。

彼はハツとして、中庭の石畳を踏み進んだ。アクセルの特等席とも言える、あの岩から、確かにその声は聞こえたのだ。四階からではわからなかつたが、アクセルよりも大きな人影があることに気付く。

誰かいるのか、そう声を掛けようとしたところで、あちらもこちらに気付いたらしく、人影は口を開いた。

「ボス、こんばんは」

「リリースか」

岩から立ち上がり、歩み寄ってきた人影は、部屋着のままのリリースだった。ちょうど雲に隠れていた双月が蘇り、淡い月光で彼女を包む。月下に醜女無しと言うが、彼女の場合も逆効果になる事はない。金色の髪が、砂金のような光を放っていた。

今夜、彼女に客はない。

「降りませんでしたね、雨」

「ああ……そうだな」

絵になる、というのはこいつのことなのかと、ナタンは漠然とそう思つた。空を眺める仕草一つとっても、男の視線を離さない魅力がある。ナタンは意識して、彼女と同じ空に顔を上げた。千切られた雲が再び双月を隠し、リリースの輝きも潜まる。

「……まあ、あれだ」

ナタンは人差し指を鉤のよじに曲げ、こめかみを搔くと、再び彼女に目を向けた。

「いくら夏だからって、さつきみたいな風が吹いたりもするんだ。夜の散歩もほどほどにな」

「あの娘達の様子はどうです？」

「え？」

唐突な質問に、彼は目を見開いて首を傾げる。一秒ほど間抜けな体勢のままだつたが、リリースが言うのが誰なのかに思い至つた。

「……何でだらうな」

ナタンは、今度は頭を搔きむしる。

「なるべく秘密に、悟られないよじにしてた筈なのに、やっぱり不安そうだ。考えてみれば、こんなに長い間、ベルがあいつらに会わなかつたのは二度目。前の時は、大火傷を負つた。やっぱ、漠然とした不安はあるんだろう。……アニエスは、前にも増して剣の修練に励んでる。マチルダも、しつかりしたもんさ。……問題は、ミシェルとテファ……いや、テファはマチルダがフォローしてるし……やっぱ、ミシェルだな。けど、ミシェルだつて大したもんだぜ？」少しでも大人の負担を減らさうとしてくれてる

「……みんない娘ね」

「ああ、その通りだ。いい娘たちだ」

そう言つて笑うナタンの顔を、リリースはじつと見つめた。

彼はこうやって、自分が褒められたわけでも無いのに、親しい人間が評価されれば、まるで自分のことであるかのように喜ぶことが

出来る。その喜びは、或いは本人以上かも知れない。

「……な、何だ？」

リリースの視線に気付き、ナタンはたじろぎ、後退るように背を反らす。

「何でもありません。それじゃ、ボス。私はもう戻ります」

「おお、風邪ひくなよ。おやすみ」

リリースと別れて後、ナタンは再び渡り廊下に戻り、事務棟へと上がった。事務室に戻れば、書類を広げ、それを眺めるバルシャがいる。仮眠程度でしか休んでいないらしく、普段ただでさえ鋭い視線が、一層鋭利になっていた。入ってきたナタンにも気付いていない。ナタンは水差しを持ち上げ、コップに注ぐと、それを恭しくバルシャに差し出した。

「どうぞ」

「おう」

部下が女中が持つてきたとでも思ったのか、バルシャはぞんざいに受け取ると、一息に飲み干し、コップを突き返した。しかしようやく違和感を感じたらしく、首を回してから、目を丸くする。

「あ、ボス。失礼しました」

「いや。ご苦労様だ」

ナタンはひらひらと手を振つて応じると、バルシャの向かいのソファに腰を落とした。その心地よい反発に押し出されるようにして、天井を見上げた口から、年寄り臭い溜息が溢れ出す。

「お疲れ様です」

「お前ほどじやねえよ。……そりそろ、ベルは会えた頃か？ そ

の……枢機卿に」

「マザリー二枢機卿ですね」

「ああ。有能なんだろ？」

「ええ」

書類のいくつかにサインしたバルシャは、それらを束ねてテープルの上で整えると、端に押しあつた。しかし彼の手は、またすぐに別の書類に伸びる。

「通常、各国に派遣された枢機卿の給料は、ロマリアが負担するのですが……それとは別に、マザリー二枢機卿はトリスティンからも給金を得ています。あまり表に出てくる名前ではありませんが、国王か、或いは国王に近い人間にとつては、手放し難い人材のようですね」

「そんなお偉いさんに、渡りをつける……ねえ」

「レオニー子爵が知り合いだそうですから、面会は容易でしょう。問題は、協力を得られるかどうかですが……。しかし独いとしては、適當です。能力、人脈、権力、どれも申し分ない。ブランシオーリ司祭の一件すら揉み消せる人物です」

「なるほどなあ、それでか」

枢機卿、という位階はナタンにとって馴染みのないもので、何となくブリミル教の偉い人間、その程度の認識しか無い。

「あちらはベルさんに任せてしましょう。ラヴィス子爵の帰還まで、最短であと五日しかありません。」あちらはこちで、手は抜けません」

「今、うちの状況は？」

「イシュタルの内側の問題は、フラヴィ、そして私達が引き受けます。スルトには、ラヴィス子爵の帰り道である街道を遡つて貰っています」

「何でだ？」

「イシュタルの館の利益の半分以上は……いえ、組織の収入の半分以上は、ラヴィス子爵領の外からの客が占めています。つまり、最大の街道である北東を封鎖されれば、組織の力は大きく減退することに……」

「しかしよ、封鎖を力尽くで破壊なんて出来ねえだろ？　いや、あいつならやれるけど」

「あくまで、偵察のみです。北東街道の先には、クルコスの街があります。失業中の傭兵は安値で買い叩けるでしょうし、子爵が手勢を整えるのなら最適かと。あそこは、スルトの拠点でもありますから。そこで情報収集を」

「そうか……」

一通り聞き終えると、ナタンは再び天井を仰ぎ、そつと瞼を閉じた。

皆が皆、それぞれの役割を得て、この館を守るために動いている。ナタンもいつも通り、縄張りにある店のトラブルの相談に乗ったり、娼婦達の慰労に回つたりと、暇のない生活を送つていたが、それでも皆には及ばない気がした。自分一人だけ、いつも通りの仕事をしていて許されるのかと。

「……しつかり休んで下さいね」

「ん？」

そのナタンの心を見透かしたように、バルシャは書類から目を離さず、そう忠告した。

「ラヴィス子爵も、いきなり攻撃を仕掛けることは無いでしょう。その前に、何らかのコンタクトを取つて来る筈です。その時、あなたは我々の顔として、子爵と相対しなければなりません」

「……責任重大だな」

「ええ。その通りです」

下手に慰めることは無かつた。ふにやりとだらしない笑い顔を作るナタンだが、彼こそが、このイシュタルの館の……そして、東地区を非合法にまとめる組織の体現者なのだ。

「どうか、泰然と構えていてください。ボスとは本来、そうするものです」

「わかつたよ」

ナタンは軽く右手を挙げて見せる。その右手は僅かに震えていたが、バルシャは気付かないふりをした。

事務室を出て、伸びをした。出る時にちらりと時間を確認したが、そろそろ日付が変わる。しかしどつも、何故か眠る気にもなれず、ナタンは事務棟の階段に向かつた。

「ん？」
「あ」

階段を二階まで上つたところで、フラヴィと鉢合させした。彼女の朝は遅く、夜は長い。皆、街は眠りにつく時間だとこの辺、フラヴィはまるでイシュタルの館そのものであるかのように、イシュタルの館と同じ時間で生活していた。

元々、娼婦にしては色気の少ない服装だったのは、身体に混じる

吸血鬼の本能がそうさせていたらしい。そして完全な裏方となつた今では、色氣のなさに更に拍車がかかっていた。

「……寝かしつけてくれてたのか？」

「まあ、ね」

歯切れ悪く返事をすると、フラヴィイは片手に持つた絵本を振った。アクセルは毎晩のように、ティファニアの為に絵本を読んでやつてゐるそうだが、フラヴィイはその代役に選ばれたらしい。

「ありがとな」

多忙な筈の彼女が、わざわざティファニアでも呼べるような位置にいたことは、つまり気に掛けていたということなのだろう。ナタンは微笑むと、若干照れくさそうに礼を言つた。

「いや、礼を言われるほどでも無いんだけどねえ……」「ん？」

「これ、ベルのヤツが書いたんだけど……どうも、大人が読み聞かせるのを前提にして……。文字を覚えたばかりのあたしじや、ちょっとキツイんだよ。マチルダやミシェルに手伝つて貰つて、ようやくつて感じ」

「まあ、あの二人は元貴族だからな。そりや、俺らみたいな下々の者とは、下地が違うぞ」

ナタンは冗談交じりに言つ。フラヴィイも釣られたように笑みを零したが、ふと、押し黙つた。

どうした、と問い合わせる代わりに、ナタンは待つ。

「……文字を……覚えたんだよ、お陰様でさ」

フラヴィイはふと、窓の外に顔を向けた。娼館の灯火を眺めている
よつではあるが、本当は、ナタンと顔を合わせない為だった。

「あたしだけじゃない、他の娼婦も……知ってる娘が、知らない
娘に教えてやつて……簡単な暗算まで……」

「ああ」

「だからさ、娼婦がダメだつたとしても、他にこいつらでも……見
つけよつと思えば、働き口くらこ、見つけられるんだ」

「……ああ」

「元は、この街で野良猫の生活だつたんだ。少しマシになつて、
あるべき場所に収まるだけや。……一応、言つとくよ」

「……」

フラヴィイは真つ直ぐ、ナタンの瞳を見つめた。

「」のイシュタルの館が無くなつても、誰も死にはしないんだ

それは宣言であり、宣告であり……やはり、忠告であった。

ナタンは驚いたよつて、目を見開く。そして階段を数歩ほど駆け
下りると、手摺りから身を乗り出して一階に向けて怒鳴つた。

「おこつ、バルシャツ、大変だ！ フラヴィイが、俺に氣を遣つた
ぞ！」

「あ……真面目に聞けつ」

フラヴィイも跡を追つよつて駆け下りつて、手摺りによじ登るナタ
ンの尻を蹴飛ばした。彼女にとつては相当に手加減したものだつた
が、その衝撃は、ずしんと身体の奥にまで響く。

苦笑いしながらナタンは階段に着地し、尻をたする。そして大き

く、腹の底から溜息のよつに息を吐か出すと、軽く顔を傾け、フライの方を向いた。

「でもよ……気遣いは事実だろ?」

「…………」

「心配すんな、大丈夫だよ。命が危なくなれば、さつさと逃げ出します」

「別に、あんたの命を心配してるわけじゃ…………」

「ツンデレ?」

「つん……え? 何だつて?」

「ベルから教わった。東方じゃこんな時、そつまつのが礼儀らしく

い

「そうなのかい?」

「そうなんだとさ」

「ふうん」

そこで、二人揃つて言葉が途切れる。

そうやつて静寂が訪れると、微かに、娼館から賑やかな声が聞こえてきた。酔つた客の笑い声、何かを離し立てる娼婦達の、息の合つたかけ声、そして音楽。

「いつまで……続くんだろうね」

フライはそつまつと、ナタンとすれ違い、階下へと降りていく。ナタンは再び手摺りから身を乗り出し、彼女の白銀の後ろ髪に向かって、囁くような声を落とした。

「いつまでも、だる」

その言葉を鼻で笑う代わりに、首を傾げトントンと、フライは

絵本の角で肩を叩いた。

再び一階に戻り、廊下を歩く。もう寝ているかも知れない子ども達を起こさないよう、極力足音を殺し、ナタンは滑るような足取りで、散歩を再開した。

そして、角を曲がる時。ハツとして息を呑み、つま先立ちになり、背を反らして強制的に停止する。

「……」

まるで潜むようにして、俯き、壁を片手で押すように立つアーネスがいた。もう片方の手には、木剣を握っている。

ナタンも暫く無言で、アーネスの頭頂部を見下ろしていたが、やがて、その彼女の頭から、一筋の……蜘蛛の糸のようなものが垂れ下がっているのに気付く。粘性を持つそれは、地獄の囚人を助けるかのよつこ、真っ直ぐにトヘトヘと伸びていった。

「……おい」

「ふひゃえふあつ！？」

寝起きの第一声は、聞いたこともない音だった。

顔を上げたアーネスは、顎を濡らす唾液を袖で拭い去ると、瞬きしながら左右を見回し、すぐにナタンを見上げる。

「あ……何だ、ナタン兄か」

「何してんだ、こんな所で。子どもはもう寝る」

「見回りだよ」

寝惚け眼のまま、アーネスは胸を張った。ナタンはちらりと、彼女が片手に持つ木剣に目をやりながら、呆れたようになにか呟き出す。

「その、まあ、あれだ。とにかく、そろそろ寝る。朝飯に間に合
わなくとも知らんぞ」

「……そういうわけにもいかないさ」

「何でだ？」

「皆が頑張っている」

大人達の間の雰囲気から、子どもは子どもなりに、何か不吉な予
感を感じているのだろう。目を擦り、欠伸をかみ殺し、アニエスは
軽く頬を叩いた。

「ベル君だつて、ただの旅行じゃないんだろう？　ここが一大事
の時に、一人だけ遊びに行けるような子どもじやない。だから私が、
ベル君の分まで、ここを守る」

「……生意氣言つてんじやねえよ」

「この少女は時折、信じられない程に勘が良い。一丁前に女として
の第六感を備えているアニエスに密かに驚きつつ、ナタンは彼女の
頭を少し乱暴に撫でた。

「お前が今守るのは、イシュタルの館じやない。マチルダ、テフ
ア、それにミシェルの三人だ」

「だから、ここを守る」ことがひいてはあの三人を……」

「焦るな」

頭を撫でる手を止め、ぽんぽんと、小さな肩を叩く。

「ベルの代役つてんなら、ベルが大切にしているものを守れ。イ
シュタルの館を守るのは、大人たちの仕事だ。ベルは、全部を自分
一人でしようとしたか？」

「…………」

「それに、あんまり心配すんな。今の問題が失敗しても、死ぬわけじゃない。ただ、ちょっと、他の街にお引っ越しするだけだ。そりや、今までのようになれば、ベルとは会えなくなるが、……それも、永久つてわけじゃない。さ、いいから寝ろ寝ろ。どんな屈強な戦士だって、眠気には勝てねえさ。よく寝て、身体を休めて、飯食つて……今より強くなれ」

「わかった……。いつか、立つたまま眠れるようになるぞ、私は」「ううーん、そうか。一体何をわかったのかさっぱりだが……楽しみにしてるぜ」

ナタンがアニエスの背を押し出すと、彼女は素直に、ベッドへと向かった。その姿が寝室に消えるまで見送り、ナタンは首を何度も傾け、最後に一つ欠伸をする。

(眠気を移されたか?)

一度欠伸が出てしまえば、一度、三度と出た。そろそろ休むべきだと判断し、ナタンは一階へ下りる。雨は降らなかつたが、曇り空の為か、心地よく涼しい眠りを得られそうだ。

そう思いながら自室に戻ったナタンは、思わず叫びそうになつた。

「……夜分遅く、しかも無断での入室、申し訳ありません」

丁寧に謝罪するのは、ローランだった。

街の名士である彼が、大手を振つて娼館に出入りするわけにはいかない。よつて来訪の時は、今回のようにお忍びであることが常であつたが、窓から侵入というのは初めてだつた。どうやら、バルシヤにすら知られていないらしい。

「あんまり、驚かせねえでくれ……変な汗かいちまつた

ナタンが掌で顔を仰ぎながら言つと、ローランは再び謝罪した。

「で……何か飲むか？ 確かワインが」

「いえ、すぐにお暇します。……単刀直入にお聞きします。この館、置むおつもりは？」

「ねえなあ」

ナタン自身が驚くほどあつさりと、即答することが出来た。ローランの意見を、ナタンも、考えなかつたわけではない。このままイシュタルの館に固執するあまり、犠牲者を出しては元も子もないのではないかと。そうなるくらいなら、綺麗さっぱりと全てを終わらせ、子爵に無条件降伏を行うべきではないかと。

しかし……最終的な結論は、ほんの数分前に出ていた。

「やつぱ……それは、出来ねえんだ。確かにそれなら、一滴の血も流れねえだろう。けど、それでも……俺は……最後まで、ここを捨てることは出来ない」

「そうですか……。よくわかりました。では、失礼致します」

「早えなー？」

思わず突つ込みを入れたナタンに、ローランはそつと、微笑みを見せる。その笑みに、覚えがあつた。あの時、アクセルが貴族の長男だと初めて知つた後、昼の酒場で、三人で宣誓の杯を交わした時、あの時と同じ顔だった。

「あなたにそこまでの覚悟があるならば、私も、すべき事があるのです」

「何だよ、そりゃ」

「秘密です」

微笑んだまま言つローランに、ナタンは拗ねたように頭をかく。

「つたく……クーヤといいアンタといい、老人は秘密ばつかだな」

「クーヤ……？」

「いや、何でもねえ、こつちの話だ。まあともかく、気を付けて帰つてくれよ」

「ええ……。よい夢を」

最後にそう言い残すと、ローランは窓を飛び越え、曇り空の闇夜に融けた。

取り出しけたワインを元の棚に戻し、ナタンは窓の枠を掴み、空を見上げる。真っ黒い闇に、ほつりほつりと、イシュタルの館の灯火が揺らいでいた。

「…………ふう」

バルシャは身体を倒し、ソファの上に寝そべると、目を閉じて目頭を抓む。瞼の奥から、じいんと、反響のよつなものが伝わってきた。

どうこうことだ、と……何度も考へても、答えが出ない。

壁際の時計の、振り子の規則正しい音。微かに聞こえる、客と娼婦の喧騒。目を閉じていれば、実に様々な音が聞こえてきた。

（娼館は、街の風紀を乱す？ 馬鹿馬鹿しい。そんな理由、どう考へてもあり得ない。イシュタルの館は、あらゆる面で……目に見える成果も、見えない成果も、ちゃんと出しているんだ。その利益を見れば、娼館といつ汚点など、十分に懷に納められる筈だ。では何故、イシュタルの館を潰そうとする？ 清貧でも気取るのか？ まるで……。まるで……？ そうだ、まるで……このゼルナの街が変化することを嫌うような……）

ドアが開き、ハツとして、バルシャは跳ね起きた。

「……スルトか」

旅装のままのスルトが、ドアの前に立つてゐる。報告を聞こうとソファから足を下ろし、テーブルの上の書類をまとめ始めたところで、バルシャは異変に気付いた。スルトの表情が、固い。

「どうした、スルト。何があつた」

彼は固い表情を崩さず、じつと瞼を閉じていた。しかし、やがて光を失つた目を開くと、次いでその鉛のように重々しい口を開く。

「悪い知らせだ。北東の街道だが、既に塞がれている。偶然の災害に見せかけてはいるが、魔法によるものだ」

「……そつか」

予想の範囲内だった。客の流入が制限されたのは、確かに痛い。しかし、蓄えが無いわけではない。それに、クルコスへの道を塞い

だことで、相手がクルコスへの逃亡を完全に阻止できると考えているなら、付け入る隙がある。もつともそれは、最悪の、逃亡の時の話だが。

対応しようと地図に向かうバルシャだが、未だスルトが立ち去って居ることに気が付いた。

「……その様子だと……」

組んだ腕にぎゅっと力を込め、バルシャはショックに備える。

「悪い知らせが……まだありそうだな

「ああ」

スルトが黙つてゐるのは、バルシャの為だった。彼に、今以上のショックを与えて良いのかと、そう考えている。そしてそれを察したからこそ、バルシャは一言、

「言え」

そう命じた。

スルトは一度溜息をつくと、また、重々しい口を開く。

「ラヴィス子爵だが……」

「そうだ、ラヴィス子爵……。いや、ちょっと待て。今、北東街道が塞がれたと言つたな」

薄い微睡みの中にあつたバルシャの脳が、急激に冷えていく。

「つまり……」

「ああ、そうだ。……ラヴィス子爵は、既に、このゼルナにいる

スルトがそう告げた途端、はつきりとした意識を保つていながら、バルシャはその場に崩れ落ちた。

「ふうむ

ハンスはだんだんと濃くなってきた鬚を指の腹で撫で、後ろを振り向いた。

「これは、メイジの仕業だな

ラヴィス子爵領の北東へと延びる街道は、ゼルナの街へと至る最短ルートでもある。

そしてその街道は、大量の土砂によって塞がれていた。両脇は山林であり、その間に切り込むようにして街道が続いている。その穴を塞ぐようにして聳える土砂は、明らかに人為的に運ばれてきたものだった。

既に馬車は捨て、アクセル、ハンス、マルセルの三人はそれぞれ騎乗している。ハンスは手綱を引いて馬首を巡らせるが、アクセルへと近づいた。

「それでどうする？ お坊ちゃん。もう夜は明けるとはい、こんな深い森を突つかるんだとすれば、危険は変わらない。隣のレオニー子爵領の傭兵ギルドが壊滅したそうだが、山賊化した傭兵も、勿論ここにまで流れきっているだろう

「突つ切る

少年の即答に、ハンスは小気味良さげに肩を震わせる。

「やめといった方がいいと思ひぜえ」

マルセルは手綱を離し、両手を組み合わせて大きく伸びをしてから、憚ることもなく大あくびをして見せた。トリスター・アから二ここまで、ほとんど休み無く馬を走らせ、流石に疲労が溜まっている。マルセルを睨むような目で振り向くアクセルだったが、その目もまた、真っ赤に充血していた。髪は乱れ、服や顔には乾いた泥がこびりついている。

マルセルは再び大口を開け、涙を滲ませながらあくびをした。そしてついでとばかりに軽く尻を鞍から浮かせ、太鼓のような音と共に放屁する。

「俺ら“疾風怒濤”は、攻撃しかしねえ。お前の安全まで保障は出来ねえよ。盗賊を退治してこいつてんなら話は別だが、お前を盗賊から守りながら山越えなんて、無理無理無理……」

「マルセルっ！」

ハンスが怒鳴ったのは、勿論、弟分の態度の悪さ故では無い。その怒鳴り声がマルセルの脳内で処理された時には既に、矢は、彼の騎乗する馬の首に突き立っていた。

苦しげな嘶きと共に馬が倒れ、マルセルは転げ落ちる。ハンスとアクセルは咄嗟に頭を下げ、二人も転げ落ちるようにして馬の腹に身を隠したが、彼等の馬にも次々と矢が突き刺さり、一頭はあらぬ方向へ走り出し、もう一頭は地面に座り込んでしまった。

そして間髪入れず、土砂の上から、森の中から、何人もの人影が姿を見せる。その時に聞こえてきた怒声によつて初めて、包囲されていることが判明した。

「待ち伏せかっ！」

土砂の上から滑り落ちてくる傭兵の顔面に、軽くジャブのようこ『ウインドブレイク』を放ちながら叫ぶハンスだが、その顔にさしたる狼狽は無かつた。土砂がメイジによるものだと知った時、ほとんど反射的に、伏兵という言葉が頭の片隅に生まれていた。

「ああっ、畜生っ、畜生がっ」

襲撃者たちの鬨の声を跳ね返そうとするかのように、マルセルの怒りの叫びが走り抜ける。深海のような誰彼の中、人の姿はただ影としてしか見えず、アクセルとハンスはその叫びの源へと走り寄つた。

背中合わせになり、円陣を組んだときには既に、三人とも杖を構えている。襲撃者達は全方位から、包囲するように近づいていた。

「だから……俺らは、守りは苦手だつてのに」

マルセルが吐き捨てた。

ハンスは弟分の言葉に強い共感を覚えながら、『ストーム』の魔法で飛来した矢を逸らす。

アクセルは構えた杖を動かさずに、背中合わせの二人の名を呼んだ。

「ハンス、マルセル」

「何だ、泣き言か？」

「ここで解散する。集合場所は、ゼルナの街の東地区、イシュタルの館。聞けばすぐにわかる筈だ

「……はあ？」

驚愕ではない。何かの聞き間違いか、またはただの間違いだと、

不審に思つて聞き返す。しかしそれでも少年は、動搖したよつた素振りを見せなかつた。

「つまり、」ヒで一旦お別れつてことか？ ゼルナで落ち合つ？
「そうだ」

再び、上空から矢が襲いかかる。今度はアクセルが風で防いだ。

「成る程、お前を守らなくていいなら好都合」

ハンスは軽く笑みを漏らしながら、しかし冷徹な声で告げる。

「だがな、俺たちが素直に従つと思つか？ わざわざ山越えせずとも、ヒで帰れば、俺たちは丸儲けなわけだが」

「のままゼルナに向かうために山越えを選ぶか、それとも反転して引き返すか。そのどちらが安全で容易かは、今更言つまでもなかつた。

そしてそのような未来を示して見せたのは、ハンスの優しさでも何でもない。“疾風怒濤”的一人は本氣で、その選択肢を考慮に入れていた。

「それは無いだろ？」「

相変わらず、アクセルは動搖を見せない。そのことが何となく、ハンスの癪に障つた。

“疾風怒濤”は、傭兵、ギルドに所属しない、フリー・ランスの傭兵なんだろう？ 保証人がいない“疾風怒濤”にとつて、前払いで金を渡されながらバツクレるのは自殺行為だ

「この場の全員の口を封じれば、残念ながら死人に口なしだが？」「そんな荒技をするくらいなら、素直に従つてくれ。それに、今更マザリー二極機卿を殺しに戻るつもりか？」

「……ふんっ」

「あーあー、もう、つげづく可愛げのねえガキだこと」

ハンスは鼻で笑い、マルセルはぼやくよつて天を仰いだ。

「生きてゼルナに辿り着けたら、イシュタルの館にいる、バルシヤかクーヤに従つてくれ」

「バルシヤにクーヤ、ね……」

「じゃあ……頼んだっ」

言つべき事を言つと、アクセルは駆け出す。その途端、周囲の襲撃者達にも変化があつた。

「いたぞっ、じつちだっ！」

誰かの野太い声が放たれる。駆け出したのは、アクセルのみ。ハンスもマルセルも動いてはいない。そして襲撃者の矛先は、真っ先に、一人になつた少年へと向けられた。

（知つていたのか、あのガキ……自分がターゲットだと）

ただ孤立した者から狙つたのではない。襲撃者たちが狙うのは、一番背の低い、あの少年だつた。風の魔法で土煙を巻き上げ、それに隠れながら森へと向かうアクセルの背を見送りながら、ハンスはそう結論付けた。

「で？　どうすんの、兄貴」

襲撃者達は粗方、アクセルを追つて行つてしまつた。残つた者も何人かいるが、いざれもやる氣は無いよりで、牽制するよりマジックアローを放つてくる。

逃げるなら逃げろ……そう告げられてはいるようだった。

「どうする……とは？」

「いやほら、結局あのガキにつくの？ それとも帰る？」

「あ、マルセル。気付いたか？」

「え、何を？」

質問の応酬に初めて答えたのは、ハンス。

「ここまではほぼ休みなしで馬を飛ばした。しかしあの小僧は、まだあれだけ動ける」

「……確かに」

「そこまでなら、ただの元気な子どもだ。だが、あいつの魔法の実力はラインクラスでありながら、トライアングルやスクウェアと遜色ない風読みが出来る。これはどういいう理屈だ？」

「いや……俺に聞かれても」

答えられる筈が無い質問をされ、困惑するマルセルだったが、兄貴分が出した結論がどちらかは、はつきりとしていた。

「俺は……あの小僧よりも強い、あの小僧に勝てるメイジは、山ほど知つてゐる。だが、マルセルよ。あいつと同じメイジは、一人として知らない。あの小僧を失うのは、大いなる風の、大いなる損失だ」

「……了解」

ハンスに続き、マルセルも杖を構え、精神力を高める。

「なあに、簡単だ」

ハンスは笑つた。

「あの小僧を追いかけるヤツらを追いかけ、後ろから始末すればいい。あの小僧は前から始末するだろう。それだけだ」

夜明けだった。東から覗き出た太陽が、周囲をオレンジに染め上げる。それと共に、ハンスの兇悪な笑みが露わとなつた。

そして“疾風怒濤”は一陣の風となり、森へと向かう。彼等を囲んでいた僅かばかりの傭兵達は、既に引き裂かれ、その屍を晒していた。

一人の男が、椅子に腰掛ける。

その椅子は、例えば国王が使者に謁見を許した時のような、例えば王女が肖像画を描かせる時に腰掛けるような、その類のものではない。アームチェアーだ。装飾も無く、デザインも古風。ただ、良質のライカ檜を使い、皮張りは水牛。座り心地の良い、無骨な威厳を感じさせる椅子だ。

その椅子に、一人の男が腰掛ける。その男の服装もまた、余計な

装飾など無い。色は黒か、灰色がいい。地味とも言えるような服だ。その男は足を組み合わせ、左拳を握り、左の肘掛けで頬杖をつき、身体もわずかに左に傾けている。右手は、そつと前に差し出されている。

そして、誰か……これは誰でもいい。例えば、部下でも。例えば、商人でも。その誰かは、跪き、その右手を受け入れ、忠誠を誓う。畏怖を示す。敬愛を伝える。椅子に腰掛けた男は、ただ、当たり前のようにその想いを受け取る。

自分はその光景を、その部屋の壁際……いや、窓際。もしくは、椅子の後ろから眺めている。

いつしかアクセルの頭には、マフィア映画の一場面そのものの、そんな光景が浮かんでいた。

決まらなかつたのは、椅子に腰掛ける男の顔。それは若きアル・パチーノであることも多かつたが、大抵の場合、靄がかかつたようにぼんやりとしていた。

試しに、鏡で見た自分の顔を当てはめてみたことがある。しかしそれは、あまりにもそぐわなかつた。一体どんな顔を、誰の顔を当てはめればいいのか、まるでジグソーパズルの残る一つのピースを探すように、アクセルはざつと考えていた。

（俺じゃ……駄目なんだ）

狭い木立の間、一人の傭兵が、剣を真っ直ぐに突き出してくる。狙いは、足。アクセルは軽く地面を蹴ると、その白刃に左足を置き、右足の爪先で傭兵の顎を蹴り上げた。

何本か、矢が襲いかかる。マントを掠め、たつた今蹴り上げた傭兵のこめかみに突き立つが、アクセルに血を流させるには至らなか

つた。

(矢は……まだあるのか。『フライ』は使わない方がいいな)

初めは遠くに、ぼんやりと感じる脅威。それは近づくにつれ、はつきりと輪郭が出来、そして肌を刺すように脅す。

(……頭か)

アクセルが足を曲げ、頭を下げる、木の幹に矢が刺さった。立つたままだつたなら、左耳から右耳へと綺麗に突き抜けていたかも知れない。

振り向きながら、矢が飛んで来た方向へ『マジックアロー』を四発放ち牽制、そして再び森の奥へと走り出した。

(“椅子に腰掛ける男の顔”は……もう、換えがきかないんだ)

空想の中の男の顔に、初めてナタンを当てはめてみた時、あの時はまだ違和感がなさそうだけだった。しかしあの時以来、もう、他の誰かの顔を試すことは無くなつた。ナタンの顔は急激になじんでいき、今ではあの空想の光景を思い浮かべるだけで、彼の顔が現れる。

本当に彼は、そこまでの男になるのか。それは分からぬ。しかし、既に変更が出来ないのは事実だ。“椅子に腰掛ける男”は、“椅子に腰掛けるナタン”になつてしまつていた。

(……死ぬなよ。死んでくれるな、ナタン。お前が、必要なんだ)

ひゅひゅんつ

一振りの剣が、風を縫う。襲いかかる一筋の白刃は、メイスによつて甲高い音と共に弾かれた。

「ふんつ」

弾かれた勢いを利用して、身体を回し腰を捻る。背を見せて攻撃を誘い、そしてナタンは剣を寝かせて並べると、スルトの首と腰を狙い、叩き付けた。しかしスルトは誘いに乗らず、膝を曲げて上の刃をかわし、メイスを立てて下の刃を防ぐ。甲高い音だつた。

ナタンの脳裏に、何度も聞いた、女の悲痛な悲鳴が蘇る。続いて、それを聞くたびに沸き起る不快感を連想する。そしてその隙を見破られ、彼が気付いた時には既に、スルトは肩から突っ込んできた。

「つ……！」

身長も体重も、スルトの方が一段上。助走をつけた突撃ではなく、押し出すような体当たりだつたが、それでもナタンの身体は人形のように弾き飛ばされ、数メートル後方の杉の幹に衝突した。

「げほつ」

そのまま杉の根本に座り込み、咳き込む。スルトは暫く、未だ彼の両手から離れていない双剣を眺めていたが、やがてメイスを腰に

納めると、ナタンに近づいて右手を差し出した。

そして初めて、ナタンは剣の柄から指を解き、その手を掴んで引き起^ハして貰^ハう。

「……だよなあ。体当たりもあるよなあ、そりゃ」

引き起^ハせれながら、ナタンは感心したように、何度も頷いていた。スルトは呆れたように首を振る。

「常々思^ハうが、ナタン」

「ん？」

「お前は、自分の身体を函にし過ぎる。実戦では、相手は一人だとは限^{ラン}だぞ」

「うーん」

自覚があつたらしく、ナタンは自嘲するよ^ハうな曖昧な笑みを作ると、首の後ろを搔いた。

「駄目だ、どうしても、怪我したらベルに治してもらえばいい……そんな風に考えちまつて」

「いない人間を頼つてどうする。それに、あいつの治癒の魔法を一般だと思うな。俺から見ても、少々異常なレベルなのだ。まあこれは、治癒が苦手な俺の覇^ハ頃目かも知れんのだが……」

擦り傷どころではない、裂傷や骨折ですら、アクセルは瞬く間に治してしまつ。その腕前は見事なものだが、こ^ハうやって周囲の人間に、怪我というものをただの痛みだと錯覚させてしまつのは、副作用と呼んで差し支えないだろ^ハう。

ナタンは一振りの剣を鞘に納めると、スルトの言葉に応えないま

ま、軽く柄頭を掌で払つた。

太陽は出でていない。どんよりと、緩やかに滴り落ちてきそうな程に重厚な黒雲が、青空を満遍なく塗り潰していた。夏とは思えないくらいに肌寒い。

「……一雨くるな」

ナタンに続いて事務棟に入る直前、スルトは独り言のように漏らした。

地下の風呂で汗を流した後、ナタンは自室へ向かった。待つていたフラヴィイが、無言のまま鏡台を指し示す。貴族の婦人が使うような、上等な化粧台で、何故アクセルがこれをナタンの部屋に備えたのか、理由を聞いてみたことがある。その時アクセルは、見た目を気にしろと、そんな風な事を言つていた。

今までほとんど使わなかつた椅子を引き、鏡の前に腰を下ろす。フラヴィイは櫛を手にすると、ナタンの髪を梳いた。

「アンタ、結構くせつ毛なのに、櫛の通りはいいね」

「そうか？ 初めて言われたな、そんな事」

他愛もない会話。それを、どこか名残惜しそうに交えながら、フラヴィイはナタンの髪を、丁寧な手つきで梳かし、少量の香油を染み込ませる。肩まで伸びた髪が、彼女の手によつて軽く纏められ、後頭部で結わっていくのを鏡越しに眺めつつ、ナタンは人差し指でさつと眉を撫でた。

「よつし、出来た、漢前つ」

満足のいく出来だつたらしく、フラヴィイは掌でバンッとナタンの

背を叩き、彼を立ち上がらせる。

「んじゃ、あたしはこれで」

「ああ、ありがと」

ナタンが言い終わる前に、フラヴィはドアを閉めていた。昨夜から、やけに肌寒い氣がする。今にも降り出しそうな雨雲に覆われた空と相俟つて、理由の有無に問わらず落ち込んでしまいそうな天氣だったが、ナタンは鼻歌と共にクローゼットを開いた。ほんの数ヶ月前までは想像も出来なかつた、着るものを見ばなくてはならないという贅沢。稽古の時の運動着から礼服まで、実際に様々の服がハンガーを枕に眠つていた。ナタンは浴衣を脱ぎ、肌着を装備すると、革製の黒ズボンを穿き、金のバックルのベルトを通す。そして選んだ上着もまた、黒だつた。その選択はほとんど無意識のものだつたが、言い換えれば、ナタンの内側の顕現でもあつた。

「……よし」

ナタンは上着のボタンを留め終え、ぽとりと呟く。そしてドアを開け、事務棟から娼館へと渡り、娼館の入り口で革靴を履くと、外に出た。

ざつ……と、靴が土をはね除ける音が重なる。

「行つてらつしゃいませ」

「「「行つてらつしゃいませええ」」

一人が言つた後、男達の、野太い声が重なつた。

イシュタルの館、及びその周辺の治安維持に従事する“貝殻”達、総勢43名。揃いの貝殻紋の羽織を纏う男達が、ナタンの道を作る

ように、一列に並んでいた。メイジと非メイジの混合、誰も彼もが荒事に長けた屈強な男達。その彼等が、身分としてはただの平民であるナタンの前で、一斉に頭を下げる。

「おひ

それに臆すでもなく、尊大に構えるのでもなく、ナタンは軽く右手を挙げた。

「んじゃあ……行つてくる。後はようしくな

返事をするために、再び、男達の野太い声が上がった。

ナタンは微笑むと、彼等の間を颯爽とした足取りで歩いていく。男達も無言のまま、彼を見送った。男達の列が途切れた頃、ナタンはふと立ち止まり、視線を上へと向ける。足下にはベニティ工の泉、そしてその視線の先には、イシュタルの像があつた。

アクセルが作ったイシュタルという名の女神像は、門ではなく、娼館の方を向いていた。アクセルは娼婦の守護神だと言つていたが、成る程確かに、客を迎えるためではなく、娼婦を見守るための女神なのだろう。彼女は今日も変わらず、イシュタルの館を見守つていた。

「……またな

そつと、ナタンは一言呴き、女神像から離れると、門に向かう。そこで更に、待ち受けている者がいた。その姿を認めた時、思わずナタンは立ち止まる。

「どうしたんだ、バルシャ」

ラヴィス子爵が予想を遙かに超える速度で帰還していたことに愕然とし、絶望感からか卒倒しかけたバルシャだったが、彼はまだ休もうとはしなかった。

バルシャはズボンに半袖のシャツという、普段着そのものの服装だったが、背には矢筒を背負い、左手に長刀を握っていた。

「……参りましょ」

彼は静かにそう告げると、背を翻し、歩き出す。ナタンも若干駆け足になると、バルシャの隣に並んだ。

一人揃つて、通りを歩く。イシュタルの館へと至るその道の両脇には、手頃な価格の娼館や、それに関連した店が建ち並んでいた。もはや東地区は、ほんの数ヶ月前のゴミ溜めとは無縁である。

「ラヴィス子爵に呼ばれてるのは、俺一人だぜ？」

「ええ、あなた一人です。武器も持たず、一人で来いと」

夜明け頃、イシュタルの館にはラヴィス子爵からの招待状が届けられた。そしてそれは、召喚状と呼んでも差し支えない。イシュタルの館の主人に、執政庁まで来るようになると、要約すればそれだけだった。

「まあ、あれだ。何か説教くらいされるだろ？ が、いきなり殺されるなんてことはねえだろ」

それが楽観過ぎる考え方とは、ナタン自身も感じていた。しかしそれでも彼は、身に寸鉄すら帯びてはいない。バルシャは何も言わなかつた。

この街の裏の顔役とはいえ、それはあくまで非合法な顔。ナタン

はあくまで、平民なのだ。そしてこの世の平民の命は、塵芥にも等しい。大義名分などあらうが無かるうが、貴族であるラヴィス子爵は何の躊躇も束縛もなく手を下せる。

寒氣すら感じさせるような曇り空の下、二人は無言のまま、通りを歩く。

「あら、イシュタルの田那さん」

風俗街を抜ける頃、そう言ってナタンを呼び止めたのは、一人の恰幅の良い女将だった。彼女が顔を出している扉の上には、“ヘビイチゴの館”の文字がある。更にその看板の上、二階の窓の手摺りから、化粧をした女が手を振っていた。

「よう、ジュリーの姐さん」

ナタンも挨拶を返し、二階の女にも手を振り返す。

「お散歩ですか？」

「まあ……そんなところだな。景気はどうだ？」

「お陰様で、と言いたいところですけどねえ。昨夜、予約を入れてくれてたお客様が全員来なかつたんですよ。まったく、こつちは折角料理や酒を奮発してたつてのに」

「そりや災難だったな。何でも、北東の街道が土砂崩れで通れないらっしゃい」

「あらつ、本当ですか！？」

田を丸くする女将に、ナタンは黙つて頷く。女将は顔に手を当て、曇り空を仰いだ。

「あーあー、何でこつた。それじゃウチは、商売上がつたりじやないか。ただでさえ領主様が不在で、ガキや小娘が街を仕切つてるつてのこ」

「おいおい、そういう事、大きな声で言つもんじゃねえよ」

「いいんですよ。どひせお貴族様なんかが、こんな時間に元気来るわけも無いですし」

吐き捨てるように言われたその言葉に、ナタンは密かに苦笑する。それを押し隠すかのように咳払いし、彼は再び微笑を浮かべて見せた。

「まあ、心配すんな。またウチのモノに、何とかするよ」
「まあ、いいんですか？ そんな事をしたつて、どひせお役

人も、礼も言わなければ金も払はしませんよ」

「アンタ等が商売あがつたりつてことは、ウチだつて商売あがつたりなんだ。黙つてたつて、道が通れるようになるわけでも無し」

「そりやそうですけどねえ」

女将は口を尖らせ、まだ何か愚痴を言いたげだったが、店の奥から彼女を呼ぶ声に応え、大声で返事をする。そしてナタンに別れを告げた後、彼の脇に佇むバルシャにも声を掛けた。

「ああそうだ。残りモンで悪いんだけどねえ、バルシャさん。料理や酒が余っちゃつて、大変なんだよ。折角だし、良ければ貰ってくれないかねえ？」

「いや……俺は……」

「おう、そうか。そんじゃ、有り難く頂いとくよ。ありがとな」

断らうとしたバルシャの前に割り込み、ナタンは満面の笑みで答

える。反対しようとしたバルシャだが、女将はやつと店の中に戻ってしまった。

「んじゃ、またな。ペラジー」

再び歩き出そうとしていたバルシャが振り向くと、ナタンが二階の女に手を振つてゐるところだつた。ペラジーと呼ばれた女も笑いながら手を振り返し、そのまま店の中へと戻つた。

バルシャにナタンが追いつき、二人はまた、石畳の上を歩き出した。そして数歩も歩かない内に、バルシャはやつと尋ねる。

「……お知り合いでですか？」

「あ、ジユリーの姐さんか？ ほらこの前、客を奪つた奪わないで喧嘩になりかけた店があつただろ。そん時の仲介で、助けてくれたんだ。いやあ、流石に娼館の女将だけの事はあるぜ。どっちが嘘ついてんのか、スペツと見抜いちまつて……。そうだ、知つてたか？ あの女将さん、昔、フランヴィとも喧嘩したことがあつて、そん時も……」

「あの、ペラジーという女は？」

「え、ああ、あの娘か。先月くらいだつたつけなあ。ウチの女の子が足りなくなつた時に、ジユリーの姐さんが助つ人に寄越してくれたんだ。客のじ機嫌を取るのは、はつきり言つて苦手なんだが、面白い話を山ほど知つてるんだ。場が白けそうになると、すかさず話題を変えたり……いやあ、見事なもんだった」

まるで自らの手柄話を語るかのよつて、ナタンは楽しげに話してみせる。

しかし、街の中央、噴水の広場まで差し掛かつたところで、ふとナタンは黙つた。怪訝そうにバルシャが横を向けば、彼は頭をかきながら、横目でバルシャの顔を見ている。

「……なんですか？」

そう尋ねられたナタンは、暫く言いにくそうにしていたが、やがて愛想笑いを浮かべながら口を開いた。

「いや、ひょっとして、こんな話はつまんなかったか？」

「……」

心底呆れたような顔で、バルシャはナタンを見つめる。その表情に、ナタンは思わず怯んでしまった。

「……ボスが、手下の顔色を窺つてどうするんですか」

「え、いや、だつて。むつつり黙つちましたから」

「寧ろ私は、この状況でそんな風に振る舞えるボスに、尊敬の念すら抱いていますよ」

「……なあ、バルシャ。ひょっとしてそれって、皮肉つてヤツか」

「ええ、そうです」

誤魔化そうとすらせずに、バルシャははつきりと言つてのける。

それに益々怯んだように、ナタンは顔を歪めて見せた。

「……あ、ほら」

バルシャの肩を叩き、ナタンはもう片方の手で噴水を示す。普段は人々がその縁に、休憩や待ち合わせの間に腰掛けているが、天気のせいか、今は人一人いなかった。そもそも、街を歩く人々からして少ない。

「……噴水ですね」

バルシャの無機質な感想に辟易しながら、ナタンは続けた。

「言つたつけ？」「こなんだよ。俺が、ベルと初めて会つたのは

「噴水の前で、ですか。運命的ですね」

「いや、実際は、あいつが俺を見つけたんだけどな」

ナタンの指がすっと動き、ローランのホテル“初月の館”を指示す。

「あそこ」、ローランのホテルだろ？ 俺、ベルには気付かず……
つて言うか知らずに、あの路地に入つてつたんだよ。それをベルが
追いかけたんだ」

「路地裏で、ベルさんと会つたので？」

「ああ、そうだ。俺がボコボコにされてるところに、ベルが助け

に来てくれたんだ」

「それはそれは」

「まあ、俺をボコボコにしたのはアーヴィスなんだけど」

ぶほうつ、と、革袋が破裂するような音が響いた。バルシャが俯き、右手で顔を覆つっている。

ナタンはその顔を覗き込もうとした。

「おい、今、吹き出しだら

「……つ……」

バルシャはそれには答えず、長弓を握つたままの左腕をぶんぶんと振つて、ナタンの顔を遠ざける。それでもしつこく迫つてくる彼に耐えきれなかつたのか、突然走り出した。

「あいつ、ちょっと、待てよ

慌ててナタンも後を追う。

走り出したと言つても、全力ではなく、駆け足程度だ。忽ち追いついたナタンがバルシャの襟を掴むが、彼は身を捩つて逃れる。するとナタンは更に、矢筒に手を伸ばす。それから再びバルシャが逃れているうちに、いつの間にか一人は、噴水広場から執政庁へ至る道を随分と進んでいた。

「……ふうつ

ようやく表情を落ち着けたのか、バルシャは顔を上げ、息を吐き出す。ナタンも軽く額の汗を拭いながら、彼の隣に並んだ。

「つつーか、バルシャ。笑い過ぎだろ。そんなに滑稽だったのか」「すみません。場面を想像したら、つい……。しかし、何でそんなことに？」

「……バルビエって商人に、家族を皆殺しにされてな。その敵討ちの途中だった」

バルシャは息をのんだ。

そのことを、知らなかつたわけではない。ローランからも聞かされていて。しかし元々家族がいなかつたバルシャにとって、その痛みを想像することは出来ても、理解することなど不可能だった。

育ての親の死すら、バルシャはあつさりと飲み込んでいた。怒りが湧かなかつたわけではないが、非合法な世界に生業を得た者の宿命だと、スムーズに納得することが出来た。

しかし今、実際、ナタン自身の口から告白され、そしてその彼の声が明らかに色氣を失っていたことに、自分が踏み込んではならぬい場所をバルシャははつきりと感じ取っていた。

「……それは……」

彼の記憶には、ナタンにかけるべき言葉が存在しない。言い淀むバルシャに、ナタンはフッと、短く笑つて見せた。

「まあ、気にすんな。俺自身、気にしてねえわけじゃねえが……最近、ようやくな。」うやつて、誰かに話せるくらになつたんだ

だ

いつの間にか、ナタンの歩みは早まつて、バルシャは少し慌てて、彼の後ろに続いた。

「……なあ、バルシャ」

「はい」

「やつさ、女将さんが料理を勧めてくれた時、断ろうとしたろ？」

「ああこいつの、やつぱ、素直に貰つとくべきだと想うぜ」

「……しかし、我々は、あのような見返りを求めるわけではありません。食うに困つているわけでも無いのです。それに、どこかで歯止めをかけなければ、いつかは、なし崩しに……」

「あれはな……一種の、税金みたいなもんだ」

「税金？」

バルシャは怪訝そうな顔をすると、更に歩みを早め、ナタンの隣に並ぶ。

「領主は下々から税金を吸い上げて、下々に対しても責任を持つんだろう？ それは、俺らも一緒にやねえか？ 普段から相談に乗つて、それで時々、ああやつて贈り物を貰う。俺はな、それは別に、間違つたことじや無いと思つ。……金を受け取れとは言わねえよ。けど、

ああやつて料理を貰つたり、飯屋のオヤジに昼飯を奢つてもうつたり、そういうのはあつていいと思うんだ。俺らが皆を助け、皆が俺らを助ける。それが本当に、受け入れられるつてことで……この街で、この街と生きていくつてことじゃねえかと思つ

「……何故、今、そんな話を？」

「ああ、何でだろな」

バルシャの詰問のような口調には、多分に危惧が含まれていた。しかし、その彼の心配を宥めるかのように、ナタンは軽い口調で空惚ける。

「死ぬつもりは……無いんですね」

「当たり前だ。俺だって、死にたいとは思つてない」

「……なら、いいです」

空の色がより一層、その暗さを増すかのように灰色雲を重ねた頃、二人は執政庁に辿り着いた。そして庁舎へと至る門の前に、守備兵たちが並んでいる。その先頭には、少女と呼んでも差し支えないよう年齢の、女メイジが立っていた。

「止まりなさい」

ナタンに杖を向け、リーズは言い放つ。

彼女は悪い女ではないと、アクセルはそう言つていた。そしてそれは、ナタンも同感である。

「召喚したのは、たつた一人の筈だが？」

努めて男のような口調を使うその姿が、どこかアニエスと重なつた。ナタンは背後のバルシャを振り返り、首を振つてみせる。

「この後、狩りにでも行こうかと話していましたね。勿論、コイツは連れて行きませんよ。私一人で、子爵様にお会いします」

ナタンのその言葉を保障するかのように、バルシャは何歩か後退つた。

「長弓」と矢筒を携えているのは問題だが、たった一人が弓を持つて暴れたところで、守備兵達との戦力差は歴然。注意しなければならないのは、どこからか執政庁に侵入しようとする伏兵であると判断し、リーズも特に追求はしなかった。

そして何より、リーズや守備兵たちは、ラヴィス子爵から勝手な真似はするなと釘を刺されている。事実、現在執政庁舎の内部には、子爵一人しかいなかつた。

「それでは……お邪魔します」

リーズのティテクトマジックにより、非武装であると認められた後、ナタンはそつと、右拳を上空に向けて突き出しながら、門の内側に消えていく。

バルシャはただ、その背を見つめていた。

ナタンにとつては意外なことに、たつた一人で執政庁の中へと通された。信用されたと取れば聞こえはいいが、何しろここへ来たのは一度だけ。案内も無しに歩き回れるほど記憶してはいない。

（前の時は、ローランが一緒だつたんだよなあ。……いや、つつーかこれ、どこ行けばいいんだ？）

一度リーズたちの所まで戻り、案内を請うのも間抜けな気がした。大声を張り上げてみようかと思った時、石造りの床に白墨で、矢印が描かれているのを見つけた。その先を目線で追うと、やはり次の矢印があり、それが奥へと続いている。

（何だこりや、横着だな……。こんな手の込んだ演出するくらいなら、案内を寄せせばいいのに）

いや、そもそも白墨で床に矢印など、子どもの道案内と変わりがない。無骨な石造りの床に描かれた白い矢印など、つっかりすれば見逃してしまいそうで、ナタンはふて腐れながらも、注意深くそれを辿つていった。

矢印は中庭の回廊をぐるりと回り、一階の、裏庭に面した部屋に出る。窓から見える裏庭は、訓練場らしい。更に奥には、焼け落ちた建物が見えた。恐らくあれが、かつての守備隊の宿舎なのだろう。そのまま訓練場へと下りることも出来たが、矢印は外へは向かず、大部屋の奥を示していた。ナタンはそつと、矢印以外の床を見回す。所々、斑点のように床が真新しくなつており、テーブルや椅子が置かれていたことがわかる。どうやら、この部屋は食堂か何かで、物は粗方仕舞い込んだのだろう。物置に入りきらなかつたのか、壁際にいくつか、粗末なテーブルと椅子が重ねられていた。

ナタンは立ち止まる。

矢印の終着点に、円が描かれている。そしてその床の円の内側に、無造作に一振りの剣が放置されていた。そこらの武器屋で手に入れられるような、数打ちのプロードソード。

拾え、ということなのだろう。しかしなタンは、躊躇つた。手にした途端、その辺りに隠れていた人間が姿を現し、あらぬ罪を着せてくるかも知れない。非武装でここまで入ったのなら、ただ拾えといつだけではなく、使えということでもありそうだった。

「剣を拾いなさい、ナタン」

突如として、名を呼ばれた。誰しもが、咄嗟に背後を振り向く状況。しかしナタンは、それをしなかった。

声が続く。

「あなたは、不運だ。何も知らなければ、何もしなければ……よりにもよつて、ゼルナの東地区に手を差し伸べたりしなければ……ただの、家族を皆殺しにされた哀れな男として、同情されながら生きていくことが出来た」

かつんと、靴音が響いた。ナタンは振り向かない。

「あなたは、不幸だ。アクセル・ベルトラン……あの魔性の少年に魅入られた、不幸な男だ。こうしてとうとう、取り返しの付かない場所へと至ってしまった。もつ、引き返すことなど出来ない。ここは墓場であり、墓穴だ。あなたはただ、そこに落ちるしかない」

「随分と……余裕な事言つてくれるな」

振り向かないまま、ナタンは返した。

「生き急ぐは、若者の特権。そしてその対価を払わせるのは、大人の責務」

「じゃあ、爺さん。死に急ぐアンタには、この俺が、その対価を払わせてやるうじやねえか」

ナタンの爪先が、剣の下に差し込まれ、そして彼の手へと柄を運ぶ。左手で鞘を握り、右手で柄を握り、一息に振り抜く。その弧を描く切つ先に導かれるようにして、ナタンはついに、背後の男を振り向いた。

「剣を拾え……そう言ったのはアンタだぜ。取り返しの付かないのは、アンタの方じやねえか？」

「ああ、何てことだ。イシュタルのナタンよ。あなたは、剣を抜いてしまった。それで自害すれば……まだ、救いがあつたろう」「元

ローランは右手を顔に乗せ、嘆くように天井を見上げた。彼の骨張った左手には、ナタンのそれと同じ、ブロードソードが握られている。

降り出した雨が、静かに、裏庭の土を染め上げていった。

第一十九話「喪死」

「……昨日降らな」と思つたら……」

フランシスは愛用のロッキングチェアから立ち上がり、窓の前に立ち、腕を組んで溜息をつく。空を覆う黒雲が、いつもより近くに降りて来ている気がした。大粒の雨が窓ガラスを叩き、館をノイズが包んでいる。

「あーあ、もう。どんなだけ降るんだよ」

降り出した頃、娼館を見回り窓の閉め忘れないかを確認した。そして自室に戻ってきた時にはもう、小雨は豪雨となり、親指ほどもありそうな雨粒を叩き付けていた。

昨日、昼の間に、ストールを用意していた。これ以上寒くなるなら、上着も必要かも知れないと思いつつ、フランシスは踵を返し、部屋の外へと出る。一応は彼女も娼婦なのだが、最近では裏方に回ることが多く、もう随分と客を取つていなかつた。その為、部屋は娼館一階の端にある。

ざあざあと、凄まじい大雨だった。雨樋によつて運ばれてきた水が、ポンプのよつて勢いよく噴き出している。

(……そういや、あいつら、傘持つてなかつたけど。流石にもう、役所には着いてるだろ?!)……)

肩に掛けたストールを少し引き上げ、事務棟に渡ると、フランシス

の前から一人がやつて来た。いや、正確には一人が歩き、もう一人は猫のよつに襟を持ち上げられている。

「こいつ、こいつ、いい加減に離せつ」

「出来ん相談だ」

じたばたと暴れるアニエスを片手で持ち上げているのは、大男のスルト。時折少女の踵が彼の脇腹や腹に当たつているが、びくともしない。

「……何してんだい、あんた等」

その光景に思わず頬を緩めながら、フラヴィイが尋ねた。彼女に気付いたアニエスは、憮然として大人しくなる。スルトが立ち止まり、それに答えた。

「こいつが、一人で脱け出そうとしていた」

「違う、加勢に行くだけだ」

「加勢？」

アニエスの反論にフラヴィイは首を傾げ、スルトは溜息混じりに首を振る。

「言つておくけどな、私にだつて、切り札くらいあるんだぞ」

「切り札つて？」

「それは言えない」

「……言えないのが切り札でもあるが、言つ価値の無い切り札もある。お前のは後者だろう」

「決めつけるなつ」

アニエスは自分をぶら下げるスルトの腕を掴み、乾物のよう吊されたままぐるりと振り向くと、もう片方の手で彼の顔に人差し指を突きつける。

「だいたいだな、スルト。前々から言いたかつたころがある」

「何だ？」

「いいか、私はな、この組織の初期メンバーなんだぞ。ベル君、ナタン兄、私の順だ！ バルシャですら、私の後輩なんだ！ にもかかわらず何だこの態度はっ、もっと先輩に敬意を払え！」

「では先輩、どうか大人しくお待ちを。昼飯の時間まで、お昼寝でもされてたら宜しいんじやないですか」

「おいこらつ、厄介払いか！ 待てつ」

また暴れ出したアニエスだが、相変わらずスルトの精神も肉体も動じはしない。そのまま猫の子を連行するかのように廊下を渡り、階段を上がつていった。

暫く一人を見送っていたフラヴィイは、ふと振り返ると、彼等とは逆に娼館の奥へと進む。客も雨が降らない内に全員朝帰りを行い、ただザアザアと、雨の音がやたらに響いていた。

「なあ、姉御お」

そしてそんな中、寝間着をだらしなく着崩したギャエルが、フラヴィイを見つけて話しかけてきた。口を開けて大あくびをする彼女のはだけた胸元に、いくつか口吸いの赤い跡が残っている。ボサボサの髪を搔きむしりながら、彼女は再びあくびをした。

「何だいあんた、だらしない」

「別にいいだろ？ 昨晩の客、もう、しつつこいくせに下手クソでさ……。『気持ちいい？ ねえ、気持ちいい？』とか聞くなつ

つーに「

「……成長したじゃないか。野良猫の頃のあなたない、密の胸ぐら掘んで罵つてただうつ」

「むう

からかうつよひにテリハラヴィに口をとがらせ、ギャエルはしゃがみ込む。下着すりつけおひず、股の付け根まで見えた。

「ああもうつ、そんな格好してんじやないよ。ナタンやバルシヤが見たら何で言つか

「まあまあ、一人とも出かけてるんだう?

ナタンとバルシヤの外出の理由を知るのは、娼婦の中ではリリーヌだけである。まさかイシュタルの館の存亡を賭けたものだと、そこまで気付ける者はいないだう。

それ以上反論する氣も起きず、フラヴィは軽く天井を見上げ、それから首を振った。

「あ、そうだ」

当初の目的を思い出したのか、ギャエルは跳ねるように立ち上がると、左右を見回す。

「クーヤなんだけどわあ、知らない?」

「あの爺さんがどうかしたのかい。確か昨日の夜は、マノンの部屋だつた筈だけど……」

「気分直しに一発ヤリたかつたんだけど、見つからないんだよ。マノンも、起きたらいなかつたつて言つしさあ

「……」

あの不敵な老人のどこに、女一人を相手にする精力があるのか……。それも疑問ではあるが、そもそもその正体からして得体が知れず、アクセルが保証人になっているのみ。あの異常に疑り深く、滅多に他人を信用しない少年が、初対面で心を許したとなれば、それは何よりの信頼にも思えるが、それにしても少々迂闊すぎるのではないかと思う。自分に吸血鬼の血が混じっていたように、あの老人も、実は純粹な人間ではなく亜人の類なのではないかと、そんな疑問が浮かぶのも当然と言えた。

しかし、それら世間體を気にしたような常識を取つ払つて見ると、フラヴィイの奥底には何故か、クーヤに対する奇妙な信頼感があつた。アクセルの血を吸収する時のような、身体が洗われていくような清浄感とはまた別種のもの。包容力、とでも表現すべきなのだろうか。心が満たされていくような、暖かい気持ち。

（……ま、いくら男に飢えてよーが、あんな爺さんを相手にしようととは思わないけど）

どこへ行つてしまつたのかと、ギャエルは彼方此方を見回している。勿論、それで見つけられるわけも無い。

「とにかく、諦めてさつさと寝な。見かけたら、あたしが伝言していってやるから」

「……うーん」

不承不承頷き、ギャエルは大人しく階段を上つていった。ちゃんと下着くらいつけなよと、その背に捨て台詞のように投げかけると、フラヴィイはまた窓を見る。

「……喧しい天氣だよ、まったく」

誰に聞かせるでもなく呟き、彼女はまるで追い払おうとするかの
よつに、雨雲を睨んだ。

執政庁の門の下で雨宿りする、急拵えの守備隊の靴は、既に泥で
埋まっていた。ブーツの内側にまで染み込んでくる雨水は、少し動
かせば音を立てるほどであり、耐え難い不快感を与えてくる。

「……」

彼等の先頭に立つリーズは、じつと、顔を前に向けていた。

最近街でよく見かけるようになった、貝殻の羽織の男が、ずぶ濡
れのまま、門の外側に立っている。視線も動かさなければ、顔にか
かる髪をのけようともしない。まるで死体が立っているようだった
が、真一文字の傷の上にある、二つの目だけがぎらぎらと光ってい
た。その視線が向けられているのは、リーズの方向。しかし、彼の
視線は彼女を擦り抜け、執政庁の奥へと向けられていた。

身じろぎもしない弓の男は、主の帰りを待つ忠犬のように、ただ
静かにそこにいた。リーズの背後の守備兵たちが、ボソボソと何事
か話している。彼等の視線は、さながら幽霊を目の当たりにした時
のようなそれだった。

彼が手に持つ弓、それに射られる矢が、一体どこへ向かうのか。
その視線に気圧されていることを自覚しながら、リーズはそれでも、
バルシャから目を離そうとはしなかった。

一方のバルシャだが、彼が弓を持って来たのは、合戦の矢を射る為である。中に花火が仕込んであり、豪雨ではあるが、イシュタルの館への合戦としては十分に機能してくれるだろう。勿論、少女達を逃がす時の為の。

残りの矢は、ナタンが帰つて来なかつた時の為だ。守備隊を何人相手にすることにならうが、絶対に、矢は一本だけ残す。そして残つたその矢を、絶対に、ラヴィス子爵の額に突き立てる。

“その時”を待つ両者は、今はただ、豪雨の中で待つことしか出来なかつた。

ブロードソードが振り上げられる。高々と屹立し、さながら断頭台の刃のように、一直線に振り下ろされてくるであろうそれを予感。その予感に晒された大抵の人間がそうするように、ナタンも手に持つたブロードソードで受けようとする。

しかし、ローランの剣は雨粒のように真っ直ぐには落ちなかつた。さながらツバメのように弧を描き、ナタンの足を狙う。ナタンは密かに鼻で嗤うと、床を蹴つて跳躍し、右足でローランの額を蹴り上げようとする。が、ローランは身を引いてそれを避け、更に一足跳び下がつた。

「……基本は、心得ているようですね

「ハッ。この程度でお褒めに『れるとは、光榮でござります……とでも言えぱいいのか？」

ローランが剣術使いだといふことは、ナタンも知っていた。アクセルの祖父を、盜賊から守つたと伝えられるほど腕だといふことも。

振り下ろすと見せかけて足を斬り飛ばす、傭兵の剣術。以前は、アクセルにもその手で散々にやられてしまつたものだが、流石にもう、易々と斬られてしまわない為の動きは出来るよつになつた。

「……聞かせろよ、ローラン」

飛び下がつたローランを追わず、ナタンは口を開く。

「何で裏切つた？」

「裏切つてはおりません。私は初めから、ラヴィス子爵の麾下にあります」

恐らくは、アクセルの祖父を助けたあの時からか。少なくともその頃から、ローランはラヴィス子爵家に仕えていた。

「……で、どこまでだ？」

「どこまで……とは？」

ローランは軽く首を傾ける。

客に対する顔でも、今までアクセル達に接してきた顔でも無い。ナタンが初めて見る、敵意を含んだ冷酷な表情。己の心を殺して人の命を奪う、殺人者の顔だつた。

ナタンは床を蹴り、飛び込むよつにしてローランに斬りかかる。

ローランは腰を沈め、それを真正面から受けた。重なった刃が、悲鳴に似た金切り声を上げる。

「アクセルが黒幕だつてことは、当然報告したんだろ？」「テファのことは？ フラヴィーのことは？」

「ああ……それは流石に、言えるわけもありません」

「そうか、なら良い」

刃がするりと離れ、ナタンの剣が回った。ローランも手首を回し、脇腹へと襲いかかる刃を防ぐ。一度剣を引いて身を沈め、ナタンは喉を狙つて突きを繰り出しが、ローランは独楽のように回転すると、懐の内側へと入り込んだ。

「ぐっ」

回転した勢いのまま、柄頭で腹を打たれ、ナタンの歯の間から呻きが漏れる。距離を取ろうと退がる彼を許さず、ローランは再び身体を半回転させながら、彼の頭上へと剣を振り下ろす。それを弾き、ナタンは尻餅をつきながら後転、そして立ち上がり剣を構え直した。

「……面白かったか？ 滑稽だったか？」

「……」

「大人にばれてるとも知らず、無邪気に自分の城作りに精を出す子どもを見てるのは、」

「無邪気……とは言えないでしょ？」

「まあ確かに」

ナタンは軽く笑みを漏らすと、手に持つた剣を握り直す。ローランも、今度は真横に構え直した。

「……不幸な男だ」

「そりや、誰のことだ？」

「ちよつと今、私の田の前にいますね」

視線を強めながら、ローランは続ける。

「そりやつて剣を持つことなく、一生を終えることも出来たでしょうに」

「……」

「商人バルビエの金、子爵の息子アクセル・ベルトランの権力、傭兵メンヌヴィルの武力……その全ては、偶然に手に入つたもの。それはさながら、子羊に大鹿の角を与えるにも似ています。角を持つとうが、子羊は子羊。角を得ることは、幸運ではなく不幸なのです」「つまりそりや、ボスの俺が力不足だつてことか」

「はい、言つまでもなく」

まるでそれを証明しようとするかのように、ローランは飛び出した。先ほどまでは一転して、突撃のような迫力がある。

「やけんなつ、ジジイ！」

怒声と共に心を奮い立たせ、ナタンも斬りかかる。ローランの攻撃を弾き、自分の剣を彼に食い込ませようとするが、逆に刃が肩を掠めた。

刃が激突するたびに、指に震えが来る。身体のどこかに、火かき棒を押しつけられた痛みが走る。

（くそつ、だめだ……）

若さと体力で勝つていようが、剣の腕と経験値は、ローランが圧

倒していた。

振り下ろそうとした刃を受け止められ、がら空きになつた胴体に前蹴りを受ける。ナタンは咄嗟にその勢いを利用すると、大きく跳び下がつた。

ローランは追つてこない。流石に息が続かなかつたのか、肩を静かに上下させていたが、ここで斬りかかればまた、こちらが一方的にダメージを重ねることになるだろう。

手や足の所々に感じる、火傷のような痛み。今まで散々に感じてきた痛みだが、何故か今回は、それに耐えるのにも苦労する。

（……本物の、自分より強いヤツとの殺し合いか……）

殺される可能性が高い、その緊張感が、徐々に余分に体力を消耗させている。

「……少々、剣の腕には自信があります」

「今更かよ……」

「そしてあなたを上回る私の剣でも、メイジには勝てませんでした。それほどに、メイジと非メイジとの差は大きいのです」

火の玉を放ち、風の刃で襲い、土のゴーレムを操り、水で傷を癒す。いやそれ以前に、レビテーションで持ち上げられてしまえばまづ抵抗できない。そんな相手に剣一振りで挑むなど、正気の沙汰ではなかつた。

アクセルがあつさりと殺して見せた傭兵メイジも、ローランにとっては手も足も出ない怪物。

「確かに、現在、あなたの組織は強大な力を有していると言えます。こんな片田舎に不釣り合いな、ね。……何故あなたが駄目なのか、はつきり言いましょうか」

「……是非聞きたいね」

口にたまっていた血を吐き捨て、ナタンは口元を拭う。

「野望、です」

「……野望？」

「金を手に入れたい、いい女を抱きたい、上等の服を着たい、他人を跪かせたい、尊敬されたい、恐れられたい……その欲望が、なさすぎます。聖職者にでもなつたつもりですか？ それとも正義のヒーロー？ 予言……いや、断言しましょう。あなたは近い将来、部下にボスの座を逐われる」

ローランは剣を持ち上げ、その切つ先でナタンを指し示した。

「折角の武力も、治安維持の為だけに使うのなら宝の持ち腐れ。裏組織であるからには、のし上がらなければなりません。そしてそれを実現させる強い野望が、あなたには欠如している。それは何故か……。あなたはたまたま、本当に偶然に、その座に納まつたに過ぎないからです。他の、例えば通りを歩いている酔っ払いにすら、あなたの代役は務まります。あれほどの人材を抱えていながら、潰す方が難しいのですから」

団星だと感じたのか、ナタンは視線を伏せる。更に、ローランは重ねた。

「野望とは、つまり夢。組織に、現状維持など許されません。常に夢を見、常に上昇し、常に拡大しなければならない。ボスの夢に、部下達も夢を見るのです。……奴隸市場の掌握によつて、クルコスの街の裏の鼎立は崩壊しました。何故、その勢いのまま、クルコスの裏を支配しようとしたかったのです？ あなたには、夢が無い。」

荒くれどもの上には立てない、善良な平民なのです。アクセル・ベルトランはそんなあなたを引き上げ、強引にトップに据えてしまつた。あまりにも、残酷に過ぎる仕打ちだと……私は思います。言つなれば、あなたは被害者でしうつね。貴族の息子の気紛れによつて、人生を狂わされた哀れな……」

そこまで言つて、ローランは氣付いた。いつの間にか、ナタンが顔を上げていてことだ。

「……一つ聞きたい」

彼の視線に、ローランの肌が静かに粟立つた。

ナタンの変化を、ローランは見逃していた。先ほどまでは一飲みにさえ出来てしまいそうな若造であつたのに、いつの間にか、巨大になつていて。こちらが押し潰されてしまいそうな程に巨大なそれは、精神の具象化だつた。まるで、濁流に晒され続けた盤石のようにな泰然としている。果たして自分に動かせるのかと、そんな疑問が頭を掠めた。

「いい女を抱きたい……金が欲しい……いい服を着たい……。その程度か？」

「……どうこうことでしょうか？」

ローランは、父親が大嫌いだつた。

決して自分では勝てそうにない存在だといつ、その絶対性を、何よりも嫌悪して憎悪した。

父親と相対する時、いつもローランは、ちょうど今と同じよう、歯を食いしばる。カチカチと、音を立ててしまわないように。

「ヤクザ者のボスつてのは、皆……その程度の野望でやつて行け

るのかってことだよ」「

ローランは、思わず目を見開く。

ナタンがまるで、枯れ木でも捨てるかのように、プロードソードを傍らに放り投げていた。

「じゃあ、俺の勝ちだな。俺の野望は、そんなものよりずっと…デカイんだから」

静かに、身を沈める。そして目は、真っ直ぐ、ローランの顔を睨み付ける。身体は、倒れるように前のめりに。

ローランが剣を構え直そうとした瞬間、ギリギリまで引き絞られていた矢のように、ナタンは放たれた。倒れかけた身体を起こしつつ、顔はローランに向けられたまま、一直線に。

一人の男が、自分の全てを以つて、真正面からぶつかってくる。避けられれば確実に敗北すると、ローランは直感した。避けてしまえば、恐らくもう、自分では彼を殺せない。

避けられないならば、突きで確実に殺すべきだった。しかしそれを選べなかつた時点で、ローランは既に敗北していた。振り上げた剣で、ナタンの頭を割ろうとする。

「…？」

しかし振り下ろした剣は、ナタンの髪にも届かなかつた。レバーのように回転しながら出された彼の腕に、刃が深々と食い込んでいく。刃は、骨で止められていた。

「おおおおおおおっ！」

痛みに打ち勝つため、そして力を振り絞るため、ナタンは吼える。

ローランはただ、その咆吼を田で見ていくしかなかった。

ナタンの額が、ローランの顔面に衝突する。鼻の奥底から鉄臭い臭いが広がり、ローランは反射的に田を閉じたまま大きく仰け反った。両の鼻から血が吹き出す。ナタンは無事な片手を伸ばし、ローランの襟首を掴むと、引き寄せつつ再び顔面に額をぶつけた。

解放されたローランの身体が、人形のように床に崩れ落ちる。顔を顰め、呻きながら鼻を手で覆つ彼の耳元に、ブロードソードが突き立てられた。

「悪い、ローラン……。俺はもう、とっくに、お前より強くなつてたようだ」

突き立つたブロードソードによりかかり、左腕を鮮血で染めたナタンは、そう言いながらローランの顔を覗き込む。

「勿体ないぜ、ローラン。何で、ベルを選ばなかつた？　あいつに信頼されるなんて、これでもう、一度と無いだろうに」「……」

ローランは無言のまま、そつと、瞼を開けた。ナタンは大きく溜息をつきながら、背を伸ばす。そして呆れたような笑顔になると、床のローランに右手を差し出した。

「そろそろ、聞かせてくれねえか？　ラヴィス子爵が、イシュタルの館を潰したい理由を……」

「悪いが、それは出来んな」

ハッと、ナタンは振り向いた。ローランのものではない、新しい声が聞こえた。背後を振り向くと、アクセルと同じ髪の色の貴族が、こちらに杖を向けている。

振り向いた瞬間、自分の身体が揺れた。その理由を探ろうと視線を下げるナタンの視界に、光が入る。

黒い服だった為、出血に気付くのに、一秒ほどかかった。胸に口インほどの大きさの、小さな穴が穿たれている。

(ああ……。マジックアローか)

彼は思わず笑ってしまう程冷静に、そう判断した。

「……え？」

バシャバシャと、泥の跳ねる音が近づいてきていた。伝令か何かだと思っていたリーズは、突然フードを取り去った小柄な人影に、それだけしか言えなかつた。

「アクセル・ベルトラン……今、戻つた」

事務報告のように無機質に、アクセルはそう告げた。

ひどい有様だった。髪は乱れ、顔には泥がこびり付いている。それだけではなく、ボロボロに破れた服の所々に、模様のように血液が染み込んでいた。雨粒が洗い流したことを考えても、相当に出血していたのだろう。傷は全て治癒の魔法で塞いでいるが、その幼い身体の消耗は、火を見るより明らかだった。

「わ、若様……？」

確認するようにリーズが尋ねるが、アクセルは振り向き、バルシヤを見ていた。目を見開く彼に、リーズにはわからないよう、軽く視線を返す。そしてすぐに前を向くと、守備隊の中に割つて入った。

「若様つ」

慌ててリーズが追い縋る。何故こんな状態で帰還したのか、それよりも先ず、アクセルを止めるのが先だつた。

「お父上の『命令で、入つてはならないと！』そ、それに、この二人は……？」

同じく泥だらけの、二人の男。

「ハンスだ」
「マルセルだ」

二人とも、事も無げに言つと、アクセルの後に続こうとする。

「若様つ」

再びアクセルを止めようとしたリーズだが、ぐいと、信じられない程の力で胸元を掴まれ、引き寄せられる。斜めになつた彼女の顔に、アクセルは無表情のまま言つた。

「父上一大事に、息子が助つ人を連れて戻つた、それだけだ。邪魔をするな」

ただ、それだけ。それだけの言葉で、リーズは何も言えなくなつた。

迫力だけではない。アクセルは、他人の襟を捕まえて引き寄せるような、乱暴な真似はしない。その上、こんな冷たい表情など見せたことはない。

驚愕で何も出来ず、ただ呆然と立ち尽くす彼女の脇を擦り抜けつつ、アクセルは外套を脱ぎ捨てた。残る二人も、それぞれ雨水を吸ったマントを泥の中に放り捨てる。

「あーあ、休みてえ」

試しにマルセルが弱音を吐いてみるが、アクセルは完全に無視した。そして三段ほどの石段を飛び越えると、 庁舎の中へと走る。

「まあ、さつさと終わらせよつか

マルセルの背を軽く叩き、ハンスも駆け足になつた。

中庭を囲む回廊を走り抜け、人の気配を探る。森を突つ切つた時の、野獣のような勘は未だ続いており、三人の気配はすぐに感じ取れた。

食堂だった。

「……つ、ナタンつ……」

肺が、口から飛び出しそうになる。名を呼びながら、アクセルは転がり込むように、目的の場所にたどり着いた。

「うち捨てられたように転がった剣、突き立てられた剣。その傍に倒れるローラン。壁際に立つ、久方ぶりの父親。後方から、二つの駆け足が聞こえてくる。

もはや立つともままならず、床に膝をつくアクセルに、ナタンが振り返った。

「ああ……ベルか」

アクセルの顔が歪んだ。それを揶揄するかのよう、反対にナタンは笑う。

「その……すまねえな」

そんな顔をするなど思はずとしたアクセルの声は、掠れて形にならなかつた。

疲労だけが理由ではない。少年の指が震え、顔は益々歪み、唇は必死に言葉を紡ぎつとして藻搔く。

ナタンは悪事を見られた子どものように、困った笑顔を作つていた。

「俺な、ほら、これ……もつ……死ねんだ」

胸に空いた傷を指さし、そう呟いた後、ナタンは笑顔のまま、アクセルの床の前で崩れ落ちた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8880q/>

漂流のA

2011年11月23日05時46分発行